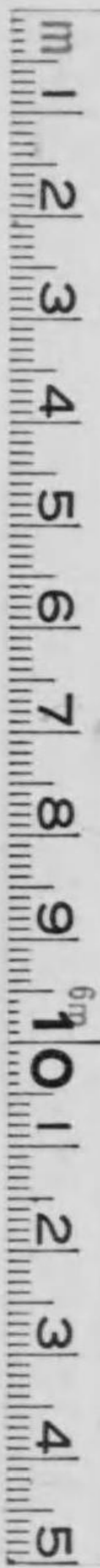


60

603



始



60-603

京都帝國大學醫科大學助教授
京都府立醫學專門學校講師
醫學士小南又一郎著



實用法醫學

大正
7. 9. 2
内文

南江堂書店發行



京都帝國大學醫科大學法醫學教室
創立第十五週年ニ當リ、并ニ予ガ同
教室ニ入りシヨリ十年ヲ經過セル
ニ際シ、同教室ノ創立者主任教授岡
本博士ニ對シ、謹ンデ敬意ヲ表ス。

序言

本書ハ京都府立醫學專門學校學生諸君ノ爲メ、及ビ大正六年二月例年ノ通りニ開催セラル、京都醫科大學醫學講習會ニ於テ、開業醫諸彦ノ爲メニ、專ラ法醫學ノ實地應用ヲ主旨トシテ講演セル原稿ヲ補正シテ著作セシモノナリ。故ニ實用ヲ主トシ學理議論ヲ補トセリ。即チ苟モ醫師タルモノ本書ヲ座右ニスレバ、合式ニシテ而モ誇ルニ足ルベキ鑑定書ノ立チドコロニ成ランコトヲ期セリ。而シテ予ガ京都醫科大學法醫學教室ニ於テ經驗セル鑑定例ヲ加ヘ實地醫家ノ參考ニ資セリ。鑑定例中二三岡本教授署名ノモノアリコトハ同教授ノ許諾ヲ得テ掲載セルモノナリ。即チ茲ニ同教授ニ對シ謹ンデ感謝ノ意ヲ表ス。

元來法醫學ハ非常ニ範圍廣キ學問ナリ予ハ之ヲ十年ノ短年月ニ學習シ比較的短日月間ニ講了シタルモノナレバ、或ハ不知ノ誤謬モアラン或ハ疎雜ニ流ル、所モアラシク或ハ言足ラズ意盡サル所モアラン、ソハ更ニ學習シテ後日之ヲ補正スル所アラシクコトヲ期スト雖、本書ノ足ラザル所ハ別記スル參考書ヲ讀讀セラレンコトヲ望ム。本書ノ成ルヤ、ゴッとしやるくほふまん平賀てーろあし、ぶきやなん、片山及高田等ノ

諸氏ノ法醫學書ニヨルコト多シ此機會ニ於テ謹ンデ同氏等ニ敬意ヲ表ス尙常ニ本書ノ完成ヲ期待シテ絶エズ著者ヲ鞭達セラレタル大正六年度京都醫科大學講習會法醫學聽講者諸彦及原稿ノ淨書并ニ校正等ニ助力ヲ與ヘラレタル畏友草刈春逸氏校正ノ勞ヲ取ラレタル沼田作氏并ニ校正及索引ノ作製ニ努力セラレタル安藤守元ノ三氏ニ對シ滿腔ノ謝意ヲ表ス。

大正七年二月十一日

京都醫科大學法醫學教室ニ於テ

著者

追記本書ノ印刷ニ當リ盡力セラレタル南江堂田嶋磯川兩君并ニ同店員諸君義侠的ニ印刷ヲ引受ケラレタル似玉堂主三上庄治郎氏ニ對シ予ハ此機會ニ際シ謝意ヲ表スルヲ忘ル能ハズ。

參考書

法醫學ニ趣味ヲ有セララル、人ノ、往々ニシテソガ參考書選擇ニ苦シマル、事アルヲ聞キ、茲ニ著名ナル參考書ヲ摘録セシ。

- Becker, L. Lehrbuch der ärztlichen sucherständigen Tätigkeit. 5. Aufl. 1907.
Brouardel, P. Cours de médecine légale de la faculté de médecine légale de paris 1897.
Balthazard. Médecin légale 1911.
Buchanan. Text-book of forensic-Medicine and toxicology 8th edition 1915.
Cramer, A. Gerichtliche Psychiatrie 4. Aufl. 1908.
Casper-Liman; Handbuch der gerichtlichen Medizin. 8. aufl. 1889.
Draper, Text-book of legal Medicine. 1912.
Dittrich's Handbuch der ärztlichen sucherständigen Tätigkeit 1913. 8 Bde
Erben; Diagnose der Stimulation nervöser Symptome.
Forel; Die sexuelle Frage. 1906.
Gross, H. Kriminalpsychologie 2. Aufl. 1905.
Gottschalk; Gerichtliche Medizin. 3. Aufl. 1909.
Glaister; Medical jurisprudence and toxicology. 3rd. edition. 1915.
Glueck; Studies in forensic psychiatry. 1916.
平賀精次郎 簡明法醫學, 第四版. 大正三年.
Hoffmann-Puppe. Gerichtliche Medizin. 2 Bde. 1908.
Hoffmann; Lehrbuch der gerichtlichen Medizin 9. Auflage. 1903.
Harrack; Die gerichtliche Medizin. 1914.

- Hamilton A. m.; A. system of legal Medicine. 2nd edition 1909. 2 vol.
- Habner. Lehrbuch der forinische psychiatrie. 1914.
- 吉山順吉 法醫學的鑑定實例, 第四版, 明治卅四年.
- Jago, Forensic chemistry and chemical evidence. 1909.
- 奥秀三 精神病鑑定例, 四冊, 明治卅六年.
- Kraft-Ebbing; Gerichtliche Psychopathologie III. Aufl. 1900.
- Kraft-Ebbing; Psychopathia sexualis. 12. Auf. 1903.
- 片山國嘉 法醫學講義, 第一冊.
- 片山國嘉 法醫學大成, 六冊. 明治卅二年.
- Krater; Lehrbuch der gerichtlichen Medizin. 1912.
- Knocker; Accidents in Medico-legal aspect. 1912.
- Lochte; Gerichtliche und polizeiarztliche Technik. 1914.
- Lewin; Die Ernschabreibung II. Auf. 1904.
- Lombroso; Der Verbreher. 1894. 3 Bde.
- Lombroso und Ferrero; Das Weib als Verbreherin und Prostituirte. 1894.
- Langenscheidt. Enzyklopaedie der modernen Kliminalistik. 6 Bde.
- Leers; Forensische Blutuntersuchung 1910.
- Lesser; Atlas der gerichtliche Medizin 1883.
- Leers; gerichtärztliche Untersuchungen 1913.
- Legludic; Notes et Observations de Médecin légale 1905.
- Lacassagne; Précis de médecine légale. 1909.
- Liszt; Die Kriminelle Ernschabreibung 2 Bde 1910.

- Maschka; Handbuch der gerichtlichen Medizin, 1889-4 Bde.
- Mann; Forensic Medicine and toxicology, 1914.
- Neubauer; Hermaproditismus beim Menschen. 1908.
- 大場茂馬 個人鑑別法.
- Pfeiffer; Über den Selbstmord. 1912.
- Pelmann; Psychische Grenzstände 1909.
- Reese; Medical jurisprudence and toxicology, 8. edition, 1913.
- Strassmann; Lehrbuch der gerichtliche Medizin. 1895.
- Sommer; Kriminalpsychologie. 1904.
- Schmidmann; Handbuch der gerichtlichen Medizin. 1905. 9. Auflage 2 Bde.
- Stewart; Legal Medicine. 1910.
- Them; Handbuch der Unfallkrankungen. 1898-3 Bde.
- Taylor; Die gifte. 1862.
- Taylor; Principles and practice of medical jurisprudence. 1910. 2 vol.
- Thoinot; Précis de médecine légale 1913. 2 vol.
- 田中祐吉 法醫學講義, 明治四十一年.
- 高田義一郎 法醫學, 大正六年.
- Vilbert; Précis de médecine légale. 1911.
- Withaus; Medical jurisprudence, forensic medicine and toxicology. 2nd. edition 4 vol.
- Autenrieth; Einführung der Gifte 4. auf. 1913.
- Baumert; Lehrbuch der gerichtlichen Chemie. 1907. 2. auf.

Blyth; Poisons, their effects and detections. 1906. 4th. ed.
 Dragendorff; Ermittlung von Giften. 4. aufl. 1895.
 Dennstedt; Die Chemie in der Rechtspflege. 1910.
 Föhner; Nachweis und Bestimmung von Giften auf biologischem Wege. 1911.
 Gadamer; Lehrbuch der chemischen Toxikologie. 1909.
 Holland; Medical chemistry and toxicology 1915. 4. ed.
 磯野周平 試薬反應彙纂 大正二年.
 Kolbert. Lehrbuch der Intoxikationen 1902. 2. Aufl. 1902.
 Kippenberger; Nachweis von Giftstoffen. 1897.
 Otto; Aëmitelung der Gifte. 1896.
 Schmidt. Pharmazeutische chemie 5. Aufl. 3 Bde. 1907.
 醫事法規
 Flügge. Das Recht des Arztes. 1903.
 Gross; Handbuch für Untersuchungsrichter. 4. aufl. 2 Bde. 1904.
 市村光恵 醫師ノ權利義務 第二版.
 Krtner; Ärztliche Rechtskunde. 1907.
 三浦 福島 醫事衛生法令新書.
 Oppenheim; Das ärztliche Rechts, 1892.
 Rapmund-Dietrich; Ärztliche Rechts und Gesetzkunde. 2. Aufl. 1913.
 Smith; Law for medicalmen. 1913.
 Spinner; Ärztliches Rechts 1914.

目次

總論

一、法醫學トハ何ゾヤ 一
 二、醫師ノ責任 二
 三、鑑定人及證人 四
 四、鑑定及檢案 五
 五、鑑定書實例 七
 六、醫事ニ關スル法規 一〇
 七、異同ノ決定 一九
 (イ) べるちろん氏人身測定法 二一
 (ロ) 指紋法 二二
 八、死體檢査及解剖檢査 二五

各論

第壹編 物品檢査 二八
 一、血痕檢査 二八
 甲、豫備檢査 三〇

(イ) をぞん検査法 三〇

(ロ) ベんちゃん検査法 三一

乙、過酸化水素水検査法 三二

乙、實性反應 三二

上、吸收線検査 三三

中、結晶検査 三三

(イ)へみん結晶検査法 三六

(ロ)へもくろもげん結晶検査法 三六

下、血球検査 三七

丙、生物學的検査 三八

(イ)血清沈降素検査法 四〇

(ロ)補體結合反應 四〇

(ハ)過敏性検査法 四三

(ニ)血色素沈降素検査法 四五

丁、血量ノ鑑定 四五

戊、極メテ微量ナル血痕ニ就キ人血ナルヤ否ノ證明必要ナル場合ニハ如何ナル方法ヲ擇ブベキカ 四六

己、肉類、羊水ソノ他體液ノ種屬鑑別 四八

二、毛髮検査

(イ)検査法 四八

(ロ)毛髮ノ色 四八

(ハ)附着物ノ検査 四九

(ニ)毛髮ノ大サ 五〇

(ホ)毛根及毛幹ノ形狀 五一

(ヘ)人毛ナルヤ獸毛ナルヤノ鑑別 五二

(ト)毛髮ニ於ケル損傷 五四

(チ)断面ノ検査 五五

(リ)毛髮類似ノ纖維 五五

(ヌ)年齢ノ鑑別 五五

(ル)鳥毛ノ検査 五六

(ヲ)血痕及毛髮鑑定實例 五六

三、精液検査 五九

上、豫備検査 六〇

(イ)ふろらん氏検査法 六〇

(ロ)ばるべりを氏検査法 六〇

中、實性 反應 六二

(イ) 新鮮ナル精液検査 六一

(ロ) 塗抹標本検査 六三

(ハ) 精液斑浸漬法 六三

(ニ) 精蟲染色検査法 六三

甲、こりんすといきす氏検査法 六四

乙、べつちい氏法 六四

丙、でるびゆう氏法 六五

下、人類ノ精蟲ナルヤ否ヤノ検査 六六

四、胎便検査 六六

(イ) 顯微鏡的検査 六六

(ロ) 生物學的検査 六八

五、胎垢検査 六八

六、羊水斑及惡露斑検査 六九

七、乳汁斑検査 七〇

八、膿汁斑及喀痰斑検査 七一

九、尿斑ノ検査 七一

十、糞便及糞便斑検査 七二

十一、腦質検査 七三

十二、骨質検査 七三

(イ) 人骨ナルヤ獸骨ナルヤ 七三

(ロ) 一人ノ骨ナルヤ將タ多人數ノ骨ナルヤ 七五

(ハ) 男子ノ骨ナルヤ女子ノ骨ナルヤ 七五

(ニ) 骨格ニ依リテ年齢ノ決定 七五

(ホ) 骨格ニ於ケル損傷ノ検査 八二

(ヘ) 火葬遺骨ト普通遺骨トノ鑑別 八三

(ト) 骨格検査ニ關スル鑑定實例 八四

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査 八八

一、急死々體検査 八八

(イ) 死前ノ病狀 八九

(ロ) 屍 八九

(ハ) 解剖検査―剖檢 九〇

上、異常所見ノ全クナキカ或ハ僅微ナル場合 九〇

第一例、くろ、ほるむ麻酔中ノしよつく死 九二

第二例、入水中ノ感動死 九六

第三例、ちすふすわくちん注入後ノ急死 九八

中、多少著明ナル異常所見アルモ尙急死スベキ程度ニ至ラザル場合 一〇二

下、死因トナリ得ベキ著明ナル異常所見アル場合 一〇二

(ニ) 随伴状況 一〇三

(ホ) 死體現象 一〇三

二、身體ニ於ケル損傷検査 一〇八

甲、一般注意 一〇八

乙、鈍器損傷 一一一

(イ) 表皮剝脱 一一一

(ロ) 皮下溢血 一一二

(ハ) 挫創、裂創、咬創 一一三

(ニ) 内臓破裂及しよつく 一一五

(ホ) 骨折、脱臼、全身ノ挫碎及離断 一一五

丙、銳器損傷 一一六

(イ) 切創 一一六

附、鑑定實例 一一七

(ロ) 割創 一一八

(ハ) 刺創 一一九

附、鑑定實例 一二一

丁、銃創 一二四

戊、創傷ノ法醫學的觀察 一二九

(イ) 死因ト損傷トノ關係 一二九

附、鑑定實例 一三〇

(ロ) 受創ハ生前ナリヤ死後ナリヤ 一三三

(ハ) 何レガ死因ナリヤ 一三四

(ニ) 自他傷及災厄傷ノ鑑別 一三五

(ホ) 自殺ト損傷トノ關係 一三五

己、瘡痕検査 一三六

庚、文身検査 一三八

申、身體諸部ニ於ケル損傷或ハ疾病ノ法醫學的觀察 一三八

(イ) 頭部損傷 一三八

(ロ) 腦損傷 一三九

(ハ) 顔面ノ損傷 一四〇

(ニ) 眼ノ損傷—視力詐病—色盲 一四〇

(ホ) 耳ノ損傷—偽聾 一四〇

(ヘ) 頰部損傷 一四一

(ト) 胸部及脊部ニ於ケル損傷 一四一

(チ) 腹部ニ於ケル損傷—切腹 一四一

(リ) 男子生殖器ニ於ケル損傷 一四三

(ヌ) 女子生殖器ニ於ケル損傷 一四三

(ル) 四肢ニ於ケル損傷 一四三

(ヲ) 悪性腫瘍ト損傷トノ關係 一四四

(ワ) 外傷性神經病并ニ精神病 一四四

三、窒息急死々々體検査 一四四

甲、一般所見 一四四

乙、縊死 一四七

丙、絞死 一五〇

附、鑑定實例 一五一

丁、扼死 一五二

戊、種々ノ機械的窒息急死 一五三

四、溺死

己、溺死 一五四

四、爾餘ノ變死々々體検査 一五六

(イ) 餓死 一五六

(ロ) 火傷死、湯瀝死及燒死 一五六

(ハ) 熱射病死及日射病死 一五九

(ニ) 凍死 一五九

(ホ) 雷死及電撃死 一六〇

(ヘ) 感動死 一六〇

五、殺兒死體検査

(イ) 初生兒ノ徵候アルヤ否ヤ 一六一

(ロ) 發育程度 一六二

(ハ) 生死産ノ別 一六六

甲、肺浮揚検査 一六七

乙、胃腸浮揚検査 一七〇

丙、大腸膀胱検査 一七〇

丁、鼓室検査 一七一

戊、肺鐵検査 一七一

(三)初生兒ノ死因 一七一

 甲、産前ノ死 一七一

 乙、産中ノ死 一七二

 丙、産後ノ死 一七四

(ホ)産後ノ生存時間 一七七

(ニ)死後解剖時迄ノ経過日時 一七七

 附、鑑定實例 一七八

六、妊娠検査 一八二

 甲、妊娠セルノ疑アル徴標—あぶてるはるでん氏法 一八四

 乙、妊娠ノ確徴 一八七

 丙、妊娠月數 一八七

 丁、妊娠期間 一八八

 戊、異常妊娠 一八九

 (イ)重復妊娠 一八九

 (ロ)子宮外妊娠 一八九

 (ハ)鬼胎 一八九

 (ニ)想像妊娠 一九〇

(ホ)人事不省間ノ妊娠 一九〇

七、挽産検査 一九〇

八、墮胎検査 一九三

 (イ)母體検査 一九四

 (ロ)産出物検査 一九四

 (ハ)流産 一九六

 (ニ)犯法的墮胎 一九七

 甲、藥物學的墮胎 一九七

 乙、器械的墮胎 一九七

 丙、折衷方法 一九七

 (ホ)墮胎ノ結果 一九八

九、生殖機能ニ關スル検査 一九九

 (イ)交接機能 二〇〇

 甲、男子交接機能 二〇〇

 乙、女子ノ交接不能 二〇〇

 (ロ)授胎及受胎不能 二〇一

 甲、授胎不能 二〇一

一、透析或ハ滲出ニ依リテ證明シ得ベキ毒物 二二二

二、揮發性毒物 二二三

三、植物性毒物 二二三

四、金屬性毒物 二三四

下、化學的検査ノ結果ニ對スル注意 二三五

(イ)毒物ノ證明ガ陽性ナリシ時ノ注意 二三七

(ロ)毒物ノ證明ガ陰性ナリシ時ノ注意 二三七

丁、毒物證明ノ補助法 二三八

(イ)顯微結晶學上ノ證明法 二三八

(ロ)吸收線検査 二三九

(ハ)植物學的検査 二三九

(ニ)生物學的證明 二三九

戊、其他ノ注意 二三九

附、鑑定實例—砒素中毒 二四〇

十二、中毒各論 二五四

甲、腐蝕毒 二六二

(イ)腐蝕性酸類 二六三

一、硫酸中毒 二六三

二、硝酸中毒 二六五

三、鹽酸中毒 二六六

四、醋酸中毒 二六六

五、蟻酸中毒 二六七

六、樟酸及樟酸加里中毒 二六八

七、石炭酸中毒 二六九

八、りーぞる中毒 二七〇

(ロ)腐蝕性あるかり中毒 二七一

一、かり及なごろん滴汁中毒 二七一

二、あんもにあ水中毒 二七二

三、ばりつと中毒 二七三

(ハ)腐蝕性鹽類中毒 二七三

一、水銀中毒 二七四

二、硝酸銀中毒 二七四

三、くろーむ中毒 二七六

附、鑑定實例 二七八

四、銅化合物中毒 二八三

五、亞鉛中毒 二八四

(三) 腐蝕性瓦斯中毒 二八五

一、くろゝる瓦斯中毒 二八五

二、硫化水素瓦斯中毒 二八六

(ホ) 有機性腐蝕毒 二八七

一、かんたりにん中毒 二八七

乙、質 質 毒 二八八

一、磷 中 毒 二八九

附、鑑 定 實 例 二九一

二、砒素劑中毒 二九八

三、あんちもん中毒 三〇二

四、鉛 中 毒 三〇三

五、麥角中毒 三〇四

丙、血 液 毒 三〇五

一、くろゝる酸加里中毒 三〇六

二、青酸及青酸加里中毒 三〇七

三、酸化炭素中毒 三〇九

丁、神經及心臟毒 三一〇

一、くろゝ、ほるむ中毒 三一〇

二、抱水くろらるる中毒 三一〇

三、急性あるこほるる中毒 三一〇

四、めちるあるこほるる中毒 三一〇

五、阿片及もるひね中毒 三一〇

附、鑑 定 實 例 三一〇

六、すとりきにーね中毒 三一〇

附、鑑 定 實 例 三一〇

七、あどろびね中毒 三一〇

八、でいぎたりん、でいぎとぎしん中毒 三一〇

九、にこちん中毒 三一〇

十、あこにつと中毒—鳥頭中毒 三一〇

十一、綿馬につきす中毒 三一〇

十二、商 陸 中 毒 三一〇

十三、さんごにん中毒 三一〇

四、急性こかいん中毒 三三八
 五、毒うつぎ中毒 三三九
 六、まんだらげ中毒 三三九
 七、しきみ中毒 三四〇
 戊、菌蕈類中毒 三四一
 一、てんぐたけ中毒 三四一
 二、紅天狗たけ中毒 三四二
 三、卵子てんぐたけ中毒 三四二
 四、毒べにたけ中毒 三四三
 五、月夜たけ中毒 三四三
 己、魚介并ニ食物中毒 三四四
 一、河豚中毒 三四四
 二、食用品中毒 三四四
 十三、醫術過誤 三四五
 第三編 法醫學的精神病學 三五二
 甲、緒論 三五二
 (一)緒言 三五二

(二)刑法ト精神病者 三五三
 (イ)精神病者ノ犯罪行為 三五四
 (ロ)證人及原告トシテノ精神病者 三五四
 (ハ)精神病者ニ對スル犯罪行為 三五四
 (ニ)民法ト精神病者 三五四
 (四)精神狀態ニ關スル鑑定事項 三五五
 (五)責任能力 三五六
 (六)心神喪失及心神耗弱者 三五九
 (七)審理及證言能力 三六二
 (八)禁治產及準禁治產 三六四
 (九)遺言能力 三六五
 (十)精神異常者ニ對スル犯罪 三六六
 (十一)精神病者ニ對スル鑑定書作成ニ就テ 三六七
 附、甲様式 鑑定書例 三六八
 乙様式 鑑定書例 三八八
 (十二)精神病者ノ伴狂ト匿狂 四〇一
 乙、各論 四〇三

一、生來性精神發育不良 四〇三

(イ)白痴 四〇四

(ロ)痴愚者 四〇四

(ハ)魯鈍者 四〇五

附、鑑定實例—痴愚者—殺兒 四〇五

二、變質性精神病—變質者 四二八

(イ)神經質者 四二八

(ロ)色慾異常者 四二九

(ハ)體質性神經衰弱者 四二九

(ニ)強迫觀念症者 四二九

(ホ)體質性沈鬱者 四三〇

(ヘ)體質性興奮者 四三〇

(ト)病的性格者 四三一

附、鑑定實例、選舉法違反事件變質者—中間者 四三二

三、ひすてりー 四四八

四、外傷性ひすてりー 四四九

五、癲癇 四五〇

(イ)夢中遊行 四五二

(ロ)癲癇性昏迷 四五二

(ハ)苦悶性譫妄狀態 四五二

(ニ)悟性譫妄 四五二

附、鑑定實例、癲癇性朦朧狀態—十四人斬 四五三

六、躁鬱病 四五九

甲、躁揚狀態 四五九

(イ)輕躁病 四六〇

(ロ)躁暴病 四六〇

(ハ)譫妄性躁揚病 四六〇

乙、抑鬱狀態 四六〇

(イ)輕度抑鬱狀態 四六〇

(ロ)昏迷性抑鬱狀態 四六〇

(ハ)妄想性抑鬱狀態 四六〇

七、ばらのお—偏執狂 四六一

八、早發痴狂 四六二

(イ)破瓜狂 四六四

附、鑑定實例、破瓜狂—殺人未遂 四六四

(ロ)緊張狂 四八六

(ハ)妄想性痴狂 四八七

一、幻覺性妄想痴呆 四八七

二、妄想性痴呆 四八七

三、空想性妄想性痴呆 四八七

附、鑑定實例、妄想性痴呆—放火 四八八

九、痲痺狂 五〇七

(イ)典型性痲痺狂 五〇八

(ロ)興奮性痲痺狂 五〇八

(ハ)痲鈍性痲痺狂 五〇八

(ニ)抑鬱性痲痺狂 五〇九

附、鑑定實例、痲痺狂—四人斬 五〇九

十、老老性痴狂 五二三

十一、傳染病性精神病 五二三

十二、中毒性精神病 五二四

(イ)酒精中毒 五二四

醫事法令摘要

醫師法 五二九

醫師法施行規則 五三〇

死亡診断書、死體検案書等記載方 五三一

醫師會規則 五三四

藥品營業並藥品取扱規則 五三五

傳染病豫防法 五四〇

傳染病豫防法施行規則 五四三

傳染病豫防ニ關スル清潔法消毒方法 五四五

「バラチフス」ヲ傳染病ト指定ノ件 五四九

肺結核豫防ニ關スル件 五四九

種痘法 五五〇

種痘法施行規則 五五一

癩病豫防ニ關スル法律 五五五

癩病豫防ニ關スル件施行規則 五五六

精神病者監護法 五五七

精神病者監護法施行規則 五五九

行旅病人及行旅死亡人取扱法 五五九

墓地及埋火葬取締規則 五六一

以上

附圖目次

第一圖 膀胱内面 精阜ノ有無 二一

第二圖 指紋(弓狀、天幕狀、蹄狀) 二三

第三圖 渦狀指紋(上流、中流、下流) 二四

第四圖 血痕 二九

第五圖 血色素吸收線原色版一葉 三四

第六圖 へみん結晶 三六

第七圖 へもくろもげん結晶 三八

第八圖 血痕ニ注加液ヲ加ヘテ血球ヲ原形ニ復セシメタル圖 三九

第九圖 毛根(脱落セル、拔去セル) 五一

第十圖 婦人頭髮ノ末端 五二

第十一圖 磨耗セル末端ヲ有スル下腿ノ毛 五二

第十二圖 各種毛髮(人、狸、羊、狐、蝙蝠、牛、貂、鼠、兔) 五三

第十三圖 ふろらん結晶 六一

第十四圖 陳久ノ精液斑ニ於ケル精蟲 六二

第十五圖 胎便ノ顯微鏡的圖 六七

第十六圖 四稜形ノ金槌ニテ生ジタル穿孔性骨折 八三

第十七圖 棍棒ニテ生ジタル穿孔性骨折 八三

第十八圖 袖囊小刀ニヨル頭部骨傷 八三

第十九圖 裂創(内面、外觀) 一四

第二十圖 挫創(内面、外觀) 一三

第二十一圖 平面地床上墜落ニヨル後頭部線狀創傷 一四

第二十二圖 切創(内面、外觀) 一六

第二十三圖 切創ノ方向 一六

第二十四圖 頭蓋ノ割創 一九

第二十五圖 刺創(断面、皮膚ニ生ズル刺創) 一九

第二十六圖 圓錐形ノ尖端ヲ有スル鐵挺ヲ以テ生ジタル披裂狀刺口 一九

第二十七圖 一刃性ノ小刀ニ由ル心臟部ノ九個ノ刺創(自殺)、刃様刀背ヲ有スル小刀刃ニ由テ生ジタル刺口(自然大) 二〇

第二十八圖 八面形銳稜性ノ刺器ヲ以テ生ジタル刺創 二〇

第二十九圖 銃創(射入口、射出口ノ形狀) 二四

第三十圖 心臟部ニ於ケル中等大ノ拳銃ヲ以テセル射擊(自殺)、圓形ノ射入口(自然大) 二四

第三十一圖 拳銃射擊(自殺)、星芒狀ノ射入口(三分二大) 二五

第三十二圖 拳銃創ノ細微ナル搔裂狀射入口ヲ挫挫セル帶輪ニ由テ周匝セルモノ(自然大) 二五

第三十三圖 小短圖ヲ以テ心臟ヲ射擊セル自殺者ニ於ケル披裂狀銃創及圓錐形刺刀ヲ以テ生ジタル披裂狀開口(自然大) 二五

第二十四圖 前頭骨ニ於ケル連發拳銃創ノ射入口及其後側(三分一大) 二六

第三十五圖 ウエルンデル銃ヲ以テセル口中ヘノ射擊(自殺) 二七

第三十六圖 三十歩ノ距離ヨリ發射セル短銃射擊ニ因ル頭蓋骨ノ甚ダシキ破壞 二七

第三十七圖 銃丸ノ變形 二七

第三十八圖 腹部ニ於ケル橫徑ノ切創及左手關節屈曲部ノ上方ニ於ケル一切創ヲ兼ヌル斷頭ニ因ル所ノ自殺 二七

第三十九圖 肺心表面ノ溢血點 四三

第四十圖 縊死ノ解剖學的圖解 四六

第四十一圖 異常ナル索條ノ走行 四七

第四十二圖 半バ屈膝シタル姿勢ニテ縊死 四八

第四十三圖 廣ク開脚シ足、床板ニ觸レテ縊死 四八

第四十四圖 縊死者ニ於ケル胸鎖孔頭筋ノ破裂、胸骨舌骨筋ニ於ケル輪狀ノ橫溝環狀軟骨骨折 四九

第四十五圖 縊死者ノ舌骨大角及甲狀軟骨上角ノ挫折 四九

第四十六圖 縊死者ニ於ケル頸靜脈内膜破裂 四九

第四十七圖 絞死 五〇

第四十八圖 扼死者、頸部ノ爪痕 一五三

第四十九圖 電 紋 一六〇

第五十圖 腫 孔 膜 一六五

第五十一圖 成熟初生兒ノ大腿骨下骨端ノ割截面ニ於ケル骨核 一六五

第五十二圖 空氣呼吸後ノ初生兒肺臟表面ヲ「ルーベ」ニテ廓大視セルモノ 一六六

第五十三圖 肋膜下ノ腐敗瓦斯胞 一六八

第五十四圖 二箇ノ側部胎生の裂隙ノ結合ニ由テ横斷セラレタル初生兒後頭骨鱗狀部及副題門及矢狀縫合後三分一部ニ於ケル裂隙並ニ兩顛頂骨ノ三角縫合線ニ於ケル左右相稱的胎生の裂隙 一七三

第五十五圖 初生兒後頭骨鱗狀部ニ於ケル胎生の裂隙 一七三

第五十六圖 初生兒ノ顛頂ニ於ケル化骨缺損 一七三

第五十七圖 初生兒ノ顛頂骨後部ニ於ケル高度ノ左右相稱性裂隙 一七四

第五十八圖 流產胎兒ニ於ケル頭皮先天性缺損(自然大) 一七五

第五十九圖 急墜産ニ於テ斷裂セラレタル臍帶ノ胎盤端(自然大) 一七五

第六十圖 剪刀ヲ以テ横ニ且ツ平滑ニ斷截セル臍帶 一七五

第六十一圖 妊娠第二月ノ初期ニ於ケル卵 一八七

第六十二圖 四月ニ於テ子宮壁破裂ヲ來セル組織間妊娠 一八九

第六十三圖 處女ノ子宮口(十四歳、十六歳、六十歳) 一九一

第六十四圖 妊娠第三月ニ於ケル流產、腹膜炎ノ爲メ流產ヨリ十日ノ後ニ死亡セル者(挿入セラル器械ニ由テ子宮口ニ被傷セリ) 一九八

第六十五圖 其邊緣ニ腐敗性軟化ヲ呈スル子宮底ノ多發的穿孔 一九八

第六十六圖 半陰陽者ノ外陰部 二〇三

第六十七圖 尿道背面破裂 二〇三

第六十八圖 半陰陽者マリ、マドレーン、ルフォオールノ内部及外部生殖器 二〇四

第六十九圖 輪狀處女膜 二〇五

第七十圖 處女膜(輪狀、半月狀) 二〇五

第七十一圖 破瓜セル處女膜 二〇五

第七十二圖 破瓜セル分隔性處女膜 二〇六

第七十三圖 不同大ノ孔口ヲ有スル分隔性處女膜 二〇七

第七十四圖 下方ニ中隔ノ殘遺ヲ有スル處女膜 二〇七

第七十五圖 剪絲狀處女膜 二〇七

第七十六圖 初産婦ノ處女膜痕 二〇七

總論

一、法醫學トハ何ゾヤ

法醫學ノ定義ニ付テハ之ヲ狹意ニ解スルモノト、甚ダ廣義ニ解釋スルモノトアリ。前者ニ屬スルモノハ
ほふはん、くもてる、てーろあ、ぐれいすたあ、はるなつく、ごつごしやるく、まん、岡本教授等ノ諸氏
ニシテ今ハまんノ記スル所ニヨレバ、

法醫學トハ民事及刑事審判ノ實際ニ生起スル問題ニシテ、豫メ醫學上ノ智識ヲ具フルニ非ラザレバ解釋
シ得ベカラザルモノヲ講究スル學問ヲ云フ。
ト云ヒぐれいすたあノ如キハ極メテ簡明ニ、

法醫學トハ法律上ノ目的ニ醫學的智識ヲ應用スル學問ナリ。
ト定義シ居レリ。然ルニ法醫學ヲ廣義ニ解釋スルモノハしゆみつとまん、片山教授等ニシテ、今片山教
授ノ定義ヲ引用スレバ、

『法醫學トハ醫學及自然科學ヲ基礎トシテ法律上ノ問題ヲ研究シ、又ハ之ヲ鑑定スル所ノ醫學ナリ』ト
定義シ、之ニ解釋ヲ下シテ曰『法醫學ハ法律ノ保護若クハ制裁ヲ要スル人ニ付テ、其行為原因及心身狀態
ヲ研究シ或ハ犯行ニ關係アル物件ニ就テ検査シ、又社會國家等ニ於ケル民衆ノ病的ノ狀態ヲ調査シ救治
ノ策ヲ講ジ立法上ニ於テハ法律ノ根柢ヲ強クシ、且ツ裁判確定前後ノ實地問題ヲ研究スルモノニシテ、
換言スレバ法醫學ハ一種ノ社會病理學ナリ』。

ト説明セラレタリ。狹意ノ解釋ハ醫學者トシテ適當ナルベク、廣義ノ解釋ハ醫師ニシテ且社會政策ニ着目スルモノ、取ルベキモノナリ。

法醫學ノ位置

法醫學ハ徹頭徹尾醫學ヲ基本トシ、且自然科學ヲ補助トシテ成立セルモノニシテ、醫學ノ何レノ科ニモ大體通曉セザレバ能クスル能ハザル學科ナレバ、甚ダ範圍ノ廣キ一種ノ臨床醫學ナリト云フベシ。今醫學全體ニ於ケル法醫學ノ位置ヲ示セバ左ノ如シ。



然ラバ醫學ノ各專門ニ通曉スルモノニハ、特ニ法醫學ヲ修得スル必要ナキカト云フニ、是亦非ナリ。何トナレバ、法律ニハ一種獨特ノ規定ナルモノアリテ、之ト醫學的過程トノ關係ヲ知悉セザレバ、裁判上意外ノ錯誤ヲ來スコアリ。或ハ法醫學の毒物ノ検査ノ如キハ、取替フル能ハザル唯一少許ノ材料ヲ以テ検査ヲ全フセザルベカラザルコアリ、故ニソノ検査法ノ如キ、自ラ醫學的検査法トソノ趣キヲ異ニセザルベカラザル所アリ。ソノ他種々ノ原因ニ依リテ、假令醫學全體ニ通曉セルモノト雖、別ニ法醫學ナルモノヲ修ムル必要アルモノナリ。

二、醫師ノ責任

醫師ノ責任

古來用キ慣レタルガ如ク、實ニ「醫ハ仁術ナリ」營業ニ非ラズ。故ニ法律上營業稅ヲ納メ及營業ニ關スル受取書等ニ收入印紙ヲ貼用スルノ必要ナシ、又醫師ノ業務ト法律家ノ仕事トハ大ニ相類似スル所アリ、前

法律上ノ恩典

者ハ公私ヲ健康状態ニ保ツテ目的トシ、後者ハ公私ノ權利義務ノ侵害サレザルヤ否ヲ監守ス。即チ經世濟民ヲ旨トスル點ニ於テ相一致ス、カク目的ヲ同フスル法律家ト醫師トノ間ニハ非常ニ相交渉スル所多ク、此共通ノ點ヲ捕ヘテ研究ノ主題トスルモノ、之レ即チ我法醫學ナリ。

醫師ハカク經世濟民ヲ以テ主眼トスル故、國家モ亦法律上次ノ恩典ヲ與ヘタリ。

- 一、治療ノ目的ニハ人ヲ損傷スルヲ得ルコト、
- 二、治療ノ目的ニハ彼ノ恐ルベキ藥品ヲ人ニ投與スルヲ得ルコト、
- 三、法律上營業ヲ營業ト認メザルコト、

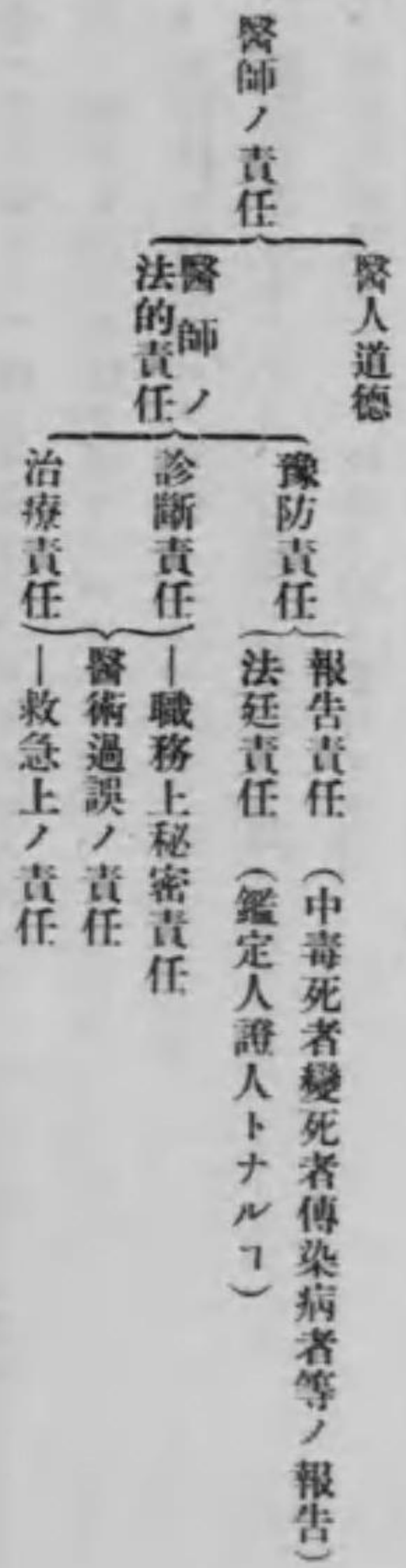
是等ハ法律家ノ言ヲ籍リテ云ヘバ、吾人醫師ニ與ヘラレタル巨大ナル恩典ナリト云フト雖、此報酬トシテ醫師ハ甚ダ多クノ責任ヲ課セラレタリ。即チ、

法律上ノ制規

- 一、醫師法ノ範圍内ニテ動作スルコト、
- 二、鑑定人トナルコト、(特殊ノ技能アル爲メ通常ノ人ヨリ多シ)
- 三、警察犯處罰令ニヨリ往診ヲ拒ム能ハザルコト、
- 四、死亡診斷書、診斷書、死體檢案書ヲ作成スベキコト、
- 五、中毒者或ハ傳染病者ヲ診察シタル時ハ、廿四時間以内ニ所轄警察署ニ届出スベキコト、
- 六、藥價診察料等ハ一定ノ期限内ニ徵集セザレバ、ソノ後法律的ニハ徵集不能トナルコト、
- 七、醫術過誤ニ對シ十分ノ責任ヲ負ハサルコト、
- 八、職務上ノ秘密責任、救急上ノ責任アルコト、

是等ノ責任或ハ義務ト前記ノ恩典トヲ併セ考フレバ、吾人醫師ヨリ見レバ法律ノ醫師ニ與ヘタル特權ハ左程大ナルモノニアラズ、唯自己ノ職務ヲ行フニ必須ノコナルノミニシテ、醫師ノ負擔スベキ責任ノ過重ナラズヤトノ感ヲ抱クコト多シ、但シ仁者ヲ以テ自任スル吾人醫師ハ、公衆ノ爲メ喜ンデ此過重ナル責任ヲ果サント心ガケザルベカラズ。

今醫師ノ責任ヲ表示スレバ左ノ如シ。



三、鑑定人及證人

裁判所ヨリ合式ノ呼出狀ヲ受ケタル時ハ何人ヲ問ハズ、證人トナリ證言ヲナスノ義務アリ、又能力ノ容ル、限リ鑑定人トナリ鑑定ヲ爲サルベカラズ、コハ日本國民ノ誰人ニモ附加セラレタル義務ナルモ、人身ニ對シ特別ノ智識ヲ有スル醫師ハ、通常ノ人ヨリモ鑑定人トナリ證人トナルノ場合頗ル多シ、次ニ證人トシテ呼出狀ヲ受ケタル場合ニ、故ナク裁判所ニ出頭セザル時ハ勾引狀ヲ發セラレ、或ハ罰金ヲ言渡サレ且不參ニ依リテ生ジタル費用ヲ辨償セシメラル、事アリ、鑑定人ニ於テモ呼出ニ應ゼザル時ハ、證人ガ呼出ニ從ハザルト略同様ノ責任ヲ附加サル、モ、勾引狀ヲ發セラレ、コトナシ。

證人及證言

鑑定人及鑑定

宣誓
業務上ノ秘密

旅費日當

鑑定料

鑑定及檢案

證人或ハ鑑定人ハ公平且誠實ニ事ニ從フベキヲ宣誓シ、故ナクシテ自己ノ知レル事實ヲ默秘シ、或ハ事實以外ノ何物ヲモ附加スルコト能ハズ、モシ官公吏ニシテソノ職務上默秘スベキ義務アルモノ、醫師藥劑師等ガソノ業務上取扱ヒタルコトニ付、知得タル事實ニシテ默秘スベキモノニ關スル時ハ、鑑定或ハ證言ヲ拒ムヲ得ルコトアリ、尙官公吏ハソノ所屬官廳ニ於テ異議アル時ハ、證人或ハ鑑定人トシテ訊問スルコト能ハズ。

鑑定人及證人ハ旅費、日當及立替金ノ辨償ヲ求ムコト得レドモ、モシ一ツノ事件ノ豫審終結若クハ公判判決前ニ本人ヨリ請求スルニ非ラズンバ、取得ノ意志ナキモノトシテソノ請求權ヲ失フモノナリ、現行ノ刑法施行法ニヨレバ、證人ノ日當ハ出頭一件ニ付二十錢乃至五十錢、(但止宿料ヲ要スル場合ハ日當ヲ給與セズ)、鑑定人及通事ハ同三十錢乃至五十錢ニシテ旅費ハ海陸路一里ニ付五錢乃至二十錢、通路兩線以上アル時ハ最近ノ通路ヲ以テ計算サレ、止宿料ハ一日ニ付二十錢乃至一圓ニシテ、八里以上ノ地ヨリ來リ滞在スルニ非ラザレバ給與サレヌ様ニ規定シアリ、但シ鑑定人通譯ニシテ、數多ノ時間或ハ特別技能、若クハ費用ヲ要スル時ハ、日當ノ外別ニ相當ノ金額ヲ給與スルコトヲ得ル様ニナリ居レリ。民事訴訟法費用法ニモ略同様ノ規定アリ、此等規定ハ明治十四年大政官布告ノ刑法附則ニアルモノヲ殆ンドソノマ、今日迄費用シタルモノナレバ、其時代ト物價ニ非常ノ差アル今日實費丈ケニ就テモ到底收支相償ハザル事アレドモ、此等ノ仕事ハ吾人ノ國家ニ對スル義務メノ一ニシテ、且醫師トシテ眼ヲ社會公衆ノ上ニ放テルモノハ、此等ノ負擔ハ寧ロ甘受スベキモノナリト信ズ。

四、鑑定及檢案

鑑定書及檢案書ハソノ形式内容共ニ全ク同様ノモノナレドモ、一般ニ刑事ヨリ命ゼラレタル事項ニ對ス

鑑定書形式

ル返答ヲ鑑定ト云ヒ、檢事或ハ警察官ヨリ命ゼラレタル時ノモノヲ檢案ト云フ。鑑定及檢案ノ結果ハ或ハ口頭ヲ以テスルコアリ、或ハ書面ヲ以テスルコアリ、前者ハ直ニ裁判所書記ニヨリテ記録ニ編入サレ、後者ハ鑑定書或ハ檢案書トシテ提出スルモノナリ、鑑定書（或ハ檢案書以下單ニ鑑定書ト記載スルモ檢案書ヲソノ内ニ含ム）中ニハソノ手續結果及鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記スベシト規定シアリ、凡テ法律上ノハソノ形式ニ非常ニ重キヲ置クモノナレバ、鑑定書ガ假令事實上及學問上頗ル秘密ニ正シク出來居ルモノニテモ、單ニ鑑定ニ要シタル時間ノ記入ヲ怠リシカ、或ハ契印ヲ忘却セリトカ、字句ノ訂正削除加入等ニ就テ捺印ヲセザリシ等ノコトニテ、法律上全ク鑑定書ト見做サレヌ様ニナルコトアレバ、其ダ馬鹿ラシク思ハレザル節ナキニシモ非ラザルモ、此等ノ點ニモ充分ノ注意ヲ拂フベキモノトス。

吾人ノ論文

裁判所ニ提出サレタル鑑定書ハ、云ハハ公衆ノ前ニ發表サレタル吾人ノ論文ナレバ、如何ナル人ノ眼ニ觸ル、モ何等耻ヅベキ點ナキ様ニ注意スベシ、此鑑定書ハ一件記録中ニ綴ヂ込メラレ、一定期間保存セラレ、モノナレバ、其事件ノ終結迄ニハ或ハ再鑑定若クハ最高鑑定ニ附セラル、コトモアルベシ、故ニ一面ニハ自己ノ爲メ他面ニハ司法上萬遺憾ナキ様、鑑定書ハ自己ノ能力ノ最善ヲ盡シテ作成スベキモノナリ。鑑定書ヲ作成スルニ當リ、尙吾人ノ注意スベキハ、鑑定書ハ醫學ニ暗キ法律家或ハ公衆ノ理解シ會得シ得ラルベキ様ニ成ササルベカラザルコトナリ、故ニ猥ニ術語ヲ使用シ、或ハ西醫ノ言ヲ用ヒ、若クハ最新說ヲ引用スル等ノ如キハ謹ンデ避クルヲヨシトス。今鑑定書ノ形式ヲ略示スレバ次ノ如シ。

鑑定書(或ハ檢案書)

- 一、冒頭トシテ受命年月日、命令官、事件名、命令ヲ受ケタル場所、鑑定事項、檢査ヲ行ヒタル年月日、場所等ヲ記載スベシ。
- 二、檢査記録、コハ檢査物ニ對シテ行ヒタル檢査法、及所見ヲ全ク客觀的ニ成ルベク主觀ヲ加ヘザル様ニシテ記載ス。
- 三、説明、檢査ノ結果ト今日ノ學問ノ教ユル所、及自己ノ經驗トヲ綜合シテ鑑定事項ノ各項ニ對シ、説明ヲ加ヘ因果ノ關係ヲ明ニスベシ。
- 四、鑑定、檢査ノ結果ト説明ニ於ケル理由ニヨリ、鑑定事項ノ各項ニ對シ極メテ簡明ニ結論ヲ下スベシ。
- 五、記名調印、最後ニ鑑定書提出ノ年月日、及自己ノ宿所氏名ヲ自署シ調印スベシ。

五、鑑定書實例

今鑑定書記載方ノ實例ヲ示セバ左ノ如シ。

鑑定書

〇〇縣〇〇郡〇〇村大字第〇〇番地
 〇〇〇〇ガ産出セル

無名初生兒

右者明治四十五年四月七日午後四時頃念ニ死亡セリト云フ然ルニソノ死因ニ疑ハシキ廉アルヲ以テ〇〇裁判所〇〇〇〇〇〇ハ右屍ヲ解剖シテ之ヲ鑑定スベキ旨ヲ子ニ命ゼリ依テ同日午前十時四十五分乃至午後零時四十分〇〇縣〇〇警察署ニテ同署長〇〇〇〇〇立會ノ上ニ之ヲ剖檢セルニソノ所見左ノ如シ

甲、解剖檢査記録

第一 外表檢査

- 一、初生兒屍
 - 身長 四五・〇釐
 - 頭圍 三二・〇釐
 - 頭縱徑 一一・〇釐
 - 頭橫徑 八・二釐
 - 頭斜徑 一二・〇釐
 - 肩幅 八・〇釐
 - 腕幅 七・二釐
- 皮膚ハ全身一般ニ淡紫色ヲ呈シ皮下脂肪層及筋肉ノ發育中等死體強直ハ四肢ノ諸關節ニ僅ニ存ス

鑑定書實例

二、頭毛ハ短ト剃除サレ頂部ニ於テ少許殘存ス其頭毛ノ長サ約一・五種、頭部ニ損傷異常ナシ顔面ニモ損傷ナク一般ニ淡紫色ニシテ眼閉テ結膜黃色、血管充盈ス角膜輕濁スト雖左右同大ニシテ中等大ノ瞳孔ヲ透見ス鼻尖及鼻翼ハ暗赤色ニ乾固ス切檢スルニ皮下組織ハ汚赤色ヲ呈ス鼻翼ヲ壓スルニ泡沫ヲ混ズル汚血色液少許ヲ漏出ス口唇ノ外半ハ汚赤色ニ乾固シ口唇前縁前ニ異物ナク舌ハ齒齦ノ間ニ突出ス兩耳ニ損傷異常ナク外聽道内異物ナシ

三、頸胸腹背部ノ皮膚ニハ損傷異常ナク臍部ニハ約五・〇種長淡黒色ニ乾固セル臍帯ヲ附着シ末端ハ臍系ニヨリテ結紮セラル尙脫離ノ狀ナシ臍窩ニ汚灰色液少許アリ脊面ニハ淡暗紫色部ト淡黄色部(初生兒黃疸)ト交互ニ存在シ肩胛部ニハ毳毛アリ外陰部ハ特ニ暗紫色ヲ呈シ大陰唇ハ少シク腫脹シ陰核及小陰唇ヲ掩フ小陰唇間ニハ灰白色ノ乾酪樣物少許アリ肛門略開シ周圍ハ汚赤色ヲ呈シ且表皮剝脫シテ赤色ノ濕潤セル眞皮ヲ露出ス

四、四肢ニ損傷ナク下腿及爪床ハ暗紫色ヲ呈ス指爪ハ指端ヲ越エ趾爪ハ趾端ニ達ス大腿骨下骨端内ノ化骨點ノ大サ右一・五―二・〇耗徑ニシテ左ニハ之ヲ認メズ

第二 内景検査

五、胸腹ノ皮膚ヲツノ正中ニ於テ切開スルニ皮下脂肪層及筋肉ノ發育中等頸部皮下ヲ細檢スルニ出血裂傷等ノ異常ヲ認メズ腹腔ヲ開檢スルニ内ニ黄色ノ透明液多量ニ存在シツノ上三分ノ一ニ帶褐黄色ノ肝臟其以下ニ淡黄色ノ腸管ヲ見ル、腸管漿膜面ノ細血管稍充盈シ腹膜滑澤、腹腔臟器ノ位置ニ異常ナシ横

十一、左腎莖變細難シ易ク大サ三・五―三・〇一。五種徑表面帶赤褐色ニシテ莖莖明ナリ断面ノ色略表面ノ如ク實質皮質分界明ニシテ乳頭部ノ細尿管内ニハ尿酸いんふあること認ム右腎大サ三・五―二・五一。五種徑ツノ他ノ性状ハ略左腎ニ同シ膀胱空虚、粘膜炎白ナリ

十二、胃中ニハ帶黄褐色ノ粘稠物約一五・〇モアリ内ニ白色ノ乳汁凝固ヲ交ニ結膜ハ汚赤色ノ粘液層ヲ以テ掩ハレ之ヲ拭除スレバ帶赤褐色ノ粘膜露出シ血管稍充盈ス

十三、肝臟表面帶紫黄色ニシテ固サ尋常大サ一・〇―一・〇六・〇一三・〇種徑断面ノ色略表面ノ如シト雖精黄色ニ染ミ血量多ク小葉ノ別不明、膽管内ニハ汚褐色ノ膽汁少許アリ内腔同色ニ染ム

十四、小腸内ニハ帶黄褐色ノ粘稠物少許アリ粘膜淡赤色ヲ呈シ血管充盈ニ大腸内ニハ汚黄色ノ軟便少許アリ粘膜炎白ナリ

下、頭部剖檢

十五、頭皮ヲ式ノ如ク切開剝離スルニ内面前半ハ帶赤淡紫色後半ハ帶赤紫色ニシテ前庭竇大動脈大サ三・〇―二・五種徑ノ耳頭骨ヲツノ結合ニ沿ヒテ剪開シ頭腔ヲ開檢スルニ異常ノ内容ナク軟腦膜透明血管稍充盈シ腦質一般ニ軟、断面ニ血點多ク上縦竇及橫竇内ニハ暗色ノ流動血少許アリ頭骨ニ骨傷ナシ

第三 顕微鏡的検査

十六、氣管内ノ淡赤色液(第八項)ヲ檢スルニ數個ノ赤血球纖毛上皮細胞ノ他異物ヲ認メズ

肺ノ小片ヲ所々ヨリ切取レシノ如ク顯微鏡標本ヲ作りハまごきしりんじんヲ以テ染色シ檢スルニ多數ノ肺胞内ニハ殆んど空氣ヲ存セズ赤血球ヲ以テ填充シ赤血球ヲ有セザル肺胞

隔膜ノ高サハ左右共第四肋間ニ在リ

以、頭胸臟器

六、胸骨ヲ肋軟骨ト共ニ切開シテ胸腔ヲ開檢スルニ兩肺ノ前縁ハ十分ニ露出シ胸腔内異常ノ内容ナク肋膜ニ癒着ナシ前庭竇ノ上二分ノ一ニ胸腺ヲ、ツノ以下ニ心臓ヲ見ル胸腺ノ表面ニ澁血點ナクツノ性状常ノ如シ

七、心臓内ニハ淡黄色ノ透明液約五・〇モアリ心臓表面帶紫赤色血管怒張シ筋質硬、心室部ヲ橫斷スルニ暗赤色ノ流動血多量ニ流出シ内腔滑澤、汚赤色ニシテ心室ノ厚サ左右共約二・〇耗徑ヲ算ス

八、頭部ノ諸臟器ヲ肺心ト共ニ剥出スルニツノ頭頸靜脈ヨリ多量ノ暗赤色流動血ヲ漏ス咽頭食道空虚、粘膜淡暗紫色ヲ呈ス喉頭氣管内ニハ淡赤色粘稠液少許アリ粘膜炎白、血管ヲ、充盈ス氣管枝内ニハ泡沫ヲ混ズル汚血色液多量ニ存在シ壓肺スルニ同狀液通過シ來ルヲ認ム

九、肺ノ表面一般ニ帶紫黑色ニシテ上葉ニ於テ僅ニ淡赤色斑散在スルヲ認ム按壓スルニ呼吸ナク充實ノ感アリ断面ノ色略表面ノ如ク其性状恰モ脾臟ノ断面ヲ見ルガ如シ壓肺ニ依リ小氣管枝ノ断面ヨリハ少許ノ泡沫ヲ含ムル血液、血管ノ断面ヨリハ暗赤色ノ流動血多量ニ流出シ全肺及左肺ハ冷水中ニ沈降シ右肺ハ冷水中ニ沈降シ細片トナシテ投水スルニ右肺上葉ヲ除キ他ハ皆冷水中ニ沈降シ細片トナシテ投水スルニ小部分ノ浮上スツノ浮上シタルモノニ壓ヲ加ヘテ投水スルニ尙浮上ス

以、腹腔臟器

十、脾臟大サ三・五―三・〇一。二種徑表面紫黑色、質稍硬、断面ノ色略表面ノ如ク壓スレバ暗赤色ノ流動血多量ニ漏出ス

ハ萎縮ス小氣管枝内ニモ赤血球ヲ入レ且肺ノ組織間及肺肋膜下ニモ著シキ出血アリ其他褐色乃至汚褐色ニ染色セル小頭粒(血色素ノ變形)數多アリ

乙、說明

上記ノ解剖的及顯微鏡的検査ノ所見ニ依レバ、一、身長頭首ノ大サ(記録第一項)頭毛ノ長サ(同第二項)外陰部其發育ノ狀(同第三項)爪甲發育ノ程度及大腿骨下骨端内ニ在ル化骨點ノ大サ(同第四項)等ニ依レバ本兒ハ妊娠第十月ノ始メニ於テ産出セラレタルモノニシテ母體外ニ於テ獨立ニ生存ヲ營シ得ルノ程度ニ發育セリ

二、臍帯ノ性状(記録第三項)初生兒黃疸ヲ存スルコト(同第二、三項)大腸内ニ最早胎便ヲ認メザルコト(同第十四項)等ニ依リ推考スルニ本兒ハ産後約十日間生存セシモノナルベシ

三、本兒ノ身體ニハ暴行ヲ被リタルノ痕跡ヲ認メズ

四、本兒ノ解剖所見上、血液ハ流動性ニシテ内臟ニ血多シ(記録第七、八、九、十、十三項)之レ通常見ル所ノ窒息死ノ徵候ノ一部ナレドモ之ノミヲ以テツテ確定スルコト能ハズ

五、肺臟ハツノ解剖的所見(記録第九項)殊ニ顯微鏡的検査ノ結果ニ依レバ(同第十項)ツノ組織内ニ甚シキ出血ヲ呈シ即チ血液ハ到ル處肺泡并ニ小氣管枝内ニ充盈スルハ勿論肺ノ實質加ニ肋膜下ニモ澁血スモヲ認メ鼻、口、喉頭咽頭及氣管内管ニハ血液ヲ存セズ(記録第八項)故ニ之ヲ死前外部ヨリ吸入セルモノナリト認ムルコト能ハズ之ヲ出血ノ源泉ハ之ヲ肺以外ノ場所ニ檢出スルコト能ハザルヲ以テツノ局所ニ求メザルベカラズ而シテ肺實質中ニ於ケル此ノ如キ大出血ハ多ク外傷ニ起因スルモノナリト推考スルニハ之ヲ惹起スベキ外傷ノ痕跡ヲ認

メズ且ツノ顯微鏡所見モ亦外傷性ノモノニアラズシテ特發性肺出血ニ酷似ス故ニ本兒ノ死因ハ恐ラク此特發性肺出血ニ起因スル窒息ナラント思科セラル

上記説明ノ理由ニ依リ左ノ如ク鑑定ス
一、本兒ハ特發性肺出血ト稱スル疾病ニ罹リ病死セルモノナリ。

六、醫事鑑定ニ關スル法規

醫事鑑定及檢案ニ關スル法律的規定ヲ摘要スレバ左ノ如シ但シコハ岡本教授ノ撰ニ係ルモノナリ

(天) 刑 事

刑事訴訟法 第三章 豫審 第七節 鑑定 (鑑定及ビ鑑定人)
第三百三十五條 豫審判事ハ犯罪ノ性質、方法及ビ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定ヲ必要ナリトスルトキハ學術、職業ニ因リ鑑定スルコトヲ得ヘキ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ

鑑定ノ爲メ必要ナリトスルトキハ死體ノ解剖ヲ命シ又ハ既ニ埋葬シタル死體ヲ解剖シ若クハ檢視スル爲メ墳墓ノ發掘ヲ命スルコトヲ得
第三百三十六條 鑑定ニ付テハ第五百五條第五百十八條乃至第五百二十一條第五百二十三條乃至第五百二十五條第五百二十八條及第五百三十二條ノ規定ヲ準用ス但鑑定人ニ對シテハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得ス第五百三十一條ノ規定ハ鑑定人ニ付テモ亦之ヲ適用ス (三十二年法律第七十三號ヲ以テ本項追加)

第三百三十七條 鑑定人ニ付テモ亦之ヲ適用ス (三十二年法律第七十三號ヲ以テ本項追加)
第三百三十八條 鑑定人ノ呼出狀ニハ其氏名住所及ヒ職業ヲ記載ス可シ

此鑑定ハ明治四十五年四月十日着手
同 年五月二日終了
明治四十五年五月二日
鑑定人醫師 小南又一郎 印

又出頭ノ日時、場所及呼出ニ應セザルトキハ罰金ヲ言渡シ且勾引スルコトアル可キ旨ヲ記載ス可シ
呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クとも二十四時間ノ猶豫アル可シ

第三百三十八條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除ク外該人呼出ニ應セザルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ其不審ニ因リ生シタル費用ノ賠償及ヒ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス
豫審判事ハ其鑑定ニ對シテ罰金ノ言渡者ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ前二條ニ勾引狀ヲ發スルコトヲ得
若シ鑑定人呼出ニ應セザルトキハ費用賠償ノ外二倍ノ罰金ヲ言渡ス可シ又勾引狀ヲ發スルコトヲ得
後備、後備ノ軍籍ニ在ラザル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス可シ其勾引ニ付テモ亦同シ

第三百三十九條 豫審判事ハ鑑定人罰金言渡者ノ送達アリタルヨリ三十日內ニ其出頭セザリシコトヲ正當ノ理由ヲ以テ辯解シタルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消ス可シ
第三百四十條 證人呼出狀ニ因リ出頭シタルトキハ其呼出狀ヲ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタルトキハ其人違ナキコトヲ證明ス可シ
第三百四十一條 豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名、年齢、職業、住所及ヒ第五百二十三條ニ記載シタル者ナリヤ否ヤヲ問フ可シ
第三百四十二條 左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルコトヲ許サス但宣誓ヲ爲サシメシテ事實參考ノ爲メ其供述ヲ聽クコトヲ得
第一 民事原告人
第二 民事原告人及ヒ被告ノ親屬但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ
第三 民事原告人及ヒ被告ノ後見人又ハ此審ノ若クハ後見ヲ受クル者
第四 民事原告人及ヒ被告ノ雇又ハ同居人
第三百四十四條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ
第一 十六才未満ノ幼者
第二 知覺精神ノ不十分ナル者
第三 癡癡者
第四 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者
第五 重罪事件又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者
第六 現ニ供述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其

證意十分ナラザルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者
第三百四十五條 左ニ記載シタル場合ニ於テハ證言ヲ拒ムコトヲ得
第一 官吏、公吏又ハ官吏、公吏タリシ者其職務上默シ可キ義務アル事情ニ關スルトキ
第二 醫師、藥劑師、藥種商、產婆、辯護士、辯護人、公證人又ハ之等ノ職ニ在リシ者及ヒ宗教者若クハ書記ノ職ニ在ル者又ハ之等ノ職ニ在リシ者其業務上取扱ヒタルコトニ付キ知得タル事實ニシテ默シ可キモノニ關スルトキ
證言ヲ拒ム者ハ拒絕ノ原因タル事實ヲ開示シ且之ヲ證明ス可シ

第三百四十八條 豫審判事ハ證人ノ供述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスルトキハ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルコトヲ得
若シ證人同行スルコトヲ肯セザルトキハ第五百十八條ノ規定ニ從フ

第四百條 被告人又ハ對質人呼出タルトキハ書面ヲ以テ問ヒ啞ナルトキハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ聲者、啞者文字ヲ知ラザルトキハ通事ヲ命ス可シ
被告人又ハ對質人國語ニ通セザルトキ亦同シ
第四百一條 通事ハ正實ニ通譯ス可キ官署ヲ爲ス可シ書記ハ通事ニ圖書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ
第四百三十六條 第四百三十七條 第四百四十一條ノ規定ハ

總 論

同前 第三百三十七條 鑑定人ハ公平且正實ニ鑑定ス可キ宣誓ヲ爲ス可シ

第三百三十八條 鑑定人宣誓ヲ背セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ背セサル

第三百三十九條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑

定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルコトヲ得

第三百四十條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其手續、結果及ヒ鑑定ヲ爲シ

タル時間ヲ詳記ス可シ

若シ結果ヲ得サルトキハ其推測スル所ヲ記載ス可シ

鑑定人意見ヲ異ニスルトキハ各自鑑定書ヲ作り又ハ各自ノ意見

ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第三百四十一條 鑑定人ハ旅費、日常及ヒ立替金ノ辨濟ヲ要ムルコ

トヲ得

第八節 現行犯ノ豫審

第三百四十四條 地方裁判所檢察及ヒ區裁判所檢察ハ豫審判事ヨリ

先ニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコト

ヲ知リタル場合ニ於テ其事件急遽ヲ要スルトキハ豫審判事ヲ待

ツコトナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分

ヲ爲スヲ得但罰金又ハ科料及ヒ費用賠償ノ言渡ヲ爲スヲ得

證人及ヒ鑑定人ノ供述ハ宣誓ヲ用ユルコトナク之ヲ聽ク可シ

同前 第三編 犯罪ノ捜査、起訴及ヒ豫審、第三章 豫審

第九十條 被告人ノ自白、官吏ノ檢査證書、證據物件、證人

及ヒ鑑定人ノ供述其他證據ノ微意ハ判事ノ判斷ニ任ス

(乙) 公判

同前 第四編 公判、第一章 通期

第三百八十九條 豫審ニ於テ訊問シタル證人又ハ鑑定ヲ爲シタル鑑

定人ハ更ニ之ヲ呼出スコトヲ得

豫審ニ於ケル證人ノ供述書又ハ鑑定人ノ鑑定書ハ更ニ其證人、

鑑定人ヲ呼出サルトキ、證人、鑑定人呼出ヲ受ケ出頭セサルト

キ又ハ豫審及ヒ公判ニ於ケル供述鑑定ヲ比較ス可キトキハ檢事

其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀

セシムルコトヲ得

第三百九十條 第九十五條以下ノ規定ハ公判ノ證人ニ第三百三十五條

以下ノ規定ハ公判ノ鑑定人ニモ亦之ヲ準用ス

第三百九十五條 證人又ハ鑑定人ノ供述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮

以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタルトキハ裁判所ニ於テ檢事其

他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ勾引狀ヲ

發シ豫審判事ニ送致ス可シ

其證人又ハ鑑定人ノ供述ハ裁判所書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送

致ス可シ

本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因

リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ辯論ヲ停止スルコトヲ得

第二百八條 裁判所書記ハ公判始末書ヲ作り左ノ事項其他一切ノ

訴訟手續ヲ記載ス可シ

第一 公判辯論ヲ爲シタルコト又ハ公判ヲ禁シタルコト及ヒ

其事由

同前 第三百三十七條 鑑定人ハ公平且正實ニ鑑定ス可キ宣誓ヲ爲ス可シ

第三百三十八條 鑑定人宣誓ヲ背セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ背セサル

第三百三十九條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑

定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルコトヲ得

第三百四十條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其手續、結果及ヒ鑑定ヲ爲シ

タル時間ヲ詳記ス可シ

若シ結果ヲ得サルトキハ其推測スル所ヲ記載ス可シ

鑑定人意見ヲ異ニスルトキハ各自鑑定書ヲ作り又ハ各自ノ意見

ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第三百四十一條 鑑定人ハ旅費、日常及ヒ立替金ノ辨濟ヲ要ムルコ

トヲ得

第八節 現行犯ノ豫審

第三百四十四條 地方裁判所檢察及ヒ區裁判所檢察ハ豫審判事ヨリ

先ニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコト

ヲ知リタル場合ニ於テ其事件急遽ヲ要スルトキハ豫審判事ヲ待

ツコトナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分

ヲ爲スヲ得但罰金又ハ科料及ヒ費用賠償ノ言渡ヲ爲スヲ得

證人及ヒ鑑定人ノ供述ハ宣誓ヲ用ユルコトナク之ヲ聽ク可シ

同前 第三編 犯罪ノ捜査、起訴及ヒ豫審、第三章 豫審

第九十條 被告人ノ自白、官吏ノ檢査證書、證據物件、證人

及ヒ鑑定人ノ供述其他證據ノ微意ハ判事ノ判斷ニ任ス

(乙) 公判

同前 第四編 公判、第一章 通期

第三百八十九條 豫審ニ於テ訊問シタル證人又ハ鑑定ヲ爲シタル鑑

定人ハ更ニ之ヲ呼出スコトヲ得

費用ヲ要スルトキハ日常ノ金額ヲ給與スルコトヲ得外別相當ノ
(地)民 事 第一審ノ訴訟手續 第一章 地方裁判

民事訴訟法 第二編 第一審ノ訴訟手續 第一章 地方裁判
第七節 鑑定

第三百二十二條 鑑定ニ付テハ以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケ
サル限リハ人證ニ付テノ規定ヲ準用ス

第三百二十三條 鑑定ノ申出ハ鑑定ス可キ事項表示ヲシテ之ヲ爲
ス

第三百二十四條 立會フ可キ鑑定人ノ選定及ヒ其員數ノ指定ハ受
訴裁判所之ヲ爲ス其裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ一名マテニ制限シ
又ハ何時ニモ既ニ任命シタル者ニ代ヘ他ノ鑑定人ヲ任命スル
コトヲ得

裁判所ハ鑑定人トシテ訊問ヲ受クルニ適當ナル者ヲ指名ス可キ
旨ヲ當事者ニ催告スルコトヲ得

當事者カ一定ノ者ヲ鑑定人ニ爲スコトヲ合意シタルトキハ裁判
所ハ其合意ニ從テ可シ然レトモ裁判所ハ當事者ノ爲ス可キ選定
ヲ一定ノ員數ニ制限スルコトヲ得

第三百二十五條 外國ノ書類又ハ產物ノ審査ヲ要スル場合ニ於テ
必要ナル能力ヲ有スル本邦人ノ在ラサルトキハ裁判所ハ外國人
ヲ鑑定人ニ任命スルコトヲ得

第三百二十六條 左ニ掲ケル者鑑定ヲ命セラレタルトキハ之ヲ爲
ス義務アリ

第一 必要ナル種類ノ鑑定ヲ爲ス爲メ公ニ任命セラレタル者
第二 鑑定ヲ爲スニ必要ナル學術技術若クハ職業ニ常ニ従事
スル者又ハ學術、技術若クハ職業ニ従事スル者爲メ公ニ任命

セラレ若クハ授權セラレタル者
右ノ外鑑定ヲ爲ス可キ旨ヲ裁判所ニ於テ述ヘタル者ハ鑑定人ト
ル義務ナキト雖モ鑑定ヲ爲ス義務アリ

第三百二十七條 鑑定人ハ證人カ證言ヲ拒ムコトヲ得ルト同一ノ
原因ニ依リ鑑定ヲ拒ム權利アリ

官吏公定ハ其所屬ニ於テ異議アルトキハ之ヲ鑑定人トシテ訊
問スルコトヲ得

第三百二十八條 鑑定ヲ爲ス義務アル鑑定人出頭セス又ハ鑑定ヲ
拒ミタル場合ニ於テハ其者ニ對シ此方爲メ生シタル費用ノ賠償
及ヒ罰則ヲ言渡ス可シ但モ鑑定人ヲ勾引スルコトヲ得

第三百二十九條 鑑定人ハ其鑑定ヲ爲ス前ニ其鑑定人タル義務ヲ
公平且誠實ニ履行スヘキ旨ノ誓ヲ宣フ可シ

第三百三十條 受訴裁判所ハ其意見ヲ以テ左ノ諸條件ヲ以テ左ノ諸
件ヲ定ム可シ

第一 鑑定人ノ意見ハ口頭又ハ書面ニテ之ヲ述ヘシム可キヤ
第二 數名ノ鑑定人ヲ訊問ス可キ場合ニ於テ各意見カ異ナル
トキハ共同ニテ鑑定書ヲ作ラシム可キヤ又ハ各別ニテ之ヲ作
ラシム可キヤ

第三 口頭辯論ノ際鑑定人ノ總員又ハ其一名ヲシテ鑑定書ヲ
説明セシム可キヤ

第四 鑑定ノ結果カ不十分ナルトキハ同一又ハ他ノ鑑定人ヲ
シテ再ヒ鑑定ヲ爲サシム可キヤ

第三百三十一條 受訴裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ受命判事又ハ受託
判事ニ委任スルコトヲ得此場合ニ於テハ受命判事又ハ受託判事
ハ第三百二十四條及ヒ第三百三十條第一號及ヒ第二號ノ規定ニ
依リ受訴裁判所ニ屬スル權利ヲ有ス

第六節 人證

第二百八十九條 何人ヲ問ハス法律ニ別段ノ規定ナキ限リ
ハ民事訴訟ニ關シ裁判所ニ於テ證言スル義務アリ

第二百九十條 官吏、公吏ハ退職ノ後ト雖モ其職務上職務
ス可キ義務アル事情ニ付テハ其所屬廳又ハ其最後ノ所屬
廳ノ許可ヲ得タルトキニ限り證人トシテ之ヲ訊問スルコ
トヲ得大臣ニ付テハ勅許ヲ得ルコトヲ要ス

此許可ハ證言カ國家ノ安寧ヲ害スル恐アルトキニ限り之
ヲ拒ムコトヲ得

右許可ハ受訴裁判所コリ之ヲ求メ且證人ニ之ヲ通知ス可
シ

第二百九十一條 人證ノ申出ハ證人ヲ指名シ及ヒ證人ノ訊
問ヲ受テ可キ事實ヲ表示シテ之ヲ爲ス

第二百九十二條 證人ノ呼出狀ニハ左ノ諸條件ヲ具備スルコ
トヲ要ス

第一 證人及ヒ當事者ノ表示
第二 證據決定ノ旨趣ニ依リ訊問ヲ爲ス可キ事實ノ表
示
第三 證人ノ出頭ス可キ場所及ヒ日時
第四 出頭セサルトキハ法律ニ依リ處罰ス可キ旨
第五 裁判所ノ名稱

電 論

セラレ若クハ授權セラレタル者
右ノ外鑑定ヲ爲ス可キ旨ヲ裁判所ニ於テ述ヘタル者ハ鑑定人ト
ル義務ナキト雖モ鑑定ヲ爲ス義務アリ

第三百二十七條 鑑定人ハ證人カ證言ヲ拒ムコトヲ得ルト同一ノ
原因ニ依リ鑑定ヲ拒ム權利アリ

官吏公定ハ其所屬ニ於テ異議アルトキハ之ヲ鑑定人トシテ訊
問スルコトヲ得

第三百二十八條 鑑定ヲ爲ス義務アル鑑定人出頭セス又ハ鑑定ヲ
拒ミタル場合ニ於テハ其者ニ對シ此方爲メ生シタル費用ノ賠償
及ヒ罰則ヲ言渡ス可シ但モ鑑定人ヲ勾引スルコトヲ得

第三百二十九條 鑑定人ハ其鑑定ヲ爲ス前ニ其鑑定人タル義務ヲ
公平且誠實ニ履行スヘキ旨ノ誓ヲ宣フ可シ

第三百三十條 受訴裁判所ハ其意見ヲ以テ左ノ諸條件ヲ以テ左ノ諸
件ヲ定ム可シ

第一 鑑定人ノ意見ハ口頭又ハ書面ニテ之ヲ述ヘシム可キヤ
第二 數名ノ鑑定人ヲ訊問ス可キ場合ニ於テ各意見カ異ナル
トキハ共同ニテ鑑定書ヲ作ラシム可キヤ又ハ各別ニテ之ヲ作
ラシム可キヤ

第三 口頭辯論ノ際鑑定人ノ總員又ハ其一名ヲシテ鑑定書ヲ
説明セシム可キヤ

第四 鑑定ノ結果カ不十分ナルトキハ同一又ハ他ノ鑑定人ヲ
シテ再ヒ鑑定ヲ爲サシム可キヤ

第三百三十一條 受訴裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ受命判事又ハ受託
判事ニ委任スルコトヲ得此場合ニ於テハ受命判事又ハ受託判事
ハ第三百二十四條及ヒ第三百三十條第一號及ヒ第二號ノ規定ニ
依リ受訴裁判所ニ屬スル權利ヲ有ス

第二百九十三條 後備、備後ノ軍隊ニ在ラサル軍人、軍醫
ヲ證人トシテ呼出スニハ其所屬ノ長官又ハ隊長ノ囑託シ
テ之ヲ爲ス其長官又ハ隊長ハ期日ヲ遵守セシムル爲メ其
呼出ヲ受ケタル者ノ關聯ヲ許ス可シ若シ軍務上之ヲ許ス
能ハサルトキハ其旨ヲ裁判所ニ通知シ且他ノ期日ヲ定ム
ル求メ爲ス義務アリ

第二百九十四條 合式ニ呼出サレタル證人ニシテ正當ノ理
由ナク出頭セサル者ニ對シテハ申立ナシト雖モ決定ヲ以
テ其不參ニ因リ生シタル費用ノ賠償及ヒ處罰以下ノ罰
金ヲ言渡ス可シ

證人カ再度出頭セサル場合ニ於テハ更ニ費用ノ賠償及ヒ
罰金ヲ言渡ス可シ又其勾引ヲ命スルコトヲ得

證人ハ右ノ決定ニ對シテ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執
行ヲ停止スル效力ヲ有ス

後備、後備ノ軍隊ニ在ラサル軍人、軍醫ニ對スル罰金ノ
言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑
託シテ之ヲ爲ス其勾引ニ付テモ亦同シ

第二百九十五條 證人其出頭セザリシコトヲ後日ニ正當ノ
理由ヲ以テ解釋スルトキハ罰金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消ス
可シ

證人ノ不參及ヒ決定取消ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ
之ヲ爲スコトヲ得

第二百九十六條 皇族證人ナルトキハ受命判事又ハ受託判
事其所在ニ就キ訊問ヲ爲ス

各大臣ニ付テハ其官廳ノ所在地ニ於テ之ヲ訊問ス若シ其
所在地ニ不在スルトキハ其現在地ニ於テ之ヲ訊問ス

電 論

一五

帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ所在地ニ滯在中ハ其所在地ニ於テ之ヲ訊問ス

第二百九十七條 左ニ掲クル者ハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一 原告若クハ被告又ハ其配偶者ト親族ナルトキ

但親族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第二 原告若クハ被告ノ後見ヲ受クル者

第三 原告若クハ被告ト同居スル者又ハ雇人トシテ之ニ仕フル者

裁判長ハ訊問前ニ前項ノ者ニ證言ヲ拒ム權利アル旨ヲ告ク可シ

第二百九十八條 左ノ場合ニ於テハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一 官吏、公吏又ハ官吏、公吏タリシ者カ其職務上

默秘ス可キ義務アル事情ニ關スルトキ

第二 醫師、藥商、産婆、辯護士、公證人、神職及ヒ

僧侶カ其身分又ハ職業ノ爲メ委託ヲ受ケタルニ因リ

テ知りタル事實ニシテ默秘ス可キモノニ關スルトキ

第三 間ニ付テハ答辯カ證人又ハ前條ニ掲ケタル者ノ

職務ニ關スルカ又ハ其刑事上ノ訴追ヲ拒ムコトヲ得

第四 間ニ付テハ答辯カ證人又ハ前條ニ掲ケタル者ノ

爲メ直接ニ財産權上ノ損害ヲ生セシム可キトキ

第五 證人カ其技術又ハ職業ノ秘密ヲ公ニスルニ非サ

レハ答辯スルコト能ハサルトキ

第二百九十九條 證人ハ第二百九十七條第一號及ヒ第二百

九十八條第一號ノ場合ニ於テ左ノ事項ニ付テハ證言ヲ拒ム

コトヲ得ス

第一 家族ノ出產、婚姻又ハ死亡

第二 家族ノ關係ニ因リ生スル財産事件ニ關スル事實

第三 證人トシテ立會ヒタル場合ニ於ケル權利行爲ノ

成立及ヒ旨趣

第四 原告若クハ被告ノ前主又ハ代理人トシテ係争ノ

權利關係ニ關シタル行爲

前條第一號、第二號ニ掲ケタル者其默秘ス可キ義務ヲ免

除セラレタルトキハ證言ヲ拒ムコトヲ得ス

第三百條 證言ヲ拒ム證人ハ其訊問ノ期日前ニ書面又ハ口

頭ヲ以テ又ハ期日ニ於テ其拒絕ノ原因タル事實ヲ開示シ

且之ヲ説明ス可シ

期日前ニ證言ヲ拒ミタル證人ハ期日ニ出頭スル義務ナシ

裁判所書記ハ拒絕ノ書面ヲ受領シ又ハ其陳述ニ付キ調査

ヲ作リタルトキハ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

第三百一條 拒絕ノ當否ニ付テハ受訴裁判所當事者ヲ審訊

シタル後決定ヲ以テ其裁判ヲ爲ス但第二百九十八條第一

號ノ場合ニ於テシタル拒絕ノ當否ニ付テハ所屬廳又ハ

最後ノ所屬廳ノ裁定ニ任ス

原告若クハ被告カ出頭セサルトキハ出頭シタル者ノ申述

ヲ斟酌シテ決定ヲ爲ス

右決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行

ヲ停止スル効力ヲ有ス

第三百二條 原因ヲ開示セシメシテ證言ヲ拒ミ又ハ開示シタ

ル原因ノ實際確定シタル後ニ之ヲ拒ミタルトキハ申立テ

要セシメテ決定ヲ以テ證人ニ對シ其拒絕ニ因リ生シタル

費用ノ賠償及ヒ四拾圓以下ノ罰金ヲ言渡ス

證人ハ費用ノ賠償及ヒ罰金ノ言渡ニ對シ抗告ヲ爲スコト

ヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル効力ヲ有ス

後備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ

言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第三百三條 原告若クハ被告ハ相手方ト相手方ノ證人トノ

間ニ第二百九十七條第一號乃至第三號ノ關係アルトキハ

其證人ヲ忌避スルコトヲ得

第三百四條 忌避ノ申請ハ證人ノ訊問前ニ之ヲ爲ス可シ此

時限後ハ其前ニ忌避ノ原因ヲ主張スルヲ得サリシコトヲ

説明スルトキニ限リ其證人ヲ忌避スルコトヲ得

忌避ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

忌避ノ原因ハ之ヲ説明ス可シ

第三百五條 忌避ノ申請ニ付テハ口頭辯論ヲ經スレ

テ之ヲ爲スコトヲ得

忌避ノ原因アリト宣言スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコ

トヲ得ス忌避ノ原因ナシト宣言スル決定ニ對シテハ即時

抗告ヲ爲スコトヲ得

第三百六條 各證人ニハ其携帶ス可キ呼出狀其他適當ノ方

法ヲ以テ人違ナラサルコトヲ判然ナラシメタル後訊問前

各別ニ宣誓ヲ爲サシム可シ然レトモ宣誓ハ特別ノ原因ア

ルトキ殊ニ之ヲ爲サシム可キヤ否ヤニ付キ疑ノ存スルト

キハ訊問ノ終ルマテ之ヲ延フルコトヲ得

第三百七條 證人ハ訊問前ニ宣誓ヲ爲スコトヲ得

眞心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ默秘セス又何事ヲモ附加

セサル旨ノ誓ヲ宣フ可シ

又訊問後ニ宣誓ヲ爲スコトヲ得於テハ眞心ニ從ヒ眞實

ヲ述ヘ何事ヲモ默秘セス又何事ヲモ附加セザリシ旨ノ誓

ヲ宣フ可シ

第三百八條 刑事ハ宣誓前ニ相當ナル方法ヲ以テ宣誓者ニ

偽證ノ罰ヲ諭示ス可シ

第三百九條 宣誓ヲ拒ム證人ニ付テハ第三百條乃至第三百

二條ノ規定ヲ適用ス

第三百十條 左ノ者ハ宣誓ヲ爲サシメシテ參考ノ爲メ之

ヲ訊問スルコトヲ得

第一 訊問ノ時未タ滿十六歳ニ達セサル者

第二 宣誓ノ何物タルヤヲ了解スルニ必要ナル精神上

ノ發達ノ缺ケル者

第三 刑事上ノ判決ニ因リ公權ヲ剝奪又ハ停止セラレ

タル者

第四百九十七條及ヒ第二百九十八條第三號並ニ

第四百條ノ規定ニ依リ證言ヲ拒絕スル權利アリテ之ヲ

行使セサル者但第二百九十八條第三號並ニ第四百條ノ

場合ニ於テハ拒絕ノ權利ニ關スル事實ニ付テハ證言ヲ

爲スコトヲ申立テラレタルトキニ限ル

第五百條 訴訟ノ成績ニ直接ノ利害關係ヲ有スル者

第三百十一條 證人訊問ハ後ニ訊問ス可キ證人ノ在ラサル

場所ニ於テ各別ニ之ヲ爲ス

證人ノ供述互ニ齟齬シタルトキハ之ヲ對質セシムルコト

ヲ得

第三百十二條 證人訊問ハ證人ニ其姓名、年齢、身分、職

業及ヒ住居ヲ問フヲ以テ始マル又必要ナル場合ニ於テハ

其事件ニ於テ證言ノ信用ニ關スル事情殊ニ當事者トノ關

係ニ付テノ同ヲ爲ス可シ
 第三百十三條 證人ニハ其訊問事項ニ付キ知リタルモノヲ
 牽連シテ供述セシム可シ
 證人ノ供述ヲ明白及ヒ完全ナラシメ且其知リ得タル原因
 ヲ穿鑿スル爲メ必要ナル場合ニ於テハ尙ホ他ノ同ヲ發ス
 可シ
 第三百十四條 證人ハ其供述ニ換ヘテ書類ヲ朗讀シ其他覺
 書ヲ用キルコトヲ得ス但算數ノ關係ニ限リ覺書ヲ用キル
 コトヲ得
 第三百十五條 陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ證人ニ同ヲ發ス
 ルコトヲ得當事者ハ證人ニ對シ自ラ同ヲ發スルコトヲ
 得ス然レトモ當事者ハ證人ノ供述ヲ明白ナラシムル爲メ
 其必要ナリトスル同ヲ發センコトヲ裁判長ニ申立ツルコ
 トヲ得
 發問ノ許否ニ付キ異議アルトキハ裁判所ハ直チニ之ヲ裁
 判ス
 第三百十六條 調書ニハ證人カ其訊問ノ前若クハ後ニ宣誓
 シタルヤ又ハ宣誓セシテ訊問ヲ受ケタルヤヲ記載ス可
 シ
 第三百十七條 受訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ證人ノ再訊問
 ヲ命スルコトヲ得
 第一 證人訊問方法上ノ規定ニ違ヒタルトキ
 第二 證人訊問ノ完全ナラザルトキ
 第三 證人ノ供述カ明白ナラス又ハ兩義ニ滯ルトキ
 第四 證人カ其供述ノ補充又ハ更正ヲ申立ツルトキ
 第五 其他裁判所カ再訊問ヲ必要トスルトキ

第三百十八條 左ノ場合ニ於テ證人ニ依レル證據測ハ受訴
 裁判所ノ部員一名ニ之ヲ命シ又ハ區裁判所ニ之ヲ囑託ス
 ルコトヲ得
 第一 眞實ヲ探知スル爲メ現場ニ就キ證人ノ訊問スル
 ノ必要ナルトキ
 第二 證人カ疾病其他ノ事由ノ爲メ受訴裁判所ニ出頭
 スル能ハザルトキ
 第三 證人カ受訴裁判所ノ所在地ヨリ遠隔ノ地ニ在リ
 テ其裁判所ニ出頭スルニ付キ不相應ノ時日及ヒ費用
 ヲ要スルトキ
 第三百十九條 第二百九十四條、第二百九十五條第三百二
 條及ヒ第三百九條ニ掲ケタル證人ニ對スル受訴裁判所ノ
 權ハ受命判事又ハ受託判事ニ專屬ス
 證人カ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ理由ヲ開示シ
 テ證言ヲ拒ミ又ハ宣誓ヲ拒ミ又ハ職權若クハ申立ニ因リ
 發シタル同ニ答フルコトヲ拒ムトキハ此拒絕ノ當否ニ付
 キ裁判ヲ爲ス權ハ受訴裁判所ニ屬ス
 受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル
 同ヲ發スルコトヲ否トキハ原告若クハ被告ハ其當否ニ
 付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得
 證人ノ再訊問ハ受命判事又ハ受託判事ノ意見ヲ以テ之ヲ
 命スルコトヲ得
 第三百二十條 證人ヲ申出タル原告若クハ被告ハ其訊問ノ
 開始マテハ此證據方法ヲ變更スルコトヲ得其後ハ相手方
 ノ承諾ヲ得ルトキニ限リ之ヲ變更スルコトヲ得
 第三百二十一條 各證人ハ日常ノ辨濟及ヒ其出頭ノ爲ニ旅

行ヲ要スルトキハ旅費ノ辨濟ヲ請求スルコトヲ得
 此金額ノ辨濟ハ訊問期日ノ終リタル後直チニ之ヲ求ムル
 コトヲ得
 舉證者ノ豫納シタル金額不足スル時ハ職權ヲ以テ其不足
 額ヲ取立ツ可シ
 同九 第九節 檢証
 第三百五十七條 檢證ノ申出ハ檢證物ヲ表示シ及ヒ證ス可キ事實
 ヲ開示シテ之ヲ爲ス
 第三百五十八條 受訴裁判所ハ檢證ヲ爲スニ際シ鑑定人ノ立會ヲ
 命スルコトヲ得
 受訴裁判所ハ檢證及ヒ鑑定人ノ任命ヲ其部員一名ニ命シ又ハ區
 裁判所ニ囑託スルコトヲ得
 第三百五十九條 檢證ヲ爲ス際發見シタル事項ハ調書ニ記載シテ
 之ヲ明確ナラシメ又必要ナル場合ニ於テハ調書ノ附録トシテ添
 附ス可キ圖面ヲ作リ之ヲ明確ナラシム可シ
 若シ既ニ記録ニ圖面ノ存スルトキハ之ヲ檢證物ニ對照シ必要ナ
 ル場合ニ於テハ之ヲ更正ス可シ

七、異同ノ決定

吾人醫師ガ検査ニ着手スル前ニ先ヅ以テ決定セザルベカラザルハ、戸籍上或一定ノ名前ヲ有スル人ト今
 現ニ検査ヲ受ケントスル人ト同一ノ人ナルヤ否ヤヲ決定スルニ在リ、コレヲ法醫學上異同ヲ決定スト云フ。
 コハ通常司法官モシクハ周圍ノ人ニヨリテ略決定サレ居リテ、何等ソノ方面ニ注意ヲ向クルノ必要ナキ
 多ケレドモ、時トシテ行旅病死者、發掘死體、或ハ犯罪人ニ對シテハ、異同決定ニ非常ノ注意ヲ拂ハザル
 ベカラザルアリ。

身體的特徵

異同決定ノ必要アル場合ニハ、先ヅ一般の觀察ヨリ漸次醫學的方面ニ移行スベシ、即チ被檢査人ノ衣服、所持品、身長、體重、年齢、性、體格、營養狀態、皮色、諸所ニ於ケル發毛ノ工合、及文身、灸痕、母斑、損傷、癍痕ノ有無、モシアラバソノ位置、職業的特徵等ヲ記載シ、次デ身體各部ニ於ケル特徵ヲ檢査スベシ。例ヘバ齒牙ノ發生、或ハ缺損ノ狀態、生殖器官ノ有無、手足ニ最モ著シキ職業的特徵等ニ注意スベシ。即チ染色業者寫眞師ノ手指ニ色素藥品ノ附着スルコト、車夫ノ下腿ニ靜脈腫ヲ見ルコト、靴屋、金箔屋ノ手ニハ一定ノたこノアルコト等ノ如キ之レナリ。

衣服ノ崩壞

發掘セル死體ノ衣服及所持品ハ甚ダ異同決定ノ參考トナルコトアリ、今日迄ノ經驗ニ依レバ土葬後棺物ハ廿年、毛織物ハ十年、木綿ハ三年位ハソノ縮柄ヲ認ムルコトヲ得ルト云フ。然レドモカ、ル物品ノ腐敗崩壞スルハ、非常ニ種々ノ條件ニ依リ影響ナル、モノナレバ、ソヲ考慮ノ中ニ措カザルベカラズ。著者見タル例ニ就テ云ヘバ、鳥羽伏見ノ戰爭ニ討死セルモノヲ改葬ノ必要アリテソノ死體數多發掘セルコトアリキ、死體ハ陶製甕ノ中ニ入レ埋葬シアリテ、内ニハ貯水ノ爲メ屍腫トナルモノアリシニ拘ラズ、五十年ヲ經過セル今日羅紗ノ陣羽織ハ、尙ソノ紋所ヲ明カニ認ムルコトヲ得タルモノアリ。

死體ノ年齢

死體ニ於テ年齢ヲ鑑定スル場合ニ必要ナルハ、ソノ齒牙發生ノ狀態、モシクハ骨格ニ於ケル各骨ノ大サソノ化骨ノ狀態等ニシテ、例ヘバ齒牙ノ交換發生ハ何才ニシテ、又何處ノ骨端化骨核ハ何才ニシテ何程ノ大サトナリ、何才ニシテ骨幹ト合致スルカト云フハ解剖學ノ教フル所ナレバ、可檢骨格ト之トヲヨク照合スレバ、ソノ年齢ヲ決定スルコトヲ得ルモノナリ。

死體ノ性

死體新鮮ナル時ハ男女ノ性ヲ區別スルコト容易ナレドモ、腐敗甚シキ時ハ困難ナリ。此時ニハ先ヅ子宮ノ

骨格ノ性別

有無、或ハ骨盤ノ形狀ニ依ルヲヨシトス、子宮ハ最モ腐敗シ難キ臟器ナレバ、此點ニ就テハ好都合ナリ。

精阜



陰毛發生ノ差

毛ハ陰阜ニノミ限ルモノナリ。
(イ) べるちろん氏人身測定法

人身測定法

生體ニ於ケル異同ノ決定ハ死體ニ於ケルモノヨリモ困難ナリ。何トナレバ之ヲ解剖シテソノ骨格ヲ檢スル能ハズ。而モ衣服、所持品、身體ニ於ケル各特徵ヲ故意ニ變化セシムルコトアレバナリ。犯罪學上此異同ノ決定ハ、非常ニ重要視サレ研究サレタル結果、千八百八十年佛國ノべるちろん氏ハ、所謂人身測定法ヲ發表セリ。此法ハ人類ノ骨格ハ成年ニ至レバ發育ヲ停止シ、ソノ後ハ變化スルコトナシト云フヲ原理トシタルモノニシテ、Anthropometric, Anthropologische Messung, od. Bertillonageト云ヒ、或一定ノ人ノ身長、身長、座高、頭首ノ大サ、四肢ノ長サ等ヲ測定シ、一定ノかあヒニ記入シ、是等ノ多クヲ中央局ニ集メ分類貯藏シ置キ、モシ又異同ヲ決定スルノ必要アル者アラバ、同様ニ測定シかあヒニ記入シ之ヲ中央局ニ送致シテ分類探究シ、

或一定ノ名前ヲ有スルモノト一致スル時ハ、後ニ異同決定ヲ要求セシモノト、以前一定ノ姓名ヲ有セシモノト同一人ナルコトヲ知ルヲ得。斯クシテ再犯者常習犯罪者ヲ發見スル方法トナセシガ、本法ハ測定ニ甚ダ手數ヲ要シ、且測定法ハハるらん氏直傳ニアラザレバ不可ナリナド云フ條件アリ。且往々全ク異人ニシテ同一測定數ヲ得ルコトアリ、故ニ記入カあごニハ他ノ身體的特徵ヲ記スベシトカ、或ハ一定ノ大サ、一定ノ位置ニ於ケル寫眞ヲ添加スベシトノ種々ナル條件ヲ附加スルニ至リ、益々本法繁雜トナルニ至レリ、尙本法ノ缺點トスル所ハ、發育シツ、アル人ニ之ヲ用フルコト能ハザルニ在リ。

此人身測定法ノ缺點ガ多クナルニ連レテ、學者ハ種々ノ考案ヲ廻ラシ、或ハ手背ニ於ケル靜脈ノ經路ニ依リ、或ハ眼底血管ノ有様等ヲ用キテ、異同ノ決定ヲ爲サントセシモ何レモ成功ノ域ニ達セザリキ。

(口) 指紋法

是ヨリ先キ一八二六年 *Puchip*、一八六〇年 *William Herschel* ハ、吾人ノ指紋即チ指頭ニ於ケル乳嘴線ハ、一生ソノ形ト走行ヲ變化スルコトナク、又地球上同一ノ指紋ヲ有スルモノナシト發表シタルモ、未ダ世人ノ注意ヲ引カザリシガ、一九〇三年初メテ指紋ハ人ノ異同ヲ決定スルニ最モ確實ニシテ、ソノ方法モ簡單ナルヲ發表セラレテヨリ、漸次全世界ニ及ビ、各國ノ犯罪學界ニテハ之ヲ採用シ、我邦ニ於テモ一度犯罪スレバ必ず指紋ヲ取り、之ヲ司法省ニ貯藏スルコトナリ居レリ。指紋法即チ *Daktyloskopie* ハ、ソノ原始ヲ印度ニ發シ居リ、我國ノ拇印ノ如キモ即チソノ一ツナリシナリ。

指紋ヲ取ルコトハ甚ダ簡單ニシテ、十本ノ指頭ノ乳嘴線アル部ニ輕ク活版いんきヲ附シ、之ヲかあごニ押捺スレバ夫レニテ指紋ハ出來上リタルナリ、之ニ參考ノ爲メ渾名、一定ノ大サノ寫眞、年齢、姓名及かあごノ

指紋法

分類番號ヲ記入シ、中央局ニ貯藏シ置キ、再犯等ノ疑アルモノハ更ニ指紋ヲ取りテ、前ノ如ク分類シソガ一致スルかあごナキヤ否ヤヲ檢スルモノナリ。

通常指紋ヲ分チテ次ノ三種類トス。

一、弓狀指紋トハ指紋ノ一側ヨリ他側ニ向ヒテ走ル弓狀ノ乳嘴線ヨリ成ル指紋ヲ云ヒ、ソノ弓線彎曲ノ度特ニ高キモノハ之ヲ天幕狀指紋ト云フ。

二、蹄狀指紋トハ指頭下部ノ一側ヨリ起リテ斜ニ上方ニ向ヒ、次デ屈曲シテ再ビ同側ニ歸ル蹄狀乳嘴線ヨリ成ル指紋ヲ云フ。此中拇指側ヨリ起リテ更ニ同側ニ復歸スルモノヲ甲種蹄狀指紋ト云ヒ、小指側ヨリ起リテ同側ニ歸ルモノヲ乙種蹄狀指紋ト云フ。前者ハ比較的稀有ナルモ後者ハ甚ダ屢遺遇スルモノニシテ、之ヲ更ニ分類スル爲メ、一個ヨリ起レル蹄線ノ再ビ同側ニ歸ル方向ノ反對側ノ下部ニ於ケル乳嘴線ノ三角ニ交叉スル部即チ外端ト、中心蹄線ノ頂點即チ内端ト結合スル一線ガ、乳嘴線ト交叉スル數ノ多少ヲ以テ、之ヲ四種類ニ區別ス。

三、渦狀指紋トハソノ名ノ示スガ如ク、乳嘴線ガ求心性ニ集リテ渦狀ヲ呈スル指紋ヲ云ヒ、其特徵トシテ必ず二箇ノ乳嘴線交叉ニ依リテ成ル三角ヲ有ス、而シテ此左右兩三角ノ間ニ横在スル乳嘴線ノ數ニ依リテ渦狀指紋ヲ三種ニ分ツ。

三、蹄狀指紋トハ指頭下部ノ一側ヨリ起リテ斜ニ上方ニ向ヒ、次デ屈曲シテ再ビ同側ニ歸ル蹄狀乳嘴線ヨリ成ル指紋ヲ云フ。此中拇指側ヨリ起リテ更ニ同側ニ復歸スルモノヲ甲種蹄狀指紋ト云ヒ、小指側ヨリ起リテ同側ニ歸ルモノヲ乙種蹄狀指紋ト云フ。前者ハ比較的稀有ナルモ後者ハ甚ダ屢遺遇スルモノニシテ、之ヲ更ニ分類スル爲メ、一個ヨリ起レル蹄線ノ再ビ同側ニ歸ル方向ノ反對側ノ下部ニ於ケル乳嘴線ノ三角ニ交叉スル部即チ外端ト、中心蹄線ノ頂點即チ内端ト結合スル一線ガ、乳嘴線ト交叉スル數ノ多少ヲ以テ、之ヲ四種類ニ區別ス。

三、渦狀指紋トハソノ名ノ示スガ如ク、乳嘴線ガ求心性ニ集リテ渦狀ヲ呈スル指紋ヲ云ヒ、其特徵トシテ必ず二箇ノ乳嘴線交叉ニ依リテ成ル三角ヲ有ス、而シテ此左右兩三角ノ間ニ横在スル乳嘴線ノ數ニ依リテ渦狀指紋ヲ三種ニ分ツ。

三、蹄狀指紋トハ指頭下部ノ一側ヨリ起リテ斜ニ上方ニ向ヒ、次デ屈曲シテ再ビ同側ニ歸ル蹄狀乳嘴線ヨリ成ル指紋ヲ云フ。此中拇指側ヨリ起リテ更ニ同側ニ復歸スルモノヲ甲種蹄狀指紋ト云ヒ、小指側ヨリ起リテ同側ニ歸ルモノヲ乙種蹄狀指紋ト云フ。前者ハ比較的稀有ナルモ後者ハ甚ダ屢遺遇スルモノニシテ、之ヲ更ニ分類スル爲メ、一個ヨリ起レル蹄線ノ再ビ同側ニ歸ル方向ノ反對側ノ下部ニ於ケル乳嘴線ノ三角ニ交叉スル部即チ外端ト、中心蹄線ノ頂點即チ内端ト結合スル一線ガ、乳嘴線ト交叉スル數ノ多少ヲ以テ、之ヲ四種類ニ區別ス。

三、渦狀指紋トハソノ名ノ示スガ如ク、乳嘴線ガ求心性ニ集リテ渦狀ヲ呈スル指紋ヲ云ヒ、其特徵トシテ必ず二箇ノ乳嘴線交叉ニ依リテ成ル三角ヲ有ス、而シテ此左右兩三角ノ間ニ横在スル乳嘴線ノ數ニ依リテ渦狀指紋ヲ三種ニ分ツ。

三、蹄狀指紋トハ指頭下部ノ一側ヨリ起リテ斜ニ上方ニ向ヒ、次デ屈曲シテ再ビ同側ニ歸ル蹄狀乳嘴線ヨリ成ル指紋ヲ云フ。此中拇指側ヨリ起リテ更ニ同側ニ復歸スルモノヲ甲種蹄狀指紋ト云ヒ、小指側ヨリ起リテ同側ニ歸ルモノヲ乙種蹄狀指紋ト云フ。前者ハ比較的稀有ナルモ後者ハ甚ダ屢遺遇スルモノニシテ、之ヲ更ニ分類スル爲メ、一個ヨリ起レル蹄線ノ再ビ同側ニ歸ル方向ノ反對側ノ下部ニ於ケル乳嘴線ノ三角ニ交叉スル部即チ外端ト、中心蹄線ノ頂點即チ内端ト結合スル一線ガ、乳嘴線ト交叉スル數ノ多少ヲ以テ、之ヲ四種類ニ區別ス。

三、渦狀指紋トハソノ名ノ示スガ如ク、乳嘴線ガ求心性ニ集リテ渦狀ヲ呈スル指紋ヲ云ヒ、其特徵トシテ必ず二箇ノ乳嘴線交叉ニ依リテ成ル三角ヲ有ス、而シテ此左右兩三角ノ間ニ横在スル乳嘴線ノ數ニ依リテ渦狀指紋ヲ三種ニ分ツ。

三、蹄狀指紋トハ指頭下部ノ一側ヨリ起リテ斜ニ上方ニ向ヒ、次デ屈曲シテ再ビ同側ニ歸ル蹄狀乳嘴線ヨリ成ル指紋ヲ云フ。此中拇指側ヨリ起リテ更ニ同側ニ復歸スルモノヲ甲種蹄狀指紋ト云ヒ、小指側ヨリ起リテ同側ニ歸ルモノヲ乙種蹄狀指紋ト云フ。前者ハ比較的稀有ナルモ後者ハ甚ダ屢遺遇スルモノニシテ、之ヲ更ニ分類スル爲メ、一個ヨリ起レル蹄線ノ再ビ同側ニ歸ル方向ノ反對側ノ下部ニ於ケル乳嘴線ノ三角ニ交叉スル部即チ外端ト、中心蹄線ノ頂點即チ内端ト結合スル一線ガ、乳嘴線ト交叉スル數ノ多少ヲ以テ、之ヲ四種類ニ區別ス。

三、渦狀指紋トハソノ名ノ示スガ如ク、乳嘴線ガ求心性ニ集リテ渦狀ヲ呈スル指紋ヲ云ヒ、其特徵トシテ必ず二箇ノ乳嘴線交叉ニ依リテ成ル三角ヲ有ス、而シテ此左右兩三角ノ間ニ横在スル乳嘴線ノ數ニ依リテ渦狀指紋ヲ三種ニ分ツ。

三、蹄狀指紋トハ指頭下部ノ一側ヨリ起リテ斜ニ上方ニ向ヒ、次デ屈曲シテ再ビ同側ニ歸ル蹄狀乳嘴線ヨリ成ル指紋ヲ云フ。此中拇指側ヨリ起リテ更ニ同側ニ復歸スルモノヲ甲種蹄狀指紋ト云ヒ、小指側ヨリ起リテ同側ニ歸ルモノヲ乙種蹄狀指紋ト云フ。前者ハ比較的稀有ナルモ後者ハ甚ダ屢遺遇スルモノニシテ、之ヲ更ニ分類スル爲メ、一個ヨリ起レル蹄線ノ再ビ同側ニ歸ル方向ノ反對側ノ下部ニ於ケル乳嘴線ノ三角ニ交叉スル部即チ外端ト、中心蹄線ノ頂點即チ内端ト結合スル一線ガ、乳嘴線ト交叉スル數ノ多少ヲ以テ、之ヲ四種類ニ區別ス。

三、渦狀指紋トハソノ名ノ示スガ如ク、乳嘴線ガ求心性ニ集リテ渦狀ヲ呈スル指紋ヲ云ヒ、其特徵トシテ必ず二箇ノ乳嘴線交叉ニ依リテ成ル三角ヲ有ス、而シテ此左右兩三角ノ間ニ横在スル乳嘴線ノ數ニ依リテ渦狀指紋ヲ三種ニ分ツ。

三、蹄狀指紋トハ指頭下部ノ一側ヨリ起リテ斜ニ上方ニ向ヒ、次デ屈曲シテ再ビ同側ニ歸ル蹄狀乳嘴線ヨリ成ル指紋ヲ云フ。此中拇指側ヨリ起リテ更ニ同側ニ復歸スルモノヲ甲種蹄狀指紋ト云ヒ、小指側ヨリ起リテ同側ニ歸ルモノヲ乙種蹄狀指紋ト云フ。前者ハ比較的稀有ナルモ後者ハ甚ダ屢遺遇スルモノニシテ、之ヲ更ニ分類スル爲メ、一個ヨリ起レル蹄線ノ再ビ同側ニ歸ル方向ノ反對側ノ下部ニ於ケル乳嘴線ノ三角ニ交叉スル部即チ外端ト、中心蹄線ノ頂點即チ内端ト結合スル一線ガ、乳嘴線ト交叉スル數ノ多少ヲ以テ、之ヲ四種類ニ區別ス。

三、渦狀指紋トハソノ名ノ示スガ如ク、乳嘴線ガ求心性ニ集リテ渦狀ヲ呈スル指紋ヲ云ヒ、其特徵トシテ必ず二箇ノ乳嘴線交叉ニ依リテ成ル三角ヲ有ス、而シテ此左右兩三角ノ間ニ横在スル乳嘴線ノ數ニ依リテ渦狀指紋ヲ三種ニ分ツ。

三、蹄狀指紋トハ指頭下部ノ一側ヨリ起リテ斜ニ上方ニ向ヒ、次デ屈曲シテ再ビ同側ニ歸ル蹄狀乳嘴線ヨリ成ル指紋ヲ云フ。此中拇指側ヨリ起リテ更ニ同側ニ復歸スルモノヲ甲種蹄狀指紋ト云ヒ、小指側ヨリ起リテ同側ニ歸ルモノヲ乙種蹄狀指紋ト云フ。前者ハ比較的稀有ナルモ後者ハ甚ダ屢遺遇スルモノニシテ、之ヲ更ニ分類スル爲メ、一個ヨリ起レル蹄線ノ再ビ同側ニ歸ル方向ノ反對側ノ下部ニ於ケル乳嘴線ノ三角ニ交叉スル部即チ外端ト、中心蹄線ノ頂點即チ内端ト結合スル一線ガ、乳嘴線ト交叉スル數ノ多少ヲ以テ、之ヲ四種類ニ區別ス。

三、渦狀指紋トハソノ名ノ示スガ如ク、乳嘴線ガ求心性ニ集リテ渦狀ヲ呈スル指紋ヲ云ヒ、其特徵トシテ必ず二箇ノ乳嘴線交叉ニ依リテ成ル三角ヲ有ス、而シテ此左右兩三角ノ間ニ横在スル乳嘴線ノ數ニ依リテ渦狀指紋ヲ三種ニ分ツ。

三、蹄狀指紋トハ指頭下部ノ一側ヨリ起リテ斜ニ上方ニ向ヒ、次デ屈曲シテ再ビ同側ニ歸ル蹄狀乳嘴線ヨリ成ル指紋ヲ云フ。此中拇指側ヨリ起リテ更ニ同側ニ復歸スルモノヲ甲種蹄狀指紋ト云ヒ、小指側ヨリ起リテ同側ニ歸ルモノヲ乙種蹄狀指紋ト云フ。前者ハ比較的稀有ナルモ後者ハ甚ダ屢遺遇スルモノニシテ、之ヲ更ニ分類スル爲メ、一個ヨリ起レル蹄線ノ再ビ同側ニ歸ル方向ノ反對側ノ下部ニ於ケル乳嘴線ノ三角ニ交叉スル部即チ外端ト、中心蹄線ノ頂點即チ内端ト結合スル一線ガ、乳嘴線ト交叉スル數ノ多少ヲ以テ、之ヲ四種類ニ區別ス。

三、渦狀指紋トハソノ名ノ示スガ如ク、乳嘴線ガ求心性ニ集リテ渦狀ヲ呈スル指紋ヲ云ヒ、其特徵トシテ必ず二箇ノ乳嘴線交叉ニ依リテ成ル三角ヲ有ス、而シテ此左右兩三角ノ間ニ横在スル乳嘴線ノ數ニ依リテ渦狀指紋ヲ三種ニ分ツ。

三、蹄狀指紋トハ指頭下部ノ一側ヨリ起リテ斜ニ上方ニ向ヒ、次デ屈曲シテ再ビ同側ニ歸ル蹄狀乳嘴線ヨリ成ル指紋ヲ云フ。此中拇指側ヨリ起リテ更ニ同側ニ復歸スルモノヲ甲種蹄狀指紋ト云ヒ、小指側ヨリ起リテ同側ニ歸ルモノヲ乙種蹄狀指紋ト云フ。前者ハ比較的稀有ナルモ後者ハ甚ダ屢遺遇スルモノニシテ、之ヲ更ニ分類スル爲メ、一個ヨリ起レル蹄線ノ再ビ同側ニ歸ル方向ノ反對側ノ下部ニ於ケル乳嘴線ノ三角ニ交叉スル部即チ外端ト、中心蹄線ノ頂點即チ内端ト結合スル一線ガ、乳嘴線ト交叉スル數ノ多少ヲ以テ、之ヲ四種類ニ區別ス。

三、渦狀指紋トハソノ名ノ示スガ如ク、乳嘴線ガ求心性ニ集リテ渦狀ヲ呈スル指紋ヲ云ヒ、其特徵トシテ必ず二箇ノ乳嘴線交叉ニ依リテ成ル三角ヲ有ス、而シテ此左右兩三角ノ間ニ横在スル乳嘴線ノ數ニ依リテ渦狀指紋ヲ三種ニ分ツ。

三、蹄狀指紋トハ指頭下部ノ一側ヨリ起リテ斜ニ上方ニ向ヒ、次デ屈曲シテ再ビ同側ニ歸ル蹄狀乳嘴線ヨリ成ル指紋ヲ云フ。此中拇指側ヨリ起リテ更ニ同側ニ復歸スルモノヲ甲種蹄狀指紋ト云ヒ、小指側ヨリ起リテ同側ニ歸ルモノヲ乙種蹄狀指紋ト云フ。前者ハ比較的稀有ナルモ後者ハ甚ダ屢遺遇スルモノニシテ、之ヲ更ニ分類スル爲メ、一個ヨリ起レル蹄線ノ再ビ同側ニ歸ル方向ノ反對側ノ下部ニ於ケル乳嘴線ノ三角ニ交叉スル部即チ外端ト、中心蹄線ノ頂點即チ内端ト結合スル一線ガ、乳嘴線ト交叉スル數ノ多少ヲ以テ、之ヲ四種類ニ區別ス。

三、渦狀指紋トハソノ名ノ示スガ如ク、乳嘴線ガ求心性ニ集リテ渦狀ヲ呈スル指紋ヲ云ヒ、其特徵トシテ必ず二箇ノ乳嘴線交叉ニ依リテ成ル三角ヲ有ス、而シテ此左右兩三角ノ間ニ横在スル乳嘴線ノ數ニ依リテ渦狀指紋ヲ三種ニ分ツ。

三、蹄狀指紋トハ指頭下部ノ一側ヨリ起リテ斜ニ上方ニ向ヒ、次デ屈曲シテ再ビ同側ニ歸ル蹄狀乳嘴線ヨリ成ル指紋ヲ云フ。此中拇指側ヨリ起リテ更ニ同側ニ復歸スルモノヲ甲種蹄狀指紋ト云ヒ、小指側ヨリ起リテ同側ニ歸ルモノヲ乙種蹄狀指紋ト云フ。前者ハ比較的稀有ナルモ後者ハ甚ダ屢遺遇スルモノニシテ、之ヲ更ニ分類スル爲メ、一個ヨリ起レル蹄線ノ再ビ同側ニ歸ル方向ノ反對側ノ下部ニ於ケル乳嘴線ノ三角ニ交叉スル部即チ外端ト、中心蹄線ノ頂點即チ内端ト結合スル一線ガ、乳嘴線ト交叉スル數ノ多少ヲ以テ、之ヲ四種類ニ區別ス。

三、渦狀指紋トハソノ名ノ示スガ如ク、乳嘴線ガ求心性ニ集リテ渦狀ヲ呈スル指紋ヲ云ヒ、其特徵トシテ必ず二箇ノ乳嘴線交叉ニ依リテ成ル三角ヲ有ス、而シテ此左右兩三角ノ間ニ横在スル乳嘴線ノ數ニ依リテ渦狀指紋ヲ三種ニ分ツ。

三、蹄狀指紋トハ指頭下部ノ一側ヨリ起リテ斜ニ上方ニ向ヒ、次デ屈曲シテ再ビ同側ニ歸ル蹄狀乳嘴線ヨリ成ル指紋ヲ云フ。此中拇指側ヨリ起リテ更ニ同側ニ復歸スルモノヲ甲種蹄狀指紋ト云ヒ、小指側ヨリ起リテ同側ニ歸ルモノヲ乙種蹄狀指紋ト云フ。前者ハ比較的稀有ナルモ後者ハ甚ダ屢遺遇スルモノニシテ、之ヲ更ニ分類スル爲メ、一個ヨリ起レル蹄線ノ再ビ同側ニ歸ル方向ノ反對側ノ下部ニ於ケル乳嘴線ノ三角ニ交叉スル部即チ外端ト、中心蹄線ノ頂點即チ内端ト結合スル一線ガ、乳嘴線ト交叉スル數ノ多少ヲ以テ、之ヲ四種類ニ區別ス。

弓狀指紋
天幕狀指紋
蹄狀指紋
渦狀指紋

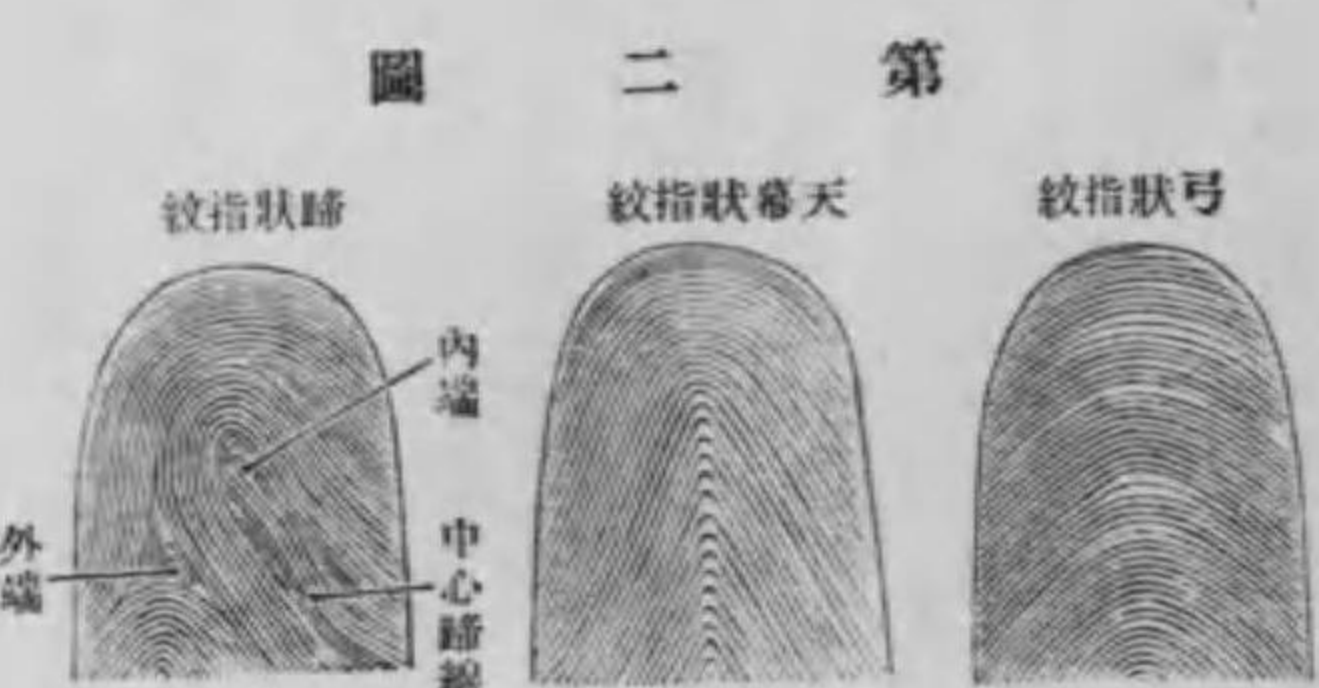
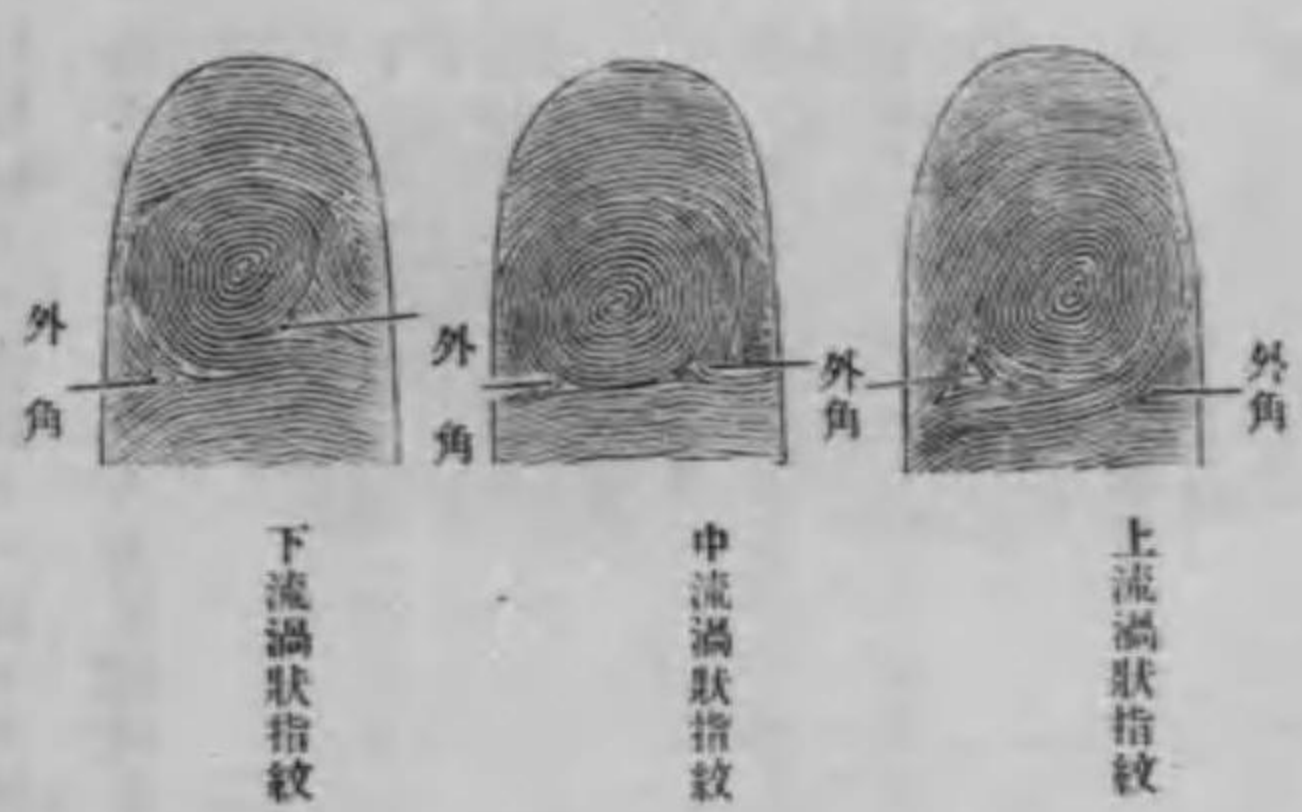


圖 二 第

此等ノ各部類ニ從テ、指紋ノ各型ニ一定ノ價ヲ附ス。而シテ右五指ノ各指紋ノ價ヲ順次ニ分母トシテ併列シ、左五指ノ各指紋ノ價ヲ順次ニ分子トシテ併列シ、此分數ヲ指紋カハジノ分類番號トス。今指紋各型ニ附スル價ヲ表示スレバ左ノ如シ。

指紋形式	分類法	分類價
弓狀指紋	甲種蹄狀指紋	1
蹄狀指紋	乙種蹄狀指紋	2
蹄狀指紋	乳嘴線ガ一乃至七本ノモノヲ	3
蹄狀指紋	同、八乃至十一本ノモノヲ	4
蹄狀指紋	同、十二乃至十四本ノモノヲ	5
蹄狀指紋	同、十五本以上ノモノヲ	6
蹄狀指紋	左外角ガ右外角ヨリモ乳嘴線三本以上上方ニ位スル時	7
蹄狀指紋	左外角ガ右外角ヨリモ乳嘴線二本以內ナル時	8
蹄狀指紋	左外角ガ右外角ヨリモ乳嘴線三本以下上方ニ位スル時	9
蹄狀指紋	指紋缺損或ハ之ヲ取ルコト能ハザルモノ	0

今左手ノ各指ニ於テ、示指ハ外端ト内端トノ間ニ介在スル乳嘴線ノ數六本ナル乙種蹄狀指紋(3)、中指ハ甲種蹄狀指紋(2)、環指ハ下流渦狀指紋(9)、小指ハ中流渦狀指紋(8)、拇指ハ上流渦狀指紋(7)ニシテ右手ノ各指ニ於テハ、示指ハ甲種蹄狀指紋(2)、中指ハ中流渦狀指紋(8)、環指ハ外端ト内端トノ間ニアル



第三圖

指紋番號

乳嘴線十一本ノ乙種蹄狀指紋(4)、小指ハ弓狀指紋(1)、拇指ハ指紋缺損セリトセバ、ソノ指紋番號ハ32107ナリトス。

此ノ如ク指紋ヲ分類スレバ、ソノ指紋番號ノ一致スルモノハ實際ニ於テ殆んどナク、モシソノ番號一致スル兩人アリトスレバソノ場合ハ、各指紋ノ特徴即チ曲線ノ工合等ヲ検査スベシ。然ル時ハソノ特徴迄一致セル他人ハ決シテナシト云フコトニ經驗上決定シ居レバ、モシ番號ト云ヒ特徴ト云ヒ一致シ居レバソノ同人ナルコトヲ知ルベシ。

斯クシテ一度犯罪ヲナシタルモノ、指紋ハ現今司法省ニ保存シアレバ、モシ再犯ノ疑アル場合ニ於テハソノ指紋ヲ押捺セシメ、司法省指紋係ヘ問合ス時ハ、直ニソガ再犯者ナルヤ否ヤヲ知ルヲ得、之ヲ以テ常習犯罪者ノ如キモノヲ社會ヨリ遠クル様ニナスモノナリ。

モシ滑澤ナル表面ニ犯行者ノ指紋アルコトニ氣付キタル時ハ、丁寧ニ之ヲ保護シ、専門家ニ交附スベシ。然ル時ハ専門家ハソノ被附着物ニ從ツテ、あるみにゆいむ、炭、白堊等ノ細粉ヲ之ニ撒布シテ、再ビ指紋ヲ現出セシメ之ヲ寫眞ニ取リテ、検査ヲ行フ時ハ、假令一指ノ指紋ナリト雖ソノ特徴ニヨリテ、モシ再犯者ナラバ何人ナルカヲ指名スルコトヲ得ル様ニナリ居レリ。學者中ニハ指紋法ト人身測定法トヲ併用スルヲ説クモノアリ、或ハ指紋法ヲ戸籍ニ應用セント企テタルモノアリ。

異同ノ決定ニハ尙足跡或ハ齒型等ヲ應用スルコトアレドモ、ソハ餘リ醫學ト關係少キモノナレバ之ヲ略ス。

死體検査及解剖検査

八、死體検査及解剖検査

自己ノ検査ヲ命ゼラレタルモノガ人違ニ非ラザルコトヲ決定シタル後、吾人ハ種々ノ検査ニ着手スルモノナルガ、醫師ガ検査ヲ命ゼラル、場合、人體ノ解剖検査、或ハ死體検査ハ最モ屢々遭遇スルモノナルヲ以テ、予ハ本章ニ於テハ死體検査及解剖検査ニ就テ總括的ニ述べ、種々ノ場合ニ對スル注意ハ各論ニ於テ詳述スベシ。

現場検査
検屍

モシ犯行ノ現場等ニ於テ、死體ヲ検査スルコトアル時ハ、死體或ハソノ近傍ニ散亂セル犯罪ト關係アリト思ハル、物體ハ注意シテ保存シ置クベシ。次デ死體ノ衣服ヲ除去リ、犯行ノ痕跡ナキヤ或ハ身體ニ或特徴ナキヤ否ヤノ外表検査ヲナス、特徴トハ異同ノ決定ノ部ニ於テ述ベタルガ如キ文身、灸痕等ノ身體の特徴ヲ云フ、之等ノ外表検査ニテ、自己ノ意見ヲ述ブルニ不充分ナルト思惟スル時ハ、司法官ニソノ旨ヲ告ゲ、ソノ許可ヲ得テ解剖検査ニ移行スベシ。死體検査或ハ解剖検査ハ光線ノ充分ナル場所ニテ行ヒ、決シテ夜間人工光線ノ下ニ施行スベカラズ、之レ不十分ナル光線ノ下ニ検査ヲ行フ時ハ、大切ナル所見ヲ見落シ、或ハ大ナル誤見ニ陥ルコトアリ、例之、夜提灯ノ光ニテ通常ノ病死死體ヲ檢シ、索溝見エタリトナシテ絞死者トナシ、人ヲシテ無實ノ罪ニ陥レタルガ如キ例アリ、或ハ電燈ノ光ニテ解剖ヲ行ヒ、甚ダシキ肝臓ノ脂肪變性ヲ發見シ得ザリシコトアリシヲ聞ケリ、注意スベキコトナリト信ズ。

行政的解剖

法醫ノ携ハル解剖ニ二種アリ、一ハ行政的ノモノニシテハ、他ハ司法的ノモノナリ、前者ノ目的ハ行旅病者或ハ傳染病者等ヲ剖檢シテ、ソノ人名ヲ知り、或ハソノ死因ヲ知りテ之ヲ遺族ニ引渡シ、或ハ傳染病豫防法ヲ講ズルガ如キ之レナリ。此意味ノ解剖ニ於テハ、ソノ注目スベキ所及術式ニ於テ殆ンド病理的解剖ト異ナルコトナシ。

法醫學的解剖

司法的意義ヲ有スル解剖、即チ眞ノ法醫學的解剖ニ於テハ、ソノ術式ハ毫モ病理學的解剖ト異ナル所ナキモ、着目スル所ハ稍ソノ趣キヲ異ニス、例ヘバ微細ナル表皮剝脱、或ハ溢血等ハ殆ンド病理學者ノ興味ヲ惹カザル所ナルモ、コハ法醫學的ニハ大ナル意義ヲ有シ、之ニヨリテ或ハ兇器ノ種類、ソノ使用法等ヲ知ルコトヲ得ル場合アレバ、注意シテ記載シ置クベキ必要アルガ如キ之レナリ。故ニ法醫學的解剖ノ場合ニハ後來犯罪ト如何ナル關係ヲ顯出スルヤモ計リ難ケレバ、身體ニ於ケル些細ノ異狀ト雖注意シテ記載シ置クベシ。

全身解剖ト局部解剖

次ニ注意スベキハ局部解剖ト全身解剖トノ關係ナリ。司法官ハ往々長時間ヲ要スルノ故ヲ以テ、成ルベク犯行ヲ被レル場所ノミノ剖檢ヲ望ムコトアリ。然レドモ醫學上ヨリ見レバ、此局所ノミヲ剖檢シテ、而シテ死者ノ死因等ヲ決定セントスルハ甚ダ困難ナルコトニシテ、人身ノ如キ複雑ナル有機體ノ一部ヲ見テ、全身ノ障害ニ就テ黑白ヲ論スルハ多クハ不可能ト云フヲ妨ケズ、故ニ司法官ハ假令局所ノミノ検査ヲ欲スルモ醫師トシテハ自己ノ立場上并ニ法ノ嚴正ニ行ハル、ヲ望ム爲メ、全身解剖ヲ懲通セザルベカラズ。例ヘバ腹部ニ暴力ヲ被リテ死セシト云フモノ、屍ヲ剖檢シテ、腹部ニ於ケル損傷ハ實ハ極メテ少ク、膈ニ大出血アリテソガ直接ノ死因トナレル如キ場合アリ、此場合モシ腹部ノミヲ剖檢シ、ソノ死因ヲしよつくナド、鑑定シタランニハ、無實ノ罪ニヨリテ人ヲ獄窓ノ下ニ流カシムルニ至ルベシ、鑑定ノ輕々ニ下ス能ハザル所以茲ニ在リ。

尙法醫學的検査ノ場合ハ、新鮮ナル死體ノミナラズ、甚ダ古キ、死體現象ノ進メルモノヲ取扱ハザルベカラザルコトアリ、此時ニソノ腐敗現象ト病的變化或ハ犯行ノ痕跡ト混同セザル様ニ注意セザルベカラズ、例

へバ仰臥位ニ在リシ死體ノ腦後頭部ニ就下聚集セル血液ヲ見テ、暴力ノ爲メノ出血ト診断セル人アリシガ如キ、或ハ死體ニ切開ヲ加ヘ流出シタル血液ヲ直ニ拭除セズシテ放置スレバ、暫時ニシテソノ血色素ハ周圍ノ組織中ニ濕潤シ、恰モ皮下溢血ノ如ク見ユルコトアルガ如キ之レナリ。

各論

各論ノ始メニ於テ先ヅ法醫學的物品検査ニ就テ述ベ、次デ種々ノ場合ニ於ケル検査法ヲ述ベントス。

第一編 物品検査

一、血痕検査

檢視檢證ノ場合、血痕附着ノ疑アルモノヲ發見シ且採集スルハ、重ニ法官若クハ警察官ノ職務ナリト雖、鑑定人タル醫師ヲ之ニ參與セシムル時ハ、血痕検査ニ大ナル利益ヲ得ルコトアリ。

犯行ノ現場ニ於テハ血液散布ノ有様、及位置、大約ノ分量等ヲ注意シテ記載シ、又ハ撮影シ置クベキモノトス、血痕附着ノ疑アル物品、即紙片、木片、土砂、布片、兇器等ハ血痕附着面ノ成ルベク他ノモノト摩擦セザル様ニシ、新聞紙ノ如キモノニテ直接包裝スル如キハ避クルヲヨシトス。

土、砂、灰等ニ濕潤セル血液アル時ハ、其近傍ヲ相當ニ廣ク且深ク採集スベシ、之レ血液流出量ヲ決定スル場合ニ特ニ必要ナリ、尙流動セル血液ハびべつコヲ以テ吸取リ、清淨ナル硝子瓶中ニ貯フベシ、次ニ血痕附着ノ疑アル兇器、衣服、器具等ガ洗滌サレタル後ト雖、血液ハ其銜元、縫目、蝶番等ノ中ニ尙殘留スルコトアリ、又加害者ノ爪垢中ニ永ク血痕ノ殘存スルコトアレバ、此等ノ點ニモ注意ヲ怠ラザル様心掛クベシ。

血痕ノ發見

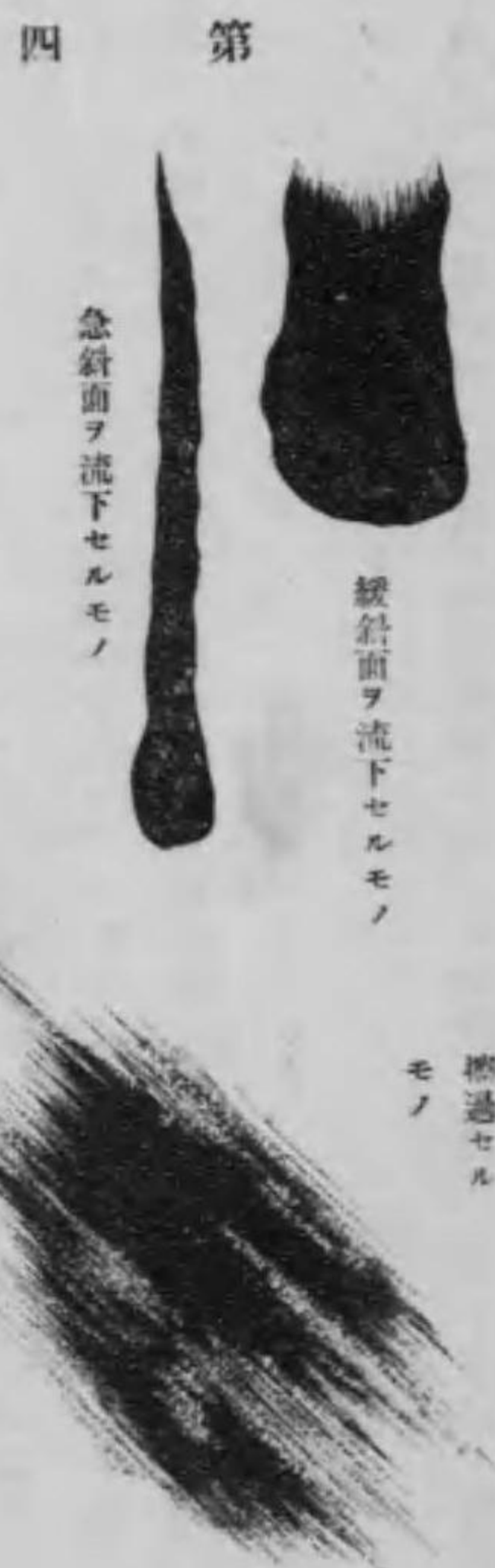
血痕ノ色

血痕ノ形状

種々ノ物體、即チ兇器、衣服等ニ附着セル小血痕ヲ發見スルコトハ、往々容易ノ事業ニ非ラズ、此時ハ先ヅ肉眼ニテ或ハ直上ヨリ、或ハ斜ノ方向ヨリ凝視シ、尙るうベニテ精査スル時ハ、殆ンド見落スコトナク發見スルコトヲ得、稀ニハ日光ニテ檢スルヨリモ、蠟燭ノ火ニテ探見スル時ハソノ發見容易ナルコトアリ。

血痕ハ常ニ暗赤色乃至赤褐色ヲ呈スルモノニハ非ラズシテ、ソノ新舊、附着シタル物體ノ色、當時ノ温度及湿度直射ノ日光ニ曝露セルヤ否ヤ等ニ依リテ異ナリト雖、最モ新鮮ナル場合ハ暗赤色ナルガ、次第二日時ヲ經過スルニ從ヒ、赤褐色、褐色、帶綠褐色、帶黃綠色、淡黃色ニ移行シ、遂ニ褪色スルニ至ル、之レ

新鮮ナル血液ガ水分ヲ失ヒ、次第二變質スルニ從ヒ、めごへもぐろびん次にへまらんニ變化スルガ故ナリ。



第一編 物品検査 一 血痕検査

形状ニ依リテ法醫學上種々ノ據所ヲ得ルコトアリ、例ヘバ動脈ヨリ進出セル血液ハ形ヲ有シ、靜ニ落下セル血液ハ形トナリ、強ク落下セルモノハ形ヲ呈シ、斜面ヲ靜ニ流下セルモノハ狀トナル、時トシテ血液ヲ以テ加害者ノ指紋ヲ兇器、窓硝子等ニ附着シ居ルコトアリ、コハ犯行者ヲ知ルニハ最も價値アルモノナリ。

検査ニ着手

血痕検査ニ着手セントスルニ當リ、先ヅ検査物上ノ血痕ノ色、形、數及有場所等ヲ詳細ニ記載シ、ソノ血痕中ノ數個ヲ以テ自己ノ検査ニ使用シ、殘餘ノモノハ適當ニ保存シテ裁判所ニ返還シ、再鑑定若クハ最高鑑定ノ材料トナル様ニ注意スベシ、法醫學的検査ニ於テハ、ソノ材料乏シキヲ通常トスレバ、一小血痕ト雖決シテ濫費スベカラズ、若シ材料非常ニ少クシテ、證據品全部ヲ費消スベキ必要アル時ハ、司法官ニソノ旨ヲ通ジ許可ヲ受クベシ。

血痕検査ノ場合ニハ、先ヅ豫備検査ニ依リテ検査ノ大體方針ヲ定メ、實性反應ニ依リテ血痕ナルコトヲ確メ、生物學的検査ニ依リテソノ血液ガ人血ナルヤ否ヤヲ決定シ、尙必要アル時ハ血痕ノ鑑定ニ及ブベシ。

甲、豫備検査

豫備検査ノ意

豫備検査陰性ナル時ハ、血痕ニ非ラザルコト殆ンド確定スルコトヲ得、之レ本検査ニ屬スル諸法ハ甚ダ鋭敏ナルモノニシテ、血液ノ數百分ノ一ノ溶液ニテモ、尙陽性ヲ呈スルモノナレバナリ。反之、假令本法陽性ナリトスルモ、決シテ血痕ナリト断定スルコト能ハズ、何トナレバ豫備検査ハ血色素ノ觸媒作用ヲ應用シタルモノナレバ、此作用ダニ存在スレバ、血色素以外ノモノト雖本法ノ陽性ヲ呈スルコトアレバナリ。

イ、をぞん検査 (Van Deen 1961)

をぞん検査

可検査ノ一部ヲ切取或ハ剝離シ、白色ノ濾紙間ニ挟ミ蒸餾水ヲ以テ濕シ、可検査ノ浸軟スルヲ待チ、硝子棒ノ鈍端ヲ以テ輕打細碎スレバ、血色素ノ一部ハ濾紙ニ移行シ來ル、此部ニ新製セル瘡瘡木ちんき、純あるこほるニ瘡瘡木樹脂ヲ恰モビける色ノ程度ニ至ルマデ溶解セシメ、而シテ後濾過シ得タル濾液ハ、古キをぞん含有ノてるべんちん油各一滴ヲ滴下シ、直ニ藍色ヲ呈スレバ可検査ハ血痕ノ疑ヒアリ、尙ホ本法陰性ヲ示スモノニシテ、稍時間ヲ經過シテ徐々ニ藍色ヲ呈スルハ、決シテ陽性中ニ算入スベカラズ、尙本法ニ用キタル血色素ノ少許ヲ濾紙ニ移行セシメタル血痕ハ大ナル變化ヲ被リ居ラザレバ、他ノ検査ノ材料トシテ用ユルコトヲ得。

血色素ニ非ラズシテ本法陽性ヲ呈スルモノハ、過酸化まんがん、はろげん元素、くろいむ鹽、ろだん鹽、銅鹽、果實汁、木質汁等ナリ、成書ニハ鐵銹ハ本法陽性ヲ示スト記載シアレドモ、余ハ鐵銹ガ然リシ場合ニ遭遇シタルコトナシ。

ロ、べんちん検査 (O. H. Adler 1904)

べんちん検査

前記をぞん検査ニ於ケル如クシ、血色素ヲ白色濾紙上ニ移行セシメタルモノニ、新製セルべんちんあるこほる性飽和溶液ト醋酸一二滴トノ合劑、及ビ三%ノ過酸化水素水各一滴ヲ注加シ、直ニ藍色ヲ呈スレバ、本法ノ陽性ナルコトヲ示ス、稍時間ヲ經過シテ呈シタル藍色ハ敢テ陽性中ニ算入スベカラズ。

本法ハ前記をぞん検査ヨリモ尙鋭敏ニシテ、稍過敏ナルガ如キ嫌ナキニ非ラズ、血液ニ非ラズシテ本法ノ陽性ヲ呈スルモノハをぞん検査ノ場合ニ於ケルモノト略同様ナレドモ、汗、唾液、乳汁、膿等ニテモ陽性ヲ來スコトアレバ、注意セザルベカラズ。

過酸化水素検査法

約三分ノ過酸化水素水ヲ僅ニあるかり性トナシ、硝子棒ヲ以テ疑問ノ汚點上ニ滴下スレバ、此斑血痕ナレバ斑ハ小氣泡ヲ以テ掩蔽サル、血痕新ラシキ程氣泡ヲ生ズルコト多シ、本法ハ黑色物品上ニアル血痕ヲ檢スルニ都合ヨロシ、又滴下セル過酸化水素水ヲ直ニ吸除スレバ、ソノ血痕ハ更ニ他ノ検査法ニ用ユルコトヲ得。

ソノ他血痕豫備検査ニハ次ノ諸法アリ。

- 一、Paraphenylen diaminchlorhydratprobe
- 二、Malachitgrünprobe
- 三、Meyersche Probe
- 四、Alouinprobe
- 五、Gannasini's Probe
- 六、Riegler'sche Probe
- 七、Lannasche Probe
- 八、井上安富氏法

等アレドモ、孰レモ別ニ前記三法ニ、特ニ優越スルモノナク、却テ種々ノ缺點ヲ有スルモノナリ。

實性反應

前記豫備検査ニ於テ陽性ナリシ斑痕ヲ撰ミ、所謂實性反應ヲ施行ス、本反應ノ一タリトモ陽性ナレバ、可

乙、實性反應

檢斑痕ガ血痕ナルコト確實ナリト雖、陰性ナレバトテ直ニ血痕ニ非ラズト斷言スルコト能ハズ、何トナレバ血痕ヨリ獨特ノ吸收線、結晶或ハ血球ノ出現スルハ、一定ノ條件ノ下ニ可能ナルモノニシテ、ソノ條件ニシテ満タサレザレバ、假令血色素存在ストモ、本反應陽性トナラザル故ナリ。

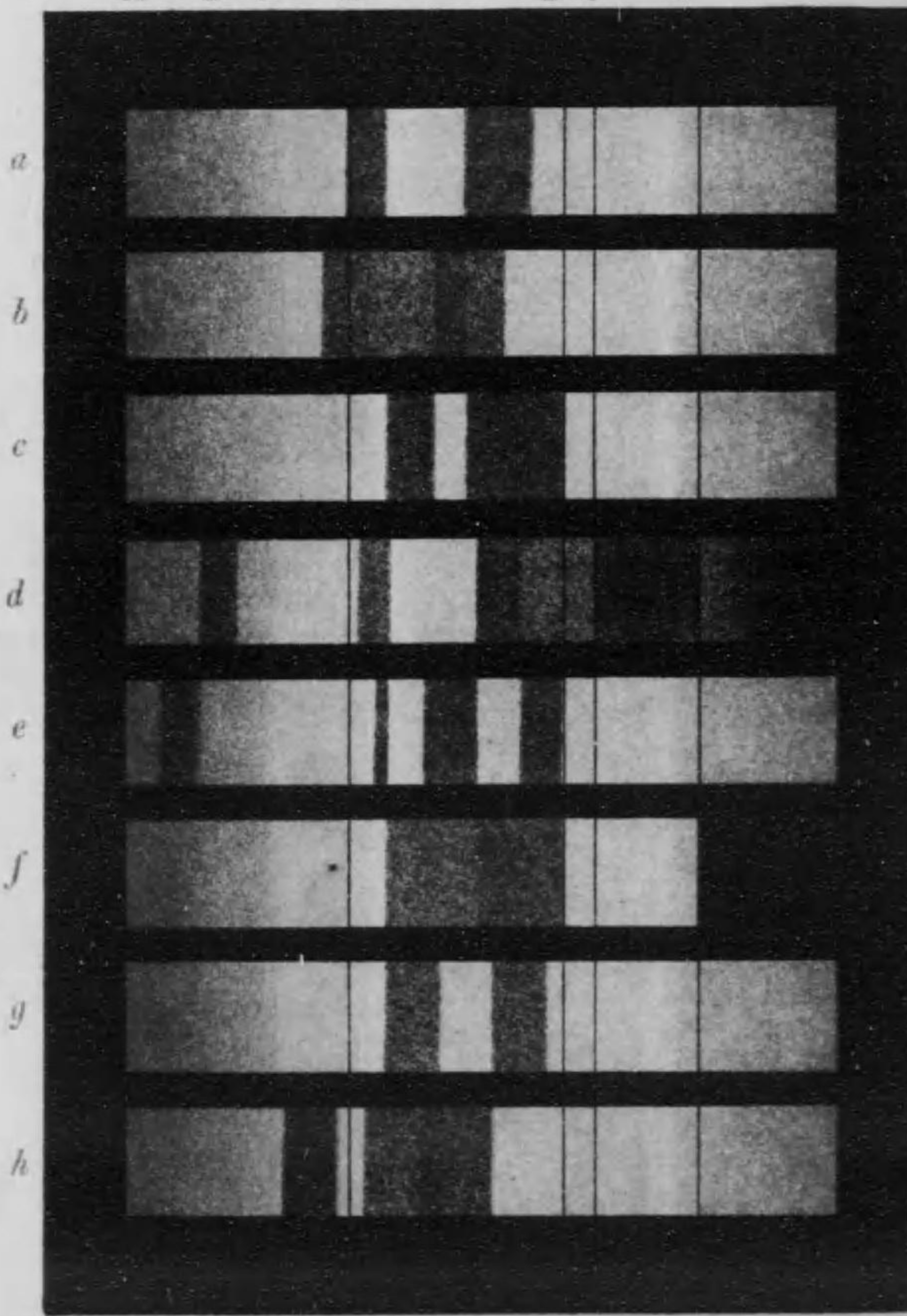
上、吸收線検査

血色素ハソノ新舊、或ハ化學的藥品ノ作用ニ依リテ種々ノ形ニ變ジ、各特有ナル吸收線ヲ現出ス、故ニ之ヲ光像鏡ヲ以テ検査シ、ソガ血痕ナルヤ否ヲ決定スルコトヲ得。

次ニ血痕ノ疑アルモノヲ種々ノ溶媒ニ溶解シ、ソノ吸收線ヲ検査シテ血痕ナルコトヲ確定スルハ甚ダ大切ナルコトナリ。此時ニ當リふくしん、わをじん、かるみん、いんていご等ノ一定溶液ノ吸收線ハ、血液ノ或溶液ノソレト酷似スルコトアルハ注意スベキ事柄ナレドモ、還元劑ヲ以テ所置シテソノ吸收線ノ變化ガ血液吸收線ノ變化ト一致セザルヲ以テ直ニ區別スルコトヲ得ルモノナリ。

血液ノ水溶液ハ新鮮ナル間ハ酸化へもぐろびんノ吸收線ヲ呈シ、ふらうんほうへる線D、Eノ間ニ在リテ、左ノモノハ細クシテ明ニ、右ニ在ルモノハ太クシテ稍境界不明ナリ、此酸化へもぐろびん溶液ニ何カ還元劑例へバ硫化あんもん、ひごらじんひごらーど等ヲ加フレバ、へもぐろびんノ吸收線ニ變ズ、コハ前記酸化へもぐろびんノ吸收線D、Eノ間ヲ充シタル一ツノ太キ吸收線ニシテ、甚ダ不安定ノモノナレバ僅ニ振盪ヲ加フルカ、或ハ時間ヲ經過スレバ酸化へもぐろびんノ吸收線ニ復歸スルカ、或ハ他ノモノニ變化スルモノナリ。血液ガヤ、古クレバ所謂めごへもぐろびんノ吸收線ヲ現出ス、之ハ單獨ニ存在スルコト少ク、多クハ酸化へもぐろびんノ吸收線ト混在スルモノナリ、吾人ガ實驗的ニ本吸收線ヲ作ラント欲セバ、新鮮血液ニ赤血

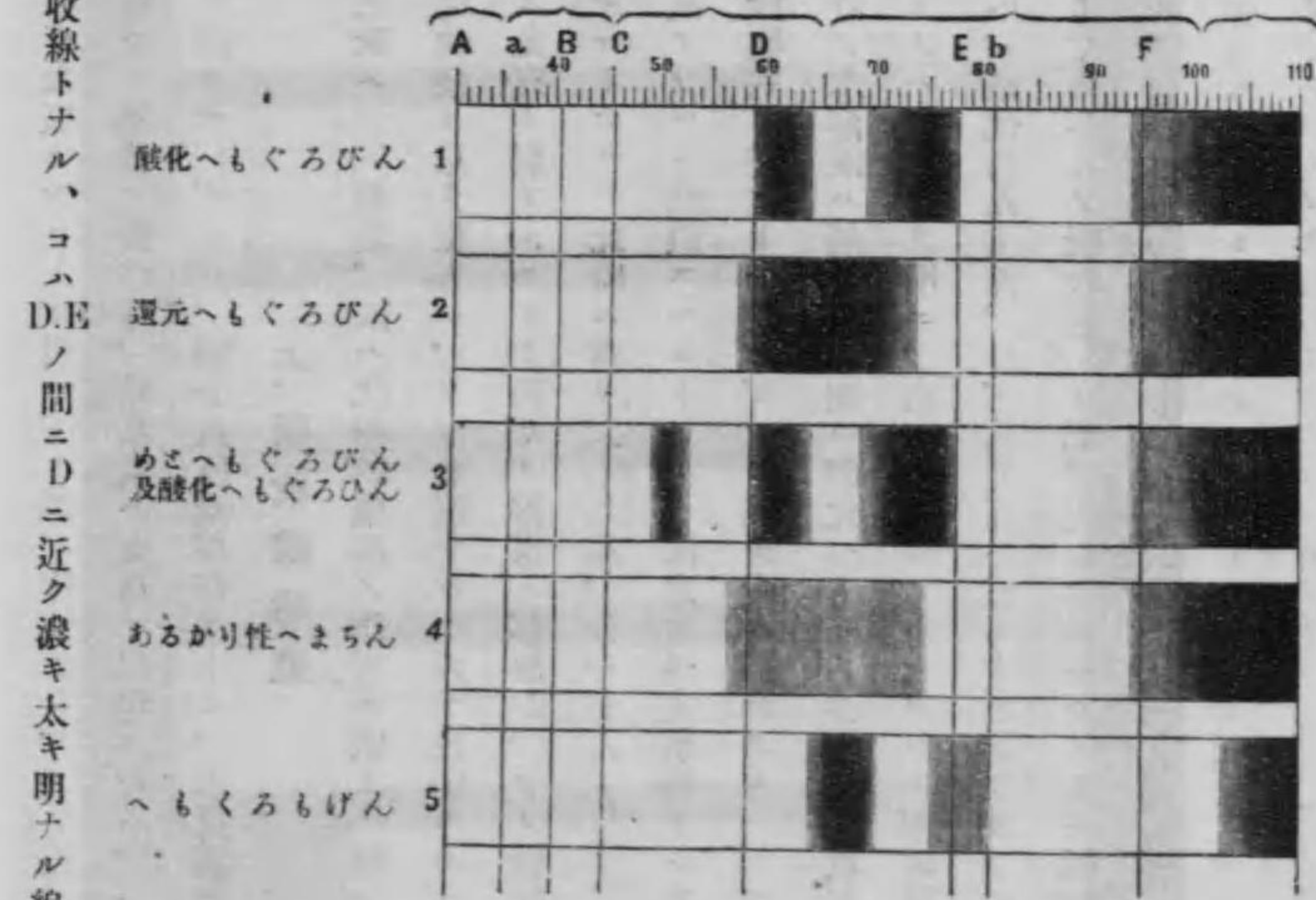
(ル 據 = 氏 ソ マ フ *)
A^a B C D E F



- | | |
|---------------------|--------------------------|
| a 酸化ヘモグロビン | e 酸性ヘマチン |
| b ヘモグロビン (還元ヘモグロビン) | f ナアンヘマチン |
| c 酸化炭素ヘモグロビン | g ナアンヘモクロモゲン (還元ナアンヘマチン) |
| d メトヘモグロビン | h 酸性ヘマトボルフィリン |

へもくろもげん
あるかり性へ
あるかり性へ
あるかり性へ
中性的めごへも
ぐろびん

圖 五 第



ノ 吸収線トナル、コハ D.E ノ間ニ D ニ近ク濃キ太キ明ナル線ト、E ニ近ク、且之ヲ掩ヒテ薄キ廣キ一本ノ線ナ

鹽ノ溶液ヲ加フレバ、血液ハ直ニ褐色トナリ
同時ニ中性めごへもぐろびんノ吸収線ヲ見ル
コトヲ得、中性めごへもぐろびんノ吸収線ハ
CDノ間ニ細ク明ナルモノ一本、D.Eノ間ニ稍細
キモノ二本アリ、中性めごへもぐろびんノ溶
液ニ一二滴ノあるかりヲ加フレバ、溶液ハ直
ニ赤色ニ變ジ、あるかり性めごへもぐろびん
ノ吸収線ヲ見ルヲ得、コハ Dノ左ニ細キモノ
及 D.Eノ間ニ二本アリ。
血液ガ水分ヲ失ヒ所謂血痕トナレバ、へま
ちんトナリ水ニ溶解困難トナル故、酸類或ハ
あるかりヲ以テ溶媒トスベシ、此へまちんヲ
あるかりニ溶解スレバあるかり性へまちんノ
吸収線ヲ現出ス、コハ D線ノ上ヨリ左右ニ薄キ
廣キ一本ノ吸収線ナリ、而シテ之ニ還元劑ヲ
加フレバ、還元へまちん即チへもくろもげん

第一編 物品検査 一 血液検査

リ、此吸收線ハ甚ダ薄キ血色素溶液ニテモ明ニ見ルコトヲ得ル故、法醫學的検査上甚ダ大切ナル吸收線ニシテ、多クノ場合血痕ヲあるかりニ溶解シ、直ニ或ハ還元劑ヲ加ヘテハもくろもげん吸収線ニ誘導シ、検査スルヲ常トス。

酸性へまらん

血痕ヲ醋酸等ニ溶解スレバ、所謂酸性へまらんノ吸収線ヲ生ズ、コハUニ近ク一本、DEノ間ニ細キモノ三本ヲ認ムルモノナリ。

血痕ガ古クシテ通常あるかりニ溶解シ難キ時ハ、青酸加里ニ溶解セシメ、あるかり性ちあんへまらんトナシ、更ニ之ニ還元劑ヲ加ヘテあるかり性ちあんへまらんもげんトナシテ検査ニ便利ヲ得ルコトアリ、青酸加里ニ血痕ヲ溶解セシメタル時ノ吸収線ノ位置ハあるかりニ溶解セシメタル時ト略相似タリ。

酸性へまどぼるひりん

血液ガ非常ニ高熱ニ遇ヒ殆ンド炭化セシ時ハ通常酸及あるかりニ溶解シ難クナル故、之ヲ濃硫酸ニ溶解セシメ、所謂酸性へまどぼるひりんトナシ、ソノ吸収線ヲ検査スベシ、コハDノ直接左ニ一本DEノ間ニ濃キモノ一本及極メテ薄キモノ一本アリ。

顕微光像鏡

極メテ小血塊ヨリ吸収線ヲ検セント欲セバ、顕微光像鏡ヲ用ユベシ、即チ小血痕ヲ載物硝子板上ニ取リ之ヲ二三分の加里滴汁、或ハ濃硫酸ヲ加ヘ覆蓋硝子板ニテ掩ヒ、暫時放置後鏡検スレバ、加里滴汁ヲ加ヘタル時ハへもくろもげんノ吸収線ヲ現出シ、(此場合ニハ同時ニ血球ヲ見ルコトヲ得)濃硫酸ヲ加ヘタル場合ニハ、酸性へまどぼるひりんノ吸収線ヲ見ルコトヲ得、顕微光像鏡トハ顕微鏡ト光像鏡トヲ結合シタル装置ニシテ此器械ナキ時ハ顕微鏡ノ接眼れんすヲ取外シ、袖珍光像線鏡ヲ挿入シテモ、前記吸収線ヲ見ルヲ得ルコトアリ。

中、結晶検査

イ、へみん結晶検査 (Teichmann 1853)

へみん結晶ハ褐色長板状ノ結晶ニシテ、鹽酸へよちんノ結晶セルモノナリ、本検査法ヲ行フニハ、先ヅ血痕ヨリツノ小片ヲ載物硝子板上ニ取り、ヨク乾燥セシメ、之ニ乾燥セル食鹽少許ト氷醋酸一、二滴ヲ加ヘ、覆蓋硝子ニテ掩ヒ、徐々ニ熱シテ氣泡ノ一二個發生スル程度ニ至リテ止ミ、冷却後鏡檢スレバ美麗ナルへみん結晶ヲ認ムルコトヲ得。



へみん結晶ハツノ製法ノ如何ト、血痕ノ新舊等ニ依リテ時トシテ長板形トナラズ、麻實形或ハ砂粒形トナルコトアリ、或ハ全ク結晶ヲ作ラザルコトアリ、即チ血痕ガ日光ニ長ク曝ラサレタル時、百八十度以上ニ熱セラレタル時、腐敗シタル時、鐵銹或ハ化學的藥品ト混ジタル時等ハ、へみん結晶ヲ作ルコトハ困難乃至不可能トナルモノナリ、我國ニ於テ染色ニ用ユル藍ノ結晶ハ同様ノ製法ニテ生ジ其形ニ於テへみん結

品ニ類似スレドモ、ソノ色ハ藍色ニシテ全クへみん結晶ト異ナレバ直ニ之ヲ區別スルコトヲ得。
へみん結晶ニ「ひざらじんひざらーど」ノ如キ還元劑ヲ加フレバ、ソノ色ハ直ニ美麗ナル赤色ニ變ジ、へもくろもけんノ吸收線ヲ現出スルニ至ルヲ以テ、ソノ結晶ガへみんナルヤ否ヤヲ決スルニハコハ最モヨキ方法ナリ。

ロ、へもくろもけん結晶検査 (Hoppe-Seyler 1890)

本法ハへみん結晶ニ勝ルトモ劣ルマジキ血色素證明力ヲ有スルモノニシテ、結晶不成功ノ場合モ吸收線ノミハ明カニ認メ得ルヲ以テ便利トナス、本結晶ヲ作ルニハ先ヅ溶媒ニ血色素ヲ溶解シ、空氣ヲ遮斷シテ還元ヲ行フベシ。ソノ目的ノ爲メニ種々ノ處方考案セラレタリ、今最モ便利ナルモノ一二ヲ擧グレバ左ノ如シ。

- 一、でいるりんぐ氏法、新鮮血ニびりちんヲ加ヘ封固放置后検査ス
- 二、はいね氏法、小血塊ヲびりちん二分ト硫酸ひざらちん飽和液三分トノ混合液ニテ所置スベシ
- 三、高山氏法、三〇%葡萄糖水溶液一〇、〇 氈一〇%などろん滴汁三、〇 氈びりちん三、〇 氈
右混シ三、四日放置シテ後用ユ。

予ハ好シテ高山氏試薬ヲ使用ス。即血小塊ヲ載物硝子板上ニ取り該試薬ヲ加ヘ、直ニ覆蓋硝子ヲ被セ、一二分間小泡ノ立タザル程度ニ微熱シ、冷却後鏡檢スレバ、美麗ナル針狀菊花狀或ハ房狀ノ結晶ヲ見ルコトヲ得。

本結晶ハへみん結晶ヨリモ出来易ク、且高温ニ遭遇シ、或ハ夾雜物等アリテへみん結晶ヲ製成スルコト能ハザリシ場合ニ於テモ、作り得ルコトアリ。



第七圖 「へみん結晶」

下、血球検査

血痕中ノ血球ハ水分ヲ失ヒタル爲メ收縮シ、原形ヲ止メザレバ、之ヲ檢スル際ニハ一定ノ溶液ヲ用ヒテ、之ヲ膨大原形ニ近ヅカシメザルベカラズ、此溶液ハ血色素ヲ溶解セズシテ收縮シタル血球ヲ膨大セシメ、且光學的ニ見易クナラシムルノ條件ヲ具備セザルベカラズ、此ノ目的ノ爲メニ種々ノ溶液提言サル、ト雖、未ダ完全ニ成功シタルモノナシ、今此注加液ノ一二ヲ擧ゲン。

一、ほふまん、ばちにー氏注加液

水 三〇〇・〇 珪

ぐりせりん 一〇〇・〇 珪

食 鹽 二・〇 瓦

昇 汞 一・〇 瓦

二、るさん氏注加液

硫 酸 一・〇 珪

ぐりせりん 三・〇 珪

右ニ蒸留水ヲ加ヘテ比重一・〇二八ニ至ラシム

注加液

血球検査

- 三、ぶつべ氏注加液
局方 などろん油汁及ふおるまりん等分
- 四、まるくす氏注加液
三三%加里油汁
等分
- 五、ういるひよう氏注加液
〇・一%鹽酸ひにん
- 三二%加里油汁

血小塊或ハ血液ノ附着セシ一纖維ヲ載物硝子板上ニ取り、分離針ニテ丁寧ニ分離シ、之ニ右記ノ液(予ハうるひよう氏液ヲ最モ便利ト信ズ)ヲ注加シ覆蓋硝子板ニテ掩ヒ、數時間乃至一晝夜放置後鏡檢スレバ尙幾分收縮ノマ、ナル血球ヲ認ムルヲ得、古キ血痕中ニ在ル血球ヲ原形ニ復セシムルハ到底不可能ノコトナリ、

血痕中ノ血球ガ原形ニ復セザルニ於テハ、血球ノ大サニヨリテソガ如何ナル動物ヨリ由來セシカラ定ムルコトハ困難ナリ、然レドモ今參考ノ爲メ普通動物ノ血球ノ大サヲ示セバ左ノ如シ

人	六・五—九・二	みくろん	平均	七・七	
犬	平均	七・四	馬及鼠	平均	七・二
家兔	同	七・五	豚	同	七・〇
牛	同	六・八	猫	同	六・四



第八圖

血痕ニ注加液ヲ加ヘテ血球ヲ厚形ニ復セシメタルルモノ

血球ノ大サ

正規血清

兔血清ヲ以テ、再ピンノ免疫價ヲ檢シ、更ニ人類以外ノ他動物ノ血清、或ハ血液ヲ生理的食鹽水ニテ特殊血清免疫價ト同濃度ニ例之、二萬倍ニ薄メタルモノニ積層シ、沈降輪所謂異種沈降ヲ來サレバ、茲ニ初メテ用ユルニ足ル抗人血家兔特殊血清ヲ得タルナリ。法醫學的ニ使用シ得ラルハ、人血ニ對スル家兔特殊血清ノ重要ナル性質ヲ列舉スレバ左ノ如シ。

血清ノ貯藏

- 一、血清ノ免疫價ハ凡ソ二萬倍ニシテ作用ハ迅速ナラザルベカラズ、
- 二、血清ハ無色透明ニシテ蛋白質ヲ呈スベカラズ、
- 三、血清ハ同種屬沈澱ノミヲ生ジ、決シテ異種屬沈澱ヲ來スベカラズ。

此ノ如キ性質ヲ有スル特殊血清ハ、ソノ製造ニ相當ノ困難ト手數及熟練ヲ要スルモノナレバ、一疋ノ家兔ヨリ得タル使用殘餘ノ血清ハ、適當ニ貯藏セザルベカラズ、此貯藏ノ目的ニハ石炭酸、くろゝ、ほるむ、ちあふてりん、ごるをゝる等ノ藥品ヲ加ヘ、貯藏スベシトハ成書ノ記スル所ナルモ、予ノ經驗ニヨレバ何等ノ藥品ヲ加ヘズシテ、成ルベク無菌的ニ所置セル家兔血清ヲ褐色ノ小硝子管内ニ封入貯藏シ、約二年ノ後尙使用ニ耐ユルモノナルコトヲ知レリ。

實際ノ検査

法醫學的ニ用ユルニ足ル、抗人血家兔特殊血清ヲ得レバ、茲ニ吾人ハ實際ノ検査ニ移行スベシ。即チ可檢汚斑、及ピンノ汚斑ヲ附着セル基質ノ一小部分ヲ切り取り、一晝夜生理的食鹽水ニ浸漬シ、透明ナル浸出液ヲ得レバソノマ、浸出液濁濁セル場合ニハ之ヲ遠心器ニヨリテ透明トナシ、豫メ抗人血家兔特殊血清ヲ入レアル細試験管、或ハ沈降素檢法ノ爲メニ特製セル試験管ヲ斜ニ把持シ、極メテ靜ニ積層スル時ハ、浸出液ト特殊血清ノ間ニ明ナル接觸面ヲ生ズ、若シ可檢斑ガ人血痕ナル時ハ直ニ、ソノ接觸面ニ絮狀ノ沈

沈降法ニ對スル注意

澱輪ヲ生ス。而シテ此際被檢基質ノミノ浸出液ニテハ此沈澱輪ヲ見ザル時、本検査法ハ儘ニ陽性ヲ呈セルモノナリトス。尙可檢斑浸出液ノ餘リ濃キモノハ往々異種屬反應ヲ來スコアレバ充分注意スベシ。貯藏後相當ノ時日ヲ經過セル特殊血清ヲ用ユル場合ニハ、更ニソノ免疫價及異種屬沈澱ヲ來サザルヤ否ヤヲ檢セザルベカラズ、之レ血清ハ貯藏中往々變質シ居ルコトアレバナリ。

本反應ハ同種動物ノ體液等ニテモ陽性ナルヲ以テ、モシ犬ノ血液ニ人類ノ唾液ノ如キモノヲ附着セル場合ニハ、人血トノ區別全然不可能ナリ、又本反應ニヨリテハ人血ト猿血トハ區別スルコト能ハズ、ソノ他一度洗濯シタル衣服ニテ血痕非常ニ薄クナリ居ル時ハ、本検査法ニヨリ鑑別スルコト困難ナリ。血痕小サキカ、或ハ薄キ時ハ浸液ニ用ユル食鹽水ヲ成ルベク小量トナシ、濃キ浸出液ヲ作ルニ心掛ガクベシ。

其他數十年ヲ經タル血痕(加之じふと木乃伊)、百四十度ニ二十分、百五十度ニ十分、百六十度ニ五分間熱セラレタル血痕、人血ヲ吸ヘル蟲類ノ糞等ニテ本反應陽性ナリシ報告アリ。

ロ、補體結合反應 Porter-Gauguin 1902, Keiser-Schels 1905

補體結合反應

本法ニ依リテ血痕ノ種屬鑑別ヲナサンニハ、次ノ材料ヲ必要トス。

- 壹、對抗元、人血痕或ハ可檢斑ノ生理的食鹽水浸出液、
- 貳、特殊血清、前記沈降素檢法ニ於ケルト全ク同様ニシテ、抗人血家兔特殊血清ヲ製造シ、免疫價ヲ檢定シタルモノヲ。約三十分五十五度ニ熱スル時ハ、ソノ中ノ補體ハ作用ヲ失ヒ、双介體ノミトナル。即チ之ニ食鹽水ヲ加ヘテ原量ノ十倍トナセバ、本法所要ノ血清ヲ得タルナリ。コハ作用價強ク人血ニノミ特殊作用ヲ有セザルベカラザルモ、全ク透明ナルベキ必要ナシ、コレ本法ノ利益トスル一點ナリ。

參、補體、海狗ノ新鮮ナル血清ヲ取り、生理的食鹽水ヲ加ヘテ原量ノ十倍トナス。
 四、山羊血球、コハ普通ノ注射器ニテ山羊ノ頸靜脈ヨリ血液五耗ヲ取り、こるべんニ移シ、約五倍ノ生理的食鹽水ヲ加ヘテ消毒セル砂粒ト共ニ、振盪シテ纖維素ヲ去リ、而シテ數回生理的食鹽水ニテ洗滌シ、血球ノミヲ集メ、生理的食鹽水一〇〇〇耗ヲ加ヘテおんヲ作ル。
 五、前述ノ山羊血球をむるじおん二乃至五耗ヲ、健康ナル家兎ノ耳靜脈ニ數日ヲ隔テ、注入スルコト、二三回ソノ頸靜脈ヨリ血液ヲ採集シテ血清ヲ析出セシメ、ソヲ約卅分五十五度ニ加熱シテ補體ヲ去リ所謂溶血々清ヲ得。

此ノ如クシテ使用材料ヲ撰定スレバ、各材料間ニ適當ニ反應ヲ來スベキ使用量ヲ決定スベシ、モシ各材料ノ使用量適當ナラザレバ、假令本反應ヲ行フモ、其結果ハ信ヲ措クコト能ハザルニ至ル。次ニ種々ノ動物ノ血痕生理的食鹽水浸出液及血痕附着物基質ノ生理的食鹽水浸出液ヲ作り、對抗元トシテ使用シ、決シテ補體結合ヲ來サザル様ニ注意スベシ。

各材料及ソノ相互關係ノ檢定ヲ經レバ、茲ニ初メテ本検査ニ着手スベシ、即可檢血痕浸出液〇・一耗ヲ試験管ニ取り、コレニ前記特殊ノ血清及補體溶液適當量(豫メ決定セルモノ)ヲ加ヘ、一時間卅七度ノ解卵器内ニ放置シ、次ニ之ヲ取り出し、溶血血清及山羊血球をむるじれん適當量ヲ加ヘ、二時間解卵器内ニ置き而シテソノ結果ヲ讀ミ、尙對照試驗トシテ血痕附着物ノ血痕ナキ部ノ生理的食鹽水浸出液ヲ對抗元トシテ用ヒ、特殊血清ノ代リニ生理的食鹽水ヲ加ヘテ同様ノ所置ヲ施シ、兩者共溶血來リ可檢血痕浸出液ノミ溶血セザル時ハ本法ハ明ニ陽性ニシテ、先キニ用ヒタル血痕ハ人血痕ナルコトヲ決定スルヲ得。

沈降素檢法ト補體結合反應トハ何レガ血液蛋白ノ種屬鑑別ニ適當ナルカト云フニ、前者ハ沈澱輪ノ鑑別困難ナリト雖、操作比較的簡單ニシテ、後者ノ如ク多數ノ材料ト、繁多ナル手数ヲ要セズ、又材料ノ好惡ヨリ來ル錯誤少キ爲メ、現今學者ハ好シテ沈降素檢法ヲ用ユ、補體結合反應ガ甚ダ蛋白含量少ク且濁濁セル浸出液ニテモ、陽性ノ結果ヲ得ルコトハ、甚ダ利益トスル點ナレドモ、コハ同時ニソノ缺點トモ見ルベキモノニシテ、本反應ハ汗等ニモ陽性ヲ呈シ、過敏ナリトノ誤アルヲ免レズ。

ハ、過敏性檢法 (H. Pfeiffer u. S. Miao)

海狗十數疋ヲ取り、ソノ腹腔内ニ可檢血痕浸出液ヲ少量注入シ、注意シテ飼養シ二乃至三週間ヲ經タル後、人血清二耗ヲ卅七度ニ温メ、再ビ同動物ノ腹腔内ニ注入シ、檢温器ヲ以テ動物ノ體温下降及ソノ他ノしよつく症狀ヲ詳細ニ檢定シ、所謂過敏性しよつくヲ來セバ、第一回ニ注入シタル浸出液ヲ由來セル可檢血痕ハ人血ナルコトヲ決定スルヲ得。然ルニ此過敏性反應ヲ法醫學ニ應用スルハ甚ダ考フベキコトニシテ、大切ナル材料ヲ動物體内ニ注入シテ二週間ヲ經過セシムルノ危險、第一次注入ヲ受ケタル動物ニ第二次注入ヲ行フモ、必ズシモしよつくヲ起スモノト決定シ居ラザルコト、しよつくヲ鑑識スルニ相當ノ困難アルコト等ノ缺點ヲ有スル爲メ、本法ハ高度ノ特異性検査材料ノ少許ニテ足ルコト等ノ利益ヲ有スルニ係ハラズ、法醫學的血痕検査ニハ未ダ廣ク用キラル、ニ至ラズ。

ニ、血色素沈降素檢法 (Klein, Jaer 1910)

人類ノ新鮮血球ヲ取りテ生理的食鹽水ニテ充分沈澱シタル後、四倍量ノ蒸留水ヲ以テ血球ヲ破壊シ、更ニ九倍量ノ生理的食鹽水ヲ加エテ遠心沈澱シ、透明ナル赤色上清液ヲ取りテ、血清沈降素反應ニ於ケルガ

如ク、家兎ノ腹腔内ニ注入シ、一定ノ時日ノ後、所謂抗人血色素家兎特殊血清ヲ得、次ニ豫メ可檢血痕斑ヲ最初蒸留水ニテ所置シ、血色素ノミヲ浸出シ、ソレニ七%ノ食鹽水ヲ等量加ヘタルモノニ、前記人血色素家兎特殊血清ヲ積層シ、前記ノ如クソノ接觸面ニ沈澱輪ヲ生ズレバ、可檢血痕ハ人血ナルコトヲ知ル。本法ハ血清沈澱素反應ヨリモ鋭敏ニシテ、特異性ヲ有スト稱セラレ、モ、特殊血清ヲ得ルコト稍困難ナリ。

丁、血量ノ鑑定

流出セル血量ヲ定ムルニハ、血液ノ澱潤セルモノ全部ヲ集メ、之ヲ蒸留水ニテ浸出シ、其一部ヲ取ツテ Gowersche Haemoglobinometer 或ハ Sahli's Haemometer ヲ以テ血色素ノ含有量ヲ計リ、之ヨリ全血量ニ換算スベシ。或ハ乾血ニ於テハ、ソノ重量ヲ計リテ失ヒタル水分ヲ加算シテ原血量ヲ算出シ、ソノ他まるくオ氏ハ血痕浸出液ノ比重ノ増加ニヨリ、しゆるつ氏ハ沈澱素檢法ヲ應用シ、三田氏ハ血液中ノ鐵分ヲ化學的ニ定量シテ、之ヲ流動血量ニ換算スル等ノ方法ヲ取リシト雖、何レモ流出セル原血量ヲ見出スコトハ殆ンド不可能ニシテ、ソノ八五・〇%迄ノ近似値ヲ得レバ、成功ノ方ナリト云フ。

戊、極メテ微量ナル血痕ニ就キ、人血ナルヤ否ヤ證明必要ナル場合ニハ如何ナル方法ヲ擇フベキカ。

血痕検査ハ豫備、質性乃至生物學的検査ニヨリ、ソノ検査法數多クシテ實際ノ場合、何レノ方法ヲ取ルベキカ、ソノ選擇ニ苦ムト同時ニ、法醫學的検査ハ材料極メテ少ナキ場合多ク、且ツソノ貧弱ナル材料ノ幾分ハ、更ニ證據品或ハ將來再鑑定ヲ要スル際ノ準備トシテ、往々保留セザルベカラザルコトアルガ故ニ

血液ノ鑑定

血液ノ鑑定

成ルベタ材料ヲ徒費セザル様心懸ケザルベカラズ。

予ハ次ノ如ク血痕検査ヲ施行スルヲ、最モ便利ニシテ材料少クトモ事足り、且正確ナル成績ヲ與フルモノナリト信ズ、即チ茲ニ大豆大平方ノ血痕斑一個アリト假定シ、單ニ其一個ノミヲ以テソガ人血ナルヤ否ヤヲ決定スルノ例ヲ舉ゲムトス。

可檢大豆大平方ノ血痕ヲ、肉眼的ニ可嘖ニ觀察シ、更ニるーベヲ以テソノ所見ヲ詳ニシタル後、ソノ約半分ヲ切取シ、(殘餘ノ半分ハ後記ノ爲メ之ヲ保留ス)或ハ時ニ依リ剝離採集シ、更ニ之ヲ三分ニシテ次ノ如ク所置ス。

第一分ヲ純白濾紙間ニ置キ水ヲ以テ濕シ、暫時放置シテソノ軟化スルヲ待チ、硝子棒ノ鈍端ヲ以テ之ヲ輕打シ僅カニ血色素ノ濾紙上ニ移行スレバ、ソノ濾紙ヲ以テをぞん及べんちん檢法ヲ行フ、此兩檢法陰性ナレバ、ソハ略血痕ニ非ラズト斷定シ得ベシ。若シ該検査陽性ナレバ、豫備検査ノ爲メニ濕潤セル小血塊ヲ低温ニテ乾燥シ、之ニテへみん結晶ヲ作成シ、ソノ結晶ニ硫酸ビシラヂン等ヲ加ヘ微熱スレバ、結晶ハ直ニ赤變シへもくろもげんノ吸收線ヲ現出スルニ至ル、或ハへみん結晶作成ノ代リニ直ニ高山氏試薬ヲ用ヒテ、へもくろもげん結晶ヲ作成シ同時ニソノ吸收線ヲ窺フモ可ナリ。之ニ依リテ血痕ナルコトノ確證ヲ得レバ、材料甚ダ少キ場合ニハ之ヲ省略スルモ可ナレドモ、材料多キ時ハ次ノ第二分ノ検査ヲ行フベシ。第二分ハ之ヲ載物硝子板上ニ取リ三二%ノ苛性加里液ヲ加ヘ、布片ニ附着セルモノナレバ纖維ヲ可嘖ニ分離針ニテ分離シ、覆蓋硝子板ヲ被セ、一夜室温ニ放置シテ後鏡檢スレバ、不整形ナル紅色ノ血球ヲ認メ得ベク、或ハ血球ヲ認ムルコト困難ナル場合ニモ、之ヲ顯微光像鏡ニテ視ヘバ、へもくろもげんノ吸收線ヲ見

ルコトヲ得。

第三分ハ二・三坵ノ生理的食鹽水ニ浸漬シテ一夜室温ニ放置シ、ソヲ成ルベク少許ノ生理的食鹽水ヲ浸セル濾紙ニテ濾過シ、或ハ遠心器ニヨリ透明トナシ、沈降素検査ヲ行ヒ、如何ニシテモ清明ナル濾液ヲ得ル能ハザレバ不止得、補體結合反應ニヨリテ、ソノ蛋白ノ種屬鑑別ヲナスベシ。

血痕ノ附着後ノ經過時間ハ、ソガ種々ノ溶媒ニ溶解スル速度ヲ比較シテ検査スルニ在レドモ、今日ニテハ未ダ良法發見サレズ。

巳、肉類、羊水、ソノ他ノ體液ノ種屬鑑別

一定ノ肉類、體液或ハ羊水等ノ何レノ、種屬ヨリ由來セルカヲ判定スルニハ、當該動物血清家兎特殊血清ニヨリ、或ハ尙正確ニハソノ肉類抽出液體液、乃至羊水ヲ對抗元トセル家兎特殊血清ヲ作り、ソレヲ以テ前記ノ如ク沈降素検査法、或ハ補體結合反應ヲ行フベシ。

二 毛髮検査

イ、検査法

検査ノ必要アル毛髮ハ叮嚀ニ白紙ノ間ニ挟ミ、細長キ壘或ハ試験管ニ入レ置キ、決シテ之ヲ急角度ニ折り曲ゲ、或ハびんせつじ等ニテ強ク取扱フベカラズ。

毛髮ヲ検査スルニハ、先ヅ之ヲ白紙或ハ白紙板上ニ置キ、肉眼ヲ以テソノ縮レ方、大サ、長サ、及色澤等ヲ檢シ、次テ顯微鏡ヲ以テソノマ、毛髮ニ附着セルモノ、有無ヲ検査シタル後、ぐりせりん或ハ生理的

肉類羊水等ノ鑑別

毛髮検査

食鹽水ヲ注加シテソガ構造ヲ鏡檢スベシ。次ニ必要ニ應ジ附着物ヲ除去スルニハ、 H_2O_2 有る或ハあるこほるヲ以テ洗滌スベシ。

毛髮ヲ鏡檢スル際、吾人ノ注意スベキハ毛根ノ性狀、毛幹ノ構造及太サ、ソノ末端ノ形態、色素ノ配列及損傷ノ有無、横断面ノ性狀等ニシテ尙必要ナル場合ニハ別ニソノ強度、伸張度ヲモ併セ檢スベシ、人毛ノ伸張度ハ通常ソノ長サノ約三分ノ一ナリト云フ、毛髮ノ細胞狀態及上皮ヲ檢スル際、1%ノ鹽酸あるこほるカ、5%ノあんもにあ溶液ヲ用ユルトキハ、ソノ構造鮮明トナル。非常ニ色素多クシテ不透明ナル毛髮ハ、強硝酸或ハ過酸化水素水ヲ以テ所置シ、適當ナル透明度ニ至レバ、直ニ之ヲ洗滌シ乾カシテ後、かなだばるさむニテ封固シテ検査スベシ。毛髮ノ横断面ニ至リテハ、式ノ如ク之ヲばらふいん或ハちわいいでいんニテ包埋シテ切斷スベシ。

毛髮ノ上皮細胞ハ、ソノ尖端ヲ毛根ト反對ノ方向ニ向クルヲ以テ、毛ノ一片ニ於テモ何レガ毛根端ナルヤヲ判定スルコトヲ得、次ニ毛髮ガ何レノ人ヨリ由來セルカヲ判定スル必要アル際ソヲはるとなつくノ Mikropolarimeter ニテ檢スレバ、毛髮ガ光線ヲ重屈折スル狀態ニ依リ、ソノ異同ヲ定ムル事ヲ得ルト云フ。コハ人毛ノ色澤ハ人々ニ依リ種々ノ差異アルヲ以テナリ。

ロ、毛髮ノ色

毛髮ノ色ハ皮質ニ存在スル色素ト、皮髓兩質ノ氣量ノ多少ニヨリテ決定スルモノニシテ、白毛ハ全ク色素ヲ缺キ、色素ガ多クナリ氣量少クナルホド、ソノ色ハ黒色ニ近ヅキ來ル、陰毛腋毛等ノ赤色ニ傾ケルハソガ汗及ソノ他ノ分泌液ニヨリ、常ニ化學的作用ヲ被ルニ依ル。發掘セル死體ノ毛髮ガ往々狐色トナリ居

毛髮ノ伸張度

毛髮ノ色

ルハ、地中に於ケルふみん酸ノ爲化學的作用ヲ破レルモノナリト云フ。

往々毛髮ガ故意ニ、或ハ職業ノ爲ニ種々ニ着色サル、コトアリ、例ヘバ水車業者ノ毛髮ガ糠ヲ以テ白色トナリ居レルガ如シ、化學的ニ毛髮染色ヲ施スハ故意ニ、或ハ美容ノ目的ニ、或ハ犯行ノ爲メニ之ヲ行フモノニシテ、往々之レガ爲メニ中毒ヲ來スコトアリ、今之ニ用ユル藥品ヲ列舉スレバ左ノ如シ。

黒染ニハ硫化あるかり、硝酸銻鉛、鉛化合物、單寧、沒食子、墨、

褐染ニハ重クロム酸加里、硝酸銀、過まんがん酸加里、

等ヲ用ユ、是等ノ着色ヲ除去スルニハ、先ヅあるこほる、わいてるヲ以テ毛髮ヲ洗滌シ、次デ加温セル鹽酸或ハ硝酸ヲ以テ所置スベシ。

ハ、附着物ノ検査

毛髮ニ附着セルモノヲ検査シテ種々犯罪捜査上ノ利益ヲ得ルコトアリ、例ヘバ附着セル血液、精液、動物毛、火藥、金屬粉等ヲ檢出シテ、月經、強姦、獸姦及銃創ノ有無、或ハソノ職業等ニ付キ検査上ノ便宜ヲ得ルコトアルガ如キコレナリ。

ニ、毛髮ノ太サ

毛髮ノ太サハをくらゐるみるくらゐのどるヲ以テ計ルモノニシテ、今人毛ノ大キモノヨリ順次列舉スレバ次ノ如シ。

- 頬 ひげ ○・一二五〇—〇・一五〇〇 耗徑
- 陰 毛(女子) ○・一〇五〇—〇・一五〇〇 同

毛髮ノ附着物

毛髮ノ太サ

下顎ひげ及鼻下ひげ

○・一二五〇—〇・一二三〇 同

腋 毛

○・〇七九〇—〇・一五〇〇 同

鼻 毛

○・〇八〇〇—〇・一二三〇 同

陰 毛(男)

○・〇九九〇—〇・一二〇〇 同

眉 毛(男)

○・一二〇〇 耗徑

眉 毛(女)

○・〇八〇〇 同

頭 毛(男女)

○・〇八〇〇 同

鬚 毛

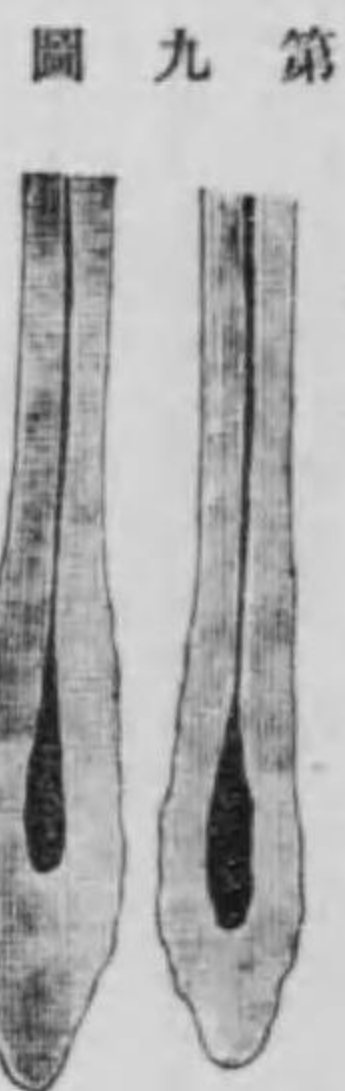
○・〇〇〇八—〇・〇〇一六 耗徑

即チ頭毛ニ○・〇八耗ヨリ太キモノハ少ク、ひげ、陰毛、腋毛ニハソレヨリ細キモノハ少ク、且之等ハ僅カノ距離ニテ急ニ細クナレドモ、頭毛ハ徐々ニ細クナリ居ルヲ以テ相互ノ鑑別ヲナスコトヲ得。

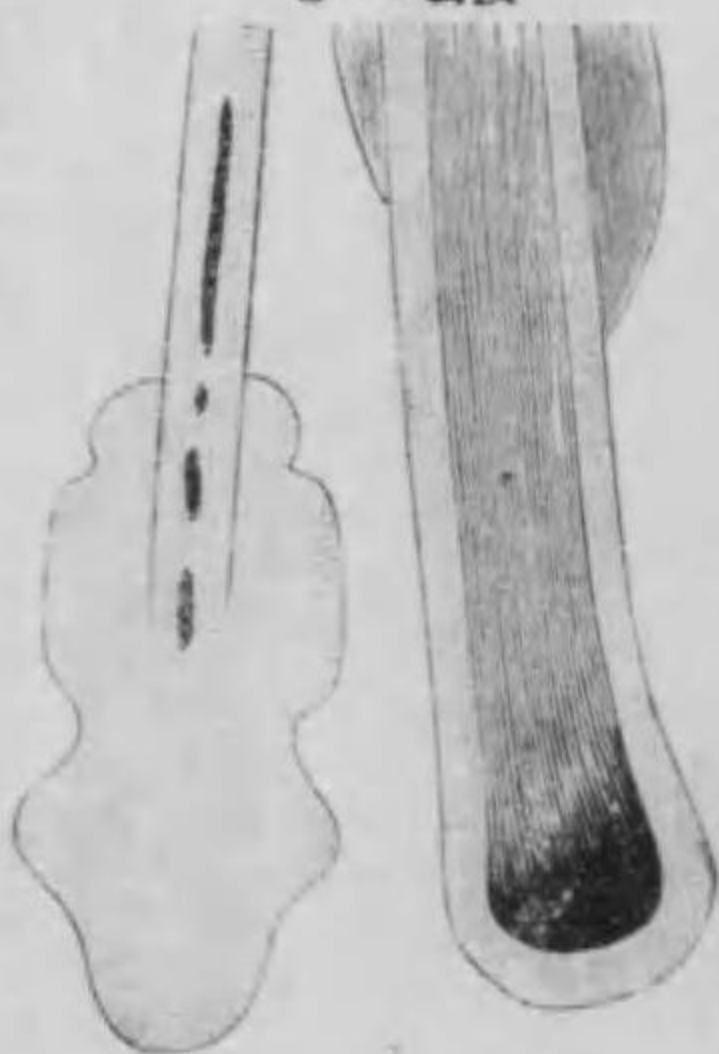
ホ、毛根及毛幹ノ形状

毛根及毛幹

脱落セル毛



去抜セル毛



毛根が滑ニシテ萎縮シ根棒状トナリ居ルモノハ自然ニ脱落セルモノニシテ、毛囊ヲ附着シ且萎縮ノ状ナキモノハ無理ニ脱去サレタルモノナリ、ソノ他毛根ノ形状ヲ注意シテ検査スル時ハ、ソガ何レノ體部ニアリシモノナルカラ知ルコトヲ得ル場合アリ。

毛幹モ亦發生部位、男女ノ別等ニヨリテ種々ノ形状ヲ呈ス、例ヘバ短クシテ、ソノ太サニ變リナク、末

婦人頭髮ノ末端



第十圖

磨耗セル末端ヲ有スル下腿ノ毛



第十一圖

端根棒状トナルモノハ男子ノ頭毛ニシテ、長クシテソノ末端分裂シタルモノハ女子ノ頭毛、黒褐色ヲ呈シ縮レ、短クシテ且ソノ末端ノ分裂シ居ルモノハ、陰毛或ハ腋毛、細クシテソノ末端尖リオルモノハ毳毛ナルコトヲ知ルヲ得ルガ如シ。

へ、人毛ナルヤ獸毛ナルヤノ鑑別

人毛ハ大サ平均〇・一五耗ヲ超過スルコトナク、上皮細胞ハ極メテ微ニ相重疊シ、皮質最モ廣ク、茲ニ多少ノ色素粒ヲ有シ、尖端或ハ毛根部ニハ通常色素ヲ缺ク、髓質ハ細クシテ顆粒状ヲ呈シ、或ハ全ク之ヲ缺

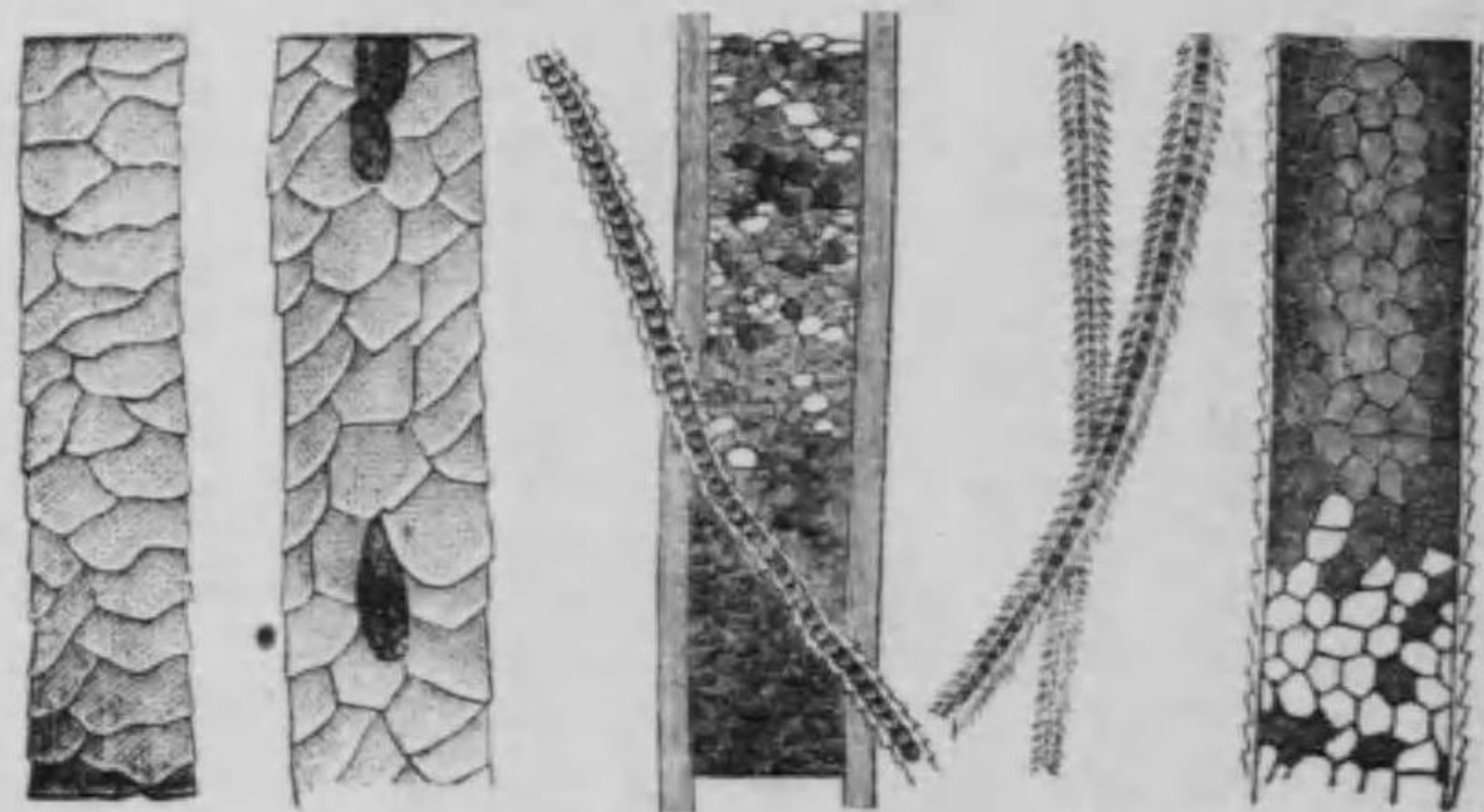
人毛ト獸毛

毳毛

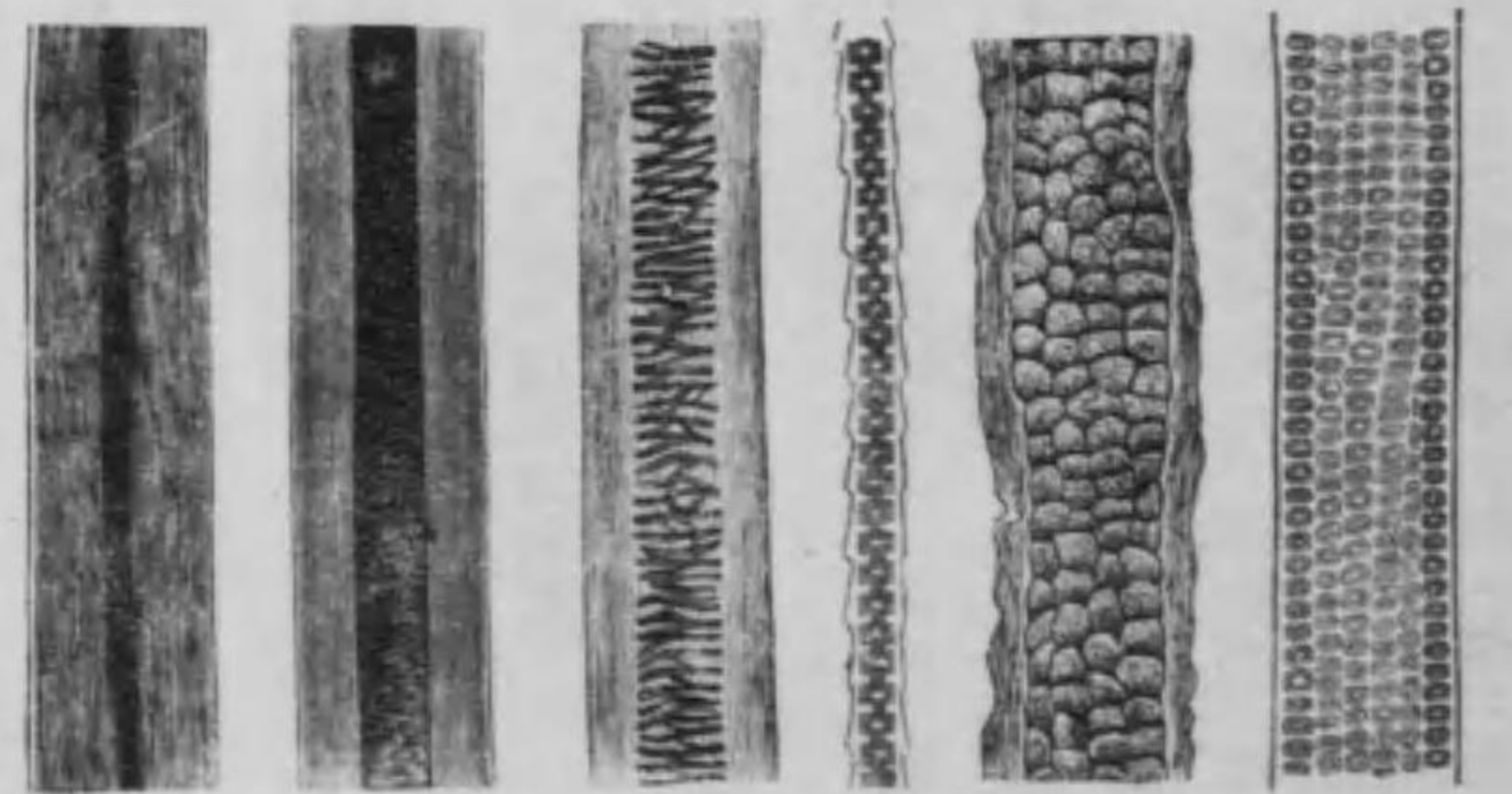
キ、且所々ニ斷絶ス、髓質ノ細胞ハ通常非常ニ見惡キモノナリ、色素ハ年齢ト伴ヒテ一定度迄増加シ、老年ニ至レバ再ビ減少ス、黒毛ハ赤毛ヨリモ早ク白色トナル。

毳毛ハ細クシテ〇・〇〇一六耗徑ヲ算シ、銳キ尖端ヲ有シ、髓質及色素ヲ缺ク、コハ妊娠五六個月ニ最多

第二十圖



1 (1) 狸毛 2 (2) 羊毛 3 (3) 狐毛 4 (4) 編蝠毛 5 (5) 羊毛



1 (1) 發育セル髓質ヲ有スル人毛 2 (2) 牛毛 3 (3) 貂毛 4 (4) 織毛ナル鼠毛 5 (5) 太ト加里油液ニ浸シタル鼠毛 6 (6) 兔毛

獸毛

ク、妊娠月數重ナルニ從ヒ脱落シテ羊水中ニ移行ス。
獸毛ハ通常〇・二五〇耗徑ヨリモ太ク、上皮細胞ハ著明ニ、或ハ時トシテ厚瓦狀ニ相重疊シ、皮質ハ極メテ細ク、色素ハ粗大ナル顆粒ヲナシ、從テ髓質ハ甚ダ廣ク、尖端ニ向フニ從ヒ細クナリ、遂ニ消失ス。髓質ニ於ケル細胞ノ構造ハ極メテ著明、一見シテ人毛ナラザルコトヲ知り、且毛髪検査ニ經驗ヲ有スル人ハソハ如何ナル獸類ノ毛ナルカヲ直ニ鑑別スルコトヲ得ルモノナリ。動物ノ毛ノ中ニテ、ソノ大サト云ヒ構造ト云ヒ、最モ人毛ニ近キモノハ犬ノ毛ニシテ、動物中ニテモ近キ種屬間相互ノ毛ハ亦區別困難ナリ。動物ノ毳毛ハ髓質ヲ有スルニヨリ、人毳毛ト明ニ區別スルコトヲ得。

ト、毛髪ニ於ケル損傷

毛髪モ往々裂傷、切傷或ハ銃創ヲ蒙リ居リ、ソノ状態ヲ検査シテ、法醫學上大ナル利益ヲ得ルコトアリ、鈍器ヲ以テ頭部ニ一撃ヲ加フル時、毛髪ハ長軸ニ沿フテ裂クルコトハ少ク、毛根ノ上部ニ於テ折ル、ヲ通常トス、然ルニ頭部ニ數回ノ打撃ヲ加ヘ、毛髪ガ頭骨ト兎器トノ間ニ在リテ暴力ヲ受クル時ハ、毛幹ノ破裂ヲ來ス、故ニ毛幹ノ破裂ヲ見タル時ハ、暴力ハ單一ニ非ラザルコトヲ知ルヲ得、頭骨ノ裂隙中ニ毛髪ノ挟マリ居レルハ、大暴力ノ加ハレルコトヲ意味ス、毛幹ノ破裂シ居ルコトハ、自然ニ或ハ汚液ノ作用ニヨリ來ル事アレバ、注意スルヲ要ス、毛幹ガ破裂スルコトナク、平滑ニ斜ニ切レ居ル時ハ、銳器ニヨリテ來リシ損傷ナルコトヲ知り、断面凹凸ヲ呈シ、階段狀トナリ、分裂狀トナリ居ルハ、餘リ銳ナラザル銳器ニテ切斷サレタルコトヲ示ス。

毛幹ノ挫カレタル状態ヲ檢シテ、如何ナルモノ、間ニ挟マリテカクナリシモノナルカヲ知ルコトヲ得ル

毛髪ノ損傷

毛髪ノ燃焼

コトアリ、又ハ毛幹ヲ檢シテ内ニ大小不同ノ空胞ヲ形成シ或ハ膨脹シ萎縮シ居ルニヨリ燃焼シタルモノナルコトヲ知り、或ハ之ニ附着セル火藥、鉛化合物ヲ證明シテ銃器ヲ以テ害ヲ加ヘラレシヲ發見スルコトアリ。毛髪ヲ百八十度以上ノ水或ハ蒸氣中ニ置ク時ハ變色シ、皮質細胞ノ收縮ニヨリテ長軸ニ沿ヘル皺襞ヲ作ル、モシソノ温度二五〇度以上ナル時ハ、萎縮變色シ脆弱トナリ、光澤ヲ失ヒ、大空胞ヲ作ルト雖、炭化スルコトナシ。

チ、断面ノ検査

人毛ノ断面ハ發生部位ト人種ニ依リテコトナレリ、例ヘバ頭毛ノ断面ハ歐米人ニテハ楕圓形、髭ハ多角形、陰毛ハ腎臟形ヲ示セルコト多ク、次ニ日本人及支那人頭毛ノ断面ハ圓形ニシテねじりける、ほつてんごつど等ノハ不正楕圓ニ傾ケル如キガ之レナリ。

リ、毛髪類似ノ纖維

羊毛、上皮細胞ノ發育極メテ著明ナルガ故ニ一見人毛ト鑑別スルコトヲ得、木綿纖維、扁平ニシテ紐狀ヲナシ、所々ニ捻轉シ内ニ髓様ノ構造ヲ見ルコトアリ。絹纖維、断面圓クシテ強ク光ヲ屈折ス。麻纖維、木綿ト相似タレドモ、内ニ何等ノ構造ヲ見ズ。ソノ他植物ノ纖維及筋纖維等ト區別スベシ。

又、年齢ノ鑑別

毛髪ノ太サ或ハ色等ニ依リテ往々其人ノ年齢ヲ知ルヲ得ルコトアリ、例ヘバ頭毛ニ就テ云ヘバ左ノ

毛髪ト年齢

第一編 物品検査 二 毛髪検査

下、質性反應

九、可檢汚斑ノ一小部分ヲ切り取り或ハソノ一小塊ヲ別取シ載物硝子板上ニ置キ高山氏試薬ニ加ヘ直ニ覆蓋硝子板ヲ被セムンゼ...

其二、血球検査

十、前検査法ニ於テ直ニ血球ノ有無ヲ檢シ或ハ三%ノ苛性加里液ヲ加ヘテ一晝夜放置後人血ニ類似セル赤血球ノ有無ヲ鏡檢セリ...

立、生物學的検査

十二、前記ノ質性反應ニ依リ血痕ト確定セシ斑ヲ切り取り或ハ薄層ヲ別取シ一晝夜生理的食鹽水ニ浸漬シ同時ニソノ溶解速度ニ注意シ...

十三、前記第一項ヨリ第十二項ニ至ル検査ノ結果ヲ表示スレバ左表ノ如シ(表及寫眞ハ之ヲ畧ス)

五八

表中(十)ハ検査成績ノ陽性ナルヲ示シ(一)ハ陰性、斜線ハ検査ヲ行ハザリシコトヲ示ス

字、毛髪検査

十四、第一號并ニ附着セル血痕ニ交リソノ及部ニ近ク數條ノ毛髮粘着ス注意シテ之ヲ別離採集シ三木ヲ得價ニ「イ」「ロ」「ハ」ト命名シ次ノ検査ヲ行フ

乙、鑑定

上記検査ノ結果ニ依リ左ノ如ク鑑定ス 一、第一號并及柄ニ於ケル血痕検査ノ全部、證第十一號木綿襪...

且「ロ」毛ノ長サ七種以上アルヲ以テ見レバコハ頭髪ヲ長クシ且屬々頭毛ニ機械的作用ヲ加フルモノ(例令婦人等ノ如キモノ)、頭髪ナラント思惟セラル

三 精液検査

精液ノ附着セル疑アル物品ハ、成るベク表面ノ摩擦ヲ避ケ、斑痕ノアル部分ハ厚紙等ニテ掩ヒ、且ソノ部ノ折曲サル、コトヲ防グベシ、斑痕ガ小ナル物品上ニ在ル時ハ塚中ニ入レテ貯フベシ、尙流動性ノ精液ハ塚中ニ集メ一〇%ふをるまりん數滴ヲ加へ、或ハざるをうるヲ以テ積層シテ腐敗ヲ防グベシ。

精液附着ノ疑アル衣服及物品ハ先ヅ肉眼ニテ、次デる一ペヲ以テ、叮嚀ニソノ所在ヲ檢シ、次デ顯微鏡的検査ニ移行スベシ。精液斑ハ一般ニ地圖狀ノ形態ヲ呈シ、乾燥後ハ無臭ナレドモ、之ヲ湿スカ或ハ新鮮ナル場合ニハ一種栗花臭様ノ臭ヲ呈シ、乾燥シタル面ニ觸ルレバ稍硬クナリ居レリ。カクテ證品上ニ於ケル斑痕ノ所在明カトナレバ、ソノ位置大サ形状、色等ヲ叮嚀ニ記載シ置クベシ。

一般ニ斑痕ノ中央ニ最も多ク精蟲存在スルモノナレバ、其部ヨリ小乾塊ヲ剝離シ、或ハ一、二條ノ纖維ヲ切取シ、精蟲ノ尾部ハ折レ易キモノナレバ、注意シテ取扱ヒツ、次ノ検査ヲ施行ス。

上、豫備検査

本検査ニ屬スル諸法ハ、精液中ニ在ル「レチ、ン」等ニ依リテ陽性ヲ來スモノナレバ、精液ニ限ラズソノ他ノ體液ニテモ往々陽性ヲ來スコトアリ。故ニ本検査陽性ナレバ、精液ノ疑アリト云フニ過ギズ。

イ、ふろらん氏検査法

本法ヲ行フニハ新製セル所謂ふろらん氏試薬ヲ必要トス、ソノ處方ハ左ノ如シ。

- 純 沃 度 二・五四瓦
- 沃 度 加里 一・六五瓦
- 蒸 餾 水 三〇・〇〇託

先ヅ可檢小塊ヲ載物硝子板上ニ取り、水ニテ浸軟シ覆蓋硝子板ヲ以テ掩ヒ、之ニふろらん氏試薬ヲ添加シ、顯微鏡下ニ窺フニ、モシ可檢斑ガ精液ナル時ハ、初メハ褐色ノ顆粒ヲ生ジ、次デ針狀トナリ、遂ニ本検査ニ特有ナル褐色板狀乃至らんせつご形或ハソレ等ノ癒合シタル結晶トナル、此結晶ハたいひまんノ結晶ヨリモ大ニシテ、ソノ約五六倍ニ達シ、光線ヲ重屈折ス、水ニ溶解シ易ク、甚ダ不安定ノ結晶ニシテ、成生後一、二時間ニシテ自然ニ消失ス、此時精蟲ハ結晶ト混在シ居ルモノナリ、同様ノ方法ニヨリ種々ノ植物性物質或ハ吾人ノ體液、例之、唾液及鼻汁等ヨリモ同一ノ結晶ヲ作ルコトヲ得、コハれち、ん、のいりん等ノ存在ニ依リテ成生スルモノナレバ、精蟲ト何等關係ナキモノナリ。

ふろらん試薬

ふろらん結晶

第三十圖



精液ニ便、尿、血液及化學的藥品ノ混在スル時ハ、本反應行フモ結晶ヲ成生セザルコトアリ、然レドモ精液ノ單ニ古クナリ、或ハ強ク乾燥シ若クハ高熱ニ曝露シ、或ハ腐敗セルノミナル時等ハ本結晶ヲ作ルコトヲ得、本法ヲ行フニハ亦材料モ極メテ少量ニテ充分ナリト雖其、結晶ノ形ニ依リテソノガ人類ヨリ由來セルモノナルカ將タ獸類ノモノナルカヲ區別スルコト能ハズ。

ロ、ばるべりお氏検査法

精液或ハソノ浸出液ノ一滴トびくりん酸ノあるこほる、ぐりせりん飽和溶液ノ一滴トヲ載物硝子板上ニテ相接觸セシメ、覆蓋硝子板ヲ被セ、鏡檢スル時ハ兩液ノ接觸面ニ小ナル黄色乃至白色ノ數多ノ十字形或ハ星形結晶ヲ生ズ、コハびくりん酸燐酸スベるみんノ結晶ナリ、此結晶ノ形ハ種々ニシテ、時トシテ板狀針狀或ハ麻粒狀トナルコトアリ。此反應ニ又ハわすばつはノ試薬ヲ代用スルコトヲ得。

ハ、で、どみにちす氏検査法

精液或ハ精液斑浸出液ト三臭化金ノ飽和水溶液トヲ載物硝子板上ニ混和シ、覆蓋硝子板ニテ掩ヒぶんせん燈火上ニテ熱シ、小氣泡一二生ズルニ至リテ止ミ、急ニ冷却セシムル時ハ、赤黄色ノ針狀板狀乃至束狀ノ結晶ヲ生ズ、此結晶ハ重屈折ヲナシ持久的ノモノナリ。

此他べつちいー氏沃度スベるみん反應等アレドモ、特記スベキ必要ヲ認メズ。

中、實性反應

可檢斑痕ガ精液斑ナリト決定スルニハ、是非共其中ニ精蟲ノ存在ヲ檢出セザルベカラズ、而シテ精蟲ノ

ばるべりお氏検査法

で、どみにちす氏検査法

尾部ハ甚ダ離脱シ易キモノナレバ、此検査ニ當リテモ餘リ種々ノ所置ヲ加フルコト能ハズ、若シ精蟲ガソノ尾部ヲ失ハバ、單ニ頭部ノミトナリテ、往々植物ノ胞子或ハ原蟲トノ區別困難トナルコトアリ、注意セザルベカラズ。

精蟲ノ檢出ハ甚ダ勞多キ事業ニシテ、ソノ所置ハ重ニ次ノ原理ニ準據スルモノナリ。

一、種々ノ藥液(色素ニアラザル)ヲ加ヘテ精蟲ヲ光學的ニ發見シ易カラシム、

二、乾着セル精蟲ヲ附着某質ヨリ浸漬離脱シ、遠心器ニヨリテ集積セシム、

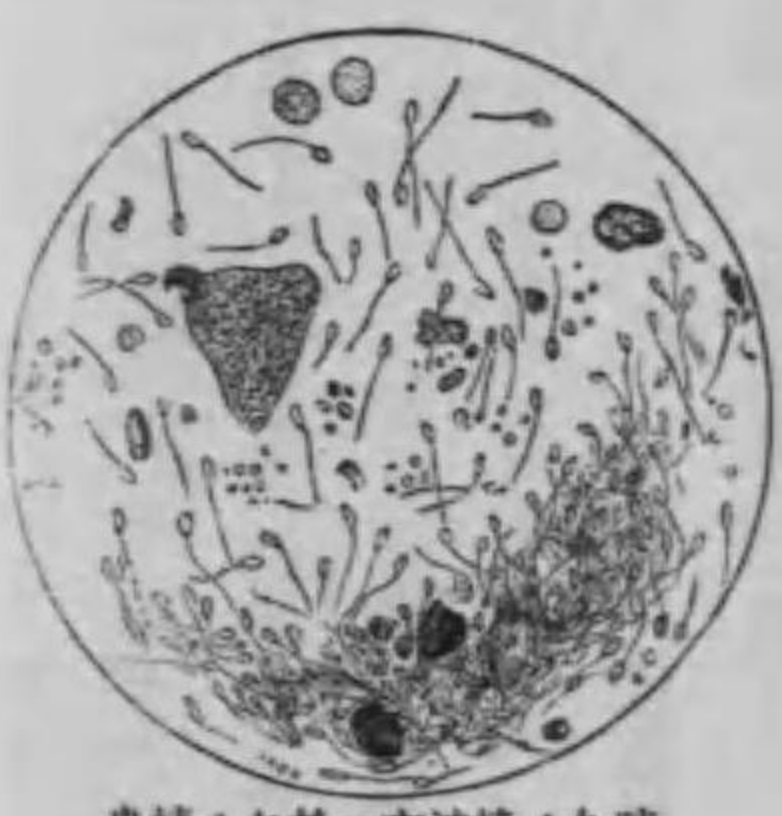
三、色素ニ依リテ精蟲ヲ染色シテ、ソノ發見ヲ容易ナラシム、

四、精蟲ノ附着セル纖維ヲ藥液ニヨリ透明ナラシムルカ、或ハソレ等ノ夾雜物ヲ崩解セシメテ検査ヲ容易ナラシム。

五、前記種々ノ條件ヲ併合應用シテ検査ヲ便ニス。

イ、新鮮ナル精液検査

載物硝子板上ニテ精液一滴ニ生理的食鹽水、一滴ヲ注加シ、覆蓋硝子板ヲ被セ、鏡檢スレバ頭部ハ三—五 μ 長、二—三 μ 幅、一—二 μ 厚、楕圓形ニシテ光ヲ強ク屈折シ、四〇—六〇 μ 長ノ尾部ヲ附着スル精蟲ヲ見ルコトヲ得、精蟲ノ形ヲ注意シテ檢スレバ、ソガ人獸何レヨリ由來セルモノナルカヲ直ニ區別スルコトヲ得、法醫學的ニハ完全ナル精蟲ヲ見出スニ非ラズンバ、決シテ精液ナル斷定下スコ



圖四十第 精蟲ヲ於ニ液精ノ久陳

新鮮ナル精液検査

精蟲ノ大サ

ト能ハズ、若シ上皮細胞等ノ夾雜物アリテ、検査困難ナル時ハ、五%ノ醋酸或ハあんもにあ水ヲ注加スル時ハコレ等ハ透明トナリ、精蟲ハ明瞭ニ見ルヲ得ルニ至ル。

比較的尙新鮮ナル精液ヲ檢スル場合ニハ、ソノ中央ヨリ一二ノ纖維ヲ切取シ、或ハ小鱗片ヲ剝離シ載物硝子板上ニ置キ生理的食鹽水ヲ加ヘテ徐々ニ軟化セシメ、輕ク覆蓋硝子板ヲ被セ(強壓等ヲ忌ム)鏡檢スベシ。此際夾雜物例ヘバ血球膿球大小便ノ成分等ニ就テモ、充分ノ注意ヲ怠ルベカラズ。

ロ、塗抹標本検査法

新鮮ナル精液或ハ精液斑ヨリノ浸出液一滴ヲ、載物硝子板上ニ取り之ニ墨汁液ノ一滴ヲ加ヘ、薄層トナシ、空氣中ニテ徐々乾燥セシメ、かなだばるさむニテ封固シ、鏡檢スレバ精蟲ノミ視野ニ明瞭トナル、暗視野裝置ニテ窺フ時ニ特ニ然リ、本法ニ墨汁ヲ用ヒテ成功セシハ九州大學法醫學教室ノ兒島氏ナリ。此塗抹標本ヲ染色スル時ハ、更ニ美麗ナル精蟲ヲ見ルコトヲ得。

ハ、精液斑ノ浸漬法

古キ精液斑ヲ浸漬シテ精蟲ヲ原形ニ復セシメ、或ハ斑痕中ヨリ離脱セシムルニハ、稍々長時要ス、即チ先ヅ班中ノ纖維一二條ヲ切取シ、或ハ小鱗片ヲ剝離シ、載物硝子板上ニ取り、生理的食鹽水及ぼるまりんノ一滴ヲ加ヘ、覆蓋硝子板ヲ被セ、時々硝子棒ヲ以テ輕壓ヲ加ヘツ、二十四時間放置シ、浸出シ得タル液ヲ直ニ鏡檢スルカ、或ハ染色ヲ施シ、又ハ塗抹標本トナシテ檢スベシ。精蟲ノ數非常ニ少キ時ハソノ浸出液ヲ遠心沈澱セシメテ、ソノ沈滓物ヲ檢スルカ、或ハ浸漬セル纖維等ニ直ニ染色液ヲ加ヘテ檢スベシ。

ニ、精蟲染色検査法

精液斑浸漬法

墨汁検査

精蟲ヲ染色スル爲メノ注加液ニ種々ノ處方考案セラレタリ。各核染色々素、例ヘバめちれんぶらう、へまどをきしりん、るこーる液等ハ精蟲ノ頭部ヲ染色シ、頭部尾部ヲ同時ニ染色スルモノトシテげんちあふびをれつど、わをじん、わりごろじん、めちーるぐりゆん等アリ今ソノ染色法ノ一ニヲ列舉セン。

甲、こりん、すどいきす氏法、(Corin, Watkins)

試薬、ゑりごろじん

〇・五瓦

二五%あんもにあ水 一〇〇・〇珪

染色法、可検斑ヨリ一二條ノ纖維ヲ切取ル、

試薬ニテ三乃至三〇秒染色ス、

水ヲ加ヘテ纖維ヲ分解セシム、

過剰注加液ヲ濾紙ニテ吸収ス、

更ニ水ノ一滴ヲ加ヘ覆蓋硝子ニテ掩ヒ鏡檢ス、

結果、頭部ハ赤色ニ強ク染色シ、尾部モ淡紅色ニ染色スルモソノ度非常ニ薄シ。

乙、べつちい氏法 (Baechli)

試薬、(1) 一%酸ふくしん溶液一分ト、一%ノ鹽酸四十分ヲ混和ス、

(2) 一%めちーるぶらう溶液一分ト一%ノ鹽酸四十分ヲ混和ス、

(3) 一%酸ふくしん溶液、一%めちーるぶらう各一分ニ一%ノ鹽酸四十分ヲ加フ。

染色法、可検斑ヨリ一平方厘大ノモノヲ切取リ、上記三液ニテ各一分内染色シ、次デ一%ノ鹽酸ニテ洗滌シ、染色面ヲ上方ニ向ケ、空氣中ニテ乾燥シ、きしろーるニテ透明トナシ、かなだばるさむニ

テ封固ス、モシ餘リ古キ斑痕ナレバ、あんもにあ水ニテ所置シテ後染色スベシ。

結果、頭部ハ赤ク、尾部ハ青ク染ミ最モ立派ナル標本ヲ得、本法ハ精蟲染色ノ中最モ優越セルモノト思ハル。

丙、でるびゆう氏法 (Derivieux)

試薬、(1) わりごろじん〇・五瓦ニあんもにあ水一〇〇珪ヲ混和ス。

(2) めちれんぶらう〇・〇五瓦ニ水一〇〇珪ヲ加フ。

染色法、成ルベク小ナル細キ纖維ヲ第一液ニテ一分間染色ス、第二液ヲ加ヘ纖維ヲ離開セシム、次デ濾紙ニテ注加液ヲ去リ、一、二滴ノ水ニテ洗ヒ、再ビ濾紙ニテ乾カシ空氣中ニ十分乾燥後、かなだばるさむニテ封固ス。

結果、頭部ハ紫色ニ染ミ、尾部ハ青色トナル。本法ニテハ纖維モ同時ニ染ム、簡單ナルヲ以テ本法ノ特徴トス。

此他夾雜スル纖維ヲ染色セザル目的ニテ、しよすてん氏法、花岡氏法等アレドモ、茲ニ之ヲ略ス。

上記ノ諸法ニ依リテ精蟲ヲ見出スコト能ハザル時ハ、纖維ヲ濃硫酸ニテ崩解セシメ、殘存セル精蟲ヲ検査スベシ、元來精蟲ハ濃硫酸ニ對シ抵抗強キモノナレバ、纖維ソノ他ノ夾雜物ノ如ク、濃硫酸ニ依リテ崩解セザル特徴ヲ利用セルモノナリ。濃硫酸ヲ以テスレバ浸漬等ニヨリテ容易ニ離脱シ來ラザリシ精蟲、或ハ夾雜物ノ際ニ隠レタルモノヲモ、容易ニ檢出スルコトヲ得、且之ニ染色ヲ施セバ、益明瞭トナルモノナリ。

試薬、濃硫酸、蒸餾水、あるこーる性をじん、
溶液、れふれる氏めちれんぶらう溶液、

染色法、試験管ニ四託ノ濃硫酸ヲ入レ、ソノ上ニ蒸留水ヲ積層シ、混和セザル様ニ注意ス、茲ニ於テ約二
 種半方大ノ可検斑ヲ投ジ、振盪シ纖維等ノ崩解セルヲ見レバ、水ヲ加ヘテ十五託トナシ、浮上シ
 來レル殘餘ノ纖維ヲ取り出シ、載物硝子板上ニ乾カシ、 H_2O をじん及めちれんぶらうニテ染色シ、
 鏡檢スレバ精虫ヲ檢出スルコトヲ得、

結果、本法ハ植物性纖維ニノミ應用ナル、又一面ニハ精蟲ハ試験管底ニ沈澱シ居ルモノモアレバ、注
 意スル必要アリ。

下、人類ノ精蟲ナルヤ否ヤノ検査

人類ノ精蟲ト他動物ノソレトハ形態及大サ等ニ於テ差異アルモノナレバ、精蟲ヲ檢出スルコトヲ得バソ
 ノ區別容易ナリ。精液ニテ精蟲ヲ缺ケル場合ハ、鑑別容易ナラズ。生物學的鑑別法就中、沈降素檢法ハふ
 あるぬむ、てるぶゆう、ばあいふわる等ニヨリテ試ミラレタルモ、未ダ成功ノ域ニ達セズ、次ニみねー、る
 くれるく、ぶあいへえる等ニ依リテ試ラレタル過敏性檢法モ、尙信用スルコト能ハズ。
 精液斑ガ次第二古クナレバ精蟲ノ數ハ次第二減ジ數年ヲ經レバ殆ンド全ク消失スルコトアリ、古キ斑痕ヲ
 檢スル際此點ニ注意スベシ。

四、胎便検査

イ、顯微鏡的検査

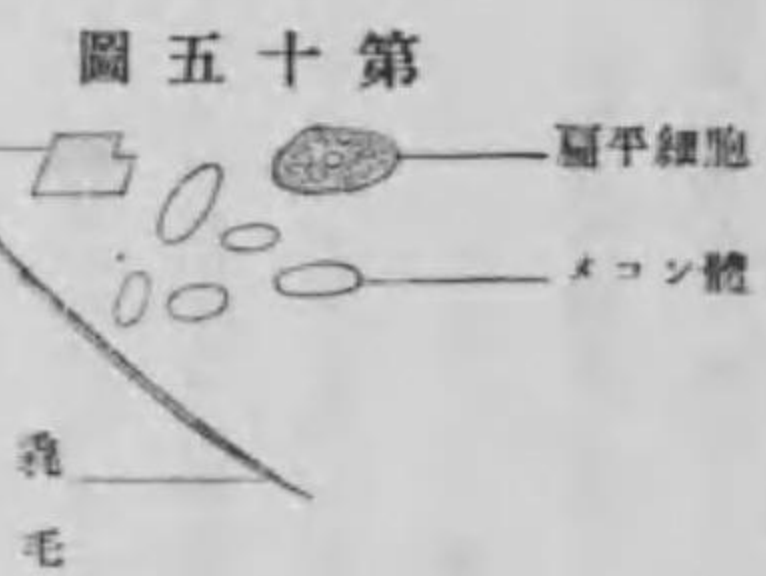
新鮮ナル胎便ハ粘稠無臭ニシテ通常帶褐綠色ヲ呈ズ、一部ヲソノマ、載物硝子板上ニ取り薄層トシテ、

人類ノ精蟲ナルヤ
否ヤ

胎便検査

めこん小體

覆蓋硝子板ニテ掩ヒ、鏡檢スレバ毳毛、板狀ノひよれすてりん結晶、扁平上皮細胞、有核ノ纖毛上皮細胞、胆
 汁色素、脂肪顆粒及ビめこん小體ヲ發見ス。此中胎便ニ特有ナルハめこん小體ニシテ之ヲ見出セバ、少ク
 モ胎便ノ混在セルモノナルコトヲ斷定スルコトヲ得。



めこん小體ハ帶綠黃色乃至帶綠褐色ノ、光ヲ強ク屈折スル無構造ノ圓形若ク
 ハ楕圓形ノ小體ニシテ、其大サハ二乃至四十 μ ヲ算シ、コハ無色ナル基質ガ胆汁
 色素ニヨリテ着色セルモノナレバ、ぐめりんノ反應ヲ呈ス、即チめこん小體ニ
 濃硝酸ヲ加フレバ帶黃綠色ヨリ綠色ニ移行ス、更ニ硝酸ヲ加フレバ紫色或ハ赤
 色ヲ現出スルコトアリ。めこん小體ノ白色無構造ノ基質ハ弱酸、弱鹽基、うる
 るひよう氏液、ほふまんばちにー氏液ニヨリテ犯サレズ、水醋酸ニ溶解ス。色
 素ニ對シテハへまごきしりん及ふくしんニ染色セザレドモ、 H_2O をじん、めちれん
 ぶらう、かるぼーるふくしん等ニテ染色ス。めこん小體ハ、如何ナル所ヨリ由來
 セルカハ今日尙未ダ明カナラズ。ソノ他ノ胎便有形成分ハ、羊水ヲ嚥下シタルヨリ來リシモノナレバ、胎
 便検査ニ對シ獨特ノ意味ナシ。

種々ノ物品ニ乾着セル胎便ヲ證明スルニハ、先ヅ可檢斑ヨリ小鱗片ヲ剝取シ載物硝子板上ニ置キ生理的
 食鹽水ヲ加ヘ覆蓋硝子板ヲ被セ數時間軟化セシメ、めこん小體ノ原形ニ復スル頃ヲ窺ヒ、鏡檢スレバ前記
 ノめこん小體ヲ檢出シ、尙扁平上皮細胞、毳毛これすてりんノ結晶等ヲ發見シ、胎便ナルコトヲ決定シ得ベ
 シ。浸漬液トシテハ生理的食鹽水ノ代リニ、古キ斑痕ニ對シテハういるひよう氏液ばちにー氏液ヲ用ヒ、又

夾雜セル上皮細胞ヲ透明ニスル爲メ、二―五%ノ醋酸溶液ヲ加フルモ可ナリ。尙めこん小體ナルコトヲ確定スル爲メニ、覆蓋硝子板ノ下ニ濃硝酸ヲ注加シテめこん小體變色ノ状態ヲ研究スルモ可ナリ。めこん小體ニ種々ノ染色ヲ施ス人アルモ、別ニ必要ナルコトニ非ラズ。

ロ、生物學的検査

近來血清學ノ發達スルニ伴ヒ、胎便検査上ニモ之ヲ應用シテ、ソガ人類ノモノナルヤ、將タ獸類ヨリ由來セシカヲ決定セントセル學者アリ。然レドモ未ダ確固タル結果ヲ得ル能ハズ。

即チ胎便或ハソノ生理的食鹽水にむるじをんヲ以テ家兎ヲ免疫シ、ソガ血清ヲ取リテ胎便斑浸出液ニ積層シ、沈澱ヲ生ズルヤ否ヤヲ檢シ、或ハ胎便若クハソノむるじをんヲ以テ、第一次注射ヲ海狗ノ腹腔ニナシ、第二次注射ヲ心臟ニ行ヒ、過敏性しよつくノ來ルヤ否ヤヲ檢シタレドモ、何レモ好結果ヲ得ル能ハザリキ。胎便斑ガ餘程古クナリテモ尙めこん小體ヲ檢出シ得テ、胎便ナルコトヲ斷定セシ報告アリ、例之しゆみつごハ七乃至九年ヲ結果セル胎便斑ヨリめこん小體ヲ檢出シ得タリト云フ。

五、胎垢斑検査

胎垢ガ身體或ハ種々ノ物體ニ附着スル時ハ、乾燥スルニ從テ痂皮狀トナリ、初メハ灰白色ヲ呈スレドモ次第ニ褐色ニ移行ス。

可檢斑ヨリ小鱗片ヲ剥取シ、載物硝子板上ニ取り、水或ハ稀薄ナルぐりせりんヲ加へ、覆蓋硝子板ニテ掩ヒ鏡檢スル時ハ、多數ノ無核扁平上皮細胞、毳毛、脂肪ノ顆粒、及脂肪酸結晶、及ひよれすてりんノ結晶等ヲ見ル時ハ、ソハ恐ラクハ胎垢斑ナリ。尙扁平上皮細胞等ニふくしん、げんちやなびをれつと染色、わい

胎便ノ生物學的検査

胎垢検査

ひよれすてりん結晶

けるごノ纖維素染色、ぐらむ染色法等ヲ試ムルモ可ナレドモ、此ノ如キ必要ヲ見ザルコト多シ。

六、羊水斑及惡露斑検査

白色基質ノ上ニ於ケル羊水斑ハ、識別スルコト容易ナレドモ、染色サレタル基質上ニ於ケルモノハ鑑別稍困難ナリ。

羊水斑

羊水斑ハ通常大ニシテ、帯灰淡黄色ヲ呈シ、周圍ノ境界明ニシテ、柔軟ナル基質ニ少シク硬度ヲ附與ス。羊水斑ヲ檢スルニハ、成ルベク斑ノ中央ヨリ一二條纖維ヲ切り取り、載物硝子板上ニ置き、生理的食鹽水、或ハ稀薄ナルぐりせりん溶液ヲ加ヘテ纖維ヲ離解シ、暫時放置後鏡檢シテ扁平上皮細胞、毳毛、これすてりん結晶等ヲ見ルコトヲ得レバ、略羊水斑ナルコトヲ決定スルコトヲ得、モシ鏡檢シテ有形成分少キ時ハ可檢斑ノ稍大ナル一片ヲ、生理的食鹽水ニ浸漬軟化後、浸漬液ヲ集メ遠心沈澱セシメ、ソノ沈澱ニ付テ羊水ノ有形成分ヲ検査スベシ。

惡露斑

惡露斑ハ産後ノ經過日時ニ相當シテ、血液含有量ニ差アリ。從テソノ色モ暗赤色乃至淡汚赤色ヲ呈ス。此ノ検査法ハ全ク羊水ニ於ケル場合ト同ジク、水或ハ生理的食鹽水ニテ浸漬軟化セシメテ鏡檢スベシ。而シテ惡露斑検査ノ場合見出ス有形成分ハ、産道ニ於ケル種々ノ上皮細胞赤血球乃至白血球、膿球、絨毛細胞、脱落膜細胞等ナリ。此中特有ナル意味ヲ有スルハ、絨毛細胞及脱落膜細胞ニシテ、コレヲ發見スレバ惡露ナリト斷定スルコトヲ得。

有形成分少キ時ハ、生理的食鹽水ニ浸漬壓出セル液ヲ遠心沈澱シテ、ソノ沈澱ヲ檢スルコト羊水斑ノ場合ト同ジ。

羊水及惡露検査ノ場合、血清學的ニ沈降素検査ニヨリ、該蛋白ノ種屬ヲ鑑別スルコトヲ得バ、ソガ人類ヨリ由來セルコト益々確實トナルモノナリ。

七、乳汁斑検査

乳汁斑ガ白色基質上ニ在ル時ハ灰白色ニシテ、ころすごるむ斑ハ多少黄色ヲ帯ビ、且柔軟ナル基質ニ一定ノ硬度ヲ附與ス。

乳汁斑新鮮ナル時ハ、之ニ三%過酸化水素水ヲ滴下スレバ小氣泡ヲ生ジ、すだんII等ニテ染色スレバ赤色ヲ呈ス。法醫學的乳汁斑検査ノ場合、化學的検査トシテハ特記スベキモノナク、顯微鏡的検査ヲ以テ重要ナルモノトス。

可検査ノ小片ヲ、水或ハ生理的食鹽水ノ少許ヲ以テ浸漬後液分ヲ壓出シ、ソノ一滴ヲ載物硝子板上ニ取リ覆蓋硝子板ヲ被セ鏡檢スベシ。然ル時可検査ガ乳汁ヨリ由來セルモノナレバ、光線ヲ強ク屈折スル、多數ノ乳汁球ヲ見、モシソガころすごるむナル時ハ、乳汁球中ニ大ナル直徑三〇みくろんニ達スル、有核桑實形ノ、所謂ころすごるむ小體ヲ檢出スベシ。強廓大ヲ以テ窺フ時ハ、二―五みくろん大ノ乳汁球多數、及乳腺ノ上皮細胞ヲモ見ル。ころすごるむ小體ヲ檢出シタル時ハ、産後尙數日ヲ經過スルノミナルコトヲ想定スルヲ得、何トナレバころすごるむ小體ハ、通常産後五、六日ニシテ消失スルモノナレバナリ、人乳ナルヤ將タ他ノ動物ノ乳汁ナルカヲ、沈降素檢法及過敏性反應等ニ依リテ區別セントスル方法アレモ法醫學的乳汁斑検査ニテハ未ダ成功ノ域ニ達セズ。

モシ多量ノ新鮮ナル乳汁ヲ手ニスルコトヲ得バ、ソガ人乳ナルカ將タ牛乳ナルカハ、所謂うみこふ

乳汁斑

ころすごるむ小體

うみこふ氏反應

膿汁斑及喀痰斑検査

尿斑検査

(Daniloff)氏反應ニ依リテ、鑑別スルコトヲ得ベシ。

うみこふ氏反應、乳汁五坵ヲ取り、之ニ一〇%ノあんもにあ水二十五坵ヲ加へ、六十度二十五分間熱スレバ、人乳ナレバ紫色ヲ呈シ、牛乳ナレバ帶黄褐色ヲ呈ス。

八、膿汁斑及喀痰斑検査

可検査ヨリ小鱗片ヲ剝取シ、或ハ斑ノ一部ヲ取り、生理的食鹽水ニテ浸軟壓出セル浸出液ヲ、載物硝子板上ニ取り、醋酸ヲ加ヘテ檢シ、膿球多クシテ粘液纖維少キ時ハ膿汁斑ニシテ、粘液小體淋巴球等多キ時ハ、喀痰ナリト思惟スベシ、但シ喀痰ニテモ膿性ノモノアレバ、只此所見ノミヲ以テ一概ニ決定スルコト能ハズ、上記ノ検査ニ依リテソノ何レナルカヲ略決定スレバ、次ニ種々ノ細菌ニ對スル染色法ヲ施シ、ソノ結果ニ依リテ、或ハ淋毒膿斑ナリ、或ハ結核ノ喀痰ナリ等ノ事實ヲ推定スベシ。

九、尿斑ノ検査

尿ハ元來成形物少キ排泄液ナルヲ以テ、ソノ附着ニ依リテ成レル汚斑ヲ檢シテ、ソガ尿斑ナルコトヲ決定スルハ、困難乃至不可能ノ事ナリ。

モシ尿斑ノ疑アル場合ハ該斑ノ極メテ濃キ生理的食鹽水浸出液ヲ作り或ハ必要ニ應ジテ、ソノ浸出液ヲ遠心器ヲカケ有形物ヲ集積シ、載物硝子板上ニ取り鏡檢シ、其中ニ尿道ノ上皮細胞、腎臟上皮細胞尿圓柱ノ如キ尿中ニ存在スル有形成分ヲ檢出シ、且一面ニハソノ浸漬液ヨリ化學的ニ尿酸或ハ尿素ヲ檢出シ得レバ、ソガ尿斑ナルコトヲ略決定スベシ。尙尿ニ對スル特有ナル試薬ヲ考案セルモノアリ、ソハウをるふらむ酸を―だ二五・〇瓦鹽酸五・〇坵水二五・〇坵ノ混合液ニシテ、尿ニ炭酸を―だヲ加へ而シテ後、本試薬ヲ加

フレバ、青色ヲ呈スト云フト雖、此反應ハ尿ノミニ限ラズ呈色スルモノナレバ信ズルニ足ラズ。

十、糞便及糞便検査

新鮮ナル糞便ナレバ、ソノマ、時計硝子ニ取り、少許ノ生理的食鹽水ヲ加ヘテヨク混和シ、之ヲ載物硝子板上ニ取り、鏡檢スルコト通常ノ臨床的検査ニ於ケルガ如シ。

糞便ガ物體上ニ乾着スル時ハ、黄色或ハ褐色ノ薄層トナリ居ルヲ以テ、之ヲ検査スル際ニハ、ソノ小鱗片ヲ剝取シ生理的食鹽水ヲ加ヘテ浸漬軟化セシメ、式ノ如ク顯微鏡標本ヲ作りテ検査スベシ。

可檢斑ノ中ヨリ半バ消化セル横紋筋纖維、澱粉顆粒、結締織、弾力性纖維、穀物ノ穀皮種々ノ植物纖維、扁平細胞、脂肪酸ノ結晶、磷酸鹽結晶、黴菌、蟲卵、蟲體ノ一部等ヲ證明スレバソガ糞便ナルコトヲ知ル。尙糞便ナルコトヲ決定スルニ都合ヨキハ、ソノ特有ナル臭氣ナリ。モシ乾着セル糞便ナレバ、之ヲ生理的食鹽水ニ浸漬シツ、硝子鐘内ニ氣密ニ入レ置キ、一晝夜ノ後之ヲ試臭スレバ、多クハ明カナル糞便臭ヲ感ズルコトヲ得ルモノナリ。

糞便或ハソノ班中ノ有形成分ヲ檢シテ、ソノ糞便ガ如何ナル季節ニ排出セシモノナルカ、或ハ乳兒ノ糞便ナルカヲ見出スコトヲ得ルコトアリ。例ヘバ糞便中ニ毒質ヲ多ク見出セバ、ソハ夏季ニ排泄サレタル糞便ナルコトヲ知り、又ソノ中ニ乳汁球ノミヲ多ク見出セバ、乳兒ノ排出セルモノナルヲ推定スルコトヲ得糞便班ヲ化學的ニ検査シテ、中毒ナルコトヲ知ルヲ得ルコトアリ。

人糞ナルカ、動物ノ糞便ナルカヲ區別スルニハ全クソノ中ニ在ル有形成分ニ依ルモノニシテ、生物學的検査ニヨリテ、之ヲ區別スル方法ハ未ダ成功セズ。

十一、腦質斑検査

腦質斑検査

腦質ノ一片ガ兎器、或ハ物體ニ乾着セル時ハ、叮嚀ニ之ヲ剝取シ、生理的食鹽水ニテ浸軟シ、少許ヲ載物硝子板上ニ取り、直ニ或ハ染色ヲ施シテ腦ニ特有ナルぐりあ細胞、みわりん球、節細胞ノ存否ヲ檢シ、ソノ然ルヤ否ヲ決定スベシ。

ソノ他ノ臟器片ノ乾着セル場合モ、之ト同様ノ所置ニ依リ、該臟器ニ特有ナル細胞、或ハ組織ノ有無ヲ檢シ、然ル後ソガ斷定ヲ與フベシ。

十二、骨質検査

イ、人骨ナルヤ獸骨ナルヤ

骨質検査
人骨カ獸骨カ

骨質検査ニ於テ吾人ノ先ヅ以テ決定セザルベカラザルハ、人骨ナルヤ將タ獸骨ナルヤニ在リ。コハ完全ナル骨片アル時ハ、ソノ形大サ等ニ依リテ多クハ容易ニ判斷スルコトヲ得レモ、若シ小ナル骨片ナル時ハ之ヲ鑑定スルコト困難ナリ。然レドモソノ骨片ノ一部ヲ取り、研磨標本ヲ作りテ之ヲ鏡檢スレバ、人骨ニテハ一べる氏小管ハ大ニシテソノ數ハ少ク、動物骨ニテハ一べる氏管ハ細クシテ數多キニ依リテ區別スルコトヲ得ルト云フ人アレドモ、コハ必ズシモ然ラズ、ソノ他動物骨ハ比較的重クシテこんばくど質多シ、組織學的所見ニ於テモ、胎兒ノ骨ハ猿類ノソレニ近シト云フ。而シテ小兒ノ骨ト犬貓狐狸等ノ骨トハ、單ニソノ一部分ヲ見タルノミニテハ鑑別困難ナルコトアリ、故ニ人骨ナルヤ將タ獸骨ナルヤヲ區別スルニハ

是非共生物學的ニ沈降素檢法ニ依ラザルベカラズ。

骨質ヲ以テ沈降素檢法ヲ行ハンニハ、先ヅソノ小骨片ヲ鉋鋸等ニテ極メテ小片、或ハ寧ロ粉狀トナシ生理的食鹽水浸出液ヲ作り、之ヲ、豫メラウーレンふうと氏法ニヨリ作り置ケル對人血清家兔特殊血清ニ積層スベシ、然ルトキ若シソノ骨ナレバ、直ニ兩液ノ接觸面ニ白色絮狀ノ沈澱ヲ生ズ、尙骨質ガ非常ニ脂肪ニ富メル場合ニハ、前以テあるこほる、わいてる或ハべんじんヲ以テ所置シ、脂肪ヲ脱去シ、而シテ後生理的食鹽水浸漬液ヲ作ルベシ。一般ニ骨質ガ古クナル程蛋白ノ含有量少クナルヲ以テ、材料ヲ多ク用ヒザルベカラズ、今骨質ノ古サト、用ユベキ材料ノ重サト、生物學的検査ノ結果ガ如何ナル關係ニアルカヲ表示スレバ左ノ如シ。

骨質ノ古サト
沈降反應

骨質ノ古サ	用ヒシ量	生物學的検査ノ結果
新鮮骨或ハ一月ヲ經過セル骨質ノ骨粉	〇・二五瓦	(十)
空氣中ニテ四十年ヲ經過セシ骨粉	二〇〇瓦	(十)
同上、九年ノ骨粉	八〇瓦	(十)
百年土中ニ在リシ骨片ヨリノ骨粉	一〇〇瓦	(十一)
水中ニ七ヶ月在リシ骨粉	二〇〇瓦	(十)
煮沸水ニ十分・五分・三分アリシ骨粉	〇・二五瓦	(十)
百度ノ熱氣中ニ在リシ骨粉	二五〇瓦	(一)
	一〇〇瓦	(十)

百五十度ノ熱氣中ニ三十分アリシ骨粉 三〇〇瓦 (一)
予ノ實驗セル一例ニ於テハ、七ヶ月胎兒ノ腸骨片ヲ骨粉トナシ、約一瓦ヲ得、食鹽水浸出液ヲ作り、免疫價一萬倍ノ特殊血清ヲ積層セシニ、約二十五分ノ後ニ陽性ヲ呈シ、數年間雨露ニ曝サレタル人骨骨粉約三瓦ハ同様ニシテ全ク陰性ナリキ。尙草刈氏ハ此問題ニ關シ有益ナル論文ヲ發表セリ。

一人ノ骨ナル
ヤ否ヤ

ロ、一人ノ骨ナルカ多人數ノ骨ナルカ

各骨片完全ナル形ヲナセル時ハ、ソノ形態ヲ比較シ大サヲ計リ、或ハ相重複セル骨片ナキヤ等ヲ注意シテ檢スレバ一人ニ屬スル骨ナルカ、或ハ多人數ノ骨ナルカ區別スルコトヲ得ト雖、モシソノ骨片トナリ居ル時ハンノ決定ハ困難ナルカ或ハ不可能ナリ。

骨格ノ種別

ハ、男子ノ骨ナルカ女子ノ骨ナルカ

已ニ異同ノ部ニ於テ述ベタルガ如ク、女子ノ骨ハ一般ニ纖細美麗ニシテ凹凸少ク、ソノ大サ、長サ、厚サ等モ男子ノ同年齡ノモノニ比シ少サシ、尙骨盤ガ存在スレバ、ソノ區別容易ニシテ、男子ノ骨盤ハ狭ク、断面ハ心臟形ニシテ、薦骨ハ狭ク、耻骨弓ハ銳角ヲナセリ。之ニ反シ、女子ノ骨盤ハ廣クシテ低ク、断面ハ楕圓形ニシテ、薦骨ハ廣ク耻骨弓ハ弧形ヲナス。

骨格ニテ年齡
ノ決定

ニ、骨格ニヨリテ年齡ノ決定

先ヅ全骨格、或ハ各骨ノ長サニヨリテソノ身長年齡ヲ知ルヲ得ルコトアリ、例ヘバ上膊骨ノ五倍或ハ大

頭骨總平均値(單位耗)

妊娠月數	後頭骨		後頭骨基部		顛頂前		前頭骨		額骨		上膊骨		髖骨		楔狀骨體	
	高	幅	長	幅	前後徑	左右徑	高	幅	高	幅	高	幅	高	幅	長	幅
II	—	—	—	—	—	—	4	3	—	—	1	2	—	—	—	—
III	5	8	—	—	16-24	8-22	6	7	3	5	5	3-5	—	—	—	—
IV	8	18	5	4	23	20	17	18	7	9	8	11	7	10	—	—
V	8	24	8	—	37	32	27	27	8	12	11	19	—	—	—	—
VI	43	41	9	8	54	54	42	41	15	22	18	21	17	23	7	15
VII	44	43	10	11	62	44	44	40	22	26	20	23	16	20	7	16
VIII	52	50	12	14	67	65	51	42	19	26	20	32	18	20	10	16
IX	54	61	—	—	71	67	54	54	19	24	21	42	—	—	—	—
X	63	68	13	14	84	86	57	49	28	31	27	37	20	27	—	—
初生兒	64	63	14	16	85	81	62	54	26	33	29	41	18	27	12	18

各骨片重量ノ平均値(單位磅)

妊娠月數	頭骨																上肢骨				下肢骨					
	後頭骨		前頭骨		額骨		顛頂骨		上膊骨		額骨		楔狀骨		肱骨		尺骨		腕骨		大腿骨		脛骨		腓骨	
	基部	側部	基部	側部	基部	側部	基部	側部	基部	側部	基部	側部	基部	側部	基部	側部	基部	側部	基部	側部	基部	側部	基部	側部	基部	側部
IV	8	2	—	—	7	5	2	4	5	2	—	—	3	5	8	3	—	9	6	—	—	—	—	—	—	
VI	92	16	21	102	137	20	28	38	17	28	13	15	33	65	30	23	127	84	19	—	—	—	—	—	—	
VII	93	20	26	89	124	27	27	37	14	31	17	17	31	62	27	22	93	75	16	—	—	—	—	—	—	
VIII	137	30	32	123	191	29	45	50	21	44	27	19	41	83	37	27	167	96	20	—	—	—	—	—	—	
X	376	61	65	263	468	—	95	112	39	95	—	60	143	200	91	64	450	272	57	—	—	—	—	—	—	
初生兒	409	51	63	296	503	—	84	105	42	89	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

胎兒ノ發骨ト
骨片ノ大サト

肢骨長總平均値(單位耗)

妊娠月數	鎖骨		肩胛骨		上膊骨		尺骨		橈骨		大腿骨		脛骨		腓骨	
	共	骨	高	幅	共	骨	共	骨	共	骨	共	骨	共	骨	共	骨
II	8	3	—	—	8	3	6	—	6	—	17	—	16	—	9	—
III	16	14	4	4	15-20	11	17	10	15	9	21	10	16	8	20	8
IV	24	14	13	11	34	23-30	35	22	—	19	34	19	31	17	32	21
V	—	20	19	16	40-45	38	—	35	—	32	—	37	—	34	—	33
VI	38	32	28	19	52	43	40	40	37	39	57	40	43	43	43	40
VII	—	38	29	23	—	52	—	46	—	42	—	55	—	50	—	49
VIII	41	42	35	25	59	52	—	49	—	48	65	61	65	57	—	54
IX	—	43	—	—	—	91	—	59	—	51	85-90	71	—	60-70	—	58
X	43	47	40	30	77	68	73	59	65	55	90	76	79	68	78	67
成熟初生兒	—	47	41	30	78	68	76	62	68	59	96	84	81	74	80	70

表中「共」トセルハ「軟骨ヲ共ニ加算セル長サ」ト「骨」トセルハ「骨質ノミノ長サ」ヲ意味ス

腿骨ノ三、七倍ハ通常全骨格ノ長サニ相當シ、生前ノ身長ハ全骨格ノ長サニ約五倍ヲ加ヘタルモノニ相當スルガ如シ。今各骨ノ長サヲ知リテ、身長ノ大體ヲ計算スル係數ヲ示セバ左表ノ如シ。

骨名	男(係數)	女(係數)
大腸骨	三・六六	三・七一
脛骨	四・五三	四・六一
腓骨	四・五八	四・六六
上膊骨	五・〇六	五・二二
尺骨	六・四一	六・六六
橈骨	六・八六	七・一六

次ニ各骨片ノ大サ及重サニヨリテ、胎兒ノ發育程度ヲ知ルコトヲ得ルモノニシテ、高田氏ニ依レバ、ソノ大サヨリモ重サノ方ガ之ノ目的ニ適當ナリト云フ。今數多ノ學者ノ計算セルモノヲ一括平均シテ之ヲ表示スレバ茲ニ掲載セル三表ニ於ケルガ如シ。

第一編 物品検査 十二 骨質検査

右表ニ於テ各骨片ノ重量ハ製骨乾燥セルモノヲ用ユレバヨシト雖、ソノ大サ或ハ長サヲ計ルニ於テハ一定ノ規定ナカルベカラズ、一般ニハ左記ノ如ク之ヲ法ニ從ヒテ測定スルヲ常トス。即チ扁平骨ヲ計ルニハ曲尺ヲ以テ各骨片ノ外面ニ沿ヒテ測定スルモノニシテ、敢テ直徑ニアラズ、之ヲ各骨ニ就テ詳説スレバ左ノ如シ。

後頭鱗ノ高サハ大後頭孔ノ後縁ト鱗尖部トノ間ノ距離、同幅ハ假性縫合ノ兩端ノ距離。
顛頂骨ノ幅ハ頂顛結節ヲ過リテ、正中線ニ平行ニ巻尺ヲ置キ、其ノ前頭縁及ビ後頭縁ニ交ル、二點間ノ距離、同高サハ同様ニ骨ノ前頭縁ニ平行シテ左右ノ骨端ニ交ル、二點間ノ距離。
前頭鱗ノ高サハ、上眼窩痕ヨリ前頭結節ヲ過リテ正中線ニ平行ニ走り、其ノ骨上縁ニ交ル點迄ノ距離、同幅ハ正中線ヨリ前頭結節ヲ過リ、水平ニ走りテ冠狀縫合ニ達スル距離。
顛頂鱗ノ高サハ顛骨突起ノ後根部ヨリ、鱗ノ上端迄ノ距離、同幅ハ、顛頂痕ヨリ水平ニ前縁ニ至ル迄ノ距離、扁平ニアラザル骨ヲ測ルニハ、巻尺ヲ用ヒズシテ、二點間ノ直線距離ヲ採ル。
上頰骨ノ高サハ、該骨、前頭突起ノ上端ヨリ、犬齒ト外門齒間ノ齒槽間隙ノ下縁迄ノ距離。同幅ハ顛骨突起ノ後下縁ヨリ、口蓋突起ニ直角ニ引ケル直線ノ長サノ二倍ヲ採ル。是レ胎兒ノ上頰骨ハ未ダ左右兩側ニ分レ居テ兩端ノ顛骨突起ノ後下縁間ノ直線距離ヲ測定シ得ザレバナリ。
管狀骨ハ軟骨ヲ除キ、骨質部ノミノ長軸ノ兩端間ノ距離。
鎖骨ハ、稍S字狀ヲ呈スレドモ亦、他ノ管狀骨ニ準ジテ兩端間ノ直線距離。
肩胛骨ノ高サハ、巻尺ヲ以テ其内面ニ於テ(外面ニハ肩胛棘等ノ突起アリテ計測ニ不便ナルガ故ニ)内

骨名	性	年	身長	鎖骨	肩胛骨		上膊骨		尺骨		橈骨		腕骨		手骨		指骨		全長
					長	幅	上骨端	下骨端	全長	上骨端	下骨端	全長	上骨端	下骨端	全長	上骨端	下骨端	全長	
男	男	初生兒	48.8	43.5	41	34	29	65	10	5	80	62	5	3	70	55	4	2	61
男	男	初生兒	52.0	46	46	33	26.5	66	11	6	83	61	6	4	71	54	3	3	60
女	女	一二年半	74	64	58	48	45	101	11	7.5	119.5	85	8.5	4.5	98	77	3	4	84
女	女	四六年半	96	80	66	54	52	116	10	8	134	98	8	7	110	87	3	5	94
男	男	六十年半	106	84	84	79	65	164	15	7	186	197	10	3	150	124	3	6	133
男	男	十五六年	137.8	110	116	105	78	247	15	8	270	206	8	5	219	181	3.5	6.5	191
男	男	廿四年	152	134	125	115	97	272	17	8	297	216	8	6	230	195	4	7	206
男	男	廿四年	163	140	141	—	—	—	—	—	300	—	—	—	236	—	—	—	221
男	男	廿四年	175	161	160	—	—	—	—	—	326	—	—	—	264	—	—	—	235

第一編 物品検査 十二 骨質検査

側角ト、下角トノ間距離、同幅ハ、關節窩ノ部ヨリ肩胛棘ノ上縁ニ、平行ニ巻尺ヲ置キテ、其脊椎縁ニ交ル點迄ノ距離。
顛骨ハ、其形(菱形)ニ依リテ直ニ知ラル、ガ如ク上下及ビ左右ノ四突起ノ相對スル直線距離ヲ採ル。
後頭骨基部ノ長サハ、大後頭孔ノ前縁ヨリ、骨前縁迄、同幅ハ左右縁ノ殆中央ニ於ケル小突出部(名稱未ダ無シ)間ノ直線距離。
楔狀骨體ノ長サハ、其ノ前後徑、同幅ハ左右ニ在ル舌狀ノ突起(無名)ノ兩側端ノ直線距離。
此規定ニ依リテ測定シ得タル數ヲ、前表ニ比較シテ凡ソ何ケ月ノ胎兒ナルカヲ決定スベシ。
又成長期ノモノニ對シテハ、各骨ノ長サ大サヲ測定シ、上表ニ對比シテソノ年齢ヲ決定スルノ補助トナスコトヲ得。

次ニ骨發育ノ状態ニテ年齢ヲ鑑定スルコトヲ得ルコトアリ。今ソノ概要ヲ次ニ述ベム。

生後第一年、分娩後第一月以内ニ於テ、前頭縫合融合シ大顛門狹小トナリ、乳様百會融合シ、乳様突起ノ初兆ヲ呈シ、蝴蝶骨大翼ハ體ト癒合シ、下顎骨兩半部亦相連結ス、載城ノ前弓ニハ一骨核ヲ發生シ、椎骨弓ハ先ヅ胸椎及下部頸椎、次テ腰椎、終リニ載城ニ於テ骨結合ヲ營ム、胸骨ニ於ケル骨核ハ増加シ、鶯嘴突起、上膊骨頭大脛骨頭ニ新核ヲ生ズ。

第二年、前頭縫合全ク化骨シ、大顛門閉鎖ス、脛骨弓ノ骨癒合益進ス、上膊骨大結節、橈骨腓骨椎骨掌骨趾骨ノ骨頭ニ骨核ヲ形成ス。

第三年、後頭骨鱗狀部ハ體ト癒合シ、顛顛骨乳様突起完成シ、樞軸齒狀突起ハ體ト癒合シ椎骨弓ノ骨結合全クナル、

第四年、創狀突起ニ於テ化骨點ヲ形成シ、上膊骨頭ノ小結節、大轉子腓骨上端ニ骨核ヲ生ジ、膝蓋骨化骨ヲ初ム。

第五年、上膊骨頭及結節ハ、癒着シ、上膊骨下端ノ内上髁、及橈骨上端ニ骨核ヲ形成ス。

第六年、後頭骨ノ關節部ト基礎部ト癒合シ、尺骨ノ兩端ニ化骨始マリ、膝蓋骨及坐骨上行枝ノ化骨ヲ完成ス。

第七、乃至八年、齒牙ノ交換始マル。

第十年乃至十一年尾間骨化骨シ、薦骨トノ癒合ヲ初ム。就中、ソノ下突起及橫突起ノ癒合體ニ比シ早シ。

第十五年、尺骨鳥喙突起及上膊骨滑車ニ一部ノ骨核ヲ生ズ。

第十三乃至十四年 上膊骨外上顆ニ骨核ヲ現出シ、小轉子化骨ス。

第十四乃至十五年 鳥喙突起及肩峰突起弓骨核ヲ形成ス。

第十六年以後第二十二年 脊柱ノ棘狀突起及橫突起ノ尖端ニ小骨核ヲ生ジ、各椎骨ノ上下面ニ圓板狀骨端ヲ備ヘ、肋骨ノ小頭及結節ニモ骨核ヲ生シ、體ト癒合ス、鳥喙突起ハ肩胛板ト癒合シ、肩峰突起ノ骨核ハ相癒合シテ、第十八乃至第十九年ニ肩胛棘ト癒合シ、肩胛内緣ニ沿フテ一骨線ヲ形成シ、肩胛下隅ニ一骨核ヲ生ズ、鎖骨ノ胸骨端ニハ一骨核ヲ現出シ、一、二年ノ後ニ體ト癒合ス、尺骨ノ上骨端ハ骨體ト癒合ス、膈骨ハ乳白ニ於テ座骨ト次テ耻骨ト癒合シ、跟骨ノ後端ハ第十七乃至十八年ニ於テ其前部ハ癒着ス、第十八乃至廿二年ニハ薦骨互ニ癒合ス、第十六乃至二十年ノ間ニハ蝴蝶後頭縫合及胸骨ノ橫縫合全ク消失シ、上膊骨、尺骨下端、橈骨下端ノ大脛骨、脛骨、腓骨、蹠骨、掌骨、指骨等ノ骨端ハ骨體ト癒合ス。

第二十二乃至廿五年 肩胛骨全ク化骨シ、椎骨體ノ上下兩骨端板亦癒合シ、次テ骨盤骨端全ク癒合シ、膈骨上緣、耻骨弓ニ於テ骨端癒合シ、骨格完成ス。

三十年乃至四十年ハ骨ニ著明ノ變化ナシ。

四十年乃至五十年 喉頭軟骨、肋軟骨化骨ヲ初メ、胸骨ノ體ト劍狀凸起相癒合ス。

五十年以後、頭蓋骨ノ縫合消失シ、即チ先ヅ矢狀縫合次テ冠狀縫合、後頭縫合最後ニ乳狀縫合消失ス。

六十乃至七十年ニ達スレバ骨格骨質漸次消耗シ、殊ニ頭蓋骨ニ於テ著シク、下顎隅角ノ如キハ小兒時代ハ鈍角ナルガ、成年壯年時代ニハ直角ニ近ヅキ、老年トナレバ再ビ鈍角トナリ消瘦ノ狀著シ、又齒牙發生ノ順位ニヨリテ骨格ノ年齢ヲ知ルヲ得ルコトアリ。

齒名	發生年齡	齒名	發生年齡
下内切齒	生後七ヶ月	第一大臼齒	第五—七年
上内切齒	八—九ヶ月	内切齒	第七—八年
下外切齒		外切齒	第八—九年
上外切齒	十一—十一ヶ月	第一小臼齒	第九—十年
下第一臼齒	十二ヶ月	第二小臼齒	第十一—十二年
犬齒	十八—廿ヶ月	犬齒	第十一年
		第二臼齒	第十二年
上下第二臼齒	三年	智齒	第十六乃至廿五年

尙骨髓ニ就テ云フ時ハ、四十才迄ハ赤色ヲ呈シ、ソレヨリ以後ハ黄色トナリ、又六十才以後トナル時ハ、は—べる氏小管甚シク擴張ス。

ホ、骨格ニ於ケル損傷ノ検査

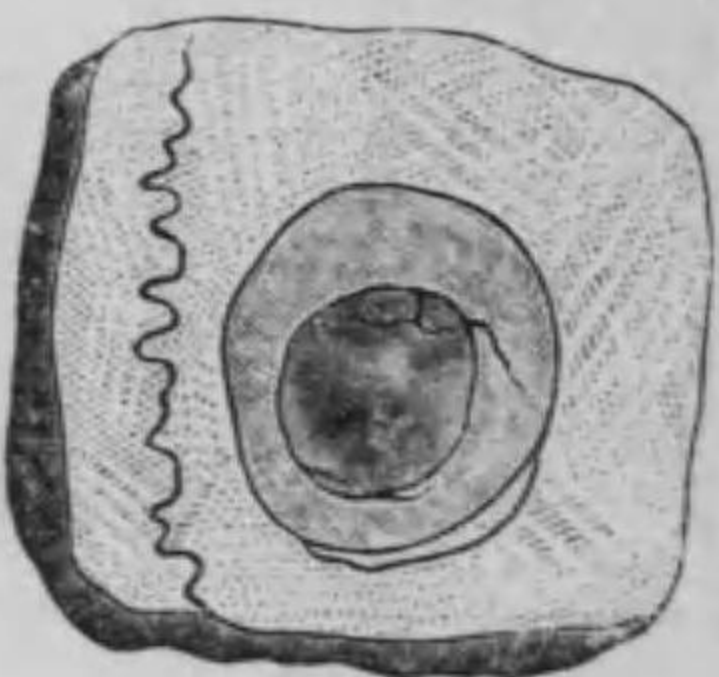
骨ニ加ヘラレタル切傷、刺傷、挫折、乃至鈍傷等ハ、軟部ニ附加シタルモノト異ナリ、何十年ヲ經過ストモ之ヲ検査スルコトヲ得ルモノナレバ、法醫學上甚ダ大切ナルモノニシテ、ソレ等ノ損傷ノ形態ハ、軟部ニ於ケルモノト大差ナク、銳器ニテ附シタル傷ハ、創縁及創底銳ニシテ滑ナレドモ、鈍器ニテ加ヘタル損傷ハ、骨ヲ挫折スルカ、裂傷ヲ與フルカ、陥凹ヲ生ズルノミナリ。而シテ刺創ニ於テハ、ソノ兇器

四稜形ノ金錠ニテ生ジタル穿孔性骨折



圖六十第

棍棒ニテ生ジタル穿孔性骨折



圖七十第



圖八十第

強キ鈍器小刀ヲ以テ左顳頂骨上ニ生シタル創口ニシテ其前縁ハ鋭ニシテ其後縁ハ鈍ニシテ其前縁ニハ尖端アリテ骨中ニ嵌ルセリ(三分一)

ノ断面ト略同形ノ穿孔ヲ作ルコトアリ。銃創ニテハ近距離ヨリ發セラレタル際ハ、單ニ銃丸ニ相當シタル創口ヲ作ルノミナレドモ、モシ遠距離ヨリ發セラル、カ、或ハ銃丸ノ力弱リテ來リシ時ハ、裂隙ヲ伴ヘル比較的大ナル創口ヲ作ル、又之ト同理由ニヨリテ銃丸ノ射入口ハ、小サクシテ創縁銳ナレドモ、射出口ハ大、創縁鈍ニシテ、且凸凹多キ故射出口ヲ射入口ヲ鑑別シ、從テ銃丸ガ何レノ方面ヨリ來リシヤヲ區別スルコトヲ得ルコトアリ。

ヘ、火葬遺骨ト普通遺骨トノ鑑別

空氣中、水中或ハ土中ニテ腐敗シ、骨格トナリタル骨片ハ、尙幾分ノ脂肪分アルヲ以テ、骨表面滑澤ニシテ灰白色乃至白色ヲ呈シ、骨質モ亦強靱ニシテ多ク全形ヲ有スレドモ、火葬遺骨ハ白色乃至帶黒白色ヲ

後頭骨間縫合(後頭骨側部ト鑿狀部ト縫合ヲ云フ)ハ過半癒合ス下顎骨左右兩半ハ全ク癒合ス
 第二頭椎ノ齒狀突起ハ同骨ノ他ノ部ト癒合シソノ他ノ頭椎(四個存ス)ノ體ハ弓部ト癒合ス附餘ノ脊椎(五個)ニ於テハ左右弓部ハ互ニ癒合スト雖體部トハ全ク遊離ス
 四肢骨ノ突起及骨端ヲ形成スベキ軟骨ハ何レモ脱落缺如ス
 ハ、丙酸屍、各頭骨ハソノ縫合ニ依リテ結合シ移動スル事ナキ程度ニ發育スト雖冠狀及矢狀縫合ハ稍離開ス(蓋シ腐敗瓦斯ノ膨脹ニ因ルナラン)後頭骨體部ト側部トハ少シモ癒合セズト雖後頭骨鑿狀部ト側部トハ全ク癒合セリ
 脊椎ノ體部ト弓部ト癒合セルモノ十三個全ク遊離スルモノ七個アリ

四肢骨ノ突起及骨端ヲ形成スベキ軟骨ハ何レモ脱落缺如ス
 乙、檢 案
 上記検査ノ結果ニ依レバ
 一、三組ノ内甲號(最幼者)ハ約七ヶ月、乙號(仲ノ者)ハ約三年、丙號(最長者)ハ約四年位ノ者ノ骨格ナリ
 二、性別(男女)ハ之ヲ知ル事能ハズ
 三、死後少クモ四ヶ月以上ヲ經タルモノト推測ス
 此檢案ハ大正〇年十月十四日着手
 同年十二月十七日結了
 大正〇年十二月〇日
 宿所 醫師 岡本 榮 松 園

第二編、身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査

一、急死々體検査

殺人ノ罪

殺人ノ罪

刑法第九十九條 人ヲ殺シタル者ハ死刑又ハ無期若クハ三年以上ノ懲役ニ處ス
 同 第二百條 自己又ハ配偶者ノ直系尊屬ヲ殺シタル者ハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス
 同 第二百一條 前二條ノ罪ヲ犯シ目的ヲ以テ其豫備ヲ爲シタル者ハ二年以下ノ懲役ニ處ス但情狀ニ因リ其刑ヲ免除スルコトヲ

得
 同 第二百二條 人ヲ殺害若クハ幫助シテ自殺セシメ又ハ被殺者ノ服託ヲ受ケ若クハ其承諾ヲ得テ之ヲ殺シタル者ハ六月以上七年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス
 同 第二百三條 第九十九條第二百條及ヒ前條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

急死々體検査

急死セル死體ヲ検査シテ死ガ自然ニ來レルモノナルカ、或ハ犯行ガ加ハリシモノナルカヲ判定スルコトハ醫師ノ屢遭遇スル所ニシテ且大切ナル職務ノ一ツナリ。外見上健康ナルモノガ突然急死スルコトハ、人ヲ

死前ノ病狀

シテソノ死因ニ付疑問ヲ起サシムル基トナレドモ、此中ニモ種々ノ病症ノ爲メニ自然ニ死ニ至ルモノアリ。例ヘバすどれつける氏ニヨレバ、斯カル疑ヲ以テ法醫學的検査ニ上リシモノノ中、十二%ハ自然ノ病死ナリシト云フ、予ノ實見セル一例ヲ述ブレバ、母子相伴ヒテ一旅宿ニ投宿セルモノアリ、兩人共外見上甚ダ壯健ニ見エタリト云フ。然ルニ旅宿ノ一室ニ於テ彼等ガ二三語荒々シク言争ヒシト思フ間ニ、子息ハ母ガ死亡セルコトヲ急告セリ。茲ニ於テ彼ノ母ノ身體ニ何カノ暴行ノ加ハザリシカノ疑ヲ惹起シ、解剖ニ附セラレシニ母親ハ腦室ニ於ケル甚ダ廣大ナル腦出血ニ依リテ、死ニ至レルモノナルヲ發見セシコトアリキ。

イ、死前病狀

急死々體検査ノ場合、吾人ノ先ヅ第一ニ調査セザルベカラザルハ死ノ直前ニ如何ナル症候ヲ呈セシカニアリ。即其症候ヲ知レバ往々ニシテ検査ノ方針ヲ決定スルコトヲ得ルガ故ナリ。而シテソノガ死因ヲ決定スルニハ、叮嚀ナル屍體検査ニヨリ何カ據所ヲ得ザルカヲ注意シ、次デ剖檢、化學的検査、動物試験、細菌學的検査ヲナシ、生前ノ症候ヲ顧慮シテ診定ヲ下スベキモノナリ。

ロ、檢 屍

死體検査、或ハ檢屍、更ニ正確ニ云ヘバ死體ノ外表検査ハ甚ダ大切ナルモノナレドモ、之ニ餘リ重キヲ置ク時ハ、思ハザル錯誤ヲ來スコトアリ。例ヘバ腐敗及血液低下ノ爲メ顔面暗赤色トナリ、一見恰モ窒息死ノ如ク見ユルモノヲ解剖シテ、ソノ死因ハ腦出血ナルコトヲ知り得タルコトアリ、或ハ冬時屍斑鮮紅ナル死體ヲ檢シ凍死ナラント思惟セシモノガ、剖檢ノ結果酸化炭素中毒ナリシコトアリ。故ニ疑ハシキ死體ニ於テ單ナル檢屍ノ後、直ニ火葬ヲ行フハ犯跡ヲ失フノ恐レアレバ、大ニ考慮スベキモノトス。

檢屍

火葬ト犯跡

屍體検査ヲ輕卒ニ行ヒタル爲メ、損傷或ハ中毒ニヨリ死ニ至リシモノヲ看過セル事ハ、往々吾人ノ聞ク所ニシテ、損傷ノ記載等甚ダ簡單ニ失シ、而モソノ死體ガ火葬サル、カ、或ハ然ラズトモ腐敗ニ移行スルコトアラバ、後日ニ到リテソノ損傷ガ自傷ナルカ、或ハ他人ノ手ニヨリテ附セラレタルカサヘ不明トナリ、或ハソガ生前ニ附加セラレタルモノナルカ、死後ニツキシ傷ナルカノ區別スラ困難トナルコトアリ。故ニ必要ヲ認メタル場合ニ、檢屍ノミニ止メズ是非共剖檢ヲナスベキモノトス。

檢屍ノ際ニハ性體格營養及身體ニ於ケル異常、例ヘバ屍斑ノ多少、死體強直ノ有無、皮色、腐敗ノ程度、損傷、灸痕、文身、附着セル汚斑、鼻口腔中ノ内容物等ハ云フニ及バズ、衣服等ニ於ケル異常、犯行ニ關係アリト思ハル、物品等ヲ叮嚀ニ記載シ置クベシ。

ハ、解剖検査—剖檢

解剖検査ハ死因ノ診斷ニ甚ダ重要ナル意味ヲ有シ、多クノ場合ハ剖檢ニヨリテソノ死因ヲ斷定スルコトヲ得、而モ之ニヨリテ得ル結果ハ甚ダ誤謬ノ少キモノナリ。モシ夫レ剖檢ノミニヨリテ決定スルコト能ハザル時ハ、更ニ組織學的、化學的、或ハ細菌學的検査ヲ行フベキモノトス。吾人ハ剖檢ニヨリテ得タル結果ヲ今次ノ三ツノ場合ニ分チテ説明セントス。

上、異常所見ガ全クナキカ或ハ僅微ナル場合、

中、多少著明ナル異常所見アルモ、尙急死スル程度ニ至ラザル場合、

下、死因トナリ得ベキ著明ナル異常所見アル場合、

上、異常所見ノ全クナキカ或ハ僅微ナル場合

異常所見ナキ場合
心臓死

吾人ノ生命ハ非常ニ種々ノ因子ノ調和ニヨリテ營爲サル、モノナレバ、此調和ガ或程度ニ破壞ナルレバ、身體各所ノ臟器ガ如何ニ夫レ自身トシテハ健康ナリト雖個人トシテハ直ニ死ニ至ルモノナリ、此場合ニハ如何ニ叮嚀ニ検査ストモ、解剖的異常所見ハナシ。例ヘバ心臓自身何等ノ變化ナクトモ、其神經的刺戟及抑制ニシテ完全ニ行ハレズンバ心臓ハ十分ニ其機能ヲ發揮スルコトヲ得ズ血液ノ循環ニ障害ヲ來シ、從テ呼吸作用モ十分ナルコト能ハズ、此等生活上大切ナル臟器ノ共同障害ハヤガテ人ヲ死ニ導クモノニシテ遂ニ心臓麻痺ニ依リテ死ニ至ル。之ヲ心臓死ト稱シ、即解剖的ニハ毫モ異常所見ナキモノトス。茲ニ述ブル心臓死トハ通常醫師診斷書死因ノ部ニ、濫用セラル、心臓麻痺ト其意味ヲ異ニス、何トナレバソノ身體何レカニ死因トナルベキ疾患アリテ、ソノ部分影響トシテ、心臓ガ次第ニ衰弱麻痺シテ死ニ至ルモノナレバナリ。此ノ如キモノノ死因ヲ心臓麻痺トスレバ死人悉皆心臓麻痺ニ依リテ倒ル、モノナリ。故ニ予ハ此ノ如キモノヲ心臓死ニ算入セズ。

ソノ他癲癇者、急性精神病者、腦水腫、腦質水腫、胸腺或ハ淋巴腺腫脹セルモノ等ハ、僅微ノ原因ニヨリ何等解剖的異常所見ヲ殘サズシテ死ニ至ル事アリ、次デ注意スベキハ急性熱性病ノ經過中、或ハ治療後同様ノ事ニ遭遇スルコトアリ。例ヘバ猩紅熱チフテリノ經過中、或ハ治療シテ數年後何等異常所見ヲ殘サズシテ、突然死ニ至ルコトアルガ如シ。此等ノ原因ニ付テハ、數多ノ研究發表サレ或ハ自家中毒トシ或ハ心臓ノ變化ニ基クトシタルモ、未ダ學說一致スルニ至ラズ。カ、ル體質ノモノガ僅微ノ原因ニヨリテ死ニ至リシ場合、法醫學的問題ニ上レル際ハ、甚ダ注意シテ鑑定セザルベカラズ。即チ一面ニハ解剖検査ヲ極メテ精密ニシ實際死因トナルベキ程ノ病變ナク、且傷害ノ痕跡ハ通常ノ人ナレバ決シテ死ニ至ル程ノモノニ非ラザルヲ確定シ、他面ニハ僅微ノ原因ニ依リ死ニ至ルベキ體質、例ヘバ胸腺淋巴性體質ナルコトヲ

淋巴性體質

しよつくと死

第二編 身體ニ於ケル兇行ノ痕跡検査 一 急死々體検査 九二

證明シ、始メテ其死因ハ加ヘラレタル傷害トハ關係アルモ、僅微ノ原因ニ依リ容易ニ死ニ至ル體質ヲ有スルモノナルコトヲ附加スベシ。

法醫學的ニ尙注意スベキハしよつくと死及あるかろいど中毒死ナリ。此兩者亦死後何等ノ解剖的異常所見ヲ殘サズシテ死ニ至ル、就中、しよつくと死ハ一言セザルベカラズ、しよつくとトハ身體的或ハ精神的ニ或ル打擊ヲ被リ、神経系統ニ於ケル反應通常ヨリモ甚シキ爲メ、所謂神經的打擊ソノ度ヲ越エ、突然心臟及肺臟ノ作用停止シテ死ニ至ルモノニシテ、剖檢上何等見ルベキノ異常所見ヲ殘サルモノナリ。所謂しよつくと起シ易キモノハ、前述ノ異常體質ヲ有スルモノニ多シ。

此ノ如ク剖檢的異常所見ヲ殘サズシテ死ニ至ルモノノ原因ヲ尋スレバ、生存ニ必要ナル臟器ノ作用調節ヲ失ヘルニヨルモノ、しよつくと死ニ至レルモノ、中毒、或ハ諸種病症ニヨリテ死ヲ招來スルモノ等、種々アレバ、是等ニ依リテ死ニ至レルヲ診定スル場合ニハ、非常ナル注意ヲ以テスベキモノトス。何トナレバ、ソノ原因證明ニ付確タル陽性ノ成績ヲ與フルモノ少ク、多クハ想定ニ過ギザレバナリ。今此点ニ關シ京都醫科大學法醫學教室ニ於テ見ラレタル適當ナル三例ヲ述ベム。

第一例

子宮病ヲ有スル二十三歳ノ娘、川○カ○エ(クロ、ホルム)ト「エーテル」ヲ合劑十五方匙ヲ約三十分ノ間ニ吸入セシメテ宮内面極度汚濁シテ行ヒ向ホテ子宮外口ヲ少シク切り廣ゲントセル際急ニ變調ヲ來シ、脈搏呼吸運動漸ク淺薄トナリタルヨリ、時ヲ移サズ人工呼吸ヲ施シ、一時三十分間許モ之ヲ繼續シ、且ツ「カンフル」ヲ皮下注射ヲ行ヒタルモ其効ナク、終ニ死亡セリ

ト云フ。剖檢所見次ノ如シ。

甲、解剖検査記録

第一 外表検査

(一)女子屍。體格營養共ニ中等、皮色ハ前面蒼白、背面及右側一般ニ汚穢淡紫色ニシテ、特ニ濃色ノ部ナク、之ヲ指壓スレバ幾分ハ褪色ス。死體強直ハ眼瞼筋及其他ノ諸關節ニ強ク存ス。

(二)頭部顔面ニ損傷ナク、兩眼閉ジ、結膜蒼白、角膜稍濁シ、

瞳孔ノ大サ中等、眼瞼軟ナリ鼻孔ニハ、右ハ低隆、左ハ隆起アルノ他異物ナク、口唇淡紫褐色ヲ呈シ、内牛ハ少シク乾燥ス。口腔齒列前ニハ異物ナク、舌尖ハ少シク齒列間ニ突出ス、左右外耳ニ損傷ナク、外聽道内異物ヲ認メズ。

(三)頸、胸及腹部ニ損傷其他特記スベキ異狀ナシ。背面四肢亦然リ。

(四)外陰部ニハ少許ノ血液ヲ附著スルモ損傷ヲ認メズ。肛門略開シ、周圍ニ二個ノ痔核ヲ見ル。

第二 内身検査

上、胸腹腔剖檢

(五)式ノ如ク胸腹部ノ皮膚ツソノ正中ニ於テ切開スルニ、腹腔ヨリ特ニ臭臭ヲ放タズ。皮下脂肪層佳ク發育シ、筋肉色常ノ如ク、稍乾燥ス。頭部ニ於テ切斷セラレタル靜脈内ヨリハ極メテ多量ノ血液ヲ漏出ス。大網膜脂肪量中等、ソノ血管内ニハ凝針狀ノ細キ血栓ヲ存ス。腹腔淨淨ニシテ潤澤ナシ。腸管ノ表面ハ淡紅ニシテ血管充盈シ、腸管ニ癒着ナシ。腸間膜ノ脂肪量中等、疎ハ小豆大乃至大豆大ニ腫起ス。腹腔内ニハ淡黄色ノ透明液少許アリ。臟器ノ位置尋常腸胃周圍ノ組織ハ黄色ニ染ム腸胃ノ高サ、左ハ第六肋間右ハ第六肋骨ノ上縁ニ相當ス。

以、膈腔検査

(六)胸腔ヲ開檢スルニ、左肺ノ前縁ハ僅カニ、右肺ノ前縁ハ充分露出ス。肋膜ニ癒着ナク胸腔内ニ異狀ノ液體ナシ。胸腺ノ大サ七・五—六・〇—七・七仙達アリ。

(七)心臟内ニハ、腹腔ト同様ノ液約十立方仙達アリ、心臟ノ壁質ハ左右室共ニ軟、表面滑澤ニシテ潤澤ナク、血管内血量中等、血液點ヲ認メズ心臟ハ本屍ノ手拳ヨリ少シク大(約十ト十三ノ割)右心

第二編 身體ニ於ケル兇行ノ痕跡検査

一 急死々體検査

内ニハ少許ノ、左心内ニハ右心ヨリモ多量ノ流動血ヲ容ルル房室間孔ニハ左右共ニ容易ニ二指ヲ通ス。心臓剛出後ニモ、附屬ノ血管ヨリ、同傍血多量ヲ漏出ス。大動脈及肺動脈孔ニ灌水スルニ其半月狀瓣能ク閉鎖ス、左右心内膜滑澤透明ニシテ潤澤ナシ。肺動脈前背白ニシテ粗ツ少シク不透明ナリ。厚サハ右室〇・三五仙達、左室一・二仙達ヲ算ス。

(八)左肺表面紫赤色ヲ呈シ肋膜滑澤透明ニシテ潤澤シ、指壓スルニ硬結ナク、断面ハ表面ニ比シ稍赤色ヲ帯ビ臭臭ナシ、血管ノ斷端ヨリハ暗色ノ流動血ヲ小氣管枝ノ斷端ヨリハ到ル處泡沫液ヲ漏ス

左氣管枝内ニハ少許ノ泡沫ヲ混ズル粘濁液ヲ存シ、粘膜ノ色ハ肺臟ノ斷面ニ同ジ。右肺ノ性状ハ左肺ニ比シ斷面血液ニ富ムル他左肺ニ同ジ。

(九)頭部ノ臟器ヲ一連ニ取出シ、之ヲ檢スルニ、舌ニ損傷ナク、左右扁桃腺ハ梅實大トナリ、舌背後部ノ嚔狀腺モ亦少ク腫起シ之等ノ爲メ咽頭腔ハ著シク狹隘トナル。咽頭部ニハ暗灰色ノ粘濁液少許ヲ存ス、食道内空虚、粘膜ハ通ジテ淡紫色ヲ呈ス、喉頭及氣管内ニハ左右氣管枝ト同様ノ内容ヲ存シ、氣管粘膜ハ赤色ニシテ、喉頭粘膜ハ之ニ比シ遙カニ淡色ナリ。

三、腹腔検査

(十)脾臟ノ大サ一四・〇—一八・〇—四・〇仙達、表面汚穢紫褐色ヲ呈シ、被膜稍緊張シ、觸ルニ洗練ノ感アリ。断面汚穢淡褐色ヲ帶ビ「マルビキ」氏小體著明ナリ。

(十一)左腎。莖膜剝離シ易ク、大サ一・〇—一・六—五—三・一仙達、硬サ尋常。表面淡紫褐色ニシテ、断面著シク血液ニ富ミ、暗紫赤色ヲ呈シ、皮質部稍廣ク(約〇・五—〇・七仙達)髓質ト皮質トノ分界明ナリ。右腎大サ一・一—一・五—一・六—〇—二・九仙達、断面稍潤澤スルノ他殆ンド右腎ニ同ジ。

(十二) 十二指腸内ニハ帶黄淡紅色ノ粘稠液少許ヲ存シ、輪體管通ズ粘膜ニハ特記スベキノ異常ナシ。胃ハ殆ンド空虚ニシテ汚穢淡黄色ノ滲厚液約三〇〇立方仙達アリ。粘膜滑澤帶灰赤色ヲ呈ス。(十三) 肝臓。大サ二八〇—一四・五—九二仙達、表面滑澤汚穢帶黄紫褐色ニシテ、實質硬固面血氣小ク、黄色ヲ帶ビ小葉ノ分界明ナリト雖、其周邊部一般ニ黄色ヲ帶フ、膽管内ニハ常色ノ膽汁ヲ存シ、粘膜ノ性状常ノ如シ。

(十四) 小腸内ニハ汚穢淡黄色ノ滲濁粘稠液少許ト、數條ノ蛔蟲ヲ存ス。管壁一般ニ淡紅色ニシテ、下部ニ於テハ孤腸ノ著シク腫起スルヲ認ム。大腸内ニハ汚穢黄綠色ノ軟稠塊物ヲ存シ、下部約一五〇仙達長ノ部ノ前壁ハ著シク肥厚硬結シ、粘膜ニハ止血針頭大ノ陷凹(實質缺損)數多散在シ、其周邊汚赤色ヲ呈ス。其他ノ部分ノ粘膜モ少シク腫起ス。

(十五) 左右卵巢ハ小鶏卵大トナリ、暗紫赤色ニシテ骨盤壁ト癒着ス。骨盤臟器ノ外陰部ト一連ニ腫出シテ各部ヲ檢スルニ、腔廣ク内ニ汚血色ノ粘稠物少許ヲ存ス。粘膜ニ紫藍色ヲ帶ビ、損傷ナシ子宮外口ハ少シク腫開シ、殆ンド小指ヲ通ズ可ク、一般ニ暗赤色ニ腫開シ、其左側ニ約一〇仙達許ノ平滑肉ノ創面アリ。前唇ノ上皮ハ不正形ニ剥脱シ、汚赤色ヲ呈シ、頸管内ニハ汚血色ノ粘稠物ヲ存ス。頸管及ビ子宮粘膜ハ一般ニ暗赤色ニ腫起シ、白色ノ粘稠物ヲ附着ス。頸管ノ左側壁ニハ前記創傷ノ上端ニ接シ、三・五仙達長ノ淺キ溝狀創アリ、ソノ創面稍々凸凹ヲ呈ス。卵巢副卵果、輸卵管等ハ互ニ相癒着シ、集塊トナリ、殆ンド分離スルヲ得ズ。右卵巢ノ断面ハ一般ニ汚穢赤紫色ニシテ「アラフ」氏胞ノ部ハ殊ニ褐色ナリ。卵巢内ニ米粒大乃至小豆大ノ小囊數個ヲ存ス。

下、頭腔検査

(十六) 頭皮ヲ式ノ如ク切開剝離シテ之ヲ前後ニ轉轉スルニ、内面一般ニ乾燥シ、後部ハ淡赤色、前部ハ蒼白ナリ。

(十七) 頭骨ヲ剝離シテ、頭腔ヲ開檢スルニ異常ノ内容ヲ存セズ。頭蓋骨ハ右後部ニ於テ骨縫離タ、内面稍乾燥ス。硬膜穹窿、軟腦膜ハ殆ンド透明、靜脈内血氣中等、細枝ハ充盈ス、軟腦膜剝離シ易シ。左右側室内ニハ異常ノ液質ナク、大脳半球ノ断面血點中等ニシテ、出血ナシ。大脳神經節、小腦ノ断面ノ性状モ亦大脳半球ノ如シ。基礎動脈系、空虛。ワロル氏橋、延髓ノ断面ハ蒼白、横質内ニハ少許ノ流動血ヲ容レ、頭骨ニ損傷ナシ。

附記、斷頭鏡的及化學的検査ノ材料トシテ血液、肺臟、腦、心臟腎臟ノ一部ヲ清淨ナル硝子器中ニ採集セリ。

乙、顯微鏡的検査

(十八) 心筋ノ一部ヲ微鏡シテ、生理的食鹽水中ニテ之ヲ顯微鏡下ニ檢スルニ個々筋纖維内ニハ先澤アル數多ノ小顆粒狀物ヲ認メ、且ツ所々ニ橫紋ノ不明瞭ナル部アリ、而シテコノ顆粒ハ稀薄ナル苛性加平液ヲ加フルモ消失セザリキ。(脂肪變性)

(十九) 腎臟ノ一部ヲ水結ミクロトームヲ用ヒテ切片トナシ、之ヲ鏡檢セルニ細尿管球ニ曲細尿管ノ上皮内ニハ所々心筋内ト同性状ノ顆粒ヲ存シ、且ツ細尿管上皮ノ境界不明ナルヲ認ム。而シテ切片ヲ染色シテ檢スルニ細尿管上皮ノ核ノ殆ンド染色セザルモノ、散在スルヲ認ム。

丙、化學的検査

右「カ〇エ」ノ死體ヨリ採集セル肺、肝、血液、腦ニ就テ化學的検査ヲナセリ。

(二十) 血液約二百立方仙達ヲ「コルベン」中ニ取り、之ヲ昇同量ノ水ヲ以テ稀釋シ硫酸ヲ加ヘテ酸性トナシ、水蒸氣ヲ流過シテ、攝

氏約六十度ニ熱シ、冷却装置ヲ附設シ、靜カニ蒸溜スルニ、一種ノ不快ナル臭氣ヲ有シ中性反應ヲ有スル液ヲ得タリ。此液ニ就キテ化學的反應ヲ檢セリ。

(イ) 可檢液ニ苛性「ナトリウム」アルコホルル性溶液及「アモリオン」一二滴ヲ加ヘテ微温ヲ施スモ「イソペンツオニトリール」ノ特臭ヲ放タズ。

(ロ) 可檢液ニ濃厚ノ苛性「カリ」液ニ溶解セル「アルファナフトール」ヲ加ヘ、加温スルモ藍色乃至綠色ヲ呈セズ。

(ハ) 「レゾルチン」一匙ヲ蒸餾水一一立方仙達ニ溶解シ、之ニ可檢液ヲ加ヘ尙ホ十五「プロセント」ノ苛性「ナトリウム」一二滴ヲ滴加シテ煮沸スルモ黄色乃至赤色ヲ呈セズ。

(ニ) 肺、肝、腦ヲ細切混合シ、其二百五ヲ取り、血液ト同一ノ方法ヲ以テ檢スルニ、ソノ成績二十項ト相同シ。

(二十二) 腦質ノ約二百五ヲ取り、血液ト同様ニ處理シ、其腦液ヲ集メテ化學的反應ヲ試スルニ、二十項(イ)法ニヨリテハ其特異明カナラズ、(ロ)法ニ依リテハ極メテ淺キ藍色ヲ呈シ、(ハ)法ニヨリテハ明カニ美麗ナル赤色ヲ呈ス。コレニ攪リ腦質内ニ「クロロホルム」ノ存在ヲ證明ス。

丁、檢案

(一) 一件記録ニ依リ死亡前ノ狀況ヲ調査スルニ、本人「カ〇エ」ハ兼テヨリ子宮病ニ罹リ居リ、本年十月十日醫師〇〇〇ニ其診療ヲ乞ヒシニ、同醫師ハ診療ノ末、翌十一日治療スベシトテ下劑ヲ投與シ、之ヲ服用シ且ツ絶食ノ處方ヲ可キ旨ヲ命ジ、帰宅セシメシヲ以テ「カ〇エ」ハ其命ノ如ク服藥絶食ノ上、翌十二日午後三時頃同醫師方ニ參リシニ、手術案上ニ臥セシメ「クロロホルム」(五)「エーテル」(一)ノ合劑ヲ「エスマルヒ」氏假面上

ニ通下吸入セシメ、全身麻酔ヲ施シ、其麻酔期ニ達セルヲ俟テ、先ツ子宮鏡ヲ挿入シテ腔ヲ開キ鏡ヲ以テ子宮腔下部ヲ引下シ、次ニ子宮頸管ヲ擴張セル後鏡ヲ以テ子宮内面ヲ推察シ、沃度丁幾ヲ以テ腐蝕シ、尙ホ子宮外口ヲ少シク切磨セントセル際、急ニ變調ヲ來シ、脈搏呼吸運動微弱漸減漸消トナリタルニ依リ、時ヲ移サズ人工呼吸ヲ施シ、一時三十分許モ之ヲ繼續シ且ツ「カンフルエーテル」ノ皮下注射ヲ行ヒタルモ、其効ナクシテ終ニ死亡セリト。而シテ其間ニ使用セル「クロロホルム」ノ全量ハ五十五立方仙達弱ニシテ「手術ニ着手セルヨリ右變調ヲ來セル迄」約三十分ナリトシ「(一)クロロホルム」ニ因ル中毒死ニハ時トシテ「クロロホルム」ノ臭氣アルノ他固有ナル劇的變化之ナキガ故ニ、死體解剖所見ノミニテ確定スルコト能ハズ。然レドモ、コノ解剖上確證ナキコトガ「クロロホルム」死メ一徵タルコトヲ忘ル可カラズ。

(三) 「カ〇エ」ハ年齡ニ比シ胸腺ノ大ナルコト、扁桃腺舌根部ノ發達ノ肥大セルコト、脾臟大ニシテ「マルビキ」氏小體ノ著明ナルコト、橋間腺及腸管ノ孤腺腫起スルコト等(記録第六、九、十、五、十四項)所謂淋巴性體質ノ解剖的ノ徵候ノ他ニ、兼テ心臟肥大脂肪變性(記録第七、十八項)腎臟炎(第十一、十九項)等ヲ有ス。而モ是等ノ諸症ハ生前ニ於テ之ヲ決定シ能ハザルモノ多シ。然レドモ以上ノ症候ヲ有スル者ハ「クロロホルム」ヲミナラズ諸種ノ麻酔劑ニ對シテ頗ル過敏ニシテ、麻酔法ニ別段過誤ナクモ麻酔ノ各期ニ於テ不慮ノ徵候ヲ呈シ、終ニ死ニ到ルコトアリ。

(四) 本人「カ〇エ」ガ前第三項ニ記載ノ如キ體質ヲ有セルコト、第一項ニ掲記セル麻酔ノ當初ヨリ死ニ到ル迄ノ狀況直接死因トナルベキ特異ナル劇的變化之レナキコト、及内臟中ニ「クロロホルム」ノ存在ヲ化學的ニ證明セルコト等ヲ總括シテ考察スル時ハ、

投水者ノしよ
つゝ死

「カ〇エ」死亡ハ「クロ、ホルム」麻酔ノ結果ナルベシト雖モ「彼ノ特異體質」ハ大ニ「クロ、ホルム」死亡ヲ促進セルモノナラン

第二例

十四歳ノ男子(副〇〇)。四圍ノ状況ニ概シテ、自ラ水ニ入りテ死セルコトハ殆ンド疑ヒナキニモ係ハラズ、溺死ノ微標(及他死因ト認ムベキ損傷ノ痕跡或ハ病的變化)ナク、タ、淋巴性體質ノミヲ有ス。剖檢所見次ノ如シ。

甲、解剖検査記録

第一、外表検査

一、男子屍。全身ニ砂粒少許ヲ附着シ、皮色ハ一般ニ稍蒼白ニシテ、濁色ノ部ナシ。營養中等死體強直ハ下肢ノ諸關節ニノミ輕ク存ス。
二、頭髮ハ五分刈ニシテ、毛間ニ泥土ヲ乾着ス。頭皮ニ損傷ナシ。顔面ノ皮膚ハ淡赤色ヲ帶ビ、諸處ニ大小不同ノ極メテ不正形ナル表皮剝脱アリ。切開スルニ皮下組織ニ異常ナシ。兩眼閉テ結膜左右共淡赤色ニシテ、瞳裂ニハ淡汚灰色ノ混濁物多量ヲ存ス。眼球軟ニシテ角膜少シク濁濁ス、瞳孔ノ徑左右共約四・〇密達。鼻中ニハ汚穢淡赤色ノ泡沫液少許ヲ存ス。口腔前庭内ニハ異常ノ内容ナク、舌尖ハ鋭利ノ後方ニアリ。左右耳鼓ニモ泥土ヲ附着シ、ソノ内外面ニハ蒼白ノ表皮剝脱數個アリ。切開スルニ皮下組織ニ異常ナシ。外聽道内ニモ少許ノ砂粒ヲ存ス。
三、前頭ノ下部ヨリ上胸部ニ亘リ約拳大ノ淡褐色斑アリ、周縁ハ不正ナリ、コノ斑中ニハ極メテ輕度ノ表皮剝脱アリテ、蒼白ノ真皮ヲ露出ス。ソノ他頭部ノ皮膚ニハ損傷異常ナシ。
四、胸腹部ノ皮膚ハ僅カニ綠色ヲ帶ビ、損傷ナシ。左鼠蹊部ニハ前頭部ト同様ノ變色部アリ。ソノ廣サ約二鵝卵大ナリ。左側胸部ニ

モ殆ンド四角形(七・〇—八・〇仙達)大ノ稍褐色ヲ呈スル部アリ。右變色部ノ表皮ハ周圍ニ比シテ容易ニ剝離スルコトヲ得。切開スルニ皮下ニ出血ヲノ他ノ異常ナシ。
五、外陰部ニハ損傷ナク、陰毛ハ未ダ發生セズ。肛門ハ殆ンド閉鎖シ、周圍ニ汚染ナシ。
六、背面ニモ損傷異常ナシ。
七、左右前胸部ニハ粟粒大乃至蠶豆大ノ表皮剝脱數多アリテ、帶黃褐色ヲ呈ス。左右手部、殊ニ右手背第二乃至第三掌骨指骨關節部ハ稍紫赤色ヲ呈ス。之等ノ部ヲ切開スルニ、後者ノ皮下組織ノミ僅カニ紫赤色ヲ呈シ。血管網著明ナリト雖モ毫モ凝血ヲ存セズ。(死後ノ血液沈澱)左前胸後面ニモ左鼠蹊部ト同様ノ變化アリ。
八、右大腿骨大轉子部ニハ大ナル白色膜狀ノ硬板一葉上縁方ヨリ少シク前下方ニ斜走シ、周圍ノ皮膚亦硬化ス。コノ硬板部ノ皮膚ハ骨質ト相癒着シ、且ツ股關節ノ屈伸運動自在ナラズ。左右下肢ニハ到處粟粒大乃至蠶豆大ノ表皮剝脱アリテ、ソノ而淡黃乃至淡褐色ヲ呈ス。切開スルニ皮下組織ニハ毫モ異常ヲ見ズ。掌面及背面ノ皮膚ハ少シク白色ノ膜狀ヲ作ル。

第二、内景検査

上、胸腔腔検査

九、胸腹ノ皮膚ヲ式ノ如クソノ正中ニ於テ切開スルニ、皮下脂肪稍少ク、筋肉ノ發育中等ナリ。腹腔ヲ開檢スルニ、大網膜ノ脂肪軟中ニシテ、血管殆ンド空虚ナリ。膈管ハ一般ニ黃色ヲ帶ビ、血色ニ乏シク、只深部ニ於テハ血管稍充盈ス。肺間膜血管内ノ血中中等疎ニ積、大ナシ。肺膜到ル處滑澤潤シ、真腔臟器ノ位置常ノ如ク、腹腔内ニハ帶黃淡赤色ノ液約三〇・〇立方仙達ヲ存ス。核一般ニ汚赤色ニシテ、滑澤ナリ、舌根部ノ齶狀腺、口蓋及咽頭扁桃腺ニ會軟骨前後面及左右被髮會軟骨附近ノ腺體ハ其數腫脹ス。
十四、左肺ノ表面ハ一般ニ滑澤ニシテ、汚穢紫赤色ヲ呈ス。右肺ノ表面ハ前記(第十一項)肋膜癒着ノ爲メ、到ル處纖維物ヲ附着シ粗穢ニシテ淡灰色ヲ呈ス。膈ル、ニ左右肺共呼吸アリト雖モ、氣量稍少シ。断面ノ色ハ一般ニ帶紫暗赤色ヲ呈シ、輕度スレバ血管ノ斷端ヨリハ暗色ノ流動血ヲ、氣管枝斷端ヨリハ少許ノ泡沫ヲ漏ス。

五、腹腔腔検査

十一、式ノ如ク胸骨ヲ肋軟骨ト共ニ切除シテ胸腔ヲ開檢スルニ左右肺ノ前縁ハ十分ニ露出シ、ソノ最モ接近スル所ハ約一・五仙達相隔タリ、心腔前縁ノ結核點ニハ多量ノ瓦斯ヲ存ス。胸腺ハ左右兩葉ヨリ成リ、上ハ甲状腺ノ下端ヨリ下ハ心腔前縁ノ中部ニ達ス。左肺ニハ癒着ナク、左胸腔内ニハ帶紫淡赤色ノ微濁液約二〇・〇立方仙達アリ。右肺ハ全部胸壁ト輕ク癒着ス。比較的容易ニ剝離スルコトヲ得。
十二、心腔内ニハ左胸腔内ト殆ンド同様ノ液體約五・〇立方仙達アリ。心臟ノ大サ約木匙手拳ニ等シク、前面ニ約一・〇仙達長三・〇密達幅ノ白色濁濁(膿斑)アリ。外膜下ニハ一、二ヶ所ノ溢血點ヲ存ス。左右心室共軟ニシテ、切開スレバ、右心内ニハ多量ノ泡沫ヲ含メル血液少許ヲ存シ、左心ハ殆ンド空虚ニシテ左右房室間孔ニハ一指ヲ通ズ。心刺出ノ聲附屬ノ血管ヨリ少許ノ流動血ヲ出ス。肺動脈及大動脈口ニ濁水スルニ漏水セズ。右心ノ内面ハ滑澤ニシテ暗赤色ヲ呈ス。左心内面ノ色ハ右心ニ比シ淡ニシテ上行大動脈内面及半月狀瓣モ一般ニ暗赤色ヲ呈ス。(血液浸潤)。心筋ノ色淡ニシテ潤澤ナシ。
十三、頭部ノ諸臟器ヲ兩肺ト共ニ剝出スルニ、舌上及咽頭部ニハ汚穢淡灰色ノ破塊セル豆腐樣物アリ。食道下部ニハ白色ノ練乳樣物少許アリ。結膜面ハ一般ニ蒼白ナリ。喉頭部ニハ汚赤色ノ泡沫液多量ニ存在シ、氣管内ニハ汚赤色ノ濁濁液多量ニ存ス。左右氣管枝ハコレガ爲メ全ク閉塞セラル。喉頭、氣管及氣管枝ノ結膜ハ

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査 一 急死々體検査

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査

一 急死々體検査

ハ泡沫ヲ有スル血液漏出ス。體腔殆ンド空虚粘膜ノ性状常ノ如シ。十九、小腸ノ上部ニハ汚穢赤色ノ糜爛狀物ヲ存シ、中部ニ於テハソノ色稍淺黃色トナリ、中ニ豆ノ皮及大根様切片ヲ存ス。胃内容ニ同ジク、血ヲ其下部ハ殆ンド空虚ナリ、大腸内ニハ汚穢赤色ノ軟便ヲ存ス。小腸下部ヨリ大腸上部ニ至ル結腸ノ孤腸ハ著シク腫脹シ、殆ンド相結合スルモノアリ。

下、頭腔剖檢

二〇、頭皮ヲ式ノ如ク切開剝離シテコレヲ前後ニ轉轉スルニ内面一般ニ紫赤色ヲ帶ビ、左右顳頂結節部ノ皮下ニハ小指頭大ノ輕キ組織間出血アリテ、暗赤色ヲ呈ス。頭骨ヲ鋸斷シテ頭腔ヲ開檢スルニ頭腔内ニ異常ノ内容ナク硬腦膜ハ血管ニ沿ヒ血液漏出シテ汚穢赤色ヲ呈ス。硬腦膜内空處、嗅腦部ノ軟腦膜ハ左右共潤澤ナク弱韌シ易シ。靜脈内ノ血液少シ。左右側室内ニハ異常ノ内容ナク大脳半球實質斷面ノ血管斷口ハ血液ノ浸潤ニヨリテ暗赤色ヲ帶ブト雖モ、血液ノ流出スルコトナシ。大脳神經節ノ斷面小腦、ワコル氏橋延髓等ノ斷面ニ異常ナク、横紋内ニハ血液少許ヲ存シ、頭骨ニ損傷ナシ。

乙、顯微鏡的検査

二一、氣管枝及胃ノ内容(第十三及十七項)ヲ鏡檢スルニ、豆ノ皮ノ他殆ンド同大多クハ類圓形ニシテ厚キ皮ヲ有シ、且ツ團集セル顆粒ヨリナリ、顆粒内不明瞭ノ紋理ヲ認ムコレニ沃液液ヲ加フレバ藍紫色トナル。前記ノ剖檢所見ニヨリ左ノ如ク検査ス。

- 一、木屍ニハ
甲、死因トナルベキ損傷ノ痕跡
乙、死因ト認ム可キ病的變化

二、皮膚其色前面ニ於テハ概シテ、蒼白ニシテ暗黃色ヲ帶ビ、腹面部ニ左右胸骨高部ハ汚穢赤色ヲ呈ス。背面ハ一般ニ帶赤暗紫色ヲ呈シ。特ニ右側ニ於テ其色濃厚ナリ。(死斑) 上肢及上胸部ノ皮下ニハ血管周圍ニ於ケル血液ノ浸潤ニ依ル暗赤紫色ノ網狀斑ヲ洩見ス。皮下ニハ到ル嚙啞喉ル(腐敗瓦斯)。上肢上胸部及腹部ノ周圍ニ於テハ水泡ヲ存シ、容易ニ破潰スルコトヲ得。其中ニ帶黃淡綠色(臍部) 乃至汚赤色(上胸部及上肢)ノ透明液ヲ存ス。(腐敗現象)。

三、屍體強直ハ喉嚨筋及四肢ノ諸關節ニ輕ク存シ、唯左右ノ足及膝關節ニ於テハ稍強シ。

四、頭部及顔面。有毛ノ頭部並ニ顔面共ニ損傷無キモ、顔面ハ一般ニ腐敗瓦斯ニヨリテ強ク腫脹ス。而シテ右顔面ハ左顔面ニ比シ其色稍濃ク帶褐淡紫色ヲ呈シ、且ツ腫脹モ亦少シク強シ。兩眼閉ヂ、右眼瞼ハ左眼瞼ニ比シ稍強ク腫脹ス、結膜ハ左右共蒼白ニシテ、輪裂ニハ汚穢淡黃色ノ濃厚液ヲ存ス。右眼ノ角膜ハ少シク潤澤シ、瞳孔中等大ナリ。左眼ニ於テモ殆ンド右ニ同ジト雖モ前房内ニ多量ノ腐敗瓦斯アルヲ透見ス。

五、耳鼻及口腔。鼻及口腔ヨリハ泡沫狀汚血色ノ潤澤液多量滲出スト雖モ、其他ニ異物ヲ存セズ、口唇粘膜蒼白ナリ。左右耳鼓ニ損傷無ク外聽道内異物ナシ。

六、頸部ニハ前記(第五項)ノ原口ヨリ漏出シタル汚液少許附著ス。頸短ク腹部ハ著シク膨滿緊張ス。此他頸胸腹部ニハ記スベキノ異狀又ハ損傷ヲ見ズ。

七、外陰部ニモ損傷無シ、陰囊ハ腐敗瓦斯ニヨリ著シク膨滿シ、是ニ小孔ヲ穿テテ忍テニシテ遺精ス。

八、肛門少シク膨滿シ、赤色ナル直腸粘膜ヲ露出ス。其周圍ニハ黃

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査

一 急死々體検査

丙、溺死ノ徵候

二、水見ガ自ラ水ニ入りテ死セルコトハ四圍ノ狀況ニ鑑ミテ殆ンド疑ヒナキニ保ハラズ、前項ノ如ク溺死ノ徵候ナシ。本見ハ所謂淋巴性體質ヲ有ス。頭部腦管等ノ淋巴性組織ノ増殖顯著(第十三及第十九項)ナルハ其徵候ナリ。而シテ斯ノ如キ體質ヲ有スルモノガ些細ノ外因ニ依リ心臓及呼吸器ヲ起シ、急死スルコトアルハ吾人ノ知ル所ナリ。入水ノ際受クル所ノ精神感動モ亦、ソノ誘因トナリ得ルモノナリ。故ニ予ハ本見ハ體質異常ノ爲ニ入水ニ際シ(溺死スルコトナリ)急死セルモノナリト推測ス。

第三例

五十七歳ノ男子(中〇安〇郎)午後一時三十分頃方部省傳染病研究所發賣ニ係ル弱チフス飛沫液一立方仙達ヲ注射ヲ受ケ、三丁程ノ道ヲ歩シタル後午後三時頃ニ至リ、下肢ノ倦怠感等アリシニ付キ就床セリ。然ルニ同六時頃輕微ノ頭痛惡寒胸内苦悶ヲ來シ、上ノ後床上ニテ嘔吐ヲナシ、間モナク人事不省ニ陥リシニ付キ、直チニ醫師平〇〇ヲ招キ診察ヲ乞ヒシニ、同氏來診ノ當時ハ已ニ醒覺シ、脈搏一分時八九乃至九十、體温三十八度(檢温器ニテ測定セルニアラズ)ニシテ、別段惡微無キヲ以テ同醫師ハ一時顯貴血ヲ來セシナラント診斷シ、歸宅セルニ三十分許ヲ經テ再ビ人事不省ニ陥リタルモ、間モ無ク醒覺セルニ同日午後七時頃ニ至リ復又人事不省トナリ殆ンド其傷死亡セリ。剖檢スルニ其所見左ノ如シ。

甲、解剖検査記録

- 上、外表検査
一、男子ノ屍。體格營養共ニ中等ナリ。

色ノ軟便少許附著ス。

九、脊面。前記(第二項)ノ帶赤暗紫色ナル脊面ノ皮膚ニハ粟粒大乃至米粒大ノ帶黑紫赤色ノ斑紋數個散在スルヲ以テ、此部ヲ特ニ切開スルニ皮膚ノ上層ニ限局シテ同大ノ同色斑ヲ存ス、又左肩胛間部ニ帶赤黑色止針頭大ノ斑一個(注射セル部分)在リ。附近ノ皮膚ヲ廣ク且ツ深ク切開スルニ、皮下組織及筋内ニハ、特記スベキノ異狀ナク、唯血液浸潤ニヨリ暗赤色ヲ呈シテ潤澤シ且ツ多量ノ腐敗瓦斯ヲ含蓄スルヲ見ル。

下、内景検査

第一、頭腔剖檢

十一、頭皮ヲ式ノ如ク切開シテ前後ニ轉轉スルニ、其内面ハ一般ニ汚赤色ヲ呈シ、且ツ水分ニ富ム(血液浸潤)。特ニ右側ニ於テ著シ。頭骨ニハ損傷無キモ、前頭ノ骨左右兩半ノ接處部ニハ内外面共明カニ縫合ヲ見ル。

十二、頭骨ヲ鋸斷シテ頭腔ヲ開檢スルニ、内ニ異常ノ内容ナク、硬腦膜ハ稍強ク頭骨ト癒着スルガ故ニ、頭蓋頂ト硬腦膜ヲ連環ノマ、別出ス。

十三、腦膜。硬軟兩腦膜間ニハ癒着無ク、硬質内空虚ナリ。穹窿部硬腦膜内面及軟腦膜共ニ滑澤ニシテ、軟腦膜ノ靜脈内ニハ中等量ノ血液ヲ容レ、且ツ所々ニ腐敗瓦斯ヲ存スルヲ見ル。底面ノ軟腦膜モ亦穹窿部ニ等シク、基礎動脈及ヒ氏溝動脈汚赤色ニ染ミ、空虚ニシテ硬變ナシ。軟腦膜透明ニシテ剝離容易ナリ。

十四、腦。左右側室及第三、第四、室内ニモ異常ノ内容物無シ。大

腦半球大脳神経節小腦等ノ實質軟化シ、其断面ニハ血點ヲ中等度ニ存スルノ他血液等ヲ認メズ。わろる氏橋、延髓ノ断面ニモ軟化ノ他記スベキノ異常ヲ見ズ。横質内ニハ少許ノ濃厚血ヲ存ス。

十五、頭蓋底ニ骨傷無シ。

第二、胸腹腔剖検

十六、式ノ如ク胸腹ノ皮膚ヲ正中ニ於テ切開スルニ、腹腔内ヨリ多量ノ腐敗瓦斯飛出テ發シテ通散シ、腸腸管各部瓦斯ニヨリテ著シク膨滿シ、又胸部皮下及筋内間ニモ多量ノ腐敗瓦斯存在スルヲ見ル。

十七、大網膜脂肪量中等、血管内ニハ其微量ノ血液ヲ存スルノミ、腹膜到ル處滑澤ニシテ腸間膜ノ脂肪量中等血管殆ンド空虚ナリ。横質内處々ニ腐敗瓦斯ヲ存シ、脾ニ腫大ナク腸管ハ淡汚赤色ヲ呈ス。腹腔内臓器ノ位置ニ異常ナシ。膈蓋周囲ノ組織ハ著シク黃色ヲ呈ス。腹腔内ニハ汚赤色ノ微濁液約四十立方仙達アリ。膈膜ノ高サ左ハ第五肋間、右ハ第五肋骨ノ下緣ニ在リ。

其一、頸胸臓器

十八、頭部ノ組織ハ血液ノ浸潤ニヨリ一般ニ暗赤色ヲ呈シ、右側ニ於テ特ニ著明ナリ。頸腺腫大ス(大豆大乃至蠶豆大)。

十九、肋軟骨未ダ化石居ラズ。刀ノヨリテ容易ニ切断シ得。組織狀突起亦硬化セズ。胸骨ヲ肋軟骨ト共ニ切除シテ胸腔ヲ開檢スルニ、右肺ハ充分ニ露出スルニ反シ、左肺ノ前縁ハ僅カニ之ヲ見得ルノミ。

二十、胸腺。前縁兩端ノ約上三分一ニ於テ、左右兩葉ヨリ成ル胸腺ヲ見ル。右葉ハ長サ五、幅二仙達ヲ算シ。左葉ハ長サ五、幅二仙達ノ上部ト長サ五、幅〇・五乃至一〇仙達ノ下部トニ分ル、厚サハ右葉約一仙達、左葉ハソレヨリ稍厚シ表面滑澤ニシテ、汚穢淡黃色ヲ呈ス。

表面断面ノ性状共ニ略左肺ニ同ジ。

二四、頭部ノ諸臓器ヲ一聯ニ取出スルニ、口腔内ニ一條ノ蠅蟲在リ、咽頭部及舌上ニハ魚卵様ノ顆粒物多量ヲ存セリ(之ヲ顕微鏡下ニ檢査スルニ、舌ノ絨狀乳頭ノ脫離セルモノナルヲ確メ得タリ)。食道、喉頭及氣管内容ナク結膜一般ニ汚穢赤色ヲ呈ス、舌根部ニ於ケル濾胞及其附近ノ淋巴組織腫大シ、左右側ノ扁桃腺ハ約二蠶豆大ナリ。

其二、腹臓器

二五、脾臟。表面汚穢淡赤色ニシテ、中ニ多量ノ腐敗瓦斯ヲ存シテ膨大シ水中ニ浮上ス、故ニ其大サヲ測定セズ。断面ハ暗赤色ヲ呈シ、輕壓スレバ實質ハ多量ノ瓦斯ヲ含メル軟泥様物トナリテ漏出シ、細檢スルニ由無シ。大豆大ノ副脾一個ヲ有ス。

二六、脾臟。實質内ニハ多量ノ腐敗瓦斯ヲ滿シ、表面一般ニ汚穢淡赤色ヲ呈ス。断面ハ顆粒狀ニシテ表面ニ比シ其色稍濃シ。

二七、左腎。被膜内ニハ多量ノ腐敗瓦斯ヲ含ミ、割斷容易ナリ。表面ハ暗赤色ヲ呈シ、質極メテ軟ナリ。大サ一〇・〇一六・〇一三。〇仙達。断面ノ色表面ニ比シ濃、血液ノ浸潤ト死後ノ軟化トニヨリテ實質ノ性状ヲ細檢スルニ由無シ。右腎被膜割斷シ難ク、大サ一〇・〇一六・〇二二・八仙達。其他ノ性状ハ略左腎ニ等シケレドモ色一般ニ淡ナリ。

二八、膀胱。空虚、粘膜滑澤、蒼白ナリ。

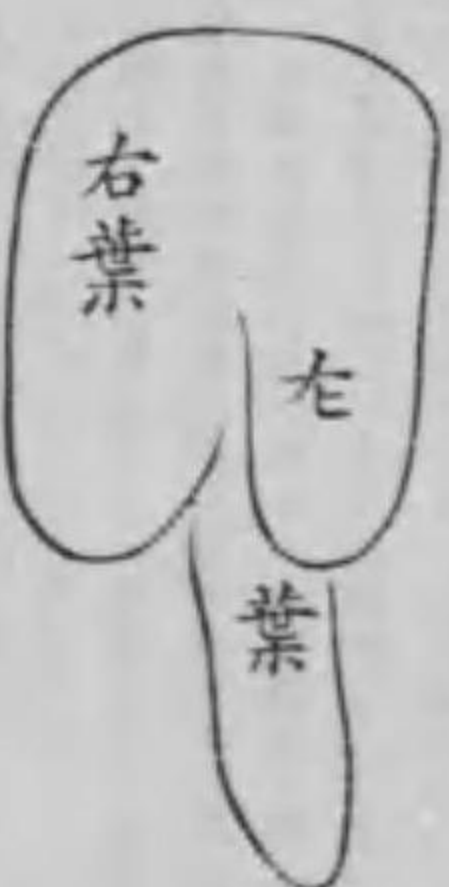
二九、十二指腸内ニハ汚穢淡黃色ノ濃厚液少許アリ、粘膜ノ色殆ンド其内容ニ同ジク、膜下ニ多量ノ腐敗瓦斯ヲ容ル。輸膽管ノ通否ハ體腔空虚ニシテ檢スルヲ得ズ。

三〇、胃中ニハ多量ノ瓦斯ト食物ノ殘餘少許トヲ存ス(米飯及わかめ)結膜一般ニ淡綠色ヲ帶ビ、軟化シテ割斷シ易ク細檢スル

第二編 身體ニ於ケル犯罪ノ痕跡検査

一 急死々體検査

ヲ呈シ、小葉ノ分界明瞭ヲ缺ク。(左圖参照)



断面ハ淡汚赤色ヲ帶ビ、實質甚シク軟化ス。

二一、左右肺臟ニ檢着ナク、右胸腔内ニハ異常ノ内容ナシ。左胸腔内ニハ暗赤色ノ流動液約六十六立方仙達ヲ存ス。

二二、心臓内ニハ左胸腔ニ於ケル同様ノ液約十立方仙達有リ、心臓表面汚穢淡赤色ヲ呈シ、脂肪中等量血管内殆ンド空虚、外膜下ニ腐敗瓦斯ヲ存ス。左右心内空虚ニシテ房室開口ニハ容易ニ二指ヲ通ズ。冠狀溝部ニ止針頭大ノ滲血點ヲシキモノ一、二個存スト雖、腐敗高度ニシテ其眞否ヲ確定スルコト能ハズ。心臓ノ筋質一般ニ汚穢帶淡赤色ヲ呈シ、著シク軟化シテ破碎シ易ク、肉柱及乳頭筋ノ發育不長ナリ。輕壓スレバ實質間ヨリ多量ノ腐敗瓦斯ヲ漏出ス。大動脈及肺動脈口ニ濁水スルニ濁水セズ。心臓ノ内膜ハ一般ニ汚穢帶淡赤色ニシテ、大動脈ノ管腔狹ク、内膜ハ血液ノ浸潤ニヨリ汚赤色ヲ呈ス。硬變ナシ。各層膜ニ硬結短縮等ヲ見ズ。

二三、左肺表面滑澤ニシテ、前部ハ帶淡赤色ヲ呈シ、後部ハ帶暗赤色ニシテ、前部ニ比シテ氣量少シ。断面ノ色略表面ノ如クナレドモ、稍淡ナリ。輕壓スレバ汚赤色ニシテ殆ンド氣腫ヲ含マザル液多量ヲ漏出ス、實質ハ軟化シテ破壊シ易ク、氣管及氣管枝内ニハ異常ノ内容ナク、其結膜ハ一般ニ汚穢赤色ヲ呈ス。右肺。

コト能ハズ。

三一、肝臟表面滑澤ニシテ帶淡汚赤色ヲ呈シ、質其軟ナリ。被膜下ニ腐敗瓦斯ノ充溢スルヲ透見シ、投水スレバ浮上ス。大サ二七一・一五七・仙達(腐敗瓦斯ノ爲メ多少膨大ス)。断面ハ淡汚褐色ヲ呈シ大小不同ノ空洞數多ク在リテ蜂窩狀トナリ破碎シ易ク、壓スルモ血液ノ漏出スルヲ見ズ。體腔ハ空虚ニシテ結膜ノ性状常ノ如シ。

三二、小腸 上半部ニ於テハ汚穢淡赤色ノ濃濁ナル内容物中等量ヲ存シ、結膜下ニハ所々ニ腐敗瓦斯ヲ存ス。下半部ニ於テハ内容漸次稠度ヲ増シ、其色モ亦濃厚トナル。結膜ノ色ハ一般ニ蒼白ニシテ腐敗ニヨリ所々ニ汚穢綠色ヲ呈スル部アリ。下半部ニハ刺ル處氣腫ノ腫大セルヲ認ム。

三三、大腸内ニハ黃色ノ軟便少量ヲ存シ、結膜ノ性状ハ略小腸ノ下部ニ同ジ。

三四、下大動脈。空虚、内膜滑澤柔順ニシテ血色素ノ浸潤ニヨリ稍暗赤色ヲ帶ブ。

乙、檢 査

一、本屍ノ死因ハ腐敗高度ナル爲、剖檢的所見ノミニヨリテ之ヲ確定スルコトハ不可能ナリ。然レドモ
二、解剖檢査記録中ニ掲ゲタル、
(イ)頭部及小腸并ニ大腸氣腫ノ腫大スルコト(此記録第二四第三二三三項)
(ロ)舌根部ニ於ケル舌濾胞及其附近ノ淋巴組織腫大スルコト、(此記録第二四項)
(ハ)大人ニアリテハ進行消失ス可キ、胸腺ノ尙遺殘スルコト、(此記録第二〇項)
(ニ)心臓ノ肉柱及乳頭筋ノ發育不長ナルコト及大動脈ノ管腔狹

キコト、(記註第二項)
(ホ)年齢ニ比シ、胸骨ノ鼓狀突起、肋軟骨ノ軟ニ過グルコト、
(記註第十八項)
等ノ事實ヲ綜合スル時ハ安○郎ハ所謂淋巴性體質ト稱スル一種ノ
異常體質ヲ有スルモノナリト察知セラル。
三、此淋巴性體質ハ普通ノ注意ニテハ生前之ヲ認定スルコト能ハ
ズト雖、
四、淋巴性體質ガ些細ナル出来事ニ依リ、往々急死スルコトアル
ハ吾人ノ既知スル所ナリ。

中、多少著明ナル異常所見アルモ、尙急死スベキ
程度ニ至ラザル場合

剖檢ノ結果一面身體ニハ一定ノ病變ヲ發見シ、他面ニハヤ、強キ損傷等ヲ見出し、而モソノ何レモ直接
急死スル程度ニ達セザル場合、直接死因ヲ何レニ歸スベキヤ、或ハ病變損傷等ノ共同作用ニ依リテ死ヲ來
セシモノナルヤ、又ハ數多ノ損傷ガ略同程度ニ一人ノ死體ニ附加サレタル場合、ソノ直接死因ヲ決定スル
ハ、甚ダ困難ナル事業ニシテ、通常ハ最モ生命ニ必要ナル臟器ニ在ル損傷或ハ病變ヲ直接死因ト見做ス
モノトス、然レドモ之モ斯ク一概ニ論去シ能ハザルモノニシテ、個々ノ事件ニ從ヒテ、死前ノ病症、周圍
ノ事情等ヲモ考究シテ認定ヲ下シ、而モ時トシテ如何ニ手段ト考量トヲ費スモ、到底人力ヲ以テソノ直接
死因ノ闡明シ能ハザルコトアリ。此際ハ鑑定書ニ極メテ卒直ニソノ點ヲ記載シ、或ハ司法官ノ希望ニ依リ
大略ノ想定ヲ附記スベシ。

下、死因トナリ得ベキ著明ナル異常所見アル場合

單一一個ノ死因トナリ得ベキ著明ナル異常所見アル場合ハ、ソノ認定甚ダ容易ナレドモ、此ノ如キ損傷
或ハ病變ノ一個以上併在スル時ハ、甚ダ診斷ニ苦シムモノナリ。此程度ノ損傷數多アル場合ハ、ソガ附加

死因ノ綜合

著明ナル死因

死因ト事實

隨伴狀況

死體現象

サレタル時間ノ關係、損傷ヲ被レル臟器ノ生命ニ對スル必要ノ程度ニ注意シ、最モ生命ニ必要ナル臟器ニ
最初ニ大ナル損傷ヲ加ヘタルモノガ、直接死因ニ對スル責任ヲ負フベキモノトス。而モ個々ノ場合ニ依リテ
種々ノ事情ノ存スルモノナレバ、醫師ハ只事實ノミヲ記載シテ、最後ノ判定ヲ司法官ニ委スベシ。

茲ニ注意スベキハ死者ニ素因ニアリテ、加害者ガ加ヘタル程度ノ加害力ニ由リテハ、通常健康ノ人ナレ
バ到底死ニ至ルベキ損傷ヲ來サザルニ、ソノ人ニハ思ハザル大損傷ヲ來シ、コレガ直接死因トナルコトア
リ。醫師ハカ、ル素因或ハ病變ヲ死者ノ體中ニ見出シタル場合ニハ、宜シク鑑定書ニ記載シテ、司法官ノ
注意ヲ求ムベシ。例ヘバ梅毒或ハまらりあノ爲メ脾臟肥大ヲ來シ質甚ダ破碎シ易クナリシモノハ、比較的
小ナル暴力ニヨリテ脾臟破裂ヲ來シ死ニ至ルコトアリ。或ハ胎内ニ於テ已ニ甚シキ疾病ニカ、リ、假令生産
ストモ、産後數時間ニシ死ニ至ルガ如キ産兒ニ、産婦ガ胸部ニ微力ノ壓迫ヲ加ヘタルタメ死ニ至リシガ如キ
或ハ心臟病者ノ胸部ニ對スル小打撃ガ辨膜ノ破片ヲ容易ニ腦ニ送リテ死ヲ招來スルガ如キ場合之レナリ。
急死ヲ突然來ス病症ハ腦出血、動脈瘤破裂、諸種ノ腦膜炎、腦腫瘍及膿瘍、腦血管栓塞氣道ノ閉塞、大
出血、大血管栓塞、内臟破裂、肺炎、中毒、急性傳染病等擧ゲテ數フベカラズ。

二、隨伴狀況

死者ノ近傍ニアル種々ノ隨伴狀況ヲ検査スル時ハ、意外ノ論據ヲ得ルコトアリ。例ヘバ死者ノ居室ニ散亂セ
ル藥瓶ヲ檢シテ中毒検査ニ對スル方針ヲ確定シ、或ハ衣服ニ在ル切り傷ニコリテ、兇器ヲ決定シ得ルガ如シ

ホ、死體現象

死後人體ニ起ル腐敗、分解等ノ現象、即死體現象ハ法醫學者ニ取リテ甚ダ大切ナルモノナリ。前述ノ如

死ノ徵候

ク死後ノ血色素低下ト鬱血トヲ誤診シ、或ハ胃粘膜ニ於ケル死後消化ト血色素滲潤トヲ見テ中毒ト思考スル如キハ、往々吾人ノ見聞スル所ナリ、故ニ今茲ニ死體現象ニ就テ略述セン。

死ノ最初ノ徵候ハ心臟ト呼吸ノ永久停止ニ在リ、次イデ筋肉弛緩スト雖、其電氣興奮性ハ尙二乃至四時間存在シ、所々ノ上皮細胞及精蟲ハ、個體ノ死後二十四時間乃至四十八時間生存スルコトヲ得。

身體厥冷

身體ニ血液循環止ムト共ニ全身皮色蒼白トナリ、急性發疹、火傷第一度等ハ此際消失ス。身體ノ全ク厥冷シ終ルハ、死後十時間内外ナルモ個人ノ體格及氣候ニヨリテ差アリ。身體ノ大ナルモノ、肥滿シタルモノ、被服ノ十分ナルモノ、熱ノ不良導體中并空氣中ニ在ルモノ及夏時等ハ身體ノ小ナルモノ、瘦セタルモノ被服不十分ナルモノ、冬時或ハ水中ニ在ルモノヨリ體温ヲ保存スルコト永シ。時トシテ死後二十分計リモ體温ノ上昇スルコトアリ。次ニ身體ノ下方ニ在ル部ニ血液ハ次第ニ就下シ、淡紅色乃至紫紅色ノ死斑ヲ

死斑

作ル。死斑ハ死後血液ガ永ク流動性ナレバ流動性ナル程早ク且多ク形成ナル、平均死後三乃至十時間ニシテ出現シ初メ、十五時間位ニシテ死斑最モ著明トナリ、腐敗進行スルニ從ヒ消失ス。就下セル身體部ニ於テモ、壓ヲ受ケタル部ニハ死斑ヲ生ゼズ、一般ニ死斑ノ鮮紅ナル時ハ一酸化炭素、燃燒瓦斯、青酸化合物中毒死及凍死ノ疑アリ。

血液就下

内部ノ臟器ニ於ケル血液モ亦ソノ下方ニ就下ス、之ヲ病的變化ト混同スベカラズ、例ヘバ仰臥位ニ在リシ死體ノ腦ノ後頭部、或ハ肺ノ後下部ニハ病的變化ニアラズシテ鬱血シ居ル如キ之レナリ。

死體強直

次デ死後筋肉ノみをじんノ凝固ニ依リテ死體強直ヲ來ス、之ヲソノ發生スル順序ニ從テ述ブレバ、死後二時間ニシテ先ヅ項、下顎ニ硬直來リ、八乃至二十時間ニシテ全身ニ及ブ。初生兒小兒等ニ於テハ、成

腐敗現象

人ヨリ早ク硬直ヲ來ス。外界ノ温度高キ時、燒死、或毒物中毒ニテハ死體硬直ハ早ク來リ、筋肉ノ良ク發育シタルモノ急死等ニテハ硬直ハ早ク來リ且長ク繼續ス、一般ニ一歳ノ小兒ニテハ平均死後四十時間、大人ニテハ死後九十時間ハ死體強直アリト雖、凡ソ死後四十五時間目位ヒヨリ緩解シ始ム、次ニ上皮ノ剝離シタル所及通常少シク濕潤セル所ハ死後二、三日ニシテ乾燥シ始メ、遂ニ數日ニシテ褐色、羊皮紙樣ニ乾固ス。次デ來ルハ腐敗現象ナリ。即チ眼球ハ光ヲ失ヒ角膜溷濁シ、眼球軟トナル、死斑ハ次第ニ汚穢色トナリ皮色ハ初メ皮下靜脈ニ沿ヒテ淡綠色ヲ帯ビ來ル。即チ最初腹壁綠色トナリ、次第ニ全身ニ及ブ、血清ハ上皮ト眞皮トノ間ニ滲出シ水泡ニ依リ、遂ニ破碎シテ上皮剝離シ、汚綠色ノ濕潤セル眞皮ヲ露出ス。

腐敗ト昆蟲

次ニ腹部及皮下組織ニ腐敗瓦斯ヲ生ジ、指壓スレバ嘔嘔ヲ感ズ、次デ表皮ハ次第ニ剝離シ、爪甲毛髮モ亦離脱シ、綠色ノ下腹部ハ内部ノ腐敗瓦斯ノ壓力ニ依リテ破裂シ、軟部ハ漸次糜爛狀トナリテ流下シ遂ニ骨化ス。死體ニ附着セル昆蟲卵モ亦死後ノ經過日時ヲ決定スル有力ナル證據トナルコトアリ、死後數時間ニシテ口角眼角等ニ已ニ昆蟲卵ノ播殖シアルヲ見ルコトアリト雖、蛆蟲ノ出デ來ルハ死後凡ソ五十時間後ニシテ蛹ノ見ユルハ、一、二週間後ナリ。故ニ空虚ナル蛹殼アルハ死後少クトモ二週以上ヲ經過セルモノナルコトヲ知ルニ足ル。小兒ノ死體ノ全ク骨化スルニ要スル最短時間ハ死後二週間ニシテ、大人ニテハ六週間後ナリシ報告アリ。尙發現シ來ル細菌ノ種類ヲ檢シ、死後ノ經過日時ヲ決定セントセシモノアルモ未ダ成功セズ。内臟ニ於テハ腐敗進行スルニ從ヒ血量少クナル、之レ血液ノ外方ニ滲出スル爲メナリ。時トシテ腐敗瓦斯ノ爲メニ、實質内ニ大小不同ノ空洞數多ヲ作ルコトアリ。斯クシテ内臟ハ次第ニ融解消失ス。内臟中最モ腐敗シ易キハ小兒ノ腦ニシテ、最モ腐敗シ難キハ子宮ナリ。一般ニ腐敗進行ノ速度ハ、死體自身ノ状態ト

木乃伊

屍蠟

第二編 身體ニ於ケル犯罪ノ痕跡検査

一 急死々體検査

一〇六

外界ノ氣象ニ關ス。即チ空氣ノ流通ガ多ケレバ多キ程早ク腐敗スレドモ、モシ乾燥シタル空氣ガ甚シク流通スレバ死體ハ乾燥シ木乃伊ニ陥ルコトアリ。次ニ湿度多ケレバ多キ程早ク腐敗ス。然レドモ脂肪多キ屍體水中ニ在リテ空氣ニ曝露スルコト少キ時ハ、死體ハ所謂屍蠟トナル。之レ體中ノ脂肪ガぐりせりんと脂肪酸ニ分解シ、所謂石鹼化サレテ腐敗ニ赴カズ、原形ヲ有シ殘存スルモノナリ。予ノ實見シタル一例ニテハ頸部右半ハ地水中ニ浸液シ左半ハ空氣中ニ在リシ屍體ヲ發掘シタルコトアリ、ソノ屍體ニテ右大脳ハ屍蠟トナリ、左大脳半球ハ融解シテソノ形ヲ止メザルヲ見タリ。

次デ氣温高キ時ハ腐敗ハ早ク進行シ、寒中ニ於テハ遅ク、而已ナラズ時トシテ全ク停止スルコトアリ。しベリヤノ氷雪中ニ大古時代ノ象肉完全ニ保存スルルハ此例ナリ。要之、腐敗トハ微生物昆蟲等ノ力ニ依リテ死體ヲ分解スルモノナレバ、ソノ發育ニ適當ナル條件アレバアル程早ク腐敗ス。例ヘバ濕氣ニトミ暖キ夏時ニ於テハ、死體ノ分解早ク來ルガ如キ之レナリ。

浸軟

屍體ノ存在スル外界ノ狀況ニヨリ、腐敗ノ進行ニ遲速アリ。今日迄ノ經驗ニ依レバ、空氣中ノ一日目ト水中ノ二日目ト、地中ノ八日目トハ、腐敗進行度相等シキ割合ナリト云フ。水中ニ在ル屍體ガ屍蠟トナル時間ハ、周圍ノ狀況ニ依リテ差アリ、印度ガんじす川ニ沈メタル死體ハ二三日ニシテ屍蠟トナリ、獨逸ニ於テハ二、三月ニシテ屍蠟トナルト云フ。予ノ實見ニ依レバ夏期ニ條城濠ヘ投ゲタル小兒死體ガ、一週日後已ニ屍蠟トナリシ部アルヲ發見セシコトアリ。學者ノ說ニ依レバ脂肪以外ノモノヨリ、屍蠟ハ出來ザルモノト考ヘラル、モ、當教室ノ實驗ニ依レバ、筋肉ヨリモ生ジタルアリ。例ヘバ十九歳ノ男子ノ舌ガ屍蠟トナリ居リシモノアリタリ。次ニ水水中ニ在リシ死體ガ屍蠟トナラズシテ、往々浸軟スルコトアリ。此

死後ノ咬傷

際皮膚ハ褪色シ、表皮爪甲、毛髮ハ脱落シ、軟部ハ水ニ依リ次第ニ膠狀トナリテ流去シ、最後ニ髒帶及骨格ノミヲ殘存シ居ルコトアリ。

尙木乃伊ニ就テ一言スベキハ、營養少ク且水分ノ乏シキ死體ハ木乃伊化シ易ク、ソノ他砒素中毒ニテ死亡セルモノモ然リト云フ。
次ニ死體ガ昆蟲、鼠等ニ咬傷サル、コトアリ。此損傷ト生前ニ生ジタル損傷トハ、所謂生活反應ニ依リテ鑑別シ、決シテ誤リヲ來スベカラズ。蟻ガ顔面上皮ヲ嚙ミシ痕跡ト、硫酸中毒ノ際ノ腐蝕痕跡ト誤認シタル例アリ。之レ口角ヨリ流下セル硫酸ノ腐蝕痕ト蟻ノ顔面ヲ嚙ミシ跡ト相似ノ觀ヲ呈スルコトアレバナリ。

棺内分屍

次ニ附加スベキハ所謂棺内分屍ナリ。姪婦ガ死亡シ腐敗ニ移行シ、腐敗瓦斯ノ爲腹壓次第ニ高クナリ、遂ニ胎兒ヲ棺内ニテ分屍シ居ルコトアリ、之ヲ見テ往々假死ノ狀態ニテ埋葬サレ、埋葬後生還シ分屍ヲナシ、而シテ後又死亡セルモノナリト誤認セラレタル例アリ。

上記ノ死體現象ヲ綜合シ、死體硬直ノ有様、及死斑、各腐敗現象ト死體ノ有場所狀態トヲ顧慮スル時ハ、死後ノ經過日時ノ大要ヲ知ルコトヲ得。然レドモノノ詳細ニ至リテハ、客觀的觀察ノミニテハ到底之ヲ決定スルコト能ハズ。

腐敗進行尺度

かすべる氏ハ死後ノ經過日時ヲ定ムルニ、次ノ尺度ニ依ルベシト云フト雖、氣候ノ異ル我國ニハ應用スベクモアラズ、但シ參考ノ爲メ之ヲ掲グレバ左ノ如シ。

一、死後二十四時間乃至三十六時間經過スレバ、腹壁汚綠色トナリ、眼球軟トナル。

第二編 身體ニ於ケル犯罪ノ痕跡検査

一 急死々體検査

一〇七

- 二、死後三乃至五日間經過スレバ、下腹部ハ黒綠色トナリ、所々ノ皮膚ニ綠色斑ヲ生ジ、鼻口ヨリ血色列ヲ漏ラス。
- 三、死後八乃至十二日目ニハ全身黒綠色トナリ、下腹部ハ膨滿シ爪甲尙堅シ。
- 四、死後十四乃至二十日目ニハ全身ハ赤褐色トナリ、所々ニ水泡ヲ形成シ、皮下組織ニ腐敗瓦斯ヲ生ジ、蛆蟲蟬ヲ見ル眼ハ汚赤色トナリ、爪甲ハ離脱スルヲ得ルニ至ル。
- 五、死後四乃至六ヶ月目ニハ死體軟部ハ全部糜爛狀物トナリテ流去シ骨格化スルモノナリ。

二、身體ニ於ケル損傷検査

甲、一般注意

刑法第二百四十四條 人ノ身體ヲ傷害シタル者ハ十年以下ノ懲役又ハ五百圓以下ノ罰金若クハ科料ニ處ス

刑法第二百五條 身體傷害ニ因リ人ヲ死ニ致シタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス

自己又ハ配偶者ノ直系尊屬ニ對シテ犯シタルトキハ無期又ハ三年以上ノ懲役ニ處ス

刑法第二百六條 前二條ノ犯罪アルニ當リ現場ニ於テ勢ヲ助ケタル者ハ自ら人ヲ傷害セスト雖モ一年以上ノ懲役又ハ五十圓以下ノ罰金若クハ科料ニ處ス

刑法第二百七條 二人以上ニテ暴行ヲ加ヘ人ヲ傷害シタル場合ニ於テ傷害ノ輕重ヲ知ルコト能ハス又ハ其傷害ヲ生セシメタル者ヲ知ルコト能ハサルトキハ共同者ニ非スト雖モ共犯ノ例ニ依ル

刑法第二百八條 暴行ヲ加ヘタル者人ヲ傷害スルニ至ラサルトキハ一年以下ノ懲役若クハ五十圓以下ノ罰金又ハ拘留若クハ科料ニ處ス

前項ノ罪ハ告訴ヲ待テ之ヲ論ス

刑法第二百九條 過失ニ因リ人ヲ傷害シタル者ハ五百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

前項ノ罪ハ告訴ヲ待テ之ヲ論ス

刑法第二百十條 過失ニ因リ人ヲ死ニ致シタル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

刑法第二百十一條 業務上必要ナル注意ヲ怠リ四人ヲ死傷ニ致シタル者ハ三年以上ノ禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

損傷検査

傷害

刑法第二百四十條 強盜人ヲ傷害シタルトキハ無期又ハ七年以上ノ懲役ニ處ス死ニ致シタルトキハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス

刑法第二百四十一條 強盜婦女ヲ強姦シタルトキハ無期又ハ七年以上ノ懲役ニ處ス因テ婦女ヲ死ニ致シタルトキハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス

民法第七百九條 故意又ハ過失ニ因リテ他人ノ權利ヲ侵害シタル者ハ之ニ因リテ生シタル損害ヲ賠償スル責任ニ任ス

民法第七十條 他人ノ身體、自由又ハ名譽ヲ害シタル場合ト財產權ヲ害シタル場合ト同ハス前條ノ規定ニ依リテ損害賠償ノ責任ニ任スル者ハ財產以外ノ損害ニ對シテモ其賠償ヲ爲スコトヲ要ス

民法第七十一條 他人ノ生命ヲ害シタル者ハ被害者ノ父母、配偶者及ヒ子ニ對シテハ其財產權ヲ害セラレザリシ場合ニ於テモ損害ノ賠償ヲ爲スコトヲ要ス

民法第七十二條 未成年カ他人ニ損害ヲ加ヘタル場合ニ於テ其行為ノ責任ヲ辨識スルニ足ルヘキ知能ヲ具ヘサリシトキハ其行為ニ付キ賠償ノ責任ニ任セス

茲ニ述ブル傷害トハ器械的暴力ニ依リテ、身體ノ一部、或ハソノ官能ノ損傷セラル、ヲ云フ。

損傷ヲ検査スルコトハ、法醫學的事件ニ於テ最も多ク遭遇スルモノニシテ、統計上身體ニ對スル罪ノ大多數ハ傷害ノ罪ナリ。

一、損傷ノ在ル部位及ソノ形狀。

二、兇器ノ種類及ソノ使用法。

三、自他傷ノ別。

四、損傷ノ結果。

損傷ノ記載

身體ニ於テ損傷ヲ發見シタル場合ニハ、注意シテソノ小ナルモノト雖、看過スルコトナカラシムルコトヲ期スベシ。ソガ記載ニハ左ノ事項ニヨル。尙之ヲ描寫シ或ハ攝影シ置クコトヲ得レバ重寶ナリ。

(イ)部位。損傷ノ存在スル部位ハ、極メテ明瞭ニ經緯ノ兩方面ヨリ云ヒ現ハスベシ。例ヘバ、右眼直下何種、右耳孔ヨリ左何種ト記載スレバ、ソノ存在部位自ラ決定ス。モシ單ニ右眼直下何種トノミ記載シアル場合ニハ、ソノ上下ノ位置ハ明カナレドモ、左右ハ殆ンド何種ノ所ニ在ルカヲ區別スルコト能ハザルガ如キ之レナリ。

(ロ)形状。損傷ノ形状モ或ルベク丁寧ニ記載シ、或ハ一般ニ知ラレタル圓形星形多角形等ノ文字ヲ用ヒ、尙ソレニテモ記載困難ナル場合ニハ、之ヲ圖解スルヲ便利トス。

(ハ)大小。大サモ亦小豆大或ハ大豆大等ノ記載法ニ依リ、或ハ尺度ヲ以テ、ソノ上下徑及左右徑ヲ測定シ置クベシ。

(ニ)數。損傷ノ數モ亦後來種々ノ關係ヲ惹起スルモノナレバ、注意シテ記載スベシ。

(ホ)創線創底并創管ノ性状方向ニ就テモ、ソガ不規則ニシテ凹凸ヲ呈スルカ、或ハ滑澤ナルカ、或ハ辨狀ヲ呈セザルヤヲ記載スベシ。之ニ依リテ兇器ノ種類或ハ兇器ノ作用シタル方向ヲ知ルコトヲ得ルモノナリ。

(ヘ)損傷ノ結果ノ判定ハ頗ル困難ナル問題ニシテ、小ナル損傷ニテモ、主要ナル部位ニ在ルカ、出血多キカ、或ハ創傷傳染ヲ來セシ場合ニハ、意外ノ結果ヲ來シ、反之、損傷比較的大ナルモ、清潔ナル創傷ナル時

ハ大ナル障害ヲ殘サズシテ、早期ニ治療スル事アリ。此等ハ個々ノ場合ニ依リテ判定スルノ外ナキモノトス。

乙、鈍器損傷

損傷ハ一般ニ兇器ノ種類ニ依リテ、鈍器損傷、銳器損傷、及銃創ノ三種類ニ分ツ。今順次之ニ就テ述ベン。損傷ノ中ニテモ、鈍器損傷ハ最多ク吾人ノ遭遇スルモノニシテ、吾人ノ周圍ニ在ル多クノ物品ハ、多クハ所謂鈍器損傷ヲ吾人ニ附加スルコトヲ得ルモノナリ。例ヘバ手拳、棒、木枝等ニ依ル打撲傷、高所ヨリノ墜落、或ハ轆轤等ニ依リテ起ル損傷ノ如キ皆之レナリ。鈍器ニ依リテ身體ニ起ル損傷ヲ、表皮剝脫、皮下溢血、創傷及神經系統ノ振盪、内臓ノ破裂、或ハ轉位、骨折、脱臼等トス。

一、表皮剝脫

コハ鈍器ガ皮膚ノ表面ニ、接線ノ方向ニ働ク時ニ起ルモノニシテ、多クハ上皮剝脫シテ下層ノ眞皮ヲ露出シ、少許ノ出血ヲ伴ヒ、或ハ伴ハズ數日ニシテ、痕痕ヲ殘サズ治癒ス。表皮剝脫ハ自己ノミ單獨ニ來ルコトアリ、又ハ他ノ損傷ニ伴ヒテ來ル事アリテ、外科的ニハ殆ンド無意味ノモノナレドモ、法醫學的ニハ非常ニ必要ナルモノニシテ、其性状方向等ニ依リテ、鈍器ノ種類、或ハソガ如何ニ作用セシカヲ知ルニ、價値大ナルモノナリ。往々ニシテ表皮剝脫ガ生前ニ生ジタルモノナルカ、死後死體所置ノ際等ニ生ジタルモノナルヤノ區別必要ナルコトアリ。死後ニ生ゼシ表皮剝脫ハ、蒼白ニシテ直ニ乾燥シ褐色ヲ呈シ、恰モ羊皮紙様トナル。然ルニ生前ニ受ケタルモノハ、出血後痂皮ヲ作り、切檢スレバ皮下溢血アルコト多キ故兩者ノ區別自ラ明ナリ。

鈍器損傷

表皮剝脫

皮下組織が挫折ヲ受ケ、ソノ血管が破碎セラレ、該組織間ニ出血スルモノヲ皮下溢血ト云フ。皮下溢血ト剖檢ノ際血管ヲ切斷セル爲メ出血セルモノト、一見相似タルガ如キモ、前者ハ容易ニ拭除スルコト能ハザルモ、後者ハ直ニ拭除スルコトヲ得ルヲ以テ、ソノ區別容易ナレドモ、時トシテハ剖檢ノ際血管ヨリ流出セルモノヲ、ソノマ、暫時放置スル時ハ、血色素が周圍ノ組織中ニ滲透シ行キ、恰モ皮下溢血ノ如キ觀ヲ呈スルコトアレバ、注意スベキモノトス。一般ニ鈍器損傷ヲ來セシ皮下組織ノ直下ニ骨質等アレバ、皮下溢血ヲ來シ易シ、ソノ他、血管壁ノ脆弱ナル老人及小兒ニモ、皮下溢血容易ニ生ズルモノナリ。皮下溢血ノ大小ハ、勿論、兇器及暴力ノ大小ニ比例スルモノナレドモ、被害部ノ性状ニモ大ニ關係スル所アリテ皮下組織ノ脆弱ナル頭部眼瞼ノ如キハ、甚ダ皮下溢血ヲ來シ易シ。

皮下溢血ノ形狀ハ多クハ圓形或ハ楕圓形ニシテ、兇器ノ形ニ相當セザルコト多キモ、時トシテ明瞭ニ兇器ノ形狀ヲ記録シ居ルコトアリ。例ヘバ、分枝セル木枝ニテ打撲サレテ生ジタル皮下溢血ガ、樹枝様ノ形狀ヲ呈セルガ如キ之レナリ。

皮下溢血ガ新鮮ナル場合ニハ、多少皮膚ノ表面ヨリ高マリ、藍色或ハ帶青赤色ヲ呈シ、時間ノ經過スルニ從ヒ、次第ニソノ腫脹ヲ減ジ、漸次暗赤色、赤褐色、帶綠褐色、淡綠色、淡黄色トナリ、遂ニ褪色スルモノナリ。

皮下溢血自己トシテハ、單ニ一ツノミ存在スルノミニテハ、別ニ身體ノ健康ヲ害スルコトナケレドモ、餘リ數多集合シテ作用スル時ハ、意外ノ結果ヲ見、手足ノ壞疽等ヲ來スアトアリ。時トシテ身體ニ及ビタル暴

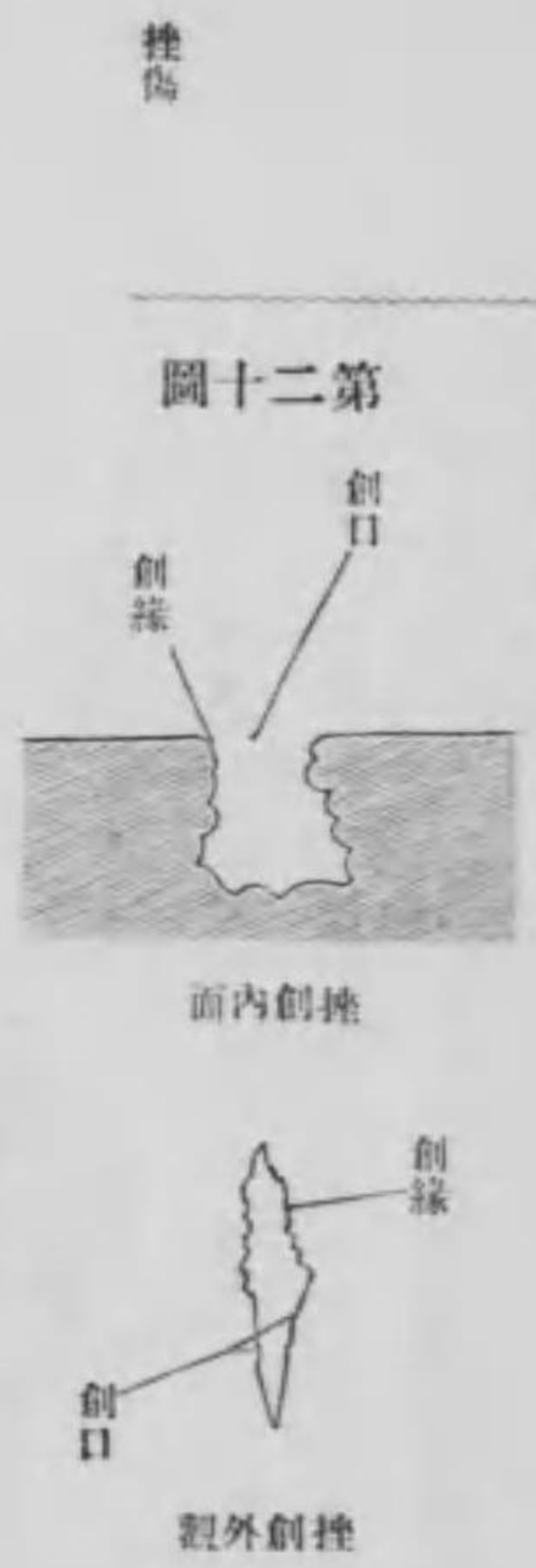
力ハ、甚ダ大ニシテ内臟ニ深甚ナル振盪、或ハ破裂ヲ來シナガラ、身體ノ表面ニハ極メテ輕度ノ皮下溢血ヲ生ジ居ルノミナルコトアリ、之レ身體表面ノ損傷ノミヲ見テ、輕々ニ診定ヲ下ス能ハザル所以ナリ。

茲ニ注意スベキハ、何等暴力ノ加ハリタルニ非ラズ、病的ニ皮下溢血ヲ來ス場合アリ。例ヘバ、敗血病、壞血病、血友病、紫斑病、及營養不良、急性熱性傳染病、磷中毒ノ際ニ見ル皮下溢血ノ如キ之レナリ。

死體ニ藍色或ハ帶赤藍色ノ斑アレバ、之レヲ切開シテ先ツ死斑ナルヤ或ハ皮下溢血ナルヤヲ鑑別シ、ソガ後者ナレバ、切開ノ際ソノ溢血ノ狀體ニヨリテ、新古ヲ區別スルコトヲ得ルコトアリ。即チ溢血ガ古クナレバナル程、水分ヲ失ヒテ濃厚トナリ、色ハ次第ニ變色ス。例ヘバ、溢血後第一日ニハ暗赤色トシテ、此ノモノガ、數日ヲ經レバ甚シク褐色ヲ帶ビ、水分次第ニ乏シクナリ、遂ニハ綠色殘滓狀ノモノトナル。此時之ヲ鏡檢スレバ、斑中ノ赤血球ノ數減ジ、時トシテハまじいでんノ結晶ヲ見ルコトアリ。但シ上記ノ事實ハ、腐敗現象ノ甚シク進行セル死體ニハ、應用スルコト能ハズ。之レ腐敗ノ進行ニヨリテ、血色素ノ滲潤ヲ來セバナリ。

ハ、挫傷、裂傷、咬傷

鈍器が大ナル力ヲ以テ身體ニ作用スレバ、諸種ノ創傷ヲ生ズ、暴力ノ方向ガ皮膚面ニ直角モシクハ之ニ近キ時ハ挫傷ヲ來シ、皮膚破レ兇器ガ創傷内ニ進入スルコトアリ。次ニ鈍器皮膚面ニ斜ニ作用スル時



圖十二第

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査 二 身體ニ於ケル損傷検査 一一六

身ノ挫碎、或ハ離斷等來ルモノニシテ、是等ノ診斷及結果ハ、普通外科學ノ述ブル所ト同ジク、茲ニ特記スルノ必要ヲ認メズ。

丙、銳器損傷

1、切創

切創ハ有及ノ銳器ヲ以テ、皮膚或ハ組織上ヲ索引スルニ由リテ起ルモノナリ。切創ハ多ク直線狀ヲナシ

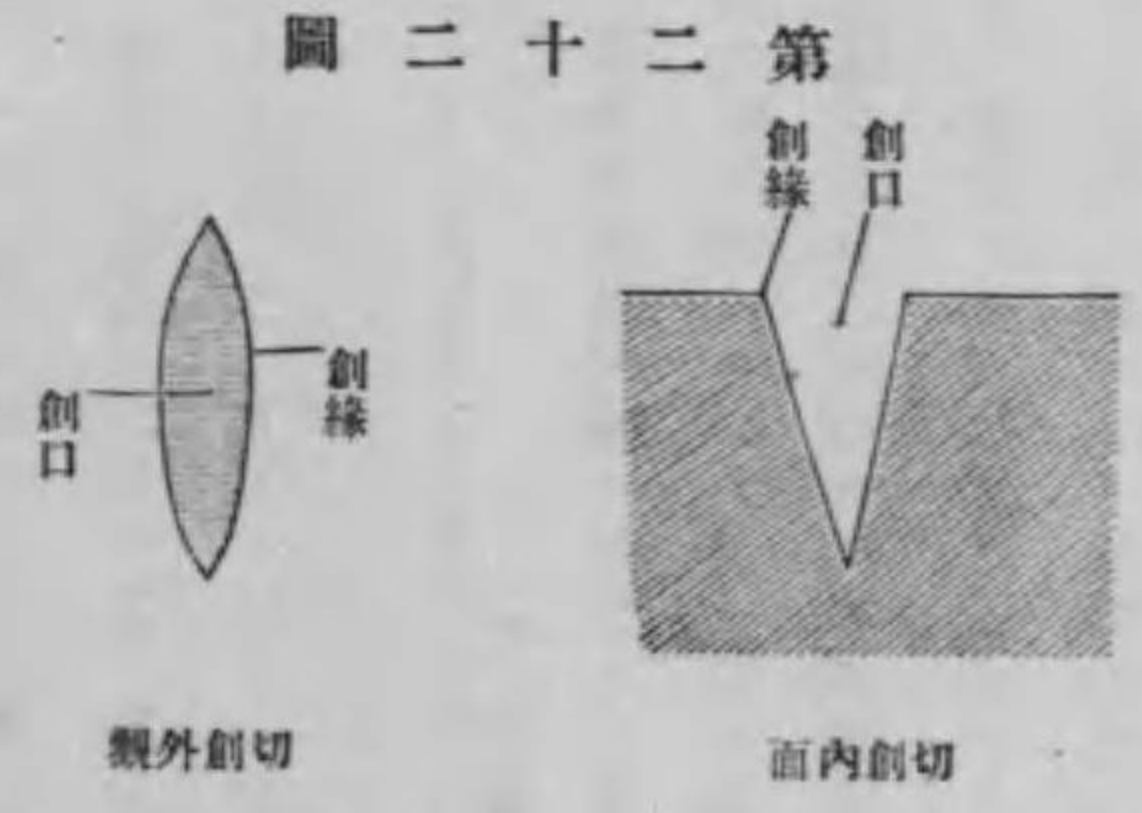


圖 二 十 二 第

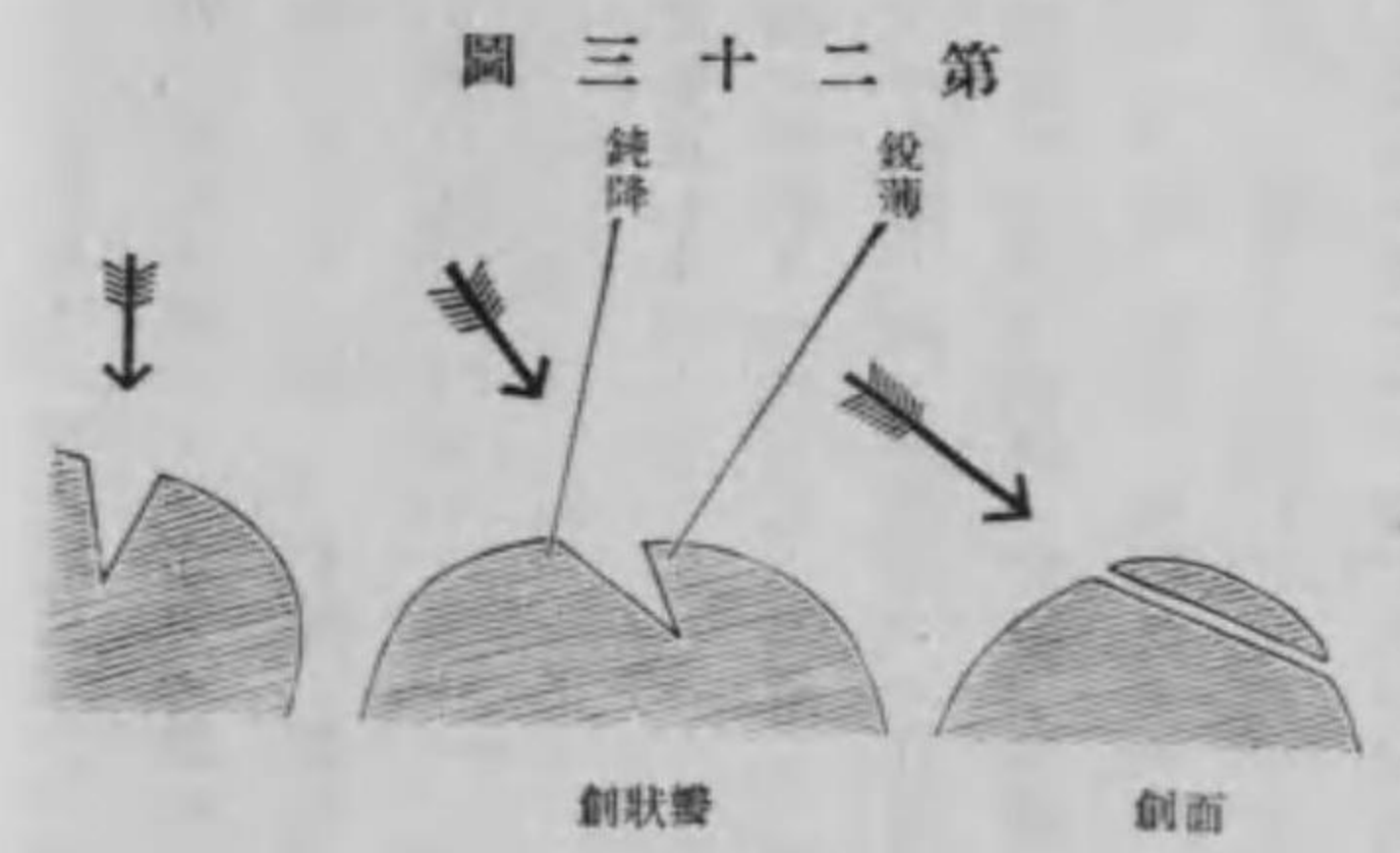


圖 三 十 二 第

創縁整銳ニシテ創端ハ尖レリ、創面ノ一方ハ銳薄トナリ、他方ハ鈍降スルニ依リテ、兇器ノ作用シタル方向ヲ知リ又創中組織ノ橋架スルコトナシ。故ニ鈍器損傷トハ明ニ區別スルコトヲ得。時トシテ一及ニテ數個ノ傷ヲ生ズルコトアリ、例ヘバ關節ヲ屈折セシ時ニ切ラレ、之ヲ伸展スレバ方向異ナル二創ノ如ク見ユルコトアルガ如シ。

創ノ深サハ兇器ノ重サト用ヒシ力ト銳度ニ正比シ、組織ノ抵抗反比ス。創

傷膨開ノ度ハソノ組織ノ裂開方向ト萎縮度トニ關係ス。

鑑定實例

府郡村字〇〇〇〇内縁ノ妻 田〇〇 四十年

大正〇年〇月〇日〇〇〇〇裁判所判事〇〇〇〇ハ〇〇〇〇殺人未遂被告事件ニ付右〇〇ノ創傷ヲ檢シテ

一、創傷ノ状態及部位
二、兇器ノ種類及用法
三、豫後

ヲ鑑定スベキ旨ヲ京都帝國大學附屬醫院ニ於テ予ニ命ゼリ依テ同日午後零時五十分乃至同二時三十分同醫院外科教室ニ於テ同人ノ身體ヲ檢査セルニソノ所見左ノ如シ

甲、檢査所見

體格中等、皮下脂肪層及筋肉ノ發育佳良、皮膚ハ稍黃色ヲ帶ビ血色ニ乏シク呼吸安靜、脈搏力アリト雖顔貌苦悶ノ狀ヲ呈シ所々ニ多量ノ乾血ヲ附着ス喉胸部等ニハ假繩帶ヲ施セリ依テ之ヲ解除シテ逐次左ノ損傷ヲ檢出セリ

(イ)下口唇ハ右口角ヨリ約半徑内前方ニ於テ上ヨリ下ニ向ヒテ一〇〇度許リ斷絶シ創面ハ前右方ヨリ後左方ニ向フ

(ロ)舌ノ上面ニハ(イ)傷ト同方向ノ創傷アリ即舌體ノ前三分ノ一ト中三分ノ一トノ境界部ニ前右方ヨリ少シク後左方ニ斜走シ深サハ右端ニ於テ殆ンド舌ノ下面ニ達シ左方ニ至ルニ從ヒ漸次淺狭トナリ左端ニ於テハ舌縁殆ンド傷ケラレズ

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査 二 身體ニ於ケル損傷検査 一一七

(ハ)頭部ノ上方ニ小指頭大楕圓形ノ皮質缺損アリテ平滑ノ皮下組織ヲ露出シ所謂創ヲ形成ス

(ニ)頭部ト右下顎隅ノ殆ンド中央ニ淺キ約三〇〇度長ノ皮創アリ左上方ヨリ右下方ニ向ヒソノ兩端尖銳ナリ

(ホ)左胸鎖乳頭筋ノ殆ンド中央部ニ(二)創ヨリ少シク長キ殆ンド圓形ノ皮創水平ニ横走ス

(ヘ)右胸鎖乳頭筋ノ下三分ノ一ト中三分ノ一ノ境界部ニ一五種長裂水形ノ皮創殆ンド水平ニ走ル

以上(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)(ヘ)ノ三創ハ何レモ淺クシテ創底ハ僅ニ皮下組織ニ達ス

(ト)左頸部ニハ鎖骨ノ上方約二〇〇度ノ處ニ同骨ト平行ニシテ横走セル一大皮創アリ前部ハ殆ンド正中ニ始マリ長サ約四横指徑ヲ算シ其中央ニ於テ約二〇〇度彎曲シ左右兩端ハ尖銳ナリ創縁ハ上下共前部狀ヲナシ創底ノ右部ニハ甲狀腺、左部ニハ胸鎖乳頭筋ノ前部ヲ見ル受瘻ノ際本創ヨリ長シク出血スルガ故ニ其源ヲ探グルニ創ノ深部ニ於テ内頸靜脈管壁ノ約三分ノ二横斷セラレ居ルヲ見ル

(チ)胸骨部ニハ縱走ノ一大皮創アリテ上端ハ胸骨柄ノ上部ニ始マリ胸骨ノ殆ンド正中ヲ下走シ創狀突起ト膈ノ中央部ニ達ス創口ハ著シク彎曲シテ左右兩縁ノ距離ニ乃至三横指徑アリ創面ニハ至ル所皮下脂肪層ヲ露出シ創底ノ最深キ所上部ニ於テハ胸骨ノ骨膜ニ達シ下部ニ於テハ直腸部ノ筋膜ヲ傷クト雖胸腔及腹腔ニ達セズ左右創面ハ創底ニ向ヒ明ニ楔狀ヲナス

有及ノ鏡器ヲ以テ組織ヲ打撲スル時ニ起ルモノハ割創ニシテ、日本刀鉞等ニテ受ケタル創傷ハソノ適例

口、割 創

- (リ)前(チ)創ト始メ直角ヲナス深キ皮創アリソノ左端ハ前創ノ下端ニ連シ右端ハ殆ンド右乳線ニ達スソノ他ノ性状ハ(チ)創ニ同ジ
- (ヌ)左前膊後面ノ殆ンド中央部ニシテソノ外側ニ近キ所ニ四稜長一極細裂孔形ノ皮創アリ上外方ヨリ内下方ニ向ヒ創底ニハ僅ニ皮下組織ヲ露出ス
- (ル)左拇指球ハソノ上縁ニ沿ヒ殆ンド弓状ニ傷ケラレソノ上創縁ハ平滑ニシテ鈍降シ下創縁ハ稍鋸齒状ニシテ鋭薄トナリ一大齧狀ヲ作り創底ハ拇指球ノ中部ニ達シ後面ノ創面ニハ短屈伸筋及短外轉筋等ヲ見ル但シ此等ノ筋ハ無底ナリ
- (ツ)左拇指第一節屈面ニモ前創(ル)ト殆ンド同形同向ノ皮創アリソノ後創面ニ長屈伸筋ノ露出スルヲ見ル
- (ワ)右掌面下三分ノ一ノ殆ンド中部ニ約四・〇釐長裂孔形ノ皮創横走シ創底ニハ僅ニ皮下組織ヲ露出ス
- (カ)右小指及環指末節屈面ノ中央ニモ深サ皮下ニ達スル皮創各一個アリ
- (タ)右手背第三乃至第四掌骨々間腔部ニ二・五釐長二・〇釐幅ノ縱創アリ、外上方ヨリ創ニ下方ニ斜走シ兩端ハ尖銳ニシテ創底ニハ皮下組織ヲ露出ス本創ノ周圍ニ微細ナル皮創尙二三ヶアリ
- 上記各創ノ創縁ハ一、二ヲ除クノ他何レモ平滑ニシテ兩角ハ尖銳ナリ創ハ底ニ向ヒ漸次狭小トナリ創ノ横斷ハ之レガ爲メニ楔形ヲ呈ス(附圖略ス)

一、ム〇ノ身體ニハ總計十六ヶノ創傷アリ其部位ハ檢診所見ノ部(イ)ヨリ(タ)ニ亘リ既述セルガ如ク今一々此所ニ再記スルハ往ニ繁雜ヲ來スガ故ニ之ヲ省ク右創傷ノ一般性状ハ殆ンド相同ジク即創縁ハ何レモ平滑ニシテ長サハ遠ニ深サヲ越エ其兩端尖リ創面亦概シテ平滑ニシテ創底向テ漸次集走シ創ノ横斷面ノ形ハ之レガ爲メニ楔狀トナル只大小深淺ハ相同ジカラズソノ内最大ナルモノハ胸骨部ニ位シ最小ナルモノハ右手背ニ在ル(タ)或創ノ周圍ニ存スル微細ナル皮創ナリ面シテ淺キモノハ其創底僅カニ皮下組織ニ達シ深キモノハ深部ノ筋肉ニ達シ或ハ血管ヲ傷ケタリ

二、創傷ノ性状ハ前第一項ニ記述セルガ如クナラガ故ニ其ノ致傷器ガ有及ノ鏡器ニシテ之ヲ引キツ、使用セラレタルコトハ明白ナリ換言スレバ各創共切創ナリ

三、ム〇ノ身體ニハ前記セルガ如ク數多ノ創傷アリト雖創傷傳染病ヲ發シザルニ於テハ生命ニ危險ヲ來ス程ノコトアラザルベク面シテソノ經過佳良ナルガ如キガ故ニ創傷ハ二三日ニシテ治癒スベク大ナルモノモ三、四日ヲ經過セバ大概癒合スベシト推測ス

此鑑定ハ大正〇年〇月〇日着手
同年同月〇日終了
大正〇年〇月〇日

鑑定人 岡 本 操 松岡

第二編 身體ニ於ケル兇行ノ痕跡検査

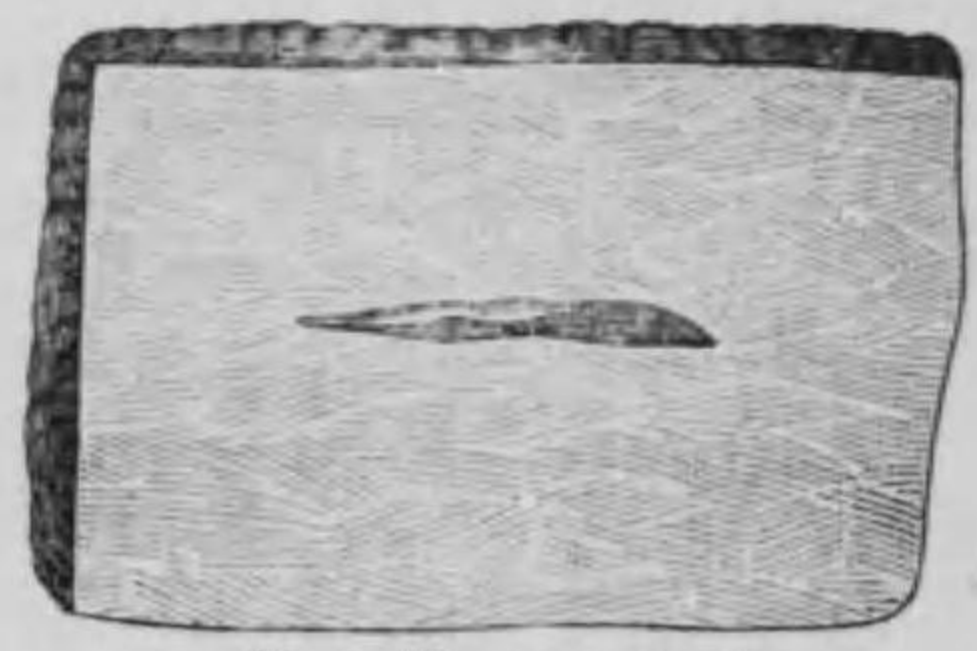
二 身體ニ於ケル損傷検査

圖四十二第



頭蓋ノ創、伐柴ノ刀ヲ以テ生シタル者

圖六十二第



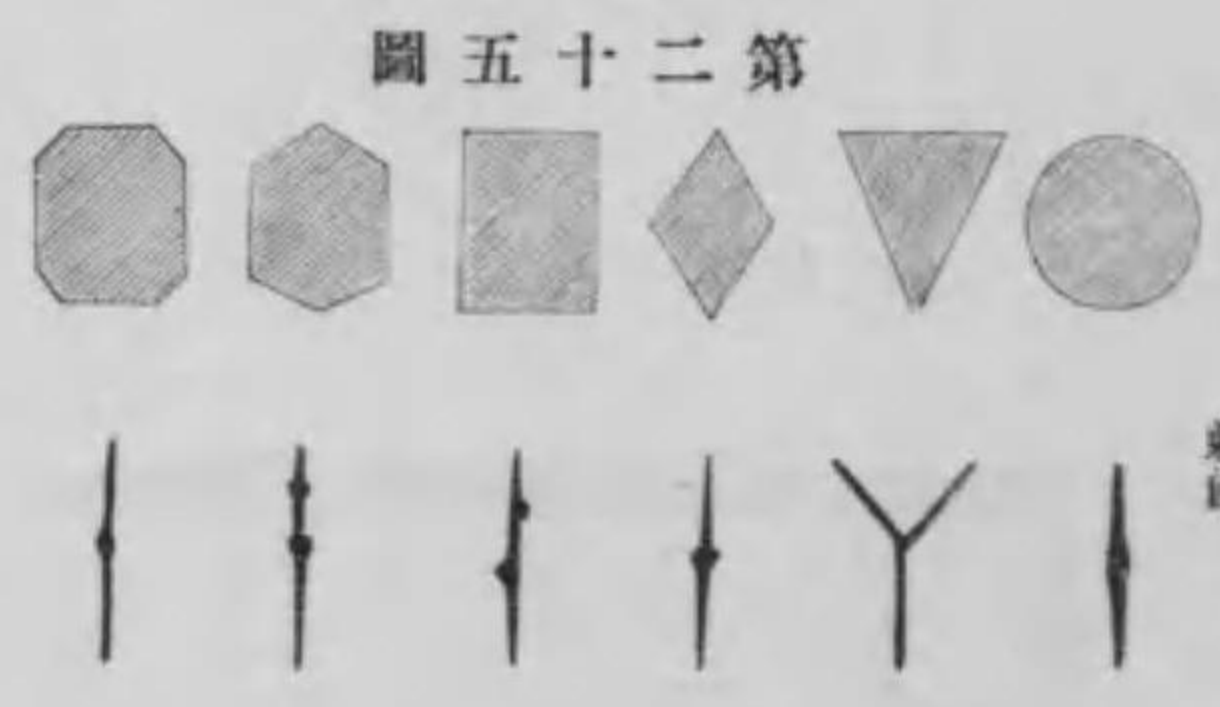
圓錐形ノ尖端ヲ有スル太サ二・五センチメートルノ鐵槌ヲ以テ生シタル披裂狀刺口(自然大)

第二編 身體ニ於ケル兇行ノ痕跡検査

二 身體ニ於ケル損傷検査

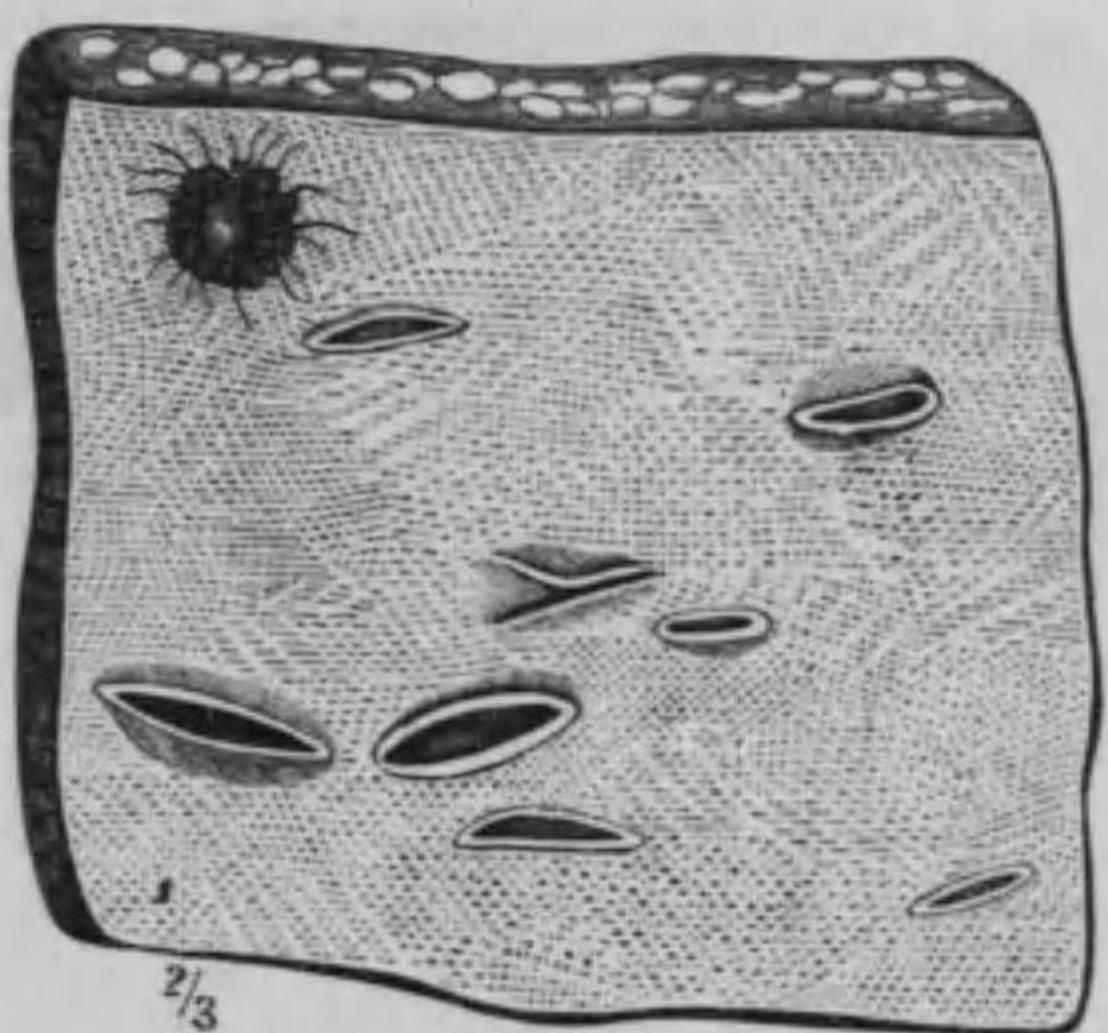
ナリ。創傷ハ大ニシテ深ク、時トシテ骨ニ達シ、創縁ハ線狀、創面ハ滑ニシテ辨狀創ヲナスコトアリ、創傷ハ兇器ノ銳度ト重テ及用キタル力ニ正比シ、組織ノ抵抗ニ反比ス、即チ日本刀ノ如キ銳ニシテ輕キモノニテハ正整ナル線狀創ヲ作り、鉞ノ如キ鈍ナル重キモノニテハ挫傷ト切創ノ混合シタルモノヲ作ル。

ハ、刺 創



刺創ハ細長キ有尖ノ兇器ヲ、組織ニ刺入スル時ニ生ズルモノニシテ、之ヲ刺入口ト創管トニ分ツ。刺入口ハ皮膚ノ分裂方向ト萎縮度トニ關シ、種々ノ形狀ヲ作り、兇器ノ斷面ト一致スルコト少シ。例ヘバ圓形ノ斷面ヲ有スル兇器ニテハ殆ンド線狀、三角形ノ斷面ヲ有スルモノニテハ三放線星形、四角形ノモノニテハ四放線星形、菱形ノモノニ

圖七十二第

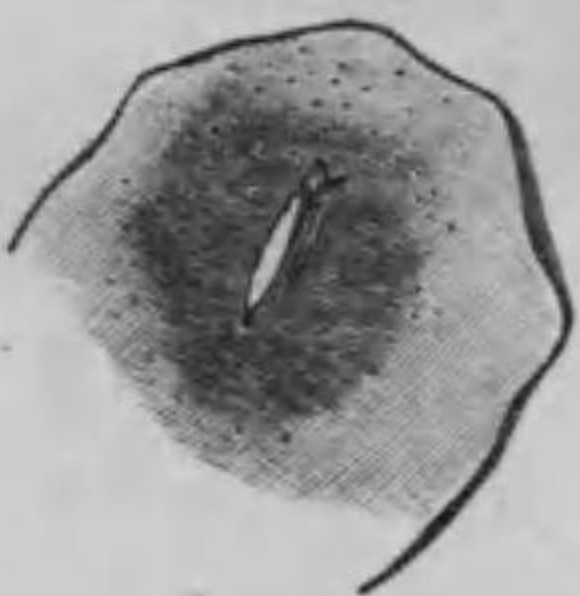


護膜創ニ使ハルセリ一刃性ノ小刀ニ由テ心臟部ニ生シタル九箇ノ刺創 (自殺ニ罹ル)

圖八十二第



八面形ノ刺創ニシテハ其各箇ハ已ニ皮膚ハ一分ノ厚クニシテ生シタル



刃ノ刀背ヲ有スル小刀刃ニ由テ生シタル創 (自然大)

枝シタル刺入口ヲ作ル。故ニソノ分枝ノ方向ヲ以テ刀ノ有及ノ方ナリシト診定スルコトヲ得。刀ヲ刺入シ同時ニ索引スル時ハ、刺切創ヲ生ズ、刺創ハ往々ニシテ體腔ニ達シ、骨或ハ内臓ヲ傷クルコトアリ、移動

例刺鑑定書實

鑑定書 市、區、町、目、番地 西〇〇〇

鑑定實例

性ノ内臓ニ有リテハ刺創ニヨリテ、意外ノ位置ニアルモノヲ傷害セシ例少ナカラズ。予ハらんぶニ倒レカ、リソノハヤノ破片ニヨリ頸動脈ヲ傷ケ出血死ニ至リシ一例ヲ實見セリ。 一般ニ銳器指傷ハ、多クハ第一期癒合ニテ治癒スルモノナレドモ、割創ノ如ク組織ヲ挫滅スル力強キ時ハソノ豫後不良ナリ。又刺創ノ如ク内臓ヲ傷ケ或ハ切創ニテ大血管ヲ破リタル時ノ如キハ往々失血ニ依リテ死ニ至ルモノナリ。

明治〇年〇月〇日〇〇地方裁判所判事〇〇〇ハ〇〇〇〇〇〇殺人被告事件ニ付被告者〇〇ノ死體ヲ解剖シテ

- 一、創傷ノ部位
二、兇器ノ種類
三、死因
ヲ鑑定スベキコトヲ同意ニ於テ予ニ命セラレタリ依テ同日午前十時四十分乃至午後零時三十分〇〇市〇〇區〇〇町〇〇〇〇方ニ於テ同判事及裁判所書記〇〇〇〇官ノ上ニテ解剖セルニソノ所見左ノ如シ

甲、解剖検査記録

第一、外表検査

一、男屍、體格中等營養佳良、皮色ハ右前胸部淡紫赤色ニシテ其他ニハ殆ンド變色部ヲ見ズ死體強直ハ咀嚼筋及四肢ノ諸關節ニ

第二編 身體ニ於ケル兇行ノ痕跡検査

二 身體ニ於ケル損傷検査

強ク存ス

- 二、頭皮ニ損傷ナク顔面右半ハ暗紫赤色ニシテ左半ハ蒼白ナリ左額骨突起部ニハ暗褐色ノ乾固部アリ不正三角形ニシテ尖端ハ下方ニ向ヒ前額ノ長サ四・〇センチメートル長四・五センチメートル表面ハ割裂シテ乾燥セル眞皮ヲ露出シ其周縁不正四凸ニシテ細網脚共〇・五乃至一・四センチメートル切開スルニ鶏卵大ノ出血アリ其他顔面ニハ損傷ナク眼閉チ粘膜暗赤色ニシテ小粟粒大ノ顆粒數多アリ角膜斑紋狀ニ濁濁シ瞳孔ノ大サ左右同大ナリ鼻中ニハ汚灰色ノ結核物少許アリ口唇粘膜ハ暗紫色ヲ帯ヒ口腔前部ニ異物ナシ三、頭部ニ損傷異常ナク右胸鎖關節ノ上方ニ多量ノ長皮割裂二個上下ニ併列シ淡褐色ヲ呈シ此部ヲ切開スルニ經度ノ皮下出血アリ胸腹部ニハ損傷ナク上胸部扁平、腹前部ハ前庭諸筋張ス外陰部ニモ損傷ナク尿道口附近ニハ結核物乾着ス四、脊部ニ於テハ左肩胛骨下隅ヨリ下方一・〇センチメートル長一・〇センチメートル横置ノ皮割裂アリ上方ヨリ脊内下方ニ向ヒ創口ヨリ一連ノ脂肪組織懸垂ス創線平滑ニシテ創内ニハ深ク手指ヲ挿入スルコトヲ得内ニ組織ナル骨質ヲ觸知ス而シテ創口

ヨリハ死體轉動ノ際多量ノ血液漏出ス其他骨面ニ損傷ナシ肛門少シク膨開シ周圍ニ汚黄色ノ軟便少許ヲ附着ス

五、兩上肢及左下肢ニ損傷ナク右腕骨、前腕中央部ニ小豆大ノ淡褐色斑アリ皮下組織及筋肉ニハ毫モ異常ヲ認メズ

第二、内 景 検査

六、胸腹ノ皮膚ヲ式ノ如ク正中ニ於テ切開スルニ皮下脂肪層ノ發育良ニシテ左季肋部中央ノ皮下組織及筋肉間ニハ小手拳大ノ著シキ組織間出血アリテ暗赤色ヲ呈シ且血液液ノ浸潤スルヲ見ル

七、胸骨ヲ肋軟骨ト共ニ切除シ胸腔ヲ開檢スルニ右肺葉ハ僅ニ露出シ左肺ハ見ルト得ズ右肺ニ癒着ナク右肺ノ前部及上後部ハ胸壁ト癒着ス胸腔内異常ノ内容ナシ胸腺ノ大サ七・〇一五・〇一〇〇程度ナリ

九、左肺ニ損傷ナク表面概シテ帯灰淡紫赤色ニシテ肋膜ハ前記(第七項)癒着ノ爲メ著シク潤滑厚シ上厚部ハ灰白色ノ厚皮トナリ前下部ニハ纖維様物ヲ附着シコノ部ノ表面ニハ極メテ薄層ノ血液ヲ附着ス斷面著シク蒼白ニシテ壓スルモ殆ンド血液ヲ漏出セズ且一般ニ乾燥シ各部佳ク空氣ヲ含ミ硬結部ナシ氣管枝内ニハ汚穢淡赤色ノ泡沫液少許アリ肋膜ハ淡紫赤色ニシテ粘着起ス

下、頭 腔 検査

十九、掛り官ノ請求ニ依リ之ヲ看ク

乙、鑑 定

七、經 徑、實少シク軟、断面著シク血暈ニ乏シク淡紫褐色ヲ呈ス十四、左腎莖膜剝離シ易ク表面滑澤、帶褐淡赤色ヲ呈シ硬ナリ尋常大サ一〇・〇一六・八一・二三經徑、断面一般ニ血液及血色ニ乏シク潤澤ナシ左腎外緣上端部ノ被膜ニ約八・〇耗長破裂狀ノ創口アリテ創縁平滑、創底ハ僅ニ皮質部ニ達シ被膜下ニハ鴉卵大ノ組織間出血アリ其他ノ性状ハ略左腎ニ同ジ大サ一〇・〇一六・五

一、本屍ニハ左肩胛下部ニ一箇ノ皮創アリ該創ハ左胸腔ヲ經テ横膈ヲ穿通シ腹腔内ニ達シ脾臟腎臟及胃ヲ傷ケタリ(命令第一項答)記録第四、十二乃至十五項ニ於テ承知セラレタシ(命令第一項答)本創ハ外皮ニ於テハソノ長徑僅ニ二、三釐ナルニシテ創底ハ深ク腹腔内ニマデ達シ且各部ノ創縁ハ銳利平滑ニシテ經路ニ於ケル胃壁及脾臟ノ創面ニ於テハ各層ノ組織平滑ニ切斷セラレ又前内ニ組織ノ交叉橋架スルコトナキガ故ニ右及左器ノ刺穿ニ依リテ生ジタルモノナルコト明カナリ此他本屍ニハ左肋骨突起部(記録第二項)右胸膈關節ノ上方(記録第三項)及左季肋部ニハ(記録第六項)表皮裂脫乃至皮下出血アリ之レ純體ノ作用ニ依リ生ジタルモノナリト雖次項ニ詳述スル死因トハ原因上ノ連續ナキモノナリ(命令第二項答)

十六、肝臟表面滑澤帶淡紫褐色ニシテ硬サ尋常、大サ二六・〇一六・二一八・〇經徑、断面血色ニ乏シク壓スルモ血液殆ンド漏出セズ膽囊内ニハ黃褐色稀薄ノ膽汁ヲ盛リ結膜ノ性状常ノ如シ十七、小腸ノ上部ニハ十二指腸ト同様ノ内容ヲ存シ下部ニハ十數條ノ蛔虫ト淡汚黄色ノ軟便少許アリ上部ノ結膜ハ捲起シ下部ニハ孤條ノ著シク腫大セルヲ認ム大腸内ニハ汚黄色ノ軟便ヲ盛リ結膜ノ性状常ノ如シ

十八、脾臟硬サ尋常、断面血色ニ乏シク其他記スベキノ異常ナシ腹部大動脈ニハ暗色ノ流動血少許アリ内腔滑澤ナリ

明治〇〇年〇月〇日

同年同月〇日結了

丁銃 創

コハ飛來スル彈丸ニ依リテ生ズルモノニシテ、通常射入口、創管及射出口ニ區別ス。銃創ノ形ハ創傷ヲ生ジタル彈丸ノ形ニ依リ種々ニシテ、鉛丸、套被丸、鐵片等ニヨリ夫々異リタル銃創ヲ生ズ、又銃器ノ種類、發火セル距離彈丸ノ身體ニ衝突スル角度ニモ大ナル關係ヲ有ス。例ヘバ、彈丸ガ遠距離ヨリ來リ非常ニ弱クナリ、且皮膚面ニ銳角ヲ來リシモノハ、之ヲ貫通スルコト能ハズシテ只挫傷ヲ作ルノミナルコトアリ、或ハ切線上ニ作用セシ時ハ所謂擦過銃創ヲ形成シ、此時ハ皮膚面ニ表皮剝脫并ニ溝狀ノ銃創ヲ作ル。

一般ニ云ヘバ彈丸ハ皮膚内ニ突入スルモノニシテ、ソノ射入口ノ形態ハ發火サレタル距離ノ遠近、火藥

鑑定人 岡 木 深 太郎

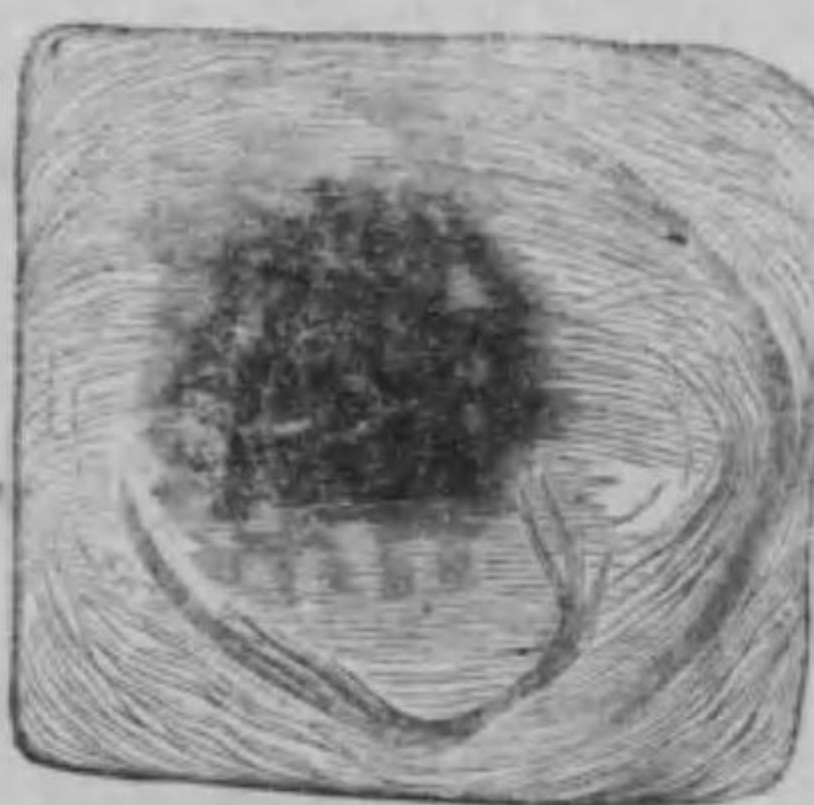
銃創

擦過銃創

圖九十二第

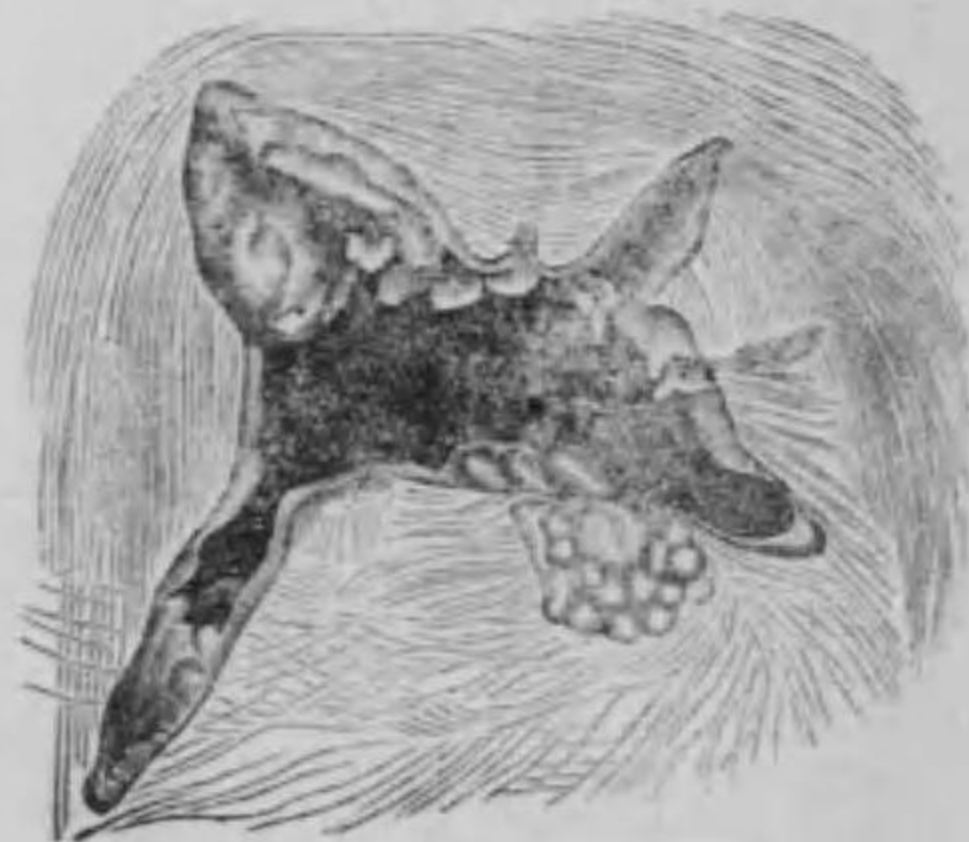


圖十三第



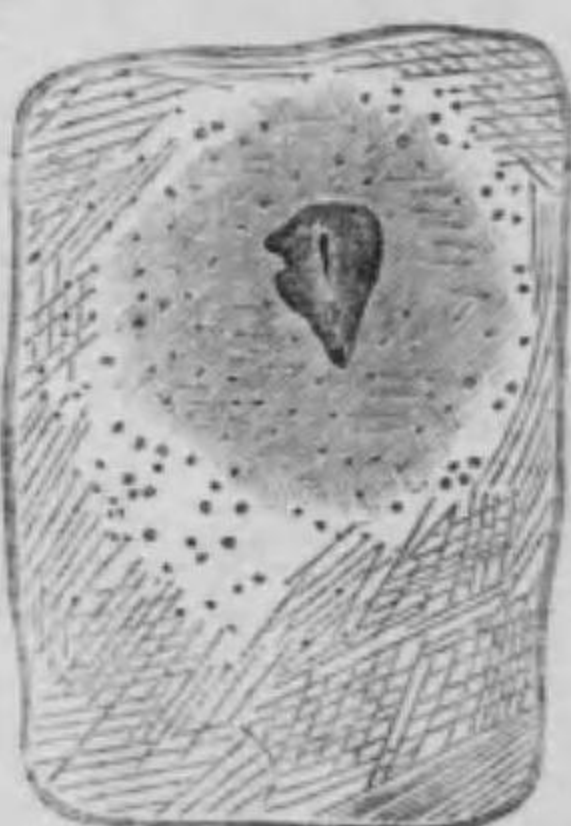
心臟部ニ於ケル中等大ノ銃創ヲ以テセル射撃(自然)圖形ノ射入口(自然)

圖一十三第



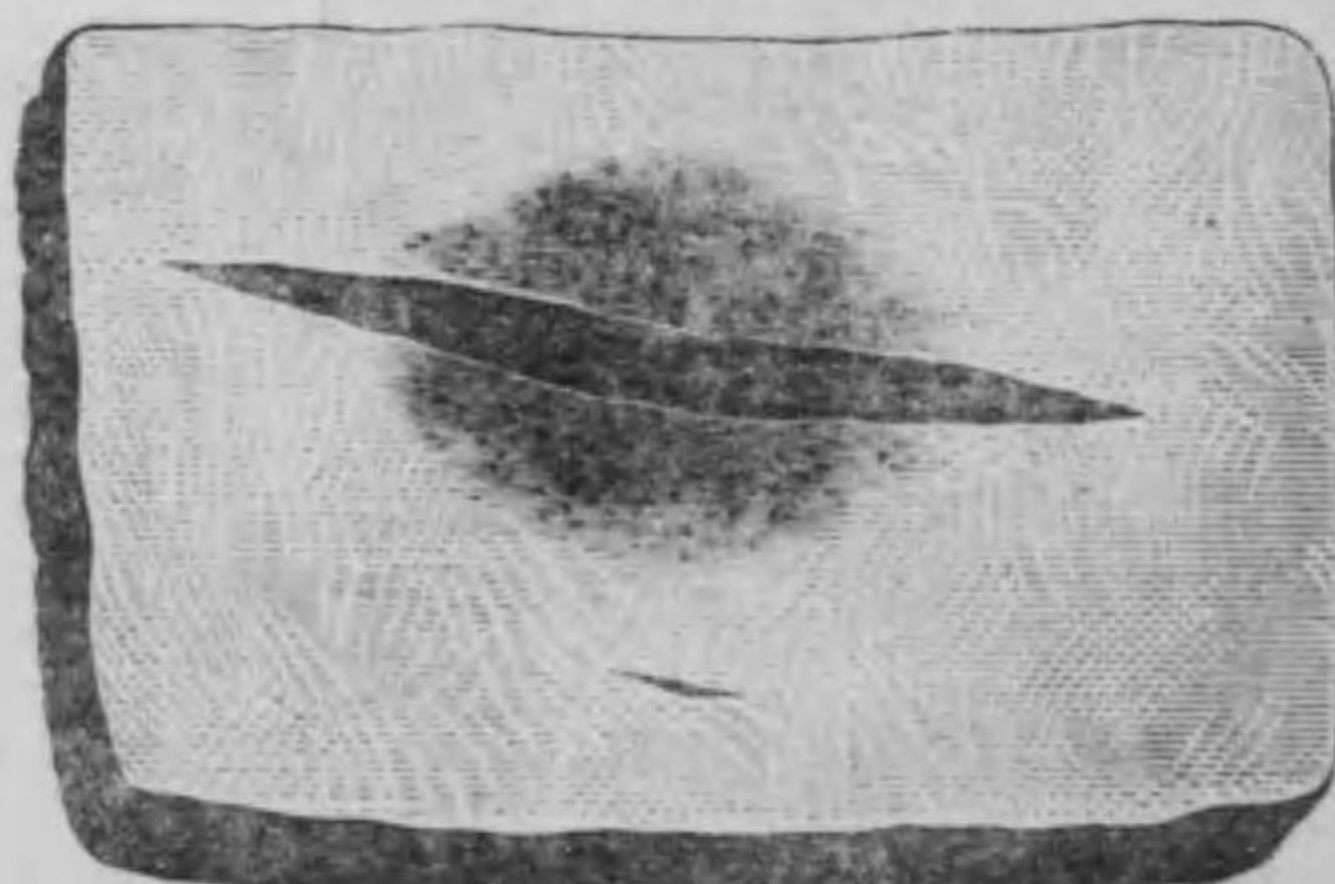
拳銃射撃(自然)星狀ニ破裂セル射入口(三分二大)

圖二十三第



拳銃射撃(自然)星狀ニ破裂セル射入口(三分二大)

圖三十三第



小銃射撃以テ心臟部ニ於ケル中等大ノ銃創ヲ以テセル射撃(自然)圖形ノ射入口(自然)

射入口

ノ性質、及銃器ノ種類ニ依リテ差アリ。近距離發射ノ際ハ射入口ハ圓形、不正形或ハ星形ニシテ、多クハ銃丸ヨリ餘程大ナリ、ソノ周圍ニハ黑色、淡黑色乃至褐色ノ輪暈ヲ存シ、内ニ粉粒ノ黑點數多散在ス而シテ射入口ノ周圍ヲ注意シテ檢スレバ、表皮剝脫、挫傷、陷凹、火傷等ノ混在スルコトアリ。又射入口ノ周圍、或ハソノ中ニ黑焦ゲノ紙片、衣服片ヲ發見スルコトアリ。無烟火藥ヲ填充シテ發火セシ場合ニハ、

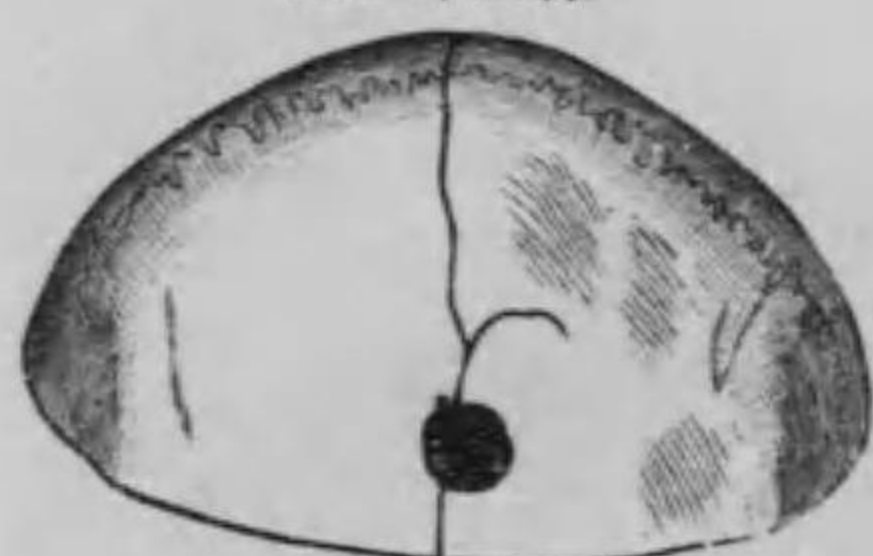
第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査

二 身體ニ於ケル損傷検査

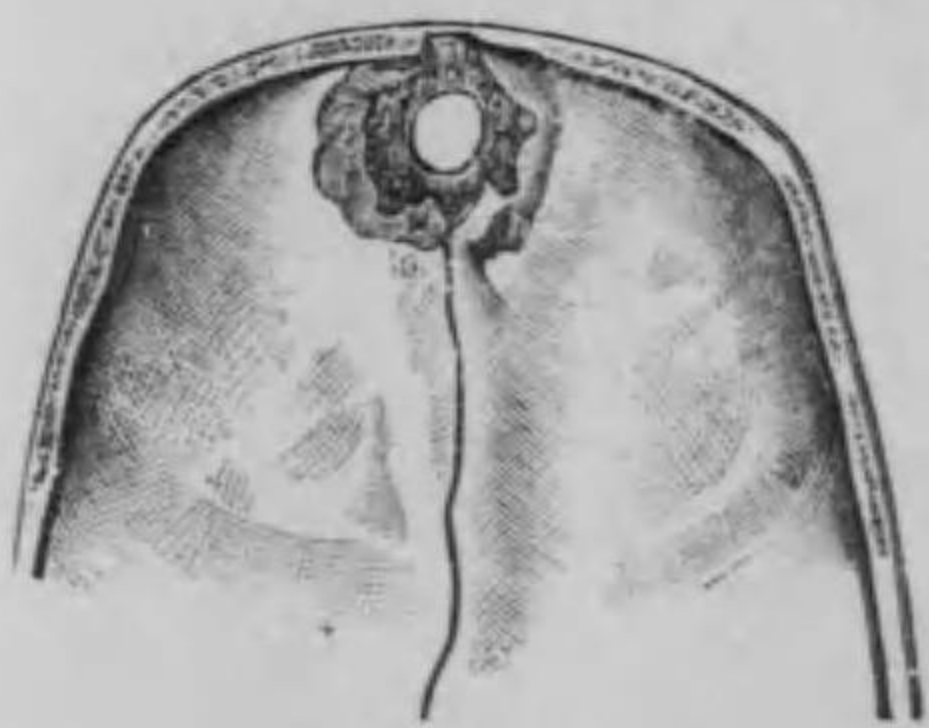
一二五

輪暈ハ帶黃淡綠色、帶白淡黃色ニシテ、拭除シ難ク、ソノ中ニ粉粒ヲ見ルコトナシ。
 遠距離ノ發射ニテハ、爆發瓦斯ノ作用少キ爲メ、射入口ノ形ハ重ニ彈丸ノ形ニ相當シ、圓形ノモノハ圓キ實質缺損ヲ生ジ、有尖彈丸ハ殆ンド切創ノ如キ裂隙狀ノ銃創ヲ作り、最近用ユル圓柱形ノ銃丸ニテハ、圓キ挫減少キ銃丸ノ大サト略同大ノ銃創ヲ作ル、砲彈或ハ榴彈ノ破片ハ、種々大サ及形ノ實質缺損ヲ生ズ。
 創管ハ近距離射撃ニテハ、爆發瓦斯ノ作用ニ依リテ、恐ロシキ慘狀ヲ呈シ、噴火口様トナリ爆發ニ隨伴セ
 ル異物、或ハ組織液等ニ依リテ高度ノ組織破碎ヲ來シ、發射方向ヲ決定シ能ハザルコトアリ、假令、近距離射撃ニテモ、びすごるノ如キモノニテハ、此ノ如キ慘狀トハナラズ。
 遠距離射撃ニテハ、軟部ニ單一ナル創管ヲ作ル、時トシテ創管ハ射出口ヲ作ラズ、盲管ニ終リ創底ニ銃丸ヲ有スルコトアリ。若シ銃丸ガ骨質ニ衝突シ、骨片ヲ隨伴スル時ハ、創管ハ甚シク不正トナル、彈丸ガ骨質ヲ

圖四十三第



前頭骨ニ於ケル連發拳銃創ノ射入口 (三分一)



上圖ニ現ハシタル射入口ノ後面 (三分一)

貫通スル際、骨質ヲ隨伴セザルコトハ非常ニ少キコトナリ、故ニ骨ニ於ケル射入口ハ小ニシテ射出口ハ大ナルモノナリ。創管ハ時トシテ直線ヲナサズ、種々ノ組織ニ衝突シテ其方向ヲ變ジ甚シキ場合ニハ輪狀ヲナセ

圖五十三第



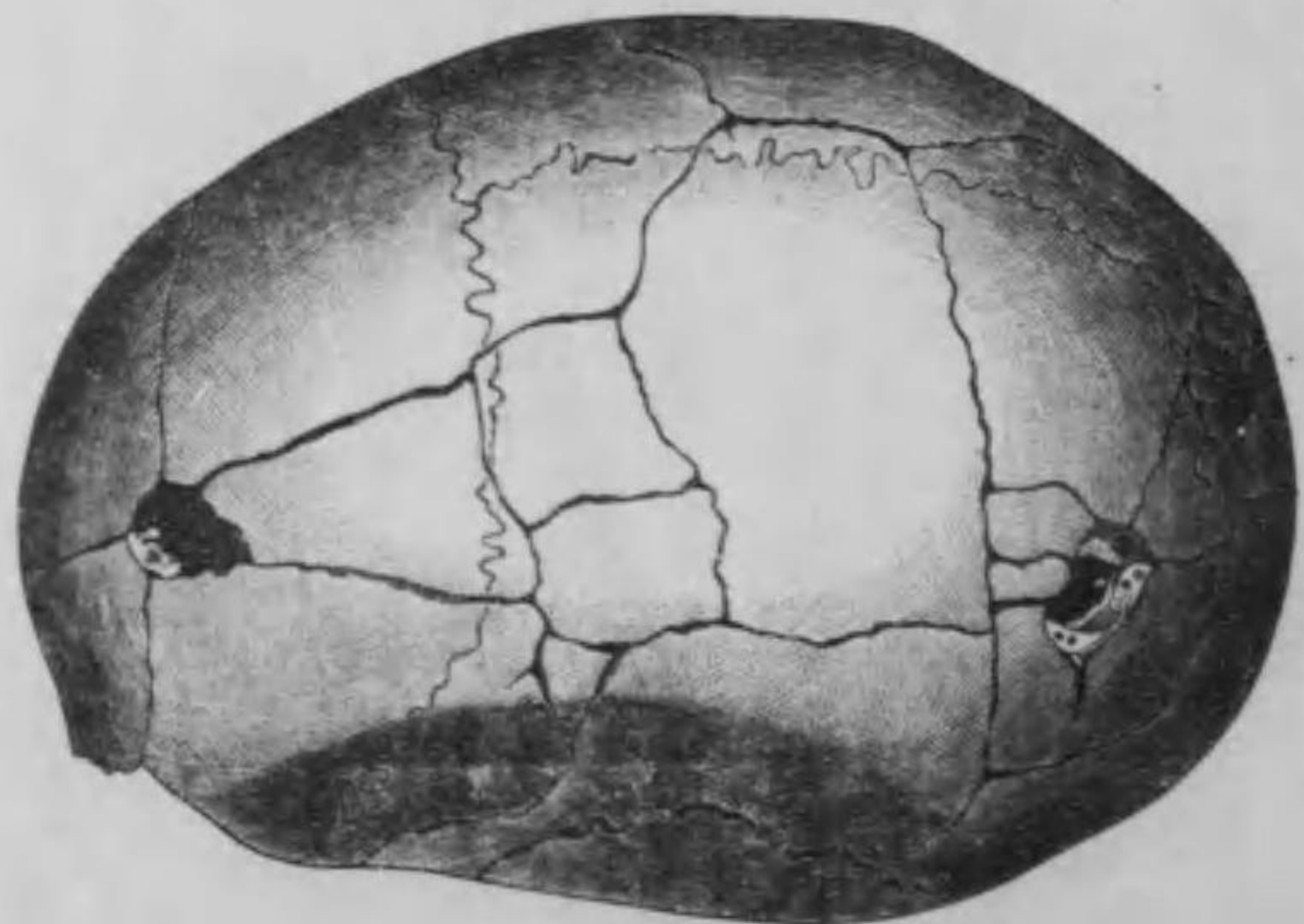
ウエルンデル銃ヲ以テセル口中ヘノ射撃(自殺)

圖七十三第



形變ノ丸銃

圖六十三第



三十歩ノ距離ヨリ發射セル短銃射撃ニ因スル頭蓋骨ノ甚ダシキ破壊

射出口ト射入口トノ鑑別

ルコトアリ、之ヲ輪狀或ハ廻轉創傷ト云フ。予ノ實見シタル一例ハ、三發ノびすごる彈丸ヲ受ケ即死セルモノニテ、一丸ハ前額部ニ當リテ頭骨ヲ貫クコト能ハズシテ、曹狀トナリ頭皮下ニ止マリ、一丸ハ左顳額部ヨリ頭腔内ニ入り、先ヅ頭蓋底ニ依リテ上後外方ニ方向ヲ變換シ、右大脳半球ニ入り、更ニ頭蓋ニ衝突シテ下後内方ニ反射シ、右後頭葉ノ後下部ニ至リテ盲管ニテ終レリ、此創傷ハ一言ニシテ云ヘバ、腦質内ニテD字ヲ描セルモノナリ、更ニ他ノ一丸ハ喉頭部ヲ貫キ、脊椎ノ間ニ箭在セルヲ發見セリ。

彈丸ガ身體ヲ貫通シタル時ハ、射入口ト射出口ヲ鑑別セザルベカラズ、近距離發射ニテハ、射入口ニハ輪暈ナル特別所見アル故、射出口トノ鑑別容易ナレドモ、遠距離射撃ニ於テハ注意スベキ點アリ、一般ニ云ヘバ、射入口ハ挫傷ノ形ヲ有シ、射出口ハ裂傷ノ觀ヲ呈ス。彈丸ハ多ク體內ニ於テ變形シ、或ハ骨質ノ他ノ組織片ヲ伴フテ出ヅル故、通常射出口ハ射入口ヨリ大ナリ、又往々人ノ主張スル射入口ハ陷凹シ、射出口ハ凸出ストノ所見ハ、確タル區別トナスコト能ハズ、之レ時トシテ皮下脂肪層及腐敗瓦斯等ニ依リテ其形態ヲ變ズルガ故ナリ。

已ニ述べタルガ如ク、射出入口ノ鑑別ハ骨ニ於テ容易ニシテ、且ツ最も著明ト云フベク、一般ニ射入口ハ小ニシテ邊緣銳薄トナリ、射出口ハ大ニシテ鈍降ス。

着衣ニ於ケル射入口モ亦小ニシテ燃焼シ、射出口ハ大ニシテ裂開セリ。創内ニ在ル異物、例ヘバ紙片等ハ注意シテ保存スベシ、之ニヨリテ時トシテ加害者探求ノ端緒ヲ得ルコトアリ。

彈丸ノ代リニ液體ヲ裝填シタル爲メ、或ハ大砲彈だいなまいご等ノ大爆發ノ際起ル大損傷ハ、法醫學的ニハ殆ンド興味ヲ有セザルモノナリ。

創傷ノ法醫學的觀察

戊、創傷ノ法醫學的觀察

創傷ガ單ニ人ヲ病床ニ伏セシメ、或ハ作業障害ヲ來シタルノミナル時ハ、已ニ本章ノ始メニ述べタルガ如ク、刑法上ニテハ傷害ノ罪ニ問ハレ、民法上ニテハソノ損害ニ對シテハ之ヲ賠償スルノ責任アルモノナルガ、モシ受傷者ガ死ニ至リシナラバ、加害者ハ殺人ノ罪ヲ課セラル、コハ刑法一九九條乃至二〇三條ニ規定スル所タリ。コノ際醫師ノ最モ注意スベキハ、受傷後問モナク死セシモノ、直接死因ハ、該創傷ニ基因セシヤ、若シ死因ガソレト確定スレバ、其傷ハ自傷ナルヤ將タ他傷ナルヤ、或ハ英厄ニ依レルモノナルヤヲ決定シ、必要ナル場合ニハソノ生前受傷ナルヤ將タ死後ニ附加セラレシモノナルカヲ鑑定スベシ。

イ、死因ト損傷トノ關係

人類ノ生存上缺クベカラザル臟器ヲ害セラレテ、間モナク死ニ至ル時ハ、此創傷ハ直接死因ニシテ、受傷後創傷傳染或ハ麻痺等ノ機能障害ニ依リ、相當ノ時日後死ニ至レバ、之ヲ間接死因ト云フ。

損傷ニシテ直接死因トナリ得ルモノハ、全身ノ粉碎、或ハ生存ニ必須ノ臟器ニ於ケル傷害若クハソノ機能障害ヲ來セシモノ、例ヘバ心臟、腦、肺、腎、肝等ヲ害セラレシカ或ハ之ヲ害セラレズトモ臟器自身ノ出血ニアラズ周圍ヨリノ出血ニ依リテ壓迫ヲ受ケ、ソノ機能充分ナラザル時ノ如キ、或ハ血管系統ヲ傷害シ、出血死ニ至ル時ノ如キ之レナリ。出血死ハ通常二種ニ分ツ、一ハ外出血ト云ヒ、體外ニ多量ノ出血アリシ場合、他ハ内出血ト云ヒ、體腔内或ハ臟器内ニ多量ノ出血アリシ場合ヲ云フ、通常人類ニ在リテハ、一五〇〇㊦ノ出血アレバ生命危險ナリト云フ。一般ニ小兒ハ出血ニ耐エ難ク、女子ハ之ニ對シ抵抗強シ。

出血死ナル診斷ヲ下スニハ、多量ノ出血アルコトヲ確定シ、死體ニハ死斑少ク、又多クノ臟器ガ血量ニ

出血死

直接死因

死因ト損傷

乏シク、且失血スベキ損傷ヲ見出シタル時ニ下スベキモノニシテ、單ニ體內ニ血液少キノミヲ以テ出血死ト云フコト能ハズ、何トナレバ自然死ニモ貧血病死、營養不良死アリ、各臓器ノ血量非常ニ少クナリ、又死體腐敗ノ爲メ、血液ガ血管外ニ滲透逸出スルコトアレバナリ。

しよつくとハ已述ノ如ク、一ツノ大ナル或ハ小ナル數多ノ損傷ニ因リテ、知覺神經ノ末端ヲ強ク刺激シ肺心ガ突然停止シテ、死ニ至ルモノニシテ、解剖上損傷以外ニハ何等ノ異常所見ナキモノナリ、しよつくとナル斷定ヲ下スニハ甚ダ注意スベキモノニシテ、被害後一時間以上ヲ經過シテ死亡セシモノハ、最早ヤソノ受傷ト關係アルしよつくとハ思ハレズ、寧ロ他ノ續發症狀ノ爲メナリトスルヲ適當トスト云フ。

次ニ創傷ニヨリテ、呼吸器傷害ヲ起シ死ニ至ルコトアリ。例ヘバ胸部ガ開カレ、呼吸スベク肺ノ開張シ能ハス場合ノ如キ之レナリ。

受傷後間接死因トナリ得ルモノハ、傷害ノ爲メニ起リシ生存上必須臓器ノ炎衝、敗血性創傷傳染病、敗血症、營養不良及衰弱等ナリ。

鑑定實例

鑑定書

創傷が間接死因となれる鑑定實例

大正〇年〇月〇日〇〇地方裁判所豫審判事〇〇〇〇〇〇ハ〇〇〇〇〇〇幸〇〇郎、同〇〇〇、同〇〇〇、傷害致死被告事件ニ付一件記録ヲ参照シ
一、亡者〇松〇〇ノ創傷(記録第六十四丁乃至六十五丁)ハ同人ノ死(大正六年八月二十三日死亡)ニ對シ直接又ハ間接ノ原因ト爲ラタルヤ否ヤ

ヲ鑑定スベキ旨ヲ同豫審審廷ニ於テ子ニ命ゼリ依テ同日及十二月八日及十二日ノ三回同裁判所ニ於テ一件記録ヲ査閱シ且若〇松〇〇ガ〇〇府立病院ニ入院中ノ病床日誌ヲ參考シ彼是ヲ綜合シテ此鑑定書ヲ作ル
甲、病歴及經過
〇〇府〇〇郡〇〇村第〇〇番戸
若〇松〇〇

明治廿四年四月三日生
右者ハ大正〇年七月三十日午後六時頃被告〇〇〇〇〇〇等數名ト喧嘩争闘シ左記大正〇年八月一日付醫師〇〇〇〇ガ診断書ニ記載セルガ如キ創傷ヲ被リ〇〇府立病院ニ入院治療ヲ受ケタリ該診断書ハ左ノ如シ

診断書

〇〇府〇〇郡〇〇村字〇〇
土木業 若〇松〇〇

二十七歳

病名、右側上膊ノ切創、頭部顔面ニ於ケル五箇ノ挫傷
一、右側背部ノ打撲傷、身體所々ノ擦過傷

- 一、右肩膀ノ後面ニテ關節ヨリ上方ニ向ヒ約十五釐、即上膊中央ニ達スル幅約八釐ノ創面アリ創縁銳ニシテ創底ニ凝血ヲ附着シ創ノ深サ筋ニ達ス創面上端ニテ此創面ノ大サニ一致スル皮膚裂アリ筋ノ一部ヲ附着ス
- 二、前頭部髮際間ノ中央ノ稍右側ヨリ、内上方ニ在ル長サ約三釐、創縁鈍、深サ骨膜ニ達スル創面アリ凝血ヲ附着ス
- 三、右側顛頂部トノ界ニテ約前後ニ在ル長サ七釐ノ創縁鈍ナル創面アリ凝血ヲ附着シ深サ骨膜ニ達ス
- 四、後頭部ノ約中央ニ於テ水平ニ走ル長サ約三釐ノ細長ナル創面アリ創縁鈍凝血ヲ附着シ深サ骨膜ニ達ス
- 五、左側顛頂部ノ上部ニ於テ長サ約一釐ノ小傷面アリ深サ皮下ニ達シ創縁鈍、凝血ヲ附着ス
- 六、右眉毛ノ内端ヨリ下方ニ至ル長サ約一五釐創縁鈍凝血ヲ附着シ深サ皮下ニ達スル創面アリ

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査

二 身體ニ於ケル損傷検査

一三一

以上創面部ノ骨ニハ異常ヲ認メズ
七、右側小指ノ基底部ニ於テ長サ一釐、深サ皮下ニ達スル約三角形ノ創面アリ凝血ヲ附着ス
八、其他左側肩胛部、右側上膊外上部、右側腰部右側胸部左側肩胛骨下角部、右側下腿ノ端所ニ表皮剝離アリ
九、右背部中央ニ水平ニ走ル長サ約十二釐幅約七釐ノ皮下淺血及膨隆アリ之ニ觸ル、ニ壓シテ壓痛アリ

各創ノ治癒ニハ約一ヶ月ヲ要スルモノト認ム

但右側上肢ニ於テ多少運動障礙ヲ殘スコトアルベシ

大正〇年七月三十日檢創

右記ノ如キ數多ノ創傷ヲ被リテ即日〇〇府立病院ニ入院セル被害者ノ疾病經過ハ同院ヨリ提供セル病歴ニ依レバ

被害者ニハ何等特記スベキ遺傳關係ナク、先年淋疾ヲ患ヒ、又約一ヶ月前風邪ニ罹レルコトアリ七月三十日入院當時ノ談ニヨレバ多數人ト喧嘩ノ爲メ右肩膀ヲ切ラレ其他頭部等ニ挫創、身體所々ニ擦過傷ヲ受ケタリ特ニ棒ニテ背部ヲ撲グラレタル爲メニ呼吸困難ヲ來セリト云フ
診察所見、體格及營養中等、表皮及外視シ得ベキ結膜ハ貧血性ナラズ皮膚溫度下脂肪層中等、脈搏整ニシテ大、呼吸運動ハ胸腹式正整ナリ眼、鼻、耳、口及頸部等ニ異常ナク胸腔ニ於テ理學的診斷上特記スベキ所見ヲ見出サズ腹部ニ異常ノ壓痛硬結等ヲ觸ル、コトナク肝腎腺等ハ觸知スルコト能ハズ外陰部下腿ニ異常ナシ

創傷ニ於ケル所見——前記〇〇醫師ノ診断書ノ通り——
次ニ入院後熱型及治療ノ大要ヲ示セバ別表ノ如シ(表ハ略ス)

以下生活反應ニ就テ略述セン。

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査

二 身體ニ於ケル損傷検査

一三四

生前ニ生ジタル表皮剝脱ニハ乳嚙出血アリ、痂皮ヲ以テ掩ハル。然ルニ死後ニ生ジタル表皮剝脱ニハ出血ナク、又羊皮紙様トナリ褐色ニ乾固ス。コハ死體ガ棺側ト摩擦シテ生ズル棺傷ノ如キモノニヨク見ル所ナリ。生前ニ生ジタル皮下溢血ハ、組織間ニ凝血アリ、容易ニ拭除スルコト能ハズ、死後ニ生ジタルモノハ、組織ハ單ニ血色素ニテ染色スルノミナルカ、或ハ血液存在ストモ之ヲ拭除スルコトヲ得、死斑ハ切檢スレバ皮下組織ニ異狀ヲ來シ居ラズ。

次ニ生前ニ生ジタル創傷ハ、筋肉ノ退縮ニ依リテ廣ク哆開シ、切斷セラレタル血管ヨリ出血ヲ見、創縁ハ腫脹スルカ、或ハ種々炎衝性若クハ治癒性傾向ヲ示シ、モシ創傷大ナル時ハ全身症狀トシテ貧血、血液吸入、或ハ諸種ノ栓塞ヲ見ルコトアリ、然ルニ死後ニ生ジタル創傷ニテハ上記ノ如キ徵候ヲ見出サズ。

骨及筋肉ハ生前ヨリモ、死後暴力ニ對スル抵抗強シ、コレ一定ノ張力ヲ失フニ依リ、鈍器ノ襲來ニ對シヨク適從シ、損傷ヲ被ルニ至ラザルガ故ナリ。

死戰期、或ハ心臟衰弱シテ死亡セルモノ、死直前ニ於ケル損傷ハ、生活反應一般ニ少シ。反之、死後ニ受ケタル損傷ニテモ、死體ガ血液ニ富ミ、且血液流動性ニシテ、損傷部位ガ垂下ノ位置ニアル時ハ、生活反應ト類似ノ所見ヲ呈スルコトアリ、故ニ受傷ノ生前ナルカ、死後ナルヤヲ鑑別スルニハ充分ノ注意ヲ要スルモノナリ。

ハ、何レガ死因ナリヤ

一死體ニ、多クノ人ニ依リテ數多ノ大損傷ガ附加セラレタル時、或ハ損傷以外ニ尙死因トナリ得ベキ病

變等存シタル場合ニハ、ソノ何レガ死因トナリシカラ決定スルニ、非常ニ困難ヲ極ムルコトアリ。此場合ハ傷ノ大小、何レガヨリ大切ノ臟器ヲ傷ケシヤ、或ハソノ作用ヲ障害セシヤ、受傷ノ前後等ヲ考察シテ、最モ先キニ附加セラレ、最モ大ナル生活反應ヲ呈セシモノガ、死因ナリト診定スベキモノナレドモ、然モ一概ニ云フベカラザルコトハ已ニ本編第二章ニ述ベタルガ如シ。

二、自他傷及災厄傷ノ鑑別

コハ一般ニ常識ニ訴ヘテ鑑別スベキモノニシテ、即チ現場、衣服ノ状態、創傷ノ有様、抵抗ノ痕跡ノ有無等ニ注意スベシ。例ヘバモシ抵抗ノ痕跡アラバ多クハ他傷ナリ。着衣亂レズ胸押開キテノ自傷ナレバ自傷ナルコト多シ。現場ニ他人ノ痕跡アレバ考慮ノ内ニ置クベク、例ヘバ自殺ヲ裝ハシメタルモノ、右手ニ、尙右手ノ指痕附着スレバ他傷ノ疑ヲ抱クガ如キコレナリ。

單ニ創傷ノ状態ノミニ付テ云フ時ハ、自傷ハ多ク自己ノ手工合ヨキ所ニ附加シアリ。即チ右利キノ人ガ頭部ヲ切ル時ハ、創傷ハ左上方ヨリ右下方ニ向ヒ居リ、且切傷ノ始部ニ多クノ小切痕アル等ノ如シ。茲ニ注意スベキハ精神異常者ニ在リテハ、時トシテ甚ダ奇抜ナル傷ノ付ケ方ヲナシ、自他傷ノ區別困難ナルコトアリ。他傷ハ遠慮會釋ナク、隨意ノ所ニ附シアリ、又創傷ノ形態モ決シテ狐疑躊躇シタルノ痕ナキモノナリ。

ホ、自殺ト損傷トノ關係

自殺ハ甚ダ多キモノニシテ、切創ニ依リ自殺スル場合ニハ頭部ヲ切り、切腹ヲナシ、泰西ニテハ關節部ヲ切リテ出血死ニ至ルコトアリト云フ。死者ノソノ他ノ部ニ在ル切創ハ先ヅ他傷ノ疑ヒヲ以テ検査スベシ

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査

二 身體ニ於ケル損傷検査

一三五

割創ヲ以テ自殺スルコトハ甚ダ少シ。但シ精神病者ハ意外ノ割創ニテ自殺スルコトアリ、注意スベキモノトス。刺創ニ依リテ自殺スルコトハ往々遭遇スル所ニシテ、即頭部、心臓部腹部ヲツキテ死ニ至ルガ如キ之レナリ、ソノ他ノ部ニアル刺創ハ先ヅ疑ノ眼ヲ以テ檢スベシ。

銃創ニ依リテ自殺スルコトハ往々アレドモ、ソガ自爲ナルカ他爲ナルカヲ鑑別スルコト甚ダ困難ニシテ自殺ノ時ハ多ク頭部顔面、心臓部等近距離ニテ射撃スルヲ常トス。

高所ヨリ飛び、或ハ轢死等ガ自爲ナルカ、否ヤハ、醫學上ニハ之ヲ鑑別スルコトヲ得ザルモノニシテ、多クハ周圍ノ事情ニ依リテ自ラ明カトナルモノナリ。

茲ニ注意スベキハ、他殺ノ死體ヲシテ自殺ヲ裝ハシメントシ、種々ノ方法ヲ取ルコトアリ。例ヘバ絞殺死體ヲ切腹シタルカノ如ク裝置スルガ如キ之レナリ。是等ノ場合常識及醫學的智識ヲ以テ、十分ニ檢査スル時ハ、必ズ何處ニカ不合理ナル點ヲ發見シテ、ソノ惡計ヲ觀破スルコトヲ得。例ヘバ前例ニ於テモ切腹シタルガ如ク見ユル腹部ノ傷ヲ檢スレバ、所謂生活反應ナク、全身剖檢ヲナスニ於テハ、明ニ頭部ニ絞頸ノ痕跡ヲ發見シ、且全身ニハ窒息死ノ所見アリ、出血死ノ所見ナキヲ以テ此惡計ヲ觀破シ得ルガ如シ。

巳、癰痕検査

癰痕検査

癰痕ヲ検査スル場合、先ヅ第一ニ問題トナルハ、該癰痕ハ如何ナル創傷ヨリ由來セシモノナルカヲ知ルニアリ。一般ニ切創ハ線狀ノ癰痕ヲ殘シ、下層ト癒着スルコトナシ、モシ該傷ガ化膿後治癒セシモノナレバ、新癰痕ハ多クハ廣ク諸所ニ豐隆、或ハ陷凹シタル部アリ、古來ノ經驗ニヨレバ、癰痕ノ收縮度ハ凡ソ原傷ノ大サノ半バニ達スト云フ、小ナル表面的ノ小切創ハ、殆ンド見得可ベカラザル癰痕ヲ殘スモノナリ

之ヲ見易クセン爲メニハ、ソノ部ヲ手掌ニテ輕打スルカ、或ハ輕ク摩擦スル時ハ皮膚ハ引赤シ、癰痕ハ白ク見え來ルコト多シ。

輕キ挫傷及裂傷ヨリ生ジタル癰痕ハ、多クハ直線的ナラズト云ヘドモ、纖細ナル癰痕ヲ殘シ大ナル挫傷咬傷或ハ有齒ノ兇器ニヨリ生ジタル創傷ハ、咬齒ヲ明ニ認メ得ル癰痕ヲ殘スコト多シ。

有尖彈丸ヨリ成ル銃創ハ小ナル線狀痕ヲ殘シ、ソノ他ノ彈丸ヨリナルモノハ、最初生ジタル實質缺損ニ相當シタル癰痕ヲ生ズ、射入口ニハ往々火藥粉治入シ居レバ、之ヲ鑑別スルコト容易ナルコトアリ。散彈ヨリ生ジタル創傷ハ、數多ノ小ナル癰痕ヲ殘ス。

火傷癰痕ハ最モ特徴ヲ有スルモノニシテ、放線狀トナリ所々豐隆シ、硬ニシテ多クハ淡赤色ヲ呈ス、湯液傷ニ於テハ往々液體ノ流下シタル方向ヲ示スコトアリ。

微毒或ハ皮膚結核ヨリ生ジタル癰痕ハ、多ク鼠蹊部外陰部下腿等特有ナル部位ニ在リ、潰瘍ノ存在シタルコトヲ示スニ足ル癰痕ヲ生ズ。

似非癰痕ハ皮膚ガ急ニ且強ク膨脹シタル時或ハ急ニ收縮シタル時ニ生ズルモノニシテちふす、皮膚ノ急性萎縮、妊娠等ノ場合ニ多シ。

時トシテ癰痕ノ新古ヲ鑑別スルコト必要ナルコトアリ、然レドモ不幸ニシテ此目的ニ對シ有効ナル方法ナシ、一般ニ癰痕ノ新ラシキ場合ハ、周圍ニ比シ著明ニ淡赤色ニ見ユルモノナルガ、時日ヲ經過スルニ從ヒ、次第ニ白色トナリ、光澤ヲ帶ビ來ル。故ニモシ光澤アル白色癰痕ヲ見レバ、此ノ創傷ハ少クトモ二年以前ニ生ジタルモノナルコトヲ確定シ得。

瘻痕ハ周圍ノ組織ヲ索引シ、或ハ壓迫シ、若クハ器官ノ内腔ヲ狭窄シ、種々ノ障害、例ヘバ神經痛、食道或ハ氣管閉塞等ヲ來スコトアリ、或ハ瘻痕ヲ基礎トシテ種々ノ腫瘍ノ發生スルコトアリ。

庚、文身検査

文身検査

文身ハ個人ノ異同ヲ定ムル際之ヲ検査スルコト必要ナルモノナリ、コハ皮膚ニ小針刺ヲナシ、ソノ上ニ種々ノ色素ヲ摩リ込ムモノニシテ、吾人ノ用ヒ居ル墨ヲ持テスレバ、外觀藍色ヲ呈スル文身ヲ得。墨ヨリ成ル文身ハ、容易ニ消失スルモノニアラザレドモ、色素ヲ以テスレバ、往々消失スルコトアリ。此時ソノ體部ノ淋巴腺ヲ組織的ニ檢スレバ、尙用ヒタル色素ノ殘存スルコトアリ。

死體ニ於テハ往々皮膚變色ノ爲メ、文身ノ發見困難ナルコトアリ、此際ハ淡キあるこほる等ニ浸漬シ表皮ヲ剝離シテ眞皮ヲ露出セシムレバ、明ニ文身ヲ認ムルニ至ルモノナリ。

文身ニ在ル文字ニ依リテ、ソノ關係者ノ姓名ヲ知り、又文身畫模様等ニ依リテ、ソノ職業ヲ推定シ得ルコトアリ。

申、身體諸部ニ於ケル損傷或ハ疾病ノ法醫學的觀察

頭部損傷

(イ) 頭部損傷 頭部ニ於ケル諸種ノ損傷ハ最モ多ク法醫學的問題トシテ取扱フモノニシテ、損傷ガ腦腔ニ達セシヤ、或ハ化膿セシヤニヨリテ、其結果重大ナルモノナレバ、小ナル損傷ト雖注意シテ検査スベシ、時トシテ鈍器ノ作用ニ依リ、頭皮ニ何等ノ變化ヲ起サズシテ強キ腦震盪ヲ起シ、或ハ腦ニ出血ヲ來スコトアリ。腦震盪ノ症候ハ内科或ハ外科學ノ教フル所ナリ、次ニ外力ニ依ル外傷性腦出血ト、病的ニ來ル腦出血トノ鑑別點ヲ擧グレバ、前者ハ外力ノ直接作用シタル近傍ニ出血最モ多シ、例ヘバ軟、硬腦膜

頭骨々傷

ノ表面ニ多クノ小出血點アリ、時トシテ腦膜ノ破裂シ居ルコトアリ、然ルニ病的ノ腦出血ニテハ自ラ一定ノ好發部位アレバ、普通兩者ヲ區別スルコトヲ得ルモノナリ、暴力甚シキ時ハ頭皮ニハ挫傷、裂傷等ヲ作り、出血、皮下溢血ヲ伴ヒ骨傷ヲ來シ、腦質サヘモ破碎サレテ、患者ハ被害ノ瞬間ニ死亡スルカ、或ハ腦壓ノ高マルコトニヨリテ相當ノ時間ノ後ニ死ニ至ル、又受傷ハ假令小ナリト雖、創傷傳染病ニ陥ル時ハ炎症ハ直ニ腦膜ニ移行シテ、意外ノ結果ヲ來スコトアリ、注意スベキモノトス。

頭骨々傷ニハ切、刺創、破裂、陥凹、脱臼、穿孔等アリ、之ニ依リテソノ暴力ノ方向、兇器ノ種類等ヲ鑑別シ得ル場合アリ、且骨質ハ一定ノ損傷ヲ被リテ後、ソノ性質上永ク創傷ノ形狀ヲ變化セザルヲ以テ之ニヨリテ受傷後數年ニシテ、或ハ死後數十年間モ、尙兇器等ノ狀況ヲ知ルヲ得ルコトアリ、時トシテ頭骨ニ於テハ暴力ノ加ハリシト全ク反對側ニ骨折ヲ來スコトアリ。例ヘバ予ハ右側顳部ニ自轉車ガ衝突シテ死亡セルモノヲ剖檢シテ、左側頭蓋底ノ破裂セルヲ發見セルコトアリ、骨傷ヲ有スル患者モシ死亡セズトモ、相當ノ臨床的症候ヲ來セバ、之ヲ推定スルコトヲ得、時トシテ骨破裂ノ間ニ毛髮ノ筈在スルコトアリテ、兇器ガ鈍器ナルコトヲ知ルヲ得ル場合アリ。一般ニ老年者ニ腦出血、骨折等ノ來リ易キコトハ云フマデモナキコトナリ。

頭皮及頭蓋ニ於ケル兇器損傷ハ是亦甚ダ多キモノニシテ、而モ此所ハ血管多クシテ出血シ易キ所ナレバ此點ニ充分留意スベシ。

腦損傷

(ロ) 腦損傷 腦ノ損傷ガ無菌性ナル時ハ、意外ニ早ク痕跡ヲ殘サズ治癒スルコトアレドモ、モシ有菌性ナルカ樞要部ヲ害セシ時ハ、腦膜炎、膿瘍、癩痢、糖尿病等ヲ來シ、或ハ精神病者トナリ、ソノ經過甚

顔面ノ損傷

（ハ）顔面ノ損傷 ハ外科學的ニハ意味少キモノモ、時々醜貌ノ原因トナリテ、小ナル瘡痕ヲ結ブ場合ト雖法醫學的ニハ重大ナル意味ヲ有スル事アリ、ソノ他ノ損傷ニ就テハ、略頭部ニ於ケル關係ト相同ジ。

眼ノ損傷

（ニ）眼ノ損傷 眼球ニ鈍器襲來シ挫傷ヲ來シ、或ハ脈絡膜破裂ヲ伴ヒ、網膜剝離ヲ招來スルコトアリ、時トシテ諸種異物眼球内ニ入り、種々ノ障害ヲ來ス、往々視力障害ヲ訴ヘテ詐病シ、兵役ヲ免レ、或ハ自己ノ利益ヲ謀ラント企ツル患者アリ、コノ時ハすきやすこびー、視野、眼底検査ニヨリテ、ソガ詐病ナルヤ否ヤヲ鑑定スベシ、即チ實際ノ疾病アルモノニハ、多クハ一、二ノ客觀的病的所見ヲ發見スルモノナレバ、之レナキニ於テハ詐病ナラントノ疑ヲ持シ、周圍ノ狀況ヲ併セ考ヘ、注意シテ診定スベシ、何トナレバ全ク客觀的病的所見ナクシテ、實際視力障礙ノ存スルニ、三ノ眼疾病アレバナリ。

視力詐病

職業ノ關係上、色盲或ハ偽色盲ヲ検査スル必要アルコトアリ、此時ハ諸種ノ色彩ヲ有スル紙片、又ハ毛糸類ヲ用ヒ、或ハ色盲検査ノ目的ニ製造シタル色彩表ヲ用ヒテ検査ヲ施行スベシ。

耳ノ損傷

（ホ）耳ノ損傷 耳殼ヲ失フコトハ聽力ニハ差シタル障害ナシ、多クハ外貌ノ關係上問題トナル、時トシテ下顎骨ヲ強ク打タレシ爲メニ外聽道ヲ損傷スルコトアリ、手掌ニテ耳殼ヲ打タレ、往々鼓膜破裂ヲ見ルコトアリ、此時裂孔ハ多クハ線狀或ハ破裂狀ニシテ、邊緣ハ銳ク、新鮮ナル場合ニハ少シク出血シ、或ハ溢血アルヲ常トス。然ルニ病的ノ鼓膜穿孔ハ圓形乃至楕圓形ヲナシ、分泌物アリ出血ヲ見ザルガ故ニソノ何レナルカヲ鑑別スルコトヲ得ルモノナリ。

聽力詐病

次ニ迷路ニ強キ振盪ヲ受ケレバ、永ク難聽ヲ訴ヘ、めに一氏症狀ヲ殘ス、偽聾ヲ發見スルニハ多クハ醫師ノ頼才ニヨルヲ常トス。

頸部損傷

（ヘ）頸部損傷 頸部ニハ生命ニ大切ナル大血管、或ハ神經走行スルヲ以テ、此部ニ於ケル創傷ハ屢々人ヲ死ニ致スモノナリ、喉頭ヲ挫傷スレバしよつく或ハ聲帶痙攣ニ因リテ死シ、氣管ヲ損傷スレバ呼吸困難ヲ來シ、或ハ嚥下肺炎ヲ起シ易ク、迷走神經、動脈或ハ頸靜脈ヲ傷ケバ、容易ニ出血等ニヨリテ死ニ至ル、項部ハ重荷ヲ支フル所ナル故往々暴力ヲ受ケ、爲メニ頸部椎骨ノ脱臼又ハ頸髓ノ震盪等ヲ來ス。

胸部及背部ニ於ケル損傷

（ト）胸部及背部ニ於ケル損傷 前胸部或ハ胃部ニ鈍器ノ襲來ヲ被ル時ハ、しよつくニヨリ瞬時ニ斃ル、コトアリ、此時ハ被害部ニ何等損傷ノ痕跡ナキカ、或ハ輕微ノ損傷ヲ有スルノミニテ、解剖上特有ナル所見ナク、窒息急死ニ見ルガ如キ所見アルノミナリ。

胸部及背部ニ於ケル損傷

胸部ニ鈍器ノ襲來ヲ受ケ、肋膜炎或ハ外傷性肺炎ノ惹起スルコトハ、内科學ノ教ユル所ナリ。肺ノ破裂ハ非常ニ少キモノナレドモ、外傷ニ依リテ心筋炎、瓣膜疾患、心臟破裂等ハ比較的容易ニ來ルモノナリ。

背部ニ於ケル損傷

背部ニ於ケル鈍器損傷ニテ、脊髄震盪ノ來ルコトアリ、列車衝突ノ際ニ起ルれ一るういすばいんハ外傷性神經病トシテ注意スベキモノナリ。

胸部脊部ニモ切、刺創ノヨク來ルコトハ云フ迄モナキコトナルガ、時トシテ胸部ノ刺創ニ依リテ、肺心ヲ傷ケ或ハ氣胸、膿胸ヲ惹起スルコトアリ。

腹部ニ於ケル損傷

（チ）腹部ニ於ケル損傷 腹壁ニ鈍器ノ襲來ヲ被リ、外皮ニ何等ノ損傷ヲ與ヘズシテ、しよつくヲ起シ、或ハ内臟破裂ヲ來シ、内出血ニ依リテ死ニ至ルコトアリ、内臟中肝臟ハ最も破裂シ易キモノニシテ、膀胱

腹部損傷内

内臓破裂

外傷性へるに
あ
切腹

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査

二 身體ニ於ケル損傷検査

一四二

ハ之ニ反スルコトハ前述セシガ如シ、胃腸ガ破裂スレバ腹膜炎ヲ惹起シテ死ニ至ルコトアルハ自明ノ理ナリ、時トシテ大ナル暴力ニ因リテ腰椎ノ脱臼ヲ來スコトアリ、往々外力ノミニ因リテへるにあヲ生成スルヤ否ヤノ問題トナルコトアリ、一般ノ學者ノ信ズル所ニ依レバ、コハ殆ンド不能ノコトニシテ、へるにあヲ來シ易キ素質アル人ガ、暴力ヲ被リテへるにあヲ惹起スル場合多シト云フ。

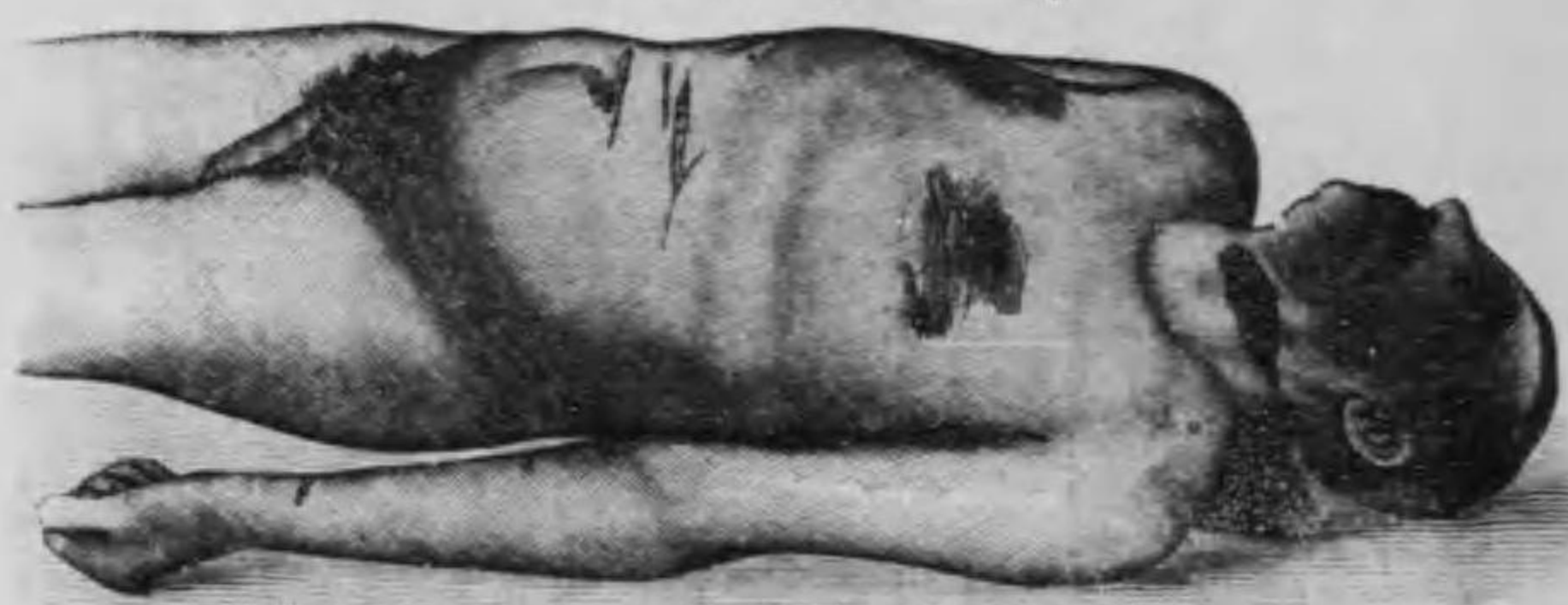
腹部ニ種々ノ銳器損傷ノ來ルハ云フ迄モナキコトニシテ、腹壁ニ於ケル大ナル血管ヲ切レバ、出血ニ依リテ生命ニ危険ヲ及ボシ、モシ該傷ガ腹膜腔ニ達シ、或ハ内臓ヲ害スレバ更ニ危険ヲ増加スルモノナリ。我邦ニ於テ古來正式ノ切腹トシテ知ラレタルハ日本刀ヲ以テ前腹壁ヲ僅ニ筋層ニ達スル迄切傷スルモノニシテ、之ニ依リテ大ナル出血ヲ見、或ハ腸管等ヲ露出セシメテ醜態ヲ演ズルハ、眞ノ武士道ニ於ケル合式ノ切腹ニ非ラズト云フ。而シテ切腹ヲ仰セケラレタル際、死因トナルハソノ介錯ニヨレル打首或ハ頸部刺創ニ由來スル出血、或ハしよつく等ナリトス、彼ノ四十七士ガ切腹ヲナシタル記載ヲ讀ムニ僅ニ短刀ヲ腹部ニ擬スレバ、已ニ首ハ前ニ落チタリト云フヲ見テモ、ソノ大體ヲ察知スルコトヲ得ン。即チ剛膽ナル武士ガ腹眞一文字ニ掻キ切り、而シテ後介錯ヲ受クルハ、云ハ覺悟ノ上ノ死ナリトノ證左ニ過ギズ、腹部ニ於ケル淺キ皮切ニ依リテ直ニ死ニ至ルコトハ、到底考ヘ得ベキコトニ非ラズ、此合式ノ切腹法ヲ知ラズシテ、腹壁ニ皮切ヲ施シ自殺ヲ企ツルモノアルモ、ソノ皮創ニハ遠巡ノ跡ナル數多ノ小皮切ヲ伴ヒ居ルコトハ、已ニ前述セルガ如シ。而シテ自殺者ハ此切腹ニ因リテ直ニ死ニ切レザルコトハ、數多ノ實例ガ之レヲ實示スルニヨリテ明ナリ。

解剖検査ヲ行ハズ單ニ外表検査ノミニテ死體ヲ所置セントスル場合ニハ、肛門或ハ陰門等ヲモ注意シ

陰部損傷

四肢ノ損傷

第三十八圖



腹部ニ於ケル損傷
ノ切創及
左手關節
風曲部ノ
上方ニ於ケル一切
創ヲ兼メ
ル斷頭ニ
四ル所ノ
自殺

テ検査スベシ、何トナレバ此部ヨリ種々ノ損傷ヲ腹腔臟器ニ加ヘ、或ハ毒物ヲ挿入シテ死ニ至ラシムコトアレバナリ。

(リ)男子生殖器ニ於ケル損傷 辜丸ノ挫傷ニヨリテしよつく或ハ辜丸炎ヲ起シ、辜丸炎ノ爲メニ生殖腺萎縮退化シ、遂ニ生殖力ヲ失フコトアリ、陰囊ヲ打チシ爲メ陰囊水腫ヲ來スコトアリ、或ハ夜尿ヲ戒ムル爲、陰囊ヲ緊縛シテ壞疽ニ陥リシコトアリ、ソノ他色情倒錯ノ爲メ此部ニ意外ノ損傷ヲ見ルコトアリ。

(ヌ)女子生殖器ニ於ケル損傷 暴力ノ爲メニ陰破裂ヲ來スコトアリ、此部ハ血管ニ富メル所ナルヲ以テ、非常ノ出血ヲ來シ生命ニ危険ヲ及ボシ、又色情倒錯或ハ墮胎ヲ試ミタル爲メ、種々ノ損傷ヲ内部生殖器ニ惹起スルコトアリ。

(ル)四肢ニ於ケル損傷 四肢ハ吾人ノ身體中最長ク外界ニ突出シ、且使用繁多ナル所ナルヲ以テ、種々ノ損傷來ルコト多キモ、創傷傳染或ハ多大ノ出血ヲ來サザルニ於テハ直接ノ死因トナルコト少ク、四肢ノ一、二或ハソノ全部ヲ缺タモ、生命

ニハ毫モ障害ヲ及ボサズ、只治癒後、職業上ノ障害ヲ殘スヲ以テ、工場法案ノ發布セラレタル今日、甚

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査

二 身體ニ於ケル損傷検査

一四三

屢法醫學的ノ問題トナルコトアリ、茲ニ最も多ク問題トナルハ骨折及脱臼ナリ。

骨折ノ治療スル日數ハ、個人ニ依リ多少ノ差異アリ、即チ一般ニ外科學ノ教ユル所ニヨレバ、指骨二週、掌骨及趾骨三週、前膊骨五週、上膊骨六週、上膊骨頭七週、下脛骨八週、大腿骨十週、大腿骨頭十二週ナリト云フト雖、コハ一概ニ然リト斷言スルコト能ハズ、強キ骨折或ハ組織挫滅ノ際、骨髓或ハ皮下脂肪、又ハ實質組織ノ小片ガ血行中ニ移行シ、遂ニ肺ニ達シ小血管ヲ堵塞シ、窒息死ニ至ラシムルコトアリ。コハ他面ニハ肺ニ甚シキ栓塞ヲ發見スレバ、該屍ハ生前ニソノ損傷ヲ被リタルモノナルコトヲ推定スルヲ得ベシ、大ナル車輛ノ轢過ニ由來スル大挫傷ノ如キハ、ソノ損傷ノ餘リ大ナル爲メ、損傷部位ニ於ケル生活反應ノ顯著ナラザルコトアリ、即チ此際ニ於ケル肺栓塞ノ檢出ハ、損傷ノ生前或ハ死後ノ何レニ附加セラレタルカヲ知ルニ大切ナル徵標ノ一ツナリ。

(ラ)惡性腫瘍 ガ損傷或ハソノ痕跡ニ伴ヒテ生ズルコトアルハ事實ナリ、コハ特ニ肉腫ニ於テ屢々遭遇スルコトナリ、但シ此損傷ト腫瘍トガ直接因果ノ關係アルヤ否ヤヲ斷定スルニハ、十二分ノ注意ヲ要ス。
(ワ)外傷性精神病并ニ精神病 外傷ノ後ニ種々ノ精神病及精神病ノ來ルコトハ、已ニ學者ノ一致スル所ナルモ、コハ甚ダ詐病ノ多キモノナレバ、特ニ弔慰金、或ハ損害賠償要求事件ニ關係アル時ハ、患者ヲ充分水ク、且緻密ニ觀察シタル後、一定ノ外傷性精神病ニ一致スルヤ否ヤヲ診定スベシ。

三、窒息急死々體検査

甲、一般所見

窒息死ハ氣道ノ交通ヲ遮斷サル、カ、呼吸運動ノ障害ヲ來スカ、或ハ空氣ノ成分不純トナリ、若クハ血液ノ作用不充分ニシテ、瓦斯交換ヲ完全ニナシ能ハザル場合ニ來ルモノニシテ、今一々之ヲ例示スレバ左ノ如シ。

イ、外部ヨリ手或ハ繩等ヲ以テ氣道ヲ壓迫スルモノ、即チ絞死、絞死、扼死、扼死、
ロ、呼吸運動ヲ機械的ニ妨害スルモノ、即チ土中埋没、群集中ニ於ケル胸部壓迫、氣胸、膿胸等、
ハ、異物ヲ以テ氣道ヲ塞グモノ、即チ胸腺ノ大ナルコト、聲帶浮腫、くるいぶ、ぢふてりあ、溺死、口鼻腔内ノ異物等、
ニ、呼吸筋ノ麻痺、破傷風、くらーれ及すぐりひにん中毒、
ホ、有害瓦斯中毒、燈用瓦斯中毒、一酸化炭素中毒、

一般ニ人類ハ呼吸停止後、第二分時ノ始メニハ已ニ意識ヲ失ヒ、第二分時ノ半バニ至リ反射性深呼吸及痙攣ヲ來シ、次デ痙攣止ミ直ニ死ニ至ルカ、或ハ所謂終末呼吸ヲ營ミ、(溺死者等ニ於テハ此時多クノ液體ヲ吸入スルモノナリ)死ニ至ル。

人類ガ實際呼吸ヲ隨意的ニ停止シ得ル時間ハ、三十秒乃至四十秒ナリト云フ。

外表所見 窒息死體ニハソレニ特有ナル所見ナシ、但シ一般ニ云ヘバ、死體ノ冷却ハ遅ク、死斑ノ發生早ク、且著大ニシテ、死後強直早ク起リ、腐敗現象速カナリ。顔面紫黑色ニシテ膨大シ、眼球凸出、眼結膜ノ血管充盈シ、諸所ノ漿膜ニ溢血點アリ、瞳孔散大シ、舌尖ハ齒間ニ凸出ス、大小便及精液ヲ漏出シ居ルコトアリ。

窒息死内景所見

第二編 身體ニ於ケル犯罪ノ痕跡検査

三 窒息急死々々體検査

一四六

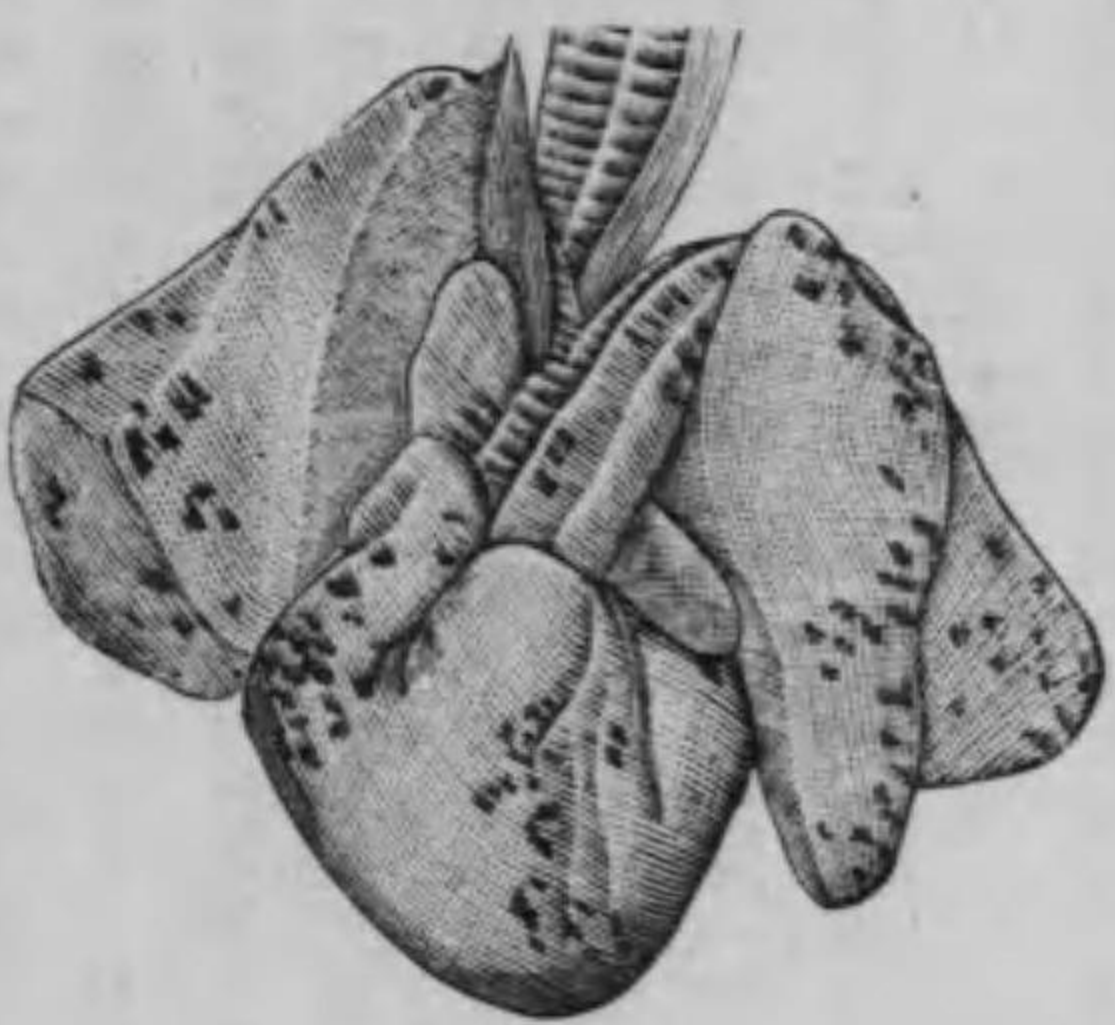
内景所見 窒息急死々々體ニ最モ著明ナルハ、血液ハ暗赤色流動性ニシテ、肺ニハ靜脈血多ク、腫大シ重クナリ断面ヨリハ暗赤色流動血多量ニ流出シ、右心及大血管ニモ鬱血シ、特ニ冠狀靜脈ニ於テ著明ナリ、氣管及喉頭粘膜モ亦血管充盈シ、氣道内ニ泡沫ヲ有スルコトアリ、腦及腹腔臟器モ亦血量ニ富ミ、肋膜及心臟表面ニ朝針頭大乃至麻仁大ノ小溢血點ヲ生ジ居ルモノナリ。

前述ノ如ク窒息急死々々體ニ屍斑ノ發生及腐敗現象ノ早ク來ルハ、内部ニ於テ血液ガ流動性ナルニ依ルモノニシテ、溢血或ハ月經大小便ヲ漏出シ居ルハ全身痙攣ニ伴ヒテ小血管及大腸、子宮、膀胱等ニ痙攣ノ來ルガ故ナリ。

上述所見ノ一二ガ存在スレバトテ、直ニ窒息急死セシモノナルコトヲ斷定スルコト能ハズ、即チ此際最モ注意シテ検査スベキハ、ソガ絞頸セシトカ溺死セシトカノ直接原因ナリ。之ヲ發見スレバ、直ニ窒息急死ナルコトヲ斷定スルコトヲ得。直接原因ニシテ發見スルコト能ハザル時ハ、窒息死ナル診定ハ餘程考量スベキモノナリ、何トナレバ人ノ死スルマ病死ニセヨ、災害死ニセヨ、如何ナル原因ニヨルモ、最後ハ肺心ノ作用停止シ、窒息ニ依リテ死ニ至ルモノナレバナリ。茲ニ予ハ法醫學ニ必要ナル暴力ニ由來セル、窒息急死ノ二、三ヲ述ベントス。

窒息死ト原因トノ關係

圖九十三第



心表面ノ血液

縊死

乙、縊死

縊死トハ索狀體ヲ頸圍ニ纏ヒ、其兩端ヲ一定ノ場所ニ固定シ、自己ノ體重ヲ以テ前頸部ヲ緊締シ、即時ニ意識ヲ失ヒ、窒息死ニ至ルモノナリ。此際索狀體ハ、舌根部ヲ咽頭ノ後壁ニ壓シ、氣道ヲ塞ギ、同時ニ頸部ヲ走レル大血管及神經ヲ強壓シテ、腦ニ向ヘル血液ノ出入ト、迷走神經ノ心臟ニ對スル作用ヲ妨ゲ、呼吸停止、人事不省、痙攣等ヲ起シテ死ニ至ルモノニシテ、縊死程安樂ニ、且容易ニ死ニ至ルモノハ、他ニソノ類例ヲ見ザル所ナリトス。

縊死ノ外表所見

第四十圖



景検査ニ於テモ、一般窒息急死ニ見ル徵候アリ、然リ而シテ縊死ニ於テ特有ナルハ、頸部ニ於ケル索溝ナリ。

定型性縊死、即チ開放係締ニ於テハ、索溝ハ前頸部ヲ斜ニ後上方ニ走り、乳嘴突起後部ニ至リ、頭毛内ニ入り不明トナリ、外後頭結節部ニ至リテ全ク消失ス。結節係締ニ在リテハ、索溝ハ結節部ニ於テ交叉シ居ルヲ常トシ、索溝ハ索狀體ノ支點ノアル反對側ニ於テ最モ著シク、又索狀體ノ性状ニモ、大ニ關係アリ

第二編 身體ニ於ケル犯罪ノ痕跡検査

三 窒息急死々々體検査

一四七

圖一十四第



テ細クシテ硬キモノナル
ホド索溝愈著シク、柔ク
シテ太キモノ程、索溝ハ
益不明トナリ、經絡二三
回ニ及ブ時ハ二三條ノ索
溝アルコトアリ。

索溝部ノ皮膚ハ通常乾

燥シテ革皮狀

ヲナシ、黃褐

色又ハ汚褐色

或ハ汚青色ヲ

呈ス、コレハ

死後索狀體ヲ

取り去ル後消

失スルカ、或

ハ見得難クナル故注意スベシ、索溝ノ皮下ヲ切檢スレバ、皮下結締織ハ乾燥シ、血液少ク、溢血アリ、胸

圖二十四第



死後テニ勢衰ルタシ膝屈バ牛

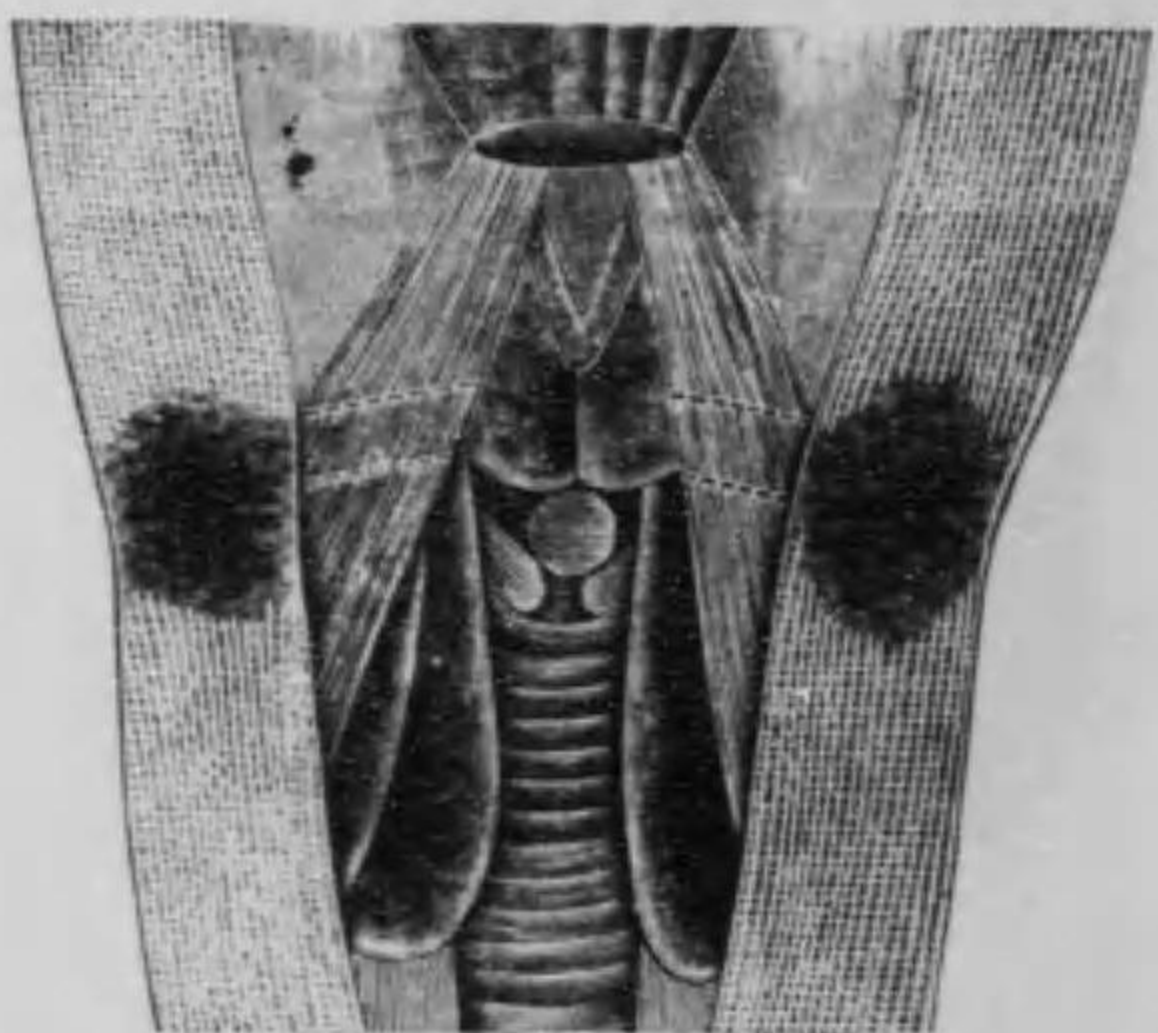
圖三十四第



ス死後テレ脚ニ板床足シ脚開ク廣

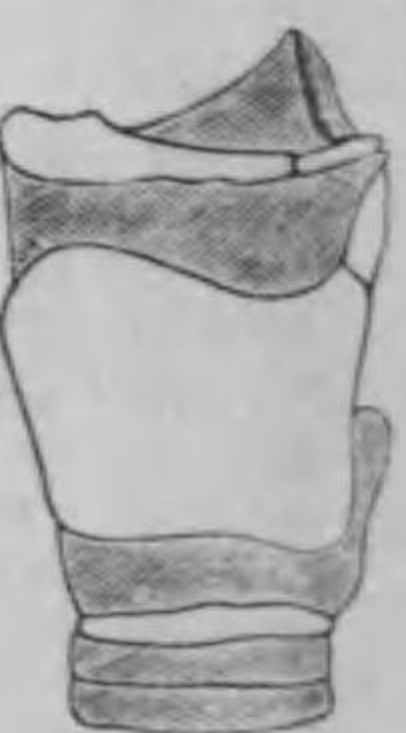
鎖乳頭筋、胸骨舌骨筋、胸骨甲狀筋等ニ裂傷ヲ來シ、或ハ溢血ヲ伴フ、此部ニ於ケル筋肉裂傷ハ、死後死體

圖四十四第



縊死者ニ
於ケル胸
鎖乳頭筋
ノ破裂、
胸骨舌骨
筋ニ於ケ
ル輪狀ノ
横溝環狀
軟骨々々折

圖五十四第



縊死者ノ舌骨大角
及甲狀軟骨上角ノ
挫折

圖六十四第



縊死者ニ於ケ
ル頭靜脈内膜
破裂

取扱ノ爲メニ往々生ズルコトアレバ、其鑑別ニ注意ヲ拂フベシ。又屢々舌骨大角、甲狀軟骨ノ上角ニ骨折
ヲ來スコトアリ、ソノ他頸動脈内膜ノ裂傷及溢血等ヲ見ルコトアリ。茲ニ注意スベキハ、廣キ柔カナル索
狀體ヲ以テ、縊死シタル場合ニハ、一般窒息急死ノ微標アルノ他、頸部ニハ外見上、剖檢上何等異狀所見
ヲ來サスコトナリ。

縊死體ガ自殺ナルカ、他殺ナルカト云フ問題ニ付テハ、小兒或ハ人事不省者ニ非ラズシテ、身體何レノ
部ニモ抵抗セル痕跡、或ハ他ノ死因ト認ムベキモノナキ時ハ、自殺ト見テ可ナリ。縊死ハ自殺者ノ最も多
ク撰ブ所ノモノニシテ、最も確實ニ、且最も容易ニ苦痛ナク死ニ至ルコトヲ得ルモノナリ。故ニ縊死ノ機
ニ繩ヲカケ、自己ノ足ハ地ニツキ居ルモ、或ハべつと上ニ在リナガラ頸部ヲ纏絡シテ、只體位ヲ變ジタ

ルノミニテモ、**絞死ニ成功シタル例アリ**。故ニ餘リ容易ニ**絞死シ居ルヲ以テ、自殺ニ非ラズト云フコト能ハズ**、ソノ他、他殺セルモノヲ**絞死者ニ擬シ、死因ト全ク關係ナキ損傷ヲ有スル自殺者、他ノ方法ニテ自殺セントシテ果サズ自殺セシモノ、死體取卸ノ際ニ於ケル損傷ノアルモノ等ヲ鑑別スルニハ、事歴、損傷ノ新舊或ハソノ生前死後ノ別、索痕ノ性状、窒息急死ノ一般徵候アルヤ否ヤ等ニ依リテ考察スベシ**。

丙、絞死

絞死

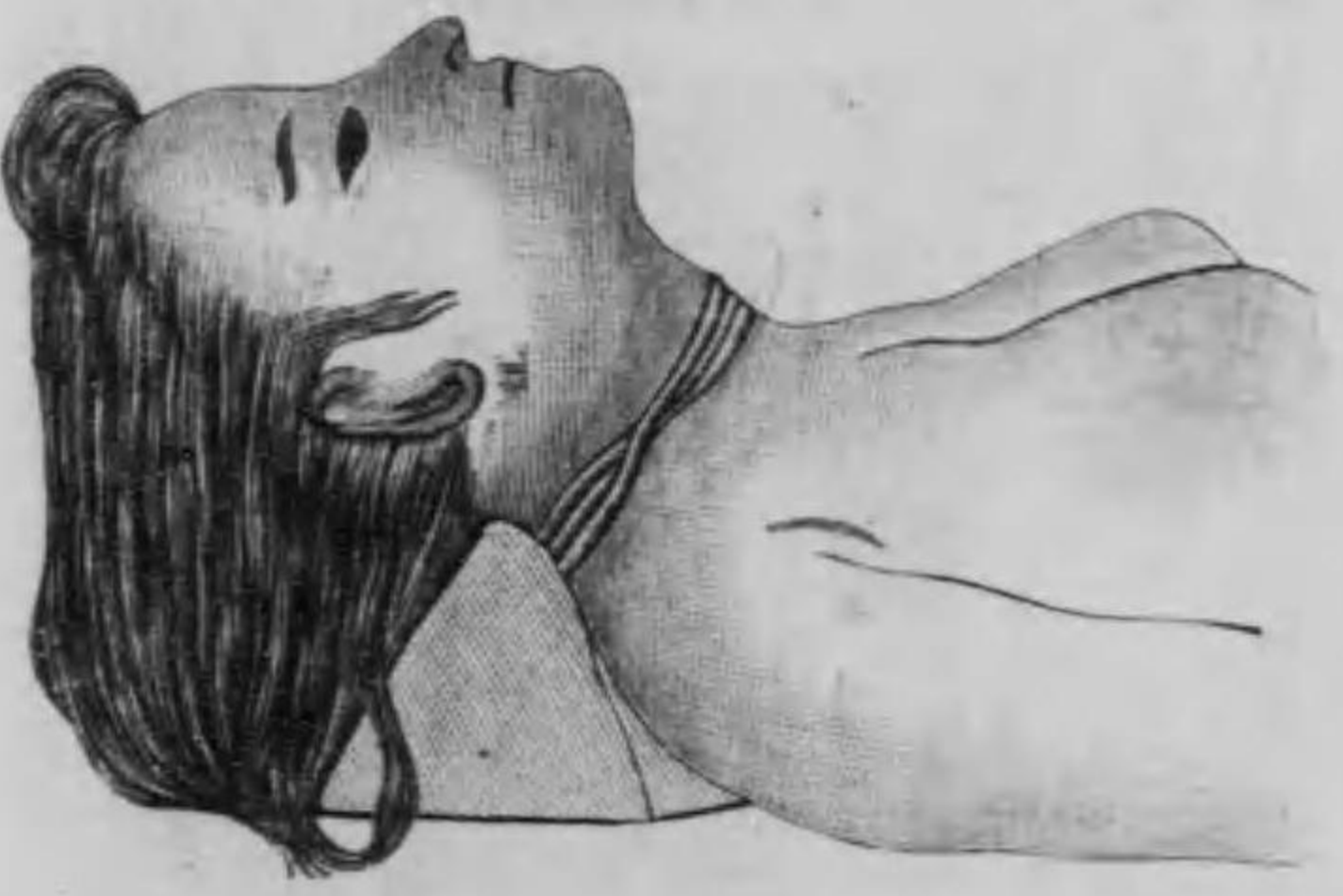
自己ノ身體重量ニ據ラズシテ、**頸部ヲ索狀體ヲ以テ壓迫シ、窒息死ニ至ルヲ絞死ト云フ**、本死ノ外表及内景所見ハ、索溝ヲ除キ他ハ全ク**絞死體ニ於ケル所見ト同シ**。

索溝ハ常ニ地平輪狀ヲナシ、**結節ノアル部、或ハ索狀體ノ交叉シタル部ニ於テ最モ深シ、索溝下ノ剖檢所見ハ亦絞死者ノソレト同シ**。

絞死ハ多クハ他殺ニシテ、**尙他ニ暴行ヲ加ヘタル痕跡ヲ併有スルモノトス、自殺ノ目的ニハ自己ノ力ニテ絞頭スルモ、苦悶人事不省等來レバ、自然ニ壓迫弛ミ、又蘇生スルモノナリ、然レドモ索狀體ト頸トノ間ニ、槓杆様ノ作用ヲナスモノヲ入レ置ケバ、弛ミノ來ルコトナク之ニテ自殺ヲ遂ゲタル例**

絞死ノ自他爲

圖七十四第



アリ、人ヲ絞殺セントスル時ハ、人ノ**油斷ヲ見スマシ、後方ヨリ頸ニ繩ヲカケ、或ハ熟睡セル人、人事不省者、小兒、身體不如意ノモノヲ絞殺セル例ハ多クアリ**。予ノ見タル實例ニテハ、**大阪ノ或仲買商ノ小僧ガ一萬圓餘ノ株券ヲ持參セシヲ奪ハントシ、或宿屋ノ一室ニテ兇漢ハ小僧ニ向フヲ見ヨ面白イモノガ通ルトテ、小僧ガ一心ニソレヲ見テ居ル間ニ、後ヨリ頸部ニ繩ヲカケ、絞殺セル一例アリタリ**。

鑑定實例

鑑定書

〇〇市〇區〇〇〇通〇丁目〇兩替店
〇〇〇〇〇方雇人
増 〇 秀 〇

當十七年

明治〇〇〇〇年〇月〇〇日〇〇地方裁判所豫審判事〇〇〇〇〇〇ハ〇〇〇〇ニ於テ右秀〇ノ局部解剖ヲナシテ

- 一、損傷ノ位置狀態
- 二、兇器ノ種類
- 三、死因

ヲ鑑定スベキ旨ヲ予ニ命ゼリ依テ同日午後六時三十分乃至七時同所ニ於テ同判事及檢事〇〇〇〇〇〇立會ノ上同屍ヲ剖檢セルニソノ所見左ノ如シ

甲、解剖検査記録

第一、外表検査

- 一、男屍、體格營養共ニ中等皮色ハ前面一般ニ稍蒼白、背面淡紫紅色ヲ呈シ胸部ニハ尙少シク温ヲ感ズ死後強直ハ頸及四肢ノ諸關節ニ強ク存ス
- 二、頭皮及顔面ニ損傷ナク顔面暗紫色ヲ帶ビ眼閉チ結膜暗赤色ニ

第二編 身體ニ於ケル犯行ノ痕跡検査

三 窒息死々體検査

第二、内景検査

頭胸臟器

五、**頸部ノ皮膚ヲ其正中ニ於テ切開スルニ頸部皮下靜脈著シク怒張シ内ニ多量ノ流動血ヲ存ス前記(第三項)皮膚部ノ皮下組織**

シテ血管充盈シ數個ノ**凝血點アリ角質透明ニシテ噴乳廣シ鼻口ヨリハ淡桃色ノ泡沫液多量ヲ漏ラシ他ニ異物ナク舌尖ハ齒間ニ凸出ス外耳ニ損傷ナク耳中異物ナシ**

三、**前頭部ニハ甲狀軟骨ノ上縁ノ高サニ於テ約一・七厘米幅横走ノ微ニ紫褐色ヲ帶ビタル淺キ皮膚アリ此溝ハ右側頸部ニ於テハ著明ナレドモ左側頸部ニ於テハ頗ル不明ナリ而シテ該皮膚溝中ニ汚褐色ノ表皮剝脫數個アリ即チ**

(イ)甲狀軟骨ノ左側ニ在ルモノハ細長クシテ内下方ヨリ外上方ニ向ヒコレニ依ッテ皮膚ニ分枝ヲ生ズ

(ロ)ハ同軟骨ノ左側ニ位シ不正圓形ニシテ小指頭大ナリ

(ハ)ハ胸鎖乳頭筋部ニ在リ約五・〇厘米ニ〇厘米ニシテ横走ス

(ニ)ハ(ハ)ヨリ少シク後下方ニ在リ小豆大ナリ

四、**胸腹部左上肢右下肢及背面ニハ損傷ナク左膝蓋骨ノ内下方ニ小指頭大淡褐色ノ表皮剝脫一個アリ外陰部ニ損傷ナク肛門閉鎖シ周圍ニ汚染ナシ**

ハ周圍ニ比シテ淡紅色ヲ帶ビ右側頭部ノ中央(第三項ハノ部ニ適ス)ノ皮下ニハ小豆大ノ出血ヲ認ム

六、胸骨ヲ肋軟骨ト共ニ切除シテ胸腔ヲ開檢スルニ兩肺ノ前縁ハ心臟ノ一部ヲ掩ヒ左肋膜ニハ輕度ノ癒着アリ右肋膜ニハ癒着ナク胸腔内ニハ異常ノ液體ヲ存セズ前縁隔ノ上部ニ天堡鏡大ノ脂肪化セル胸腺ヲ見ル

七、心臓内ニハ異常ノ内容ナク心臟ノ大サ本屍ノ手拳大ニシテ左心軟シ右心内ニハ暗色流動血多量ニ存シ左心亦然リ房室開口ハ容易ニ二指ヲ通ズ表面ニ數個ノ凝血點アリ大動脈口及肺動脈口ノ半月瓣ハ灌水ニ依リ佳ク閉鎖ス内腔滑澤、瓣膜尋常筋色常ノ如シ

八、左肺ハ前記(第六項)ノ癒着ニ依リ表面ノ一部ニ纖維様物ヲ附着シ殘餘ノ部ハ一般ニ滑澤暗紫赤色ニシテ肋膜下ニ數多ノ凝血點アリ按壓スルニ硬結ナシ断面暗赤色ニシテ血液及泡沫液ニ富ミ氣管枝内ニハ淡桃色ノ泡沫液多量ニ存在シ粘膜淡紅色ナリ右肺ハ表面ニ纖維様物ノ附着ナキ他其性状略左肺ニ同ジ

九、頭部ノ諸臟器ヲ細檢スルニ頭筋ニ破裂出血等ナク左右頸動脈ノ外膜并ニ内膜無事ナリ咽頭部ニハ氣管ト同様ノ内容少許アリ粘膜一般暗紫色ヲ帶フ食道空處粘膜蒼白ナリ喉頭上口附近ノ粘膜下ニハ粟粒大乃至針頭大ノ凝血點數多散在シ喉頭氣管内ニモ氣管枝ト同様ノ内容少許アリ粘膜一般淡紅色ヲ呈ス喉頭軟骨及舌骨ヲ精密ニ検査スルニ其附近ノ組織間ニ出血ヲ認メズト雖甲狀軟骨ノ右板ハ左側ニ比シ移動シ易ク舌骨體ニ不全骨傷アリ(附圖略ス)

掛リ官ノ請求ニ依リ解剖検査ヲ以上頭部臟器ニ止ム

丁、扼死

上記ノ解剖所見ニ依リ左ノ如ク鑑定ス

一、旁〇ノ頭部ニハ幅約一・七厘米横走ノ淺キ皮膚溝アリ而シテ溝内并ニ溝ノ附近ニハ數個ノ表皮剝脫、胸鎖乳頭筋部ニ於ケル皮下出血、甲狀軟骨右板ノ可動容易ナルコト、喉頭上口附近ノ粘膜下ニアル數多ノ凝血點、舌骨體ノ不全骨傷等アリ其詳細ハ記録第三、五及九項ノ記載及附圖ニ依リテ承知サレタシ(命令第一問ノ答)

二、右記ノ損傷ハソノ位置形狀ニ依リテ之ヲ推考スルニ軟ク且細長キ物體(索狀物)ヲ以テ頭部ヲ絞壓セルニ依リ生ジタルモノナリ(命令第二問ノ答)

三、前項ニ記載ノ如キ外力ガ頭部ニ與來スル時ハ人ハ之レガ爲メニ窒息急死スルモノナリ而シテ旁〇ノ身體ハ前第一項ニ既掲セル局部ノ異常ノ他窒息死ノ一般徵候タル血液ノ流動性ナルコト(記録第五、七項)顔面、頭部ノ皮下及肺心ニ鬱血アルコト(記録第二、五、七、八項)眼結膜喉頭上口附近ノ粘膜下腫心ノ腫脹下ニ數多ノ凝血點アルコト(記録第二、七、八、九項)等ヲ具備ス故ニ旁〇ノ死因ハ絞頸ニ依リ窒息ナリト思慮ス(命令第三問ノ答)

此鑑定ハ明治〇〇年〇月〇〇日着手
同年〇月〇日結了

明治〇〇年〇月〇日

鑑定人 岡本 松 啓

扼死トハ手ヲ以テ喉頭部ヲ後壁ニ壓シ付クルカ、或ハ氣管ヲ兩側ヨリ握締メテ、氣道ヲ塞ギ人ヲ死ニ至ラシムルモノナリ。扼死ノ解剖ノ異常所見トシテハ、喉頭部ニ爪痕、又ハ指痕ノ存在スルコトナリ。爪痕ハ半月狀ヲナセル、指痕ハ不正圓形ノ境界明カナル、表皮剝脫ニシテ、通常被害者ノ左側頭部ニ四個、右側頭部ニ一個ヲ見、ソノ部ヲ切檢スレバ、皮下溢血アリ、且喉頭軟骨、舌骨等ニ骨折ヲ來スコトアリ、ソノ他ノ解剖所見トシテハ、窒息急死ノ一般所見アリ。一般ニ頭部ノ壓迫ニ依リテ死ニ瀕シタルモノガ蘇生スルモ喉頭軟骨或ハ舌骨ニ損傷アルガ爲死スルカ、或ハ數日間昏睡ニ陥リ、次デ一種ノ精神病ノ來ルコトアリ。



戊、種々ノ機械的窒息急死

ソノ他機械的ニ呼吸口ヲ閉塞シ、窒息急死ニ至ラシムルニ種々ノ方法アリ、例ヘバ小兒ニテハ蒲團、乳房、手、濡レ紙等ニテ鼻口ヲ掩ヒ、痕跡ノ殘存セザル様ニシテ急死セシムルコトアリ、此時ハ窒息急死ノ所見アルノ他、異常所見ナシ、之ガ故意ニ起レルコトナルカ、或ハ災厄ニヨリ來レルカ、醫學上ニハ何等據ル所ナキモノトス、充分ニ發育セル小兒ハ、十ヶ月ニ至レバ、最早蒲團、乳房等ニテハ災厄的ニ窒息急死スルコトナク、自己ニソノ障害ヲ取除クコトヲ得ルモノナリト云フ。

小兒ノ口ニ紙、よだれかけ等ヲ詰メ込ミ、又ハ手指ヲ咽頭ニ挿入シテ窒息急死セシムル事アリ。コレハ異

物ヲ口中ニ殘シ、或ハ損傷ヲ咽頭等ニ生ジ居ルコトアレバ、剖檢上容易ニ發見スルコトヲ得ルモノナリ。併、入齒又ハ玩弄物ニテ窒息急死スルコトアリ、ソノ故意ナルヤ、災厄ナルヤハ事歴ニ依リテ決定スルノ外ナシ、尙淋巴性體質ノモノガ、僅カノ原因ニ依リテ窒息急死スルコトアルハ已ニ述ベタルガ如シ、予ノ遭遇セル一例ニテハ精神病者ガ重キ鐵寢臺ノ一脚ヲ喉頭ニ載セソノ重サニヨリ窒息急死セルモノヲ見タリ。

已、溺 死

液體ヲ以テ鼻口氣道等ヲ閉塞シ、窒息急死スル時ハ之ヲ溺死ト云フ。溺死ト云ヘバ全身液體中ニ溺ル、ガ如ク思ヘ共、只鼻口氣道ヲ少許ノ液體ニテ塞ケバ、窒息急死スルコトヲ得、例ヘバ酩酊者或ハ癲癩者等ハ僅ニ一二升ノ液中ニ鼻口ヲ挿入シ、溺死スルコトアルガ如シ。

溺死者ノ外部所見トシテハ、死體ハ著シク冷却シ蒼白トナリ、冬時ニ在リテハ死斑鮮紅色ヲ呈シ、眼結膜等ニ溢血點アリ、鼻口ヨリ泡沫液ヲ漏出シ、鼻肌ヲ呈ス。陰莖、陰囊、乳房等收縮シ、手足ノ皮膚ハ白色トナリ、且皺襞ヲ呈ス、以上ノ所見ハ溺死體ニ特有ナルモノニ非ラズ、死體ガ液中ニ在リシヲ證明スルノミニシテ、他ノ方法ニテ死セセルモノヲ液中ニ投ズルモ、一定時間ノ後ハ同様ノ所見ヲ呈スルモノナリ。内景所見トシテハ、一般窒息急死ノ徵候アルノ他、溺死ニ特有ナル所見ハ、肺、胃或ハ鼓室中ニ溺死液ノ浸入スルコトナリ。即チ肺ハ非常ニ膨大シ、重ク、肺縁鈍トナリ、肺ハ胸壁肋膜トノ間隙少クナリ、壓肺スレバ、小氣泡ヲ有スル汚血色液體、氣管内ニ多量迴流シ來リ、肺ノ断面ヨリハ同狀液多ク流出ス、肺水腫ノ際ニハ、断面ヨリ氣泡ヲ混ゼザル液ヲ漏出スルヲ以テ、前者ト直ニ鑑別スルコトヲ得ベシ。又死體引

溺死

溺死者外表所見

溺死者内部所見

吸入液ノ消失

上ノ際等ニ液體ノ肺胃或ハ鼓室ニ浸入スルコトアルモ、決シテ溺死ノ際ノ如ク、深ク且多量ニ入り居ルコトナシ。溺死液ハ往々ニシテ十二指膈ニ迄モ達スルコトアリ。但シ死體ガ古クナリ、腐敗ニ移行スレバ、溺死液モ次第ニ血液ト共ニ近傍ノ臟器ニ滲透シテ、遂ニハ之ヲ證明スルコト能ハザルニ至ル、此際ハ尙溺死液中ノ莖雜物、例ヘバ水草海藻泥砂等ガ肺或ハ胃腸等ニ殘存シ居リテ、診斷ニ對シ大ナル補助トナルコトアリ。故ニ此等ヲ注意シテ検査スベシ。ソノ他血液ノ比重、氷結點、電導力ノ差異ニヨリ、或ハ肺断面ヲ流出スル液體ヲ鏡檢シテ、溺死ニ對シ種々ノ「ひんご」ヲ得ルコトアレドモ茲ニ之ヲ略ス。

我教室ニテ實見セシ例ニ依レバ、一婦女踪跡ヲ晦マシテヨリ後數十日ニシテ、古井戸中ニソノ死體ヲ發見シ、溺死ナルヤ將タ死後茲ニ投入セシモノナルヤノ疑起リ、剖檢セルコトアリキ。然ルニ已ニ數十日ヲ經過セシコトナレバ、腐敗ノ進行高度ニシテ、肺中ニハ血液或ハ溺死液ノ一滴ダモ見出スコト能ハザリシニ、注意シテ檢セシニ、氣管枝分枝部ニ該井水ニ混在セル莖片數條引キカ、リ居リ、通常死體ノ所置位ニテハ、此ノ如ク莖片ノミ深部ニ達スルモノニ非ザルヲ以テ、此死體ハ遂ニ溺死ナリト診斷セシコトアリタリ。

一般ニ死體水中ニ入りテ二三時間ヲ經過スレバ、手足ノ皮膚蒼白トナリ皺襞ヲ呈シ、次第ニ腐敗瓦斯ヲ生ジテ比重輕クナリ、夏期ニ於テハ二三日ニシテ、冬季ニ於テハ數週乃至數月ニテ、水上ニ浮揚シ、投水後五六日ニシテ表皮ハ容易ニ剝脱シテ眞皮ヲ露出シ、藻多キ所ニテハ、十日内外ニシテ溺死體ニ水藻ヲ生ズ。

溺死ハ多クハ自殺ニシテ、小兒ニテハ他殺ナルコトアリ。ソノ他偶然ヨリ來レル溺死アリ、又他ノ方法